

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 病気の表現活動のエスノグラフィ 「生きづらさ」の<br>つながりと生存の知   |
| Author(s)    | 杉本, 洋   |
| Citation     |   |
| Issue Date   | 2015-03   |
| Type         | Thesis or Dissertation  |
| Text version | ETD   |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/10119/12764">http://hdl.handle.net/10119/12764</a> |
| Rights       |   |
| Description  | Supervisor:伊藤 泰信, 知識科学研究科, 博士   |

病気の表現活動のエスノグラフィ  
—「生きづらさ」のつながりと生存の知—

北陸先端科学技術大学院大学

杉本 洋

博士論文

病気の表現活動のエスノグラフィ  
—「生きづらさ」のつながりと生存の知—

杉本 洋

主指導教員 梅本 勝博

北陸先端科学技術大学院大学  
知識科学研究科

平成 27 年 3 月

# 論文要旨

キーワード: 生きづらさ, 表現活動, 知識, つながり, 生存, 弱さ

本研究は、病気や障害、生きづらさの経験を有する人々が詩の朗読パフォーマンスや音楽などの表現活動を行っている実践(以下「表現活動」と記載)を通して、病気や障害などを有する当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのかを明らかにすることを目的としている。ここでいう「つながり」とは、当事者間の関係、自己規定といった自己との関係、対社会的な関係を指し、「知識」とは人々の有する技法や信念、意識などの総体を指している。

先行研究では、当事者間のつながりは、セルフヘルプ・グループにみられるように主として共通性による共感によりつくられてきたこと、自己規定については、抑圧された状況に抗する形で負に見られてきた自らの属性の価値転換をなしてきたこと、対外的には、非当事者と時に協力関係を結び、時に運動などの実践にみられるように対立的な立場でもって社会変革をなしてきたことが示されている。医学的専門的知識とは異なる当事者の体験的知識の存在が指摘されており、以上のような、孤立しがちな中での共通性でのつながりの形成、否定的な自己規定に陥りがちな中での価値転換、対立を通じた社会変容などの技法やそこにある意識は当事者の知識といえる。

当事者の知識の存在や価値が示される一方、その限界も指摘される。それには、当事者間の関係においては、同じ当事者といえどもその経験は多様であり、共通性がつながりをつくる上で有用ではない状況があること、共通性での参集が排外的なつながりを生み出しかねないこと、自己規定については、価値転換が当事者の権威化を生じさせかねないこと、価値転換の規範が価値転換できない人を窮地に陥れかねないこと、対外的な関係については、当事者は一般社会への対立か同化かの選択を強いられること、対立などの形をとることで問題が当事者だけの問題に矮小化されてしまうこと、といった点が挙げられる。そこで、共通性を越えた当事者間の関係の構築、価値転換を越えた自己規定、対立や同化を越えた非当事者との関係の構築がいかにしてなされるのか、そこに通底する知識はいかなるものなのか、といった問いに答えていくことが学術的、実務的に要請されているものの、それらに対して既存の研究は十分に答えられていない状況にある。

本研究のフィールドは、新潟市を中心に活動する 2 つの団体、実践である。筆者は数年間にわたり、これらの活動に、調査者としてと同時にスタッフや観客としてかかわった。表現活動は多様な様相をみせるも、基本的には「生きづらさ」というテーマでつながり、自らの弱さやかつこ悪さといった負の部分を積極的に表現し、福祉、お笑い、サブカルチャーなどの多分野の組織や人々とつながりながら活動を展開していた。表現活動は、特徴的なものでありながら、セルフヘルプ・グループや障害者運動、当事者による芸術活動といった他の当事者の活動の特性を同時に有する活動と位置付けられた。本研究は、他の当事者活動と重なりながらも異なる当事者の実践の詳細

を記述するとともに、それにとどまらず、そうしたフィールドを通してだからこそ見出せる当事者の知識における学術的知見の提示を試みるものである。

本研究における発見事項の1点目には、当事者間のつながりは、共通性による共感に加えて、時に差異を資源として活用することによって、福祉やサブカルチャーなどの複数の立場を越境することによってつくられるということである。観客等を含む表現活動における当事者間のつながりは、表現者のパフォーマンスや、ステージ上、イベント後の交流会などで語られる内容と自らの経験と重ね合わせて共通性を見出し、共感を示す中でつくられていた。加えて、出演者間で好奇心を持ちながら違う病気などの経験を有する人々の話に耳を傾けたり、分かり合えなさをパフォーマンスしてイベントを盛り上げたり、当事者同士が集まり、活動する場に、「傷つく訓練の場」、「他の生き方を知る場」としての意義を感じていたり、むしろ差異を資源としてつながっている側面が見出された。そして、表現活動は、サブカルチャーやパフォーマンスイベントとしてイベントの特徴を打ち出し、多くの人が活動に参入できるよう間口を広げ、来場した人に対しては様々な福祉的な相談窓口や自助グループの案内を行うなど、他の当事者活動への参加を促していた。このように福祉からサブカルチャー、パフォーマンスと複数の立場を越境することによって当事者間の、表現活動を越えたつながりの形成が促されていた。これらのことから、当事者は共通性による共感を大切に、福祉的な文脈に沿った当事者活動によるつながりに意義を感じながらもそのみならず、時に差異を用いて、時に複数の立場を越境しながら当事者間のつながりをつくっていることが見出された。

発見事項の2点目は、当事者は、自らの負に見られがちな病気などの特性の価値転換を行うと共に、弱さや負の側面を強調する弱くある自己規定をなす、ということである。表現活動においても他の当事者活動と同様に「コンプレックスを個性に」というように、自らの属性の価値をプラスに転換することは重要な戦略として提示される。そして、一方で、時にはそれ以上に、あくまで弱くかっこ悪い自分が表現される。弱くある自己規定のあり方は、否応なく虐げられる状況に従属しているわけでもなく、属性の価値転換をしているのみでもない当事者の新たな自己規定のあり方と考えられた。そして、弱くある自己規定は、生きづらさを克服できない人が窮地に陥るといった問題や、専門家のそれと同様に危惧されている当事者の権威化、聖化といった問題に対応しうる知識となっていることが考えられた。

発見事項の3点目は、当事者は、対立、協力、同化といった関係よりむしろ、従来非当事者とみなされてきた人々に当事者性を付与し、サブカルチャー的实践であることによって支配的な規範に働きかける形で社会とつながっているということである。表現活動では、病気や障害などの当事者による活動でありつつ、「生きづらさ」という言葉を用い、日常的な対人関係の悩みや仕事のストレスなど、いわゆる病気や障害に特異的ではない経験を表現する。こうした実践を通して従来非当事者として区分されてきた人に当事者性が付与されていく。また、表現活動の特徴として、社会に通底する支配的言説や規範を覆すような表現をすることが挙げられる。当事者であることや

その経験をユーモアを交えて見世物のように表現するという実践自体も聴き手を驚かせる要素となっている。そして、示されるメッセージは必ずしも支配的な言説に対して、強固な対抗言説を擁立するものでもない様相をみせる。表現活動はユーモアや毒を含んだ表現内容や表現のされ方に表れるように、メインではなく、正統的でもなく、支配的な言説を相対化するサブの立場であるサブカルチャーとしての実践をなしている。こうして表現活動は、病気、障害にかんするタブー意識など社会の支配的な規範に働きかけており、当事者は社会と対立するわけでも迎合するわけでもなく、サブカルチャーとしての実践を通して社会に働きかけていることが本研究から見出された。

なお、当事者間、対自己、対社会のつながりをつくる当事者の知識はそれぞれ無関係に独立しているわけではなく、密接な関係があり、そこには病気や障害などに伴う弱さを基にした知識が通底していると考えられる。「弱さ」については、強さや視覚的まなざしを前提とした近代科学的知と反対の、弱さにかかわる体性感覚的な知の重要性が指摘され、つながりをつくる上でも弱さは価値を有することがいわれている。病気の表現活動にみられるつながりをつくる知識は、まさに弱さを基にした知識であり、当事者は弱さを基に他の当事者や自己、社会とつながっている。しかしながら、病気の表現活動にみられる知識は一見「弱さ」を基盤にしているようにみえるが必ずしもそうではないというのが本研究の知見となる。

表現活動では絶叫朗読という形態の朗読がなされたり、パフォーマンス活動であるという点からも迫真的で、強さを感じさせるものである。そして同時に弱さやかっこ悪さを含む表現内容が重視される。表現活動では「こんな人でも生きていける」「仲間がいれば生きていける」というテーマが重視され、これは表現活動が、各々が生きづらい中を生き延びていることを表す活動であり、弱さのみではない「生存」が当事者の実践に埋め込まれている意識をなしていることが考えられる。生存という観点は医療や福祉の面からは「サバイバー」という概念、言葉として着眼されている。これは、単に「患者」、「犠牲者」、「被害者」という意味合いを越えて、当事者の力や強さ、経験への積極的な意味づけを含んだ姿を表す際に用いられることが多い。しかしながら、本研究結果からは、「生存」は、「弱さ」と対極的な言葉というよりは、弱さと共にあるもの、弱さの背後にあるもの、そして弱さと強さを結びつけるものとして考えられた。パフォーマンス、自発的な行為などが弱さやバルネラブル(脆弱)な状況を生み出すことがいわれており、表現はその内容と表現という行為において弱く、そして弱い中を生きていく生存を表すものとなっていることが考えられた。そして、弱さを表現することの意義は、生存を顕在化させていくことであり、弱さを基盤とした知識は、弱さの背後にある生存を基盤としていることが考えられた。

本研究の理論的含意の1点目は、当事者の知識における知見が積み重ねられたことにある。本研究からは、当事者間のつながりが、従来いわれてきた共通性による共感に加え、差異の活用や越境によってつくられることが示された。自己とのつながり(自己規定)においては、当事者は従来いわれてきた価値転換とともに、弱くある自己規定をなすことが示された。社会とのつながりに

については、従来いわれてきた協力や対立というよりむしろ、当事者性の付与や、サブカルチャーとしての実践をなすことにより社会にかかわることが示された。

そして、本研究の 2 点目の理論的含意は弱さにかかわる知識の理解を深めたことにある。弱さが人々とのつながりをつくり、弱さ自体が価値を有することを示す知見に加え、弱さというよりもむしろ、弱さを表すことにより顕在化する「生存」を基にした知識を当事者は有しており、従来弱さの知識といわれてきたものは、その基底には生存が深くかかわっていること、生存は一見矛盾する弱さと強さを結びつけ、表現されることでつながりがつくられることが本研究より示された。本研究の理論的含意は、未だ見出されていなかった当事者のつながりをつくる知識を見出し、弱さにかかわる知識の理解を深めたことにある。なお、表現活動に特徴的にみえるパフォーマンスやサブカルチャー的要素は、他の様々な当事者の実践にも、たとえばセルフヘルプ・グループでの語りや当事者文化の生成などにおいて見受けられるものであり、見出された知識は一部のパフォーマンスを行う当事者のみに該当するのではなく、当事者の知識としてとらえられるものであることが考えられた。

本研究の実務的意義は、見出された知識が、従来言及されてきた当事者の知識が抱える限界を克服する可能性を有することにある。差異を活用し、立場を越境する知識は、差異により阻害されていたつながりの形成、特定の福祉的文脈のみではつながりえなかった当事者間のつながりの形成を促進する可能性を有する。弱くある自己規定は、価値転換できない人々の自尊心の回復、当事者の権威化の回避に寄与する知識となりうる。当事者性の付与、サブカルチャーとしての実践は、問題が狭い意味での当事者のみの問題になってしまう状況を避け、同化か対立を迫られる状況に新たな選択肢を提示する知識となりうる。そして、弱さとともに生存を重視する知見は保健福祉施策の方向性、理念の拡張に寄与する可能性を有している。現在、健康施策、福祉施策においては本人に能力を付与するエンパワメントが重視されているが、本研究において見出された弱いままに生き延び、それを表現する知識は、エンパワメントを核においた理念の再考を迫るものである。

本研究は、生存を表現することによってつながりをつくるという知識を当事者が有することを示したものである。

# 目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| <b>第1章 序論</b> .....           | 1  |
| 1.1 研究の背景.....                | 1  |
| 1.2 研究の目的.....                | 2  |
| 1.3 研究の方法.....                | 2  |
| 1.3.1 研究のフィールド.....           | 2  |
| 1.3.2 エスノグラフィ.....            | 3  |
| 1.3.3 データ収集およびその記述について.....   | 4  |
| 1.3.4 分析.....                 | 7  |
| 1.4 研究の意義.....                | 8  |
| 1.5 本論文の構成.....               | 9  |
| <b>第2章 文献レビュー</b> .....       | 11 |
| 2.1 本研究で用いる主要な概念.....         | 11 |
| 2.1.1 「生きづらさ」について.....        | 11 |
| 2.1.2 「つながり」について.....         | 12 |
| 2.1.3 「知識」について.....           | 14 |
| 2.1.4 「当事者」について.....          | 15 |
| 2.2 当事者の「つながり」と「知識」.....      | 16 |
| 2.2.1 当事者間のつながりー共通性を越えて.....  | 16 |
| 2.2.2 自己とのつながりー価値転換を越えて.....  | 17 |
| 2.2.3 社会とのつながりー対立・同化を越えて..... | 19 |
| 2.2.4 当事者の知識ー「弱さ」を越えて.....    | 20 |
| 2.3 まとめ.....                  | 27 |
| <b>第3章 表現活動の実際</b> .....      | 29 |
| 3.1 こわれ者の祭典.....              | 29 |
| 3.1.1 活動の概要.....              | 29 |
| 3.1.2 メンバー.....               | 31 |
| 3.1.3 関係者・協力者.....            | 40 |
| 3.1.4 公演の概要.....              | 43 |
| 3.1.5 パフォーマンス.....            | 52 |



|            |                         |            |
|------------|-------------------------|------------|
| 3.1.6      | トーク                     | 57         |
| 3.1.7      | 運営                      | 63         |
| 3.2        | K-BOX                   | 65         |
| 3.2.1      | 活動の概要                   | 65         |
| 3.2.2      | メンバー                    | 67         |
| 3.2.3      | ライブ活動                   | 85         |
| 3.2.4      | ライブ活動以外の活動              | 95         |
| 3.2.5      | 「こわれ者の祭典」との関係           | 98         |
| 3.3        | その他の活動                  | 99         |
| 3.3.1      | 個々のメンバーのライブ活動           | 100        |
| 3.3.2      | 講演会など                   | 101        |
| 3.3.3      | メディアを通じた活動・著作活動など       | 102        |
| 3.3.4      | 各種イベントへの参加・出演           | 106        |
| 3.4        | 表現者の日常                  | 107        |
| 3.4.1      | 会社員などとして                | 107        |
| 3.4.2      | 表現者として                  | 108        |
| 3.4.3      | 当事者として, 支援者として          | 110        |
| 3.4.4      | 表現活動の位置づけ               | 110        |
| 3.5        | 表現活動の観客                 | 113        |
| 3.5.1      | 観客の姿の例                  | 113        |
| 3.5.2      | 観客の特徴                   | 115        |
| 3.5.3      | 観客の属性の重なり               | 118        |
| 3.5.4      | 活動に深くかかわる観客とゆるやかにかかわる観客 | 120        |
| 3.5.5      | 観客の表現活動にかかわるプロセス        | 123        |
| 3.5.6      | 活動への反応・評価               | 124        |
| <b>第4章</b> | <b>他の当事者活動との比較</b>      | <b>132</b> |
| 4.1        | ある自助グループの実践             | 132        |
| 4.2        | 病気の表現活動との比較             | 134        |
| 4.2.1      | 表現活動との共通点               | 134        |
| 4.2.2      | 表現活動と異なる点               | 135        |
| 4.3        | 表現活動の位置づけ               | 136        |
| 4.3.1      | セルフヘルプ・グループとしての表現活動     | 136        |
| 4.3.2      | 〈思考〉と〈参集の枠組み〉の軸における表現活動 | 140        |
| 4.3.3      | 「表現活動」の中での分類            | 141        |

|   |            |
|---|------------|
| 4.4 当事者活動の特性の重なりと多様な当事者活動のひとつとしての表現活動 ..... | 143        |
| <b>第5章 表現活動における「生きづらさ」のつながりと知識 .....</b>    | <b>146</b> |
| 5.1 当事者間のつながりー共感, 差異, 越境 .....              | 146        |
| 5.1.1 「共感」によるつながりー差異ある中での共感 .....           | 146        |
| 5.1.2 差異の活用によるつながり .....                    | 151        |
| 5.1.3 越境によるつながりー福祉, 芸術, サブカルチャー .....       | 153        |
| 5.2 自己とのつながりー価値転換と弱くある自己規定 .....            | 158        |
| 5.2.1 価値転換 .....                            | 158        |
| 5.2.2 弱くある自己規定 .....                        | 160        |
| 5.3 社会とのつながりー当事者性の付与, サブカルチャーとしての実践 .....   | 163        |
| 5.3.1 「対世間」志向の活動 .....                      | 163        |
| 5.3.2 当事者性の付与によるつながり .....                  | 165        |
| 5.3.3 サブカルチャーとしての実践によるつながり .....            | 167        |
| 5.4 通底する知識としての生存の表現 .....                   | 172        |
| <b>第6章 結論 .....</b>                         | <b>176</b> |
| 6.1 発見事項 .....                              | 176        |
| 6.1.1 表現活動は他の当事者活動とどのように違うのか .....          | 176        |
| 6.1.2 当事者はいかにして当事者間のつながりをつくるのか .....        | 178        |
| 6.1.3 当事者はいかにして自己を規定するのか .....              | 180        |
| 6.1.4 当事者はいかにして社会とつながるのか .....              | 181        |
| 6.1.5 当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか .....        | 184        |
| 6.2 理論的含意 .....                             | 187        |
| 6.3 実務的含意 .....                             | 192        |
| 6.4 将来研究への示唆 .....                          | 193        |
| 6.5 まとめ .....                               | 195        |
| <b>参考文献 .....</b>                           | <b>197</b> |

# 図表目次

|      |  |    |
|------|--|----|
| 図 1  | こわれ者の祭典新潟公演(2011年6月19日)                  | 30 |
| 図 2  | こわれ者の祭典新潟公演リハーサル風景(2012年2月12日)           | 45 |
| 図 3  | 案内看板(2012年2月12日)                         | 45 |
| 図 4  | 開演前トーク時の会場の様子(2012年2月12日)                | 46 |
| 図 5  | 紙袋のマスクをかぶっての入場(2012年2月12日)               | 47 |
| 図 6  | 病気だよ！全員集合(2014年4月27日)                    | 47 |
| 図 7  | パジャマ姿の月乃さん(2012年2月12日)                   | 48 |
| 図 8  | 女装姿の Kacco さん(2012年2月12日)                | 48 |
| 図 9  | 公演終了後の出口付近(2012年2月12日)                   | 49 |
| 図 10 | 打ち上げ交流会の様子(2014年9月21日)                   | 49 |
| 図 11 | 開演前の会場の様子(2012年1月8日)                     | 50 |
| 図 12 | イベント開始時の様子(2011年7月17日)                   | 51 |
| 図 13 | こわれ者映画祭フライヤー(2014年12月13日用)               | 55 |
| 図 14 | 映像作品上映イベント(2014年12月13日)                  | 55 |
| 図 15 | 打ち合わせ(2012年5月16日)                        | 63 |
| 図 16 | こわれ者の祭典フライヤー(2014年9月21日用)                | 64 |
| 図 17 | K-BOX フライヤー(2014年10月19日配布)               | 65 |
| 図 18 | 似顔絵ライブ(2010年10月24日)                      | 67 |
| 図 19 | トークライブで体験を語る K-BOX メンバー(2012年3月10日)      | 71 |
| 図 20 | MAKING THE ROAD 2012 ライブ時配布物(2012年7月22日) | 82 |
| 図 21 | K-BOX ライブ会場(2012年8月19日)                  | 85 |
| 図 22 | ライブ会場入り口(2010年12月23日)                    | 86 |
| 図 23 | 司会の Kacco さんと Red さん(2011年1月23日)         | 86 |
| 図 24 | パフォーマンスするタナベーさん(2011年2月20日)              | 87 |
| 図 25 | Merry'z のパフォーマンス(2012年2月19日)             | 88 |
| 図 26 | ライブ時に販売される物販物(2011年5月8日)                 | 89 |
| 図 27 | アート部門のメンバーによるライブペイント(2011年5月8日)          | 89 |
| 図 28 | アート部門のメンバーによる大喜利(2014年11月25日)            | 90 |
| 図 29 | ハロウィンの演出(2010年11月3日)                     | 91 |
| 図 30 | ふれ愛さくら祭への出演(2010年4月25日)                  | 92 |
| 図 31 | 地域の祭でパフォーマンスする Merry'z(2011年10月10日)      | 94 |
| 図 32 | 地元企業の祭での会場の様子(2010年10月24日)               | 94 |

|  |     |
|--|-----|
| 図 33 曲作りを行う Merry'z(2012 年 2 月 26 日) .....                   | 96  |
| 図 34 トークライブで展示される Renka さんの作品(2012 年 3 月 10 日) .....         | 97  |
| 図 35 Kacco さん講演会フライヤー(2011 年 1 月 30 日用) .....                | 102 |
| 図 36 スタジオからの動画中継(2011 年 12 月 23 日) .....                     | 103 |
| 図 37 表現者の日常生活上の立場(筆者作成) .....                                | 111 |
| 図 38 表現活動の位置づけ(筆者作成) .....                                   | 113 |
| 図 39 観客の属性の重なり(筆者作成) .....                                   | 119 |
| 図 40 メディアの広がりと客層(筆者作成) .....                                 | 122 |
| 図 41 活動に深くかかわる観客とゆるやかにかかわる観客(筆者作成) .....                     | 123 |
| 図 42 表現活動にかかわるプロセス(筆者作成) .....                               | 124 |
| 図 43 セルフヘルプ・グループの活動のステージ(野田(1998: 26)の図 2-1 より一部改編)<br>..... | 138 |
| 図 44 AA の大規模な集会(40 周年記念)のパンフレット .....                        | 139 |
| 図 45 病気の表現活動の位置づけ(筆者作成) .....                                | 140 |
| 図 46 〈思考〉〈参集の枠組み〉の軸を想定した表現活動の位置づけ(筆者作成) .....                | 141 |
| 図 47 表現活動の中での分類(筆者作成) .....                                  | 143 |
| 図 48 越境を通じた当事者間のつながりの形成(筆者作成) .....                          | 157 |
| 図 49 当事者の知識の重なりと相互への影響(筆者作成) .....                           | 173 |
| 図 50 生存の表現によるつながりの形成(筆者作成) .....                             | 189 |
| <br>   |     |
| 表 1 アンケート記述内容例 .....   | 126 |
| 表 2 病気の表現活動とある自助グループとの違い .....                               | 135 |

# 第1章 序論

## 1.1 研究の背景

本研究は、病気や障害等の当事者が自作詩の朗読、音楽等のパフォーマンス活動を行うという本研究のフィールドにおける実践(以降、「病気の表現活動」もしくは単に「表現活動」と表記)の検討を通して、「つながり」をつくる上での当事者の知識を明らかにすることを目的としている。

病気や障害を抱える当事者は、孤立や自己否定に悩み、社会的な偏見にさらされがちな状況にある。それゆえ、当事者はセルフヘルプ・グループなどで当事者同士でつながり、自尊心を回復させ、運動などの形で自己主張や権利復興に向けての活動を行ってきた。そうした、孤立しがちの中での当事者同士の関係形成、自己否定に陥りやすい中での自己規定のなし方、偏見がある中での社会に対しての働きかけ方などはいわば当事者の知識ととらえることが可能であり、本研究の関心はそうした当事者の知識の理解を深めることにある。なお、本研究では当事者間、対自己、対社会の関係を「つながり」と表し、人々が有する技法や意識を「知識」と表している。

本研究フィールドでは「生きづらさ」という言葉がキーワードになっている。「生きづらさ」は現代社会において重要な課題であり、多様な意味合いを持っている。「生きづらさ」は病気や障害などの生物学的側面を越えて、心理的、社会的な経験を指すこともあれば、病気や障害に限らない、様々なストレス状況や、貧困、就労問題などの問題群を指す際にも用いられる。病気や障害への対応において、疾患の管理など生物医学的側面と共に、心理、社会的側面へのアプローチが重要視されている中、その現象の理解を深めるために、もしくは、病気や障害ではなくとも、様々な生きづらさを生み出す状況への対策を考えるために、生きづらさを考察することは重要な課題といえる。

本研究は様々な知識が想定される中、いわゆる病気や障害などの当事者において一定の普遍性を有する知識、いわば専門家の有する知識とは異なった当事者の有する新たな体験的知識を見出すことを視野に入れている。従来そうした知識は、主として共通した問題、疾患のもとでなされるセルフヘルプ・グループや障害者運動などの実践を通して検討されてきた。本研究フィールドとなる病気の表現活動は、当事者同士で集まり共感するような側面もあれば、パフォーマンスなどの表現を行う、多様な意味合いを持つ「生きづらさ」をキーワードとするなどの特徴を有している。こうした従来検討されてきたセルフヘルプ・グループや障害者運動、当事者による芸術活動などの当事者の実践と重なりながらも、それぞれの分野にまたがったり、一部違いを有したりする特徴的な実践を見据えることによって、当事者の知識の新たな発見、その理解の進展が期待される。

本研究は、「生きづらさ」をテーマとして、病気などの経験をパフォーマンスとして表現するという

実践を通して、当事者の知識における理論的知見の発展に寄与することを視野におくものである。

## 1.2 研究の目的

本研究は、病気や障害等の当事者が自作詩の朗読、音楽等のパフォーマンス活動を行うという本研究のフィールドにおける実践(「表現活動」等と表記)の検討を通して、当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか(MRQ: Major Research Question)を明らかにすることを目的としている。ここでは「つながり」を広く、対当事者、対自己、対社会との関係ととらえており、以下の4つのサブディアリーリサーチクエスチョン(SRQ: Subsidiary Research Question)を設定する。

1. 表現活動は他の当事者活動とどのように違うのか
2. 当事者はいかにして当事者間をつながりをつくるのか
3. 当事者はいかにして自己を規定するのか
4. 当事者はいかにして社会とつながるのか

ひとつ目のSRQは研究成果の普遍性にかかわる問いである。本研究は本研究フィールドである表現活動を通して、当事者の知識を明らかにする試みである。そこで、本研究ではまず、表現活動と他の当事者活動との違いを明らかにし、当事者活動として表現活動がいかに位置づけられるのかを検討する。その上でSRQ 2, 3, 4, を明らかにし、次に、それらに通底する当事者の知識の検討を通してMRQ(メジャーリサーチクエスチョン)に答える。

## 1.3 研究の方法

### 1.3.1 研究のフィールド

本研究で対象となるフィールドは新潟市を中心として活動する、病気や障害、ひきこもりなどの経験を有する人々による表現活動である。

なお、本論文における「表現活動」とは、「心身障害者のパフォーマンス集団<sup>1</sup>」である「こわれ

---

<sup>1</sup> イベント「こわれ者の祭典」における活動の紹介、イベント周知用のフライヤー(たとえば2014年8月3日、12月13日イベント用)、などにおいて度々このように紹介される。「心身障害者の表現イベント(月乃2011: 著者紹介)」と紹介されることもある。

者の祭典」と、ひきこもりや心の病を有する人々により構成されるプロダクション<sup>2</sup>である「K-BOX」という組織の活動を指している。詳細は後述するが、概要としては次のようなものである。「こわれ者の祭典」は数人のメンバーで構成され、年に数回の公演などを行っている活動である。「K-BOX」は 20 名程度のメンバーが在籍し、毎週のレッスンと呼ばれるメンバーが集まる活動と、月 1 回程度のライブ活動などを行っている。それぞれの活動を行うメンバーの年齢構成は約 20 歳代～40 歳代にわたり、パフォーマンス内容は、自作詩の朗読や歌、病気などの経験のトークなどで構成される。そして、表現活動を行う人々は、ライブ活動以外にも、講演会や祭などの地域のイベントへの参加、インターネットの動画中継や、著書の出版といった活動を広く行っている。

### 1.3.2 エスノグラフィ

本研究は、知識科学研究であり、病気や障害などの当事者のパフォーマンス活動のエスノグラフィである。

エスノグラフィとは、人類学分野で発展してきた長期のフィールドワークを中心とした研究プロセスであり、同時にフィールドワークを元に書かれたものを指す (Sanjek 2002)。本研究は当事者の知識を明らかにするものであり、そのためには、実践の実際の詳細や当事者の行動や心理、考え方等およびそれらの関係について調べることが有用である。それら—たとえば人々の行動や心理など—は様々な方法により分析されうる。綿密に設計された個人へのインタビューを行うことで、焦点を絞った当事者の深い理解が可能となり (熊倉 2003)、厳密な手続きを経ることにより、普遍化された知見が生成される (Strauss and Corbin 1990=1999)。また、質問紙などによる大規模な調査を行うことで集団の特性が明らかにされ、洗練された尺度を用いることによって客観的な比較が可能となる (篠原ほか 2010; 村上 2006 など)。しかしながら、数量的な分析は変数間の関連を明確にするが、なぜ、どのように関連が生じるのか、社会文脈的な背景や文化的な環境がいかんして個人のアイデンティティを規定していくのか、といった問いに答えていくのは困難であるとされ (野沢 2009)、エスノグラフィは、そうした問いに答えていくひとつの手法となる。エスノグラフィは微視的な調査であることが特徴であり、普遍的な一般化を志すというよりは、「厚い記述」による、事例の中で一般化することを理論構成の基本的課題とする (Geertz 1973=1987)。そして、他の調査法、たとえば大規模な質問紙調査でこそ明らかにされうることを明らかにするには向いていないが、そうした調査法ではできないような、事例を通した理論的知見の発展に寄与できる。エスノグラフィでは、長期間のフィールドワークを行い、参与観察やインタビュー調査、各種資料の収集

---

<sup>2</sup> たとえば「心の病を抱えた方やひきこもりの方などがプロデュースを受けてアーティストやタレントとして所属しているプロダクション (2014 年 12 月 21 日イベント時配布資料など) と説明されている。

を行った上で、観察者としての外部の視点と共に、そこに暮らす人々の内部の視点、全体論的な視点を重視し、生活様式や価値観、社会関係などを文脈や社会背景を踏まえ考察する。人類学は障害を社会環境の中でとらえる上で有用であり、精神障害へ人類学的知見の蓄積が期待されている(Cunningham 2009)。本研究で人類学的な手法を用いた理由には、精神障害や生きづらさなどを抱えた人々を社会環境を含め包括的にとらえることを目指したことが挙げられる。そして、単にパフォーマンスの場で語られる内容のみではなく、インフォーマルなインタビューや、実践にかかわる数々の資料、実践に参加する中での印象など、多様な情報を分析対象とし、長期にわたってかかわることでみえてくる実践の機微をとらえることで可能となる新たな当事者の知識の発見、特定の実践を深く見据え、当事者の知識にかかわる知見と照らし合わせることによって可能となる当事者の知識における理論的知見の創出を期待することによる。

エスノグラフィは、近年ビジネス分野などにおいて、他の研究手法では見出されなかった新たなリアリティの理解をもたらすものとして活用され、応用的な意義や可能性が着眼されているところである(Baba 2014)。本研究はそうしたエスノグラフィの特性を活かして、特に保健福祉分野において当事者の知識を活用した施策形成等に寄与する知見の生成を試みるものである。

### 1.3.3 データ収集およびその記述について

データ収集の主となるフィールドワークは、筆者が表現活動に観客やボランティアスタッフとして継続的にかかわる中で行われた。フィールドワークはイベント「こわれ者の祭典」(年 4 回程度)、K-BOX ライブ(月 1 回程度)を中心としながら、イベント前に行われる打ち合わせ、メンバーが主催、出演する各種ライブ活動、講演会、地域で行われる行事などに渡って、2008 年より約 6 年間にわたり 160 回程度かけて行われた。データは、参与観察によって得られたデータ、イベントの広報活動などで使用される印刷媒体、表現活動のメンバーや関係者による著作物(著書、新聞記事、インターネット上の情報など)などを用いた。筆者は、調査フィールドのひとつである「こわれ者の祭典」においては主にスタッフとして、「K-BOX」においては、主に観客としてかかわり、調査者、スタッフや常連の観客として表現者はじめ関係者に認識されていた。また、少し踏み込んで自己紹介できる時には、調査者として論文を書こうとしていること、普段は看護系の大学の教員をしていることなどを伝え、メンバーや一部の観客などからは、スタッフや観客としてと同時に、調査者や大学の教員として認識されることもあった<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> 筆者は関係者と名刺交換する機会がある際は大学教員としての名刺を用いていた。「大学で教えてるんですか」と確認されたり、「何を教えてるんですか」といったことを聞かれることがたびたびあった。



こわれ者の祭典のスタッフとしての活動は、イベント当日の会場設営や物販管理、受付、打ち上げ交流会などの運営、メンバーやスタッフの車で送迎、宿泊が伴う公演における宿の確保、広報活動、予算管理などが挙げられるが、筆者は種々の運営補助と共に、予算管理の補助を主として担当した。これらを行うことによって、メンバーやスタッフの会議などに参画し、運営の機微を知ることができ、移動の最中にメンバーやスタッフに様々な話を聞かせてもらうことが可能となるなど、スタッフとしての仕事を通して関係者とかかわることで、多様なデータの収集が可能となった。また、表現者は他の組織や活動にゲストとして呼ばれたり、共に活動したりという機会も多く、そうした機会でのフィールドワークを通して、多様な当事者の活動に触れることが可能になった<sup>4</sup>。そうした他の当事者活動の実践についてフィールドワークから得られた情報は、障害者運動や、セルフヘルプ・グループ、当事者による芸術活動などの当事者の実践にかんする先行研究と共に、当事者活動としての病気の表現活動の理解を深める助けとなった。

調査をするにあたっては、まずそれぞれの表現団体の代表者に調査許可を得た。双方の活動共、パフォーマンスという開かれた表現活動であること、そして過去、および調査中においてもテレビや新聞などのメディアから取材を受けていることなどが多々あることもあってか<sup>5</sup>、病気や障害という秘匿されがちな内容をテーマにする活動にしては調査に対しての抵抗感は少ないように感じられた。個々のメンバーや関係者には論文などの形で得られた情報を記載することの了承を得たが、ゲストや病気の表現活動がかかわる組織、およびそれにかかわる人々などについては、筆者が自己紹介をしたり、調査許可を得たりする機会が設けられた場合もあるが、そうではなかった場合も多く、そうした組織や人々についての記述については、公にインターネットやイベント案内用のフライヤーなどで公開されている情報を中心に提示するのとどめるなどの調整を適宜行った<sup>6</sup>。こわれ者の祭典の観客を交えたイベント終了後の打ち上げ交流会、同様に観客を交えたK-BOXのライブ後の忘年会などにおいて、参加者に自己紹介をする際に、「スタッフとしてかかわっていて取材をさせてもらっている」といった程度の自己紹介をすることが多いものの、個別に聞いたことを書かせてもらうことの許可は得ることは困難な場合も多く、観客を含む参加者の様子や、会話の中から得られたデータの表記については、個人の詳細というよりは複数の参加者の様子と

<sup>4</sup> たとえば表現者がゲスト出演した、精神障害者の当事者コミュニティであるべてるの家でのフィールドワーク(2011年8月27, 28日)、当事者によるパレード(2011年10月9日)、千葉県における当事者や福祉関係者による地域福祉セミナー「吹く詩の宴」という活動等(2011年12月13日)が例として挙げられる。

<sup>5</sup> 2004年に日本テレビの「Dの嵐」という番組に取り上げられたことがたびたび語られることがある。また、その他ニュース番組に取り上げられたり、新聞社の取材がイベントに入ることがたびたびフィールドワーク中にも見受けられた。

<sup>6</sup> 非常に少数ながら、写真は載せないでほしいとの希望もあり、該当する人物が映っている写真は利用しないようにした。

してとらえられる範囲の内容の記述にする等の、個人の情報を考慮しつつ、かつ活動の深い記述となるよう試行錯誤する中で調整を行った。

研究参加者の権利の擁護、倫理的問題については、様々な見解がある。本研究は保健医療上の話としてとらえることも可能である。医療現場における調査をする際の倫理的配慮として「匿名化」や「同意書」の作成が要請されることが一般的であるが、倫理を書類上の問題として終わらせることへの懸念もまた示されているところである(浮ヶ谷 2009a)。また、タブー視される精神科の患者さんをモザイクをかけずに映画作品中に映し出すことにかんして、その製作者は様々な葛藤や衝突、齟齬を経験したことが記されている(想田 2006)。そして、「モザイクが守るのは、被写体ではなく、往々にして作り手の側である。それを掛けてしまえば、できた作品を観た被写体からクレームが付くことも、名誉毀損で訴えられることもない。要するに、被写体に対しても、観客に対しても、責任をとる必要がなくなる。そこから表現に対する緊張感が消え、墮落が始まるのではないか(想田 2006: 53)」と記される。このような見解からは研究論文なり映像なり表現する上での倫理において、匿名化しさえすればよい、モザイクをかければよい、ということですませないことの重要性がうかがえる。論文を記載するにあたっての研究参加者の権利の擁護については、守秘義務を守るために、「書類による同意を得る方法」と共に、「事例のもつさまざまな識別情報を変え」て、特定できないようにするという方法—具体的には「ある特性を変える」「具体的な特徴の描写を限定的にする」「合成画像などを用いる」—などが示されており(以上引用は American Psychological Association 2010=2014: 10 より)、本研究においても一部先述したこと—観客やゲスト、関連組織の記述など—も含め、そうした方法を取り入れた記述の仕方をしている部分がある。

本研究フィールドで収集され、本稿で表記される情報には広く、インターネットや書籍などで不特定多数に開かれている情報もあれば、そうではないその場に居合わせたからこそ得られる情報もある。表現活動という活動形態をとることもあって、活動にかかわること、そこで発せられる個人の経験などを記述されることへの障壁は低いかもしれないし、必ずしもそうではない部分もあるかもしれない。表現活動で表されているからといって盲目的に記載してよいというものでもないであろうし、どの程度のことを記載すべきかについてすべての調査協力者から了承を得ることは非現実的である側面もある。記述した内容のみをもらうことも活動の中心をなす一部の人には可能かもしれないが、一部見たことや聞いたことを記載させていただくことがあった人がいるにしても、そうしたすべての人に記述した内容のみをもらうことは難しいかもしれない。現在に至るまで、筆者が記述した論文等を一部の情報提供者に掲載前に見てもらったり、論文が掲載されてから、その後に別刷りを可能な範囲で表現者や関係者に手渡したこともあった。現状のところ、手渡した方々には快く受け取ってもらうことができ、「活動のことを書いてもらってありがたい」といった肯定的な言葉もいただくこともあったが、人によっては負担となることもあったのではないかと、思うこともある。たとえば

一部の表現者の方には興味を持って読んでいただけるかもしれないが、たとえば何らかの形で情報を活用させてもらったとしても、筆者と何度も会ったわけではなかった観客やゲストの方などにとっては論文などを手渡されても迷惑だったかもしれない。また、原稿を手渡すことは、特に事前に見ていただく場合などは、見てもらうことを強要するような意味合いを有することになるかもしれないし、記述した内容をみてもらう負担等も考慮に入れる必要があるのかもしれない。もちろんそうした負担をかけることになったとしても、見てもらう必要がある場合もあるのかもしれない。映像作品において、了承を得たといってもその後被写体の心が揺れ動くこともあるように(想田 2006)、調査対象となる人々の心も揺れ動くことがあることも考えられ、許可が得られたから書いてもよいというわけでもないことも考えられる。

本論文も可能な限り、表現者はじめ研究フィールドの関係者に広くみていただく予定であるが、冊子として配るのか、電子媒体でみてもらうのか、その際は誰にお知らせするのか、といった点は引き続き考慮していきたいと思っている。本研究は、一概に匿名化したり、同意書をとったりといった手続きを経ているわけではない。記載することにより誰かに何かしらの不利益が絶対にもたらされないと断言することは難しいかもしれない。しかし、識別情報を変える、情報をぼかす等の配慮をしてしまうことにより、正確な記述にならず、かえって調査参加者・協力者が誤解を受けるような記述になり、そのために誰かに迷惑をかけてしまうかもしれない。そうした迷いがある中、本論文は記述されている。本研究では以上のような点を考慮しながら、すべての情報において厳密に記述する上での了承を得ているわけでもなく、かといって得られたすべての情報を提示しているわけでもない記述の仕方をしている。調査者と研究参加者との関係性に基づいて、記述内容をその時々で倫理面を考慮しながら吟味し、記述を行っているという状況となっている。本研究での収集されたデータの記述の仕方については、学術上、倫理上最善とはいえないと思われるが、その反面単純に最も好ましい倫理的配慮を規定することの困難さも想定される場所である。本研究は以上のような考えの元、データが収集、記述されている。

### 1.3.4 分析

分析は得られたデータを、当事者の知識にかんする先行研究の知見と比較することにより行われた。「つながり」については、当事者間、自己規定、対社会それぞれに、セルフヘルプ・グループや、当事者による芸術活動、障害者運動の実践などを通して、社会学、人類学をはじめ、福祉、心理、看護学などの分野での検討がなされている。そこでは、当事者は疾患など共通性を基につなってきたこと(Katz and Bender 1976)、当事者特有の文化を創出し(木村・市田 1996)、病気や障害だからこそその能力を重視し、病気や障害などの特性の価値を転換させた自己規定をなし

てきたこと(倉本 1999), 健常者社会と対立する形で社会に働きかけ, 権利復興を成し遂げてきたことなどが示されている(横塚 1975; 自立生活センター協議会 2001)。

当事者の知識にかんする先行研究では, 当事者の知識は専門家の知識とは異なった体験的知識として存在することが指摘されており(Borkman 1976), 共通性で参集し, 自己の属性を価値転換し, 対立的に社会に働きかけることは当事者の培ってきた知識ととらえられる。しかしながら, 同じ当事者といえども人々は多様であり, 当事者グループ内で共感できないことがあること(綾屋・熊谷 2010), 当事者が権威化されてしまうこと(向谷地 2009), 問題が狭義の当事者性に封じ込められてしまう問題が指摘されているところである(豊田 1998)。本研究では, そうした問題意識を元に, 当事者間のつながり, 自己とのつながり, 社会とのつながり, において, いかに多様性がある中を当事者間でつながり, 価値転換とは異なる自己規定がなされ, 対立とは異なる対社会的な実践がなされるのか, という観点から分析を行った。加えて, 弱さの価値を示す知見や, 表現やパフォーマンスへの着眼から示唆を得た弱さにかかわる知識(中村 1982 など)を参照し, 分析から見出されたつながりをつくるためのそれぞれの知識に通底する当事者の知識を考察した。

## 1.4 研究の意義

本研究の意義のひとつは, 「生きづらさ」という枠組みで参集し, 自らの病気や障害の経験をパフォーマンスという形態で不特定多数に公開する活動を展開するという, 事象としてユニークな当事者の活動の詳細を描くことにある。本研究フィールドにおいて多数の人々が関係する精神疾患の世界では, 経験は秘匿されがちなものであった。セルフヘルプ・グループなどにおいて当事者間で経験が語られるものの, 非当事者などの外部に経験を基にした知識が表出されることは少なく, 当事者の知識は閉じられた当事者間のコミュニティの中で共有されてきた傾向があると思われる。しかしながら, 本研究フィールドで行われている実践は, 自らの経験をステージ上でパフォーマンスとして表現するものとして開かれているものとなっている。こうした実践の詳細の記述を通して, 一面的にとらえられがちな当事者の実践の豊かさを示し, 従来表出されてこなかった当事者の知識を明らかにすることが可能になると考えられる。

そして本研究の学術的意義は, 単に特徴的な実践を描くのみならず, 当事者の知識について理論的知見を付与することにある。従来当事者は共通性でつながり, 弱さの価値転換をし, 結束して対立的に社会変革をなす, という知識を有してきたことが示されているが, 差異ある中での当事者間のつながり, 価値転換にとどまらない自己規定, 対立にとどまらない対社会的実践についての当事者の知識は未知である部分が多い。そうした知識を明らかにすること, 加えて, 弱さが人々とのつながりをつくるような力を持ち, 弱さ自体が価値を有することを示す知識科学的知見を

受けて、当事者のつながりをつくる知識の理論的モデルを示すことが本研究の学術的意義となる。

本研究の実務的意義は、見出された知識が、従来明らかにされてきた当事者の知識が抱える限界を克服する可能性を有することにある。つまりは、共通性での参集が生み出す排外的な状況から生じる孤立を解消し、価値転換できない人々に自尊心の回復を促し、当事者の権威化や運動が有する対立や社会的問題が狭義の当事者性に封じ込められてしまう状況を回避しうる知識が見出しうる。加えて、特に人類学・社会学的知見は、自明視されていたことを相対化し、新たな可能態を探る上で有用であると考えられ、そうした観点で検討された弱さを基にした知識の理解を深める理論的知見は、メンタルヘルスなどにかかわる保健福祉施策における理念や施策の方向性の拡張・発展に寄与しうることが考えらえる。

## 1.5 本論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

第1章(本章)では、研究の背景を述べた後、研究の方法、目的、意義を示した。まず、「生きづらさ」の問題が現代的な重要な課題であることを示し、当事者間、對自己、対社会とのつながりにおいて当事者が抱える課題を整理した。そして、当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか、というメジャーリサーチクエスチョンと、①表現活動は他の当事者活動とどのように違うのか、②当事者はいかにして当事者間のつながりをつくるのか、③当事者はいかにして自己を規定するのか、④当事者はいかにして社会とつながるのか、というサブディアリーリサーチクエスチョンを設定した。そして、研究方法としてエスノグラフィを採用し、本研究は、未だ明らかにされていない当事者の知識の解明や弱さにかかわる知識の理解を深める意義を有することを示した。

第2章では、文献をレビューした。そこではまず、本研究で用いられる「生きづらさ」「つながり」、「知識」、「当事者」といった概念を整理し、当事者のつながりと知識についての文献レビューを行った。そして、多様な経験を有する当事者間でつながる知識、価値転換を越えた自己とのつながりをつくる知識、社会との対立を越えた知識が明らかにされる必要があることを示した。加えて、パフォーマンスや表現に関連する「弱さ」にかかわる知識のレビューを行い、弱さに基づく知識科学的観点を本研究における分析の視点として用いることを示した。

第3章では精神疾患や身体障害、ひきこもりなどの生きづらさを抱える当事者によるパフォーマンス活動の実際を示した。そこでは、活動の実際、つまりは本研究のフィールドとなる2つの活動の概要、パフォーマンス内容などと共に、団体を越えてメンバー個々で行われている活動、イベント以外の表現者の日常、観客の概要や活動の評価のされ方などを示した。

第4章では、他の当事者活動との比較を通して、表現活動の理解を深め、当事者活動としての

表現活動の位置づけを検討した。そして、当事者活動といえどもさまざまなものがあり、表現活動と同様にセルフヘルプ・グループを中心とした他の当事者活動ひとつひとつもそれぞれに多様な側面を有していることを示した。また、表現活動はユニークな活動でありながら、他の当事者活動と多くの共通点を有することを示し、表現活動は、多様で豊かな様相をみせる当事者活動のひとつと位置付けられることを示した。これらから、他の当事者活動と多くの共通点を持ちながらもユニークな表現活動の実践を見据えることにより、未だ見出されていない当事者の知識を照射し、当事者の知識の理解を深めることが可能となることが考えられることを示した。

第5章では、フィールドとなる表現活動にて見出せる「生きづらさ」によるつながりと知識を示した。そこでは、表現活動において人々は、共通性と共に、時に差異を用いて、時に福祉的文脈以外の文脈に越境しながら当事者間のつながりをつくること、価値転換と共に弱さや負の側面を強調する自己規定をなすこと、当事者性を人々に付与し、サブカルチャーとして対外的に働きかけていることを示した。そして、表現活動でみられる「生きづらさ」でつながる人々の知識は弱さを基にしたものであるが、その背後には「生存」があり、生存を表現することが表現活動にかかわる当事者が有するつながりをつくる知識となっていることを示した。

第6章では、リサーチクエスションに対する回答を発見事項としてまとめた。そこでは、第5章で見出された知識を、表現活動における知識にとどまらず、当事者の知識として検討し、当事者のつながりをつくる知識の理論的モデルを提示した。そして、本研究を、当事者は生存を表現するという知識によってつながりをつくと総括し、今後の課題を述べた。

## 第2章 文献レビュー

本章ではまず、「生きづらさ」、「つながり」、「知識」、「当事者」といった概念や言葉の使われ方についてのレビューを行い、本研究における用語の用い方を設定する。次に、当事者のつながり、知識についてのレビューを行う。

### 2.1 本研究で用いる主要な概念

本研究は、「生きづらさ」を表現する人々の実践から「つながり」をつくる「当事者」の「知識」を明らかにするものである。そこで、本節においてそれらの概念がいかに用いられ、本研究においていかに用いるのかを述べる。

#### 2.1.1 「生きづらさ」について

「生きづらさ」は近年注目されている言葉である。「生きづらさ」という言葉が保健福祉の文脈で使われ始めたのは1980年代であり、その際は、精神保健福祉上の地域生活上の問題として用いられていた(加藤 1981)。その後多様な文脈で使われ始め、リストカットや自傷行為などに絡むメンタルヘルスに問題を抱える「メンヘラ」、機能不全家族で育った「アダルトチルドレン」といった言葉と共に用いられやすい状況にある(雨宮・萱野 2008; 渋井 2010 など)<sup>7</sup>。「生きづらさ」が語られる文脈としては、「青少年の不可解な犯罪」「中高年のうつや自殺の問題」「老年世代、高齢世代」(香山・上野ほか 2010: 5)、「いじめ、DV、引きこもり、非行、心身のトラブル、挫折、自殺企図、親との葛藤、親の離別、就職難と失業、飢えや住居喪失など(田畑 2010: 10)」、「機能不全家族、不登校、精神障害や発達障害を持つ人、非正規雇用や貧困の問題、同性愛者や夫婦別姓論者などの社会的少数派、ユニークフェイス、など(川北 2009: 293)」が挙げられる。「生きづらさ」を明確に説明するのは困難である中で(山下 2010; 藤野 2007)、心理学、精神医学的立場からは自らの存在価値が脅かされるようなアイデンティティや心の個人的な問題として、社会学的な立場からは経済的な問題や多くの人に共有される社会問題としてとらえられている(雨宮・萱野

---

<sup>7</sup> アダルトチルドレンとはもともと、「アルコール依存症を親にもつ子どもが成人した状態(小池 2007: 132)」であり、アルコール依存に限らず、広く家族問題を抱えながら育ってきた人を指す言葉となってきた。そして、「メンヘラ」は「メンタルヘルスに問題を抱える人々の総称(雨宮 2009: 173)」と説明され、多くがリストカットなどの自傷行為をする(雨宮 2009)とされる。また、「メンヘラ」もしくは「メンヘラー」という言葉には侮辱的、否定的なニュアンスが含まれるとされる(渋井 2010)。

2008; 香山ほか 2010; 草柳 2004; 田畑 2010)<sup>8</sup>。

「生きづらさ」は、「従来の福祉や医療の枠組みに乗りづらい困難(川北 2009)」であり、生きづらさの文脈で語られやすいひきこもりやアダルトチルドレンは、「流動的かつ相対的な問題領域である(斉藤 2003: 42)」とされる。そして時に「制度的な『強い解決策』は無効であるか、しばしば有害(斉藤 2003: 42)」とされ、生きづらさを抱える当事者の理解や支援のあり方については今後の検討が求められるところである。

「生きづらさ」は病気や障害、そして広くメンタルヘルスの問題などと関連を持ちながら、広い文脈でとらえられるものである。そして個人のアイデンティティの問題であると同時に社会的な問題でもあり、本研究でもそのようなものとして扱っている。個人のアイデンティティ、社会的な問題の双方から当事者のつながりを考察し、従来の支援の枠組みでは取り残されやすい人々を視野においた保健施策の方向性を検討する上で、「生きづらさ」を基にした実践を考察することが期待される。

## 2.1.2 「つながり」について

「つながり」は、様々な状況で用いられる言葉である。たとえば災害後に目指す姿として報道などで用いられることもあれば(大谷 2006)、ひきこもりからの回復(竹中 2010)、自殺対策(松本 2011)などにおいて重要なものとして用いられている。そして「絆」「関係性」「ネットワーク」といった言葉が「つながり」に関連する言葉として日常的に用いられている(宇野 2010)。「つながり」は、「役割」、「居場所」などと共に、喪失が危惧されているものであり(園田 2008; 阿部 2011)、「人間の尊厳を保つうえで不可欠なもの(阿部 2011: 97)」とされる。一方で、「生きづらさ」をテーマにした論考(香山ほか 2010)にて、「つながり依存症」「つながり恐怖症」という言葉が用いられたり、「関係性への脅迫(宇野 2010: 7)」が指摘されているように、「つながり」は肯定的な側面のみならず否定的な側面も語られることがある。

「つながり」が厳密に定義されて用いられている場合は少ないが、「ネットワーク」や「コミュニティ」などについては検討がなされている。「ネットワーク」は、「複数の『モノ』がある程度持続性のある何らかの関係を基礎にある種のまとまりを形成しているもの(金子 1986: 7-8)」、「コミュニティ」は、「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が働いているような集団(広井 2009: 11)」、「近隣とか地域社会と

---

<sup>8</sup> もっともアイデンティティや心の問題は、密接に社会情勢と結びついていることが考えられ、「生きづらさ」をとらえるためには、個人のアイデンティティの問題と社会情勢の双方の結びつきを見据える必要があると考えられる。



いう意味あいと合わせて、共通の関心事で結びついている人々とか共同社会といった意味内容をももっている(園田 2008: 83)ものとされる。文化人類学事典の「ネットワーク・コミュニティ」の頁(多田 2009: 428)においては、「コミュニティ」「ネットワーク」が双方共に「社会集団」を意味するが、「ネットワーク」は「個人という『点』を『線』でつないで」、「集合」を形作る役割を担うもので、「コミュニティ」は、「何らかの事項(場所・物・社会的装置など)を核にしてその周りにつくられた『集合』」と説明される。このように、ネットワークは集合を構成する要素間の線をつなぐ関係が強調され、コミュニティは人の帰属意識に基づいた集合といった側面が強調されている。

「つながり」が語られる際には、「ネットワーク」や「コミュニティ」との関連づけられることがある。小池(2012)は、「ネットワーク概念が、個人と個人の間は無機的な(数量的な捕捉が可能となるような)二者関係の連鎖を意味しているのと違い、『つながり』は、当事者間の交渉を通して多様な意味合いを含みこむような概念である(小池 2012: 337)」とし、広井(2011)は、コミュニティを考察する中で、「コミュニティ感覚」を人々の「『つながり』の意識(広井 2011: 67)」と表す。また、文化人類学事典にて「セルフヘルプ・グループ」を説明する浮ヶ谷(2009b)は、「『病いを抱える人たちはいかに集うのか』という「参加者の〈つながり〉のあり方」と表し、今後の理論的な考察が必要としつつ、「〈つながり〉とはおもに人と人との関係(浮ヶ谷 2007: 14)」を意味しながら、「モノ、情報、金融、イデオロギー、信念、感覚、情動のレベルに至るまで、〈つながり〉を生成する要素として視野に入れている(浮ヶ谷 2007: 15)」、という形で「つながり」をとらえている。

一般的にメンタルヘルスやセルフヘルプ・グループ、支援の文脈において、当事者と家族、支援団体、機関、専門家、地域などとの関係を示す際に「つながり」という言葉は用いられており(上岡・大嶋 2010; 高森 2012; 久保・石川編 1998; 山崎・戸ヶ里 2011 など)、「つながり」を構成する要素としては、こうした当事者を取り巻く人や組織が考えられる。加えて、先に挙げた「モノ、情報、金融、イデオロギー、信念、感覚、情動(浮ヶ谷 2007: 15)」、他にも「死者」「記憶」(伊藤 2008)など、「つながり」という言葉にて必ずしも実在する人や組織ではないものとの関係を表す場合も見受けられる。「つながり」という言葉をタイトルにしている書籍「つながりの作法(綾屋・熊谷 2010)」においては、仲間といった人間間の関係性と共に、自らの身体とのつながりを考察している。また、障害のある、意のままにならない他者としての身体との交渉過程や(熊谷 2009)、幻聴などの症状を外在化させるなどの、「内なる他者」との付き合い方が当事者の術として検討されているところである(浮ヶ谷 2010)。加えて「拡大した自我ともいえるものにつながり、それに包まれることが、新たに私というまとまりを創り直すのに必要な前提(平野 1995: 61)」、とあるように、観念的なもの、身体やアイデンティティといったものとの関係として「つながり」が考えられている。

「つながり」は、さまざまな状況で用いられ、肯定的にとらえられることが多いが、否定的な側面も指摘される多様な意味合いを持つ言葉である。そして、「つながり」を構成するのは、一般的に

には人や組織と認識されやすいと考えられるが、人や組織のみならず、モノであったり、観念であったり、自分自身であったりする。「つながり」は、ネットワークやコミュニティと関連づけられながら、無機的な関係にとどまらない多様な意味合いを有し、モノや人だけではない多様な要素を含む関係を表すものとしてとらえられる。本研究では、以上の知見を受け、また本研究における問題意識と照らし合わせ、当事者間の関係、自己との関係、社会との関係を「つながり」と包括的に表している。

### 2.1.3 「知識」について

「知識」とは何か、という問いに対しては哲学の分野で考察されており、「知識」とは「正当化された真なる信念 (justified true belief)」であるという定義に合意がなされているとされる (Nonaka and Takeuchi 1995 = 1996; 大串 2007)。そして、大串 (2007) は、知識を「個人の信念やスキルを真理に向かって正当化していくダイナミックで人間的／社会的な弁証法的プロセスである (大串 2007: 204)」とし、知識は、観念的なもののみならず、技能やスキルを含み、対話を通じた弁証法的プロセスによって「社会的に構成され、さらには新たな知識の実践が社会を再構成する (大串 2007: 204)」ものとする。これらから知識は個人の信念やスキル、およびそれらが様々なものとの相互作用の中で真理といった普遍性を持つものへと向かうプロセスを含むものであると解釈できる。当事者の活動でいうならば、個人が有している信念や技法、およびそれらが何かしら人々との間で共有されていく過程や社会に働きかけている中での社会との相互作用の過程、それらを通して個人的な信念や技法が普遍性を有するようになったもの、などが知識としてとらえられると考えられる。

保健医療分野においては、当事者の体験的知識 (experiential knowledge) という形で医学的専門知とは異なった知識を当事者が有していることが示されている (Borkman 1976 など)。そうした患者の持つ知識については、「単に科学的に正しいか否か、症状の改善に資するか否か、という観点から吟味される『情報』あるいは『知識』に限定しない、より広義の本人の生を豊かにするもの (松繁 2012: 102)」を扱う理由から、「知識」ではなく「知」と表現する立場もみられる (松繁 2012)。また、単に個人が有しているものではなく「関係性の成果」として「知」をとらえることも重視される (松繁 2010)。こうした知見を受けて、本研究においても、当事者の有する信念や技法、意識等を「知」と包括的には表す場合がある。しかしながら、先にみたように「知識」は、単に情報や科学的な正当性のみ依存しない技法や信念、社会との相互作用を含むものとしてとらえる観点が示されており、本稿においては、「知識」を、人々の有する技法や信念を含む包括的なものとして扱っている。なお、ここでは本研究における知識のとらえ方を示した。当事者の知識、表現にかかわ

る知識, 弱さにかかわる知識といった分析的視点の詳細については, 別途次節に述べることにする。

## 2.1.4 「当事者」について

「当事者」という言葉は, ひとつの問題に絡む人々を広く意味する語感を有するが, 障害者運動や訴訟などの法的概念においては限定的に用いられているように用語の用いられ方に幅がある(豊田 1998)。何らかの被害を受ける人を当事者ととらえるならば, 病気や障害を持っている人も当事者になるであろうし, たとえばその家族なども当事者ととらえられる。問題にかかわる人を当事者ととらえるならば, 被害を受ける人のみならず, 問題を起こす人もまた当事者ということもできる(星加 2012)。このように「当事者」概念は際限なく広がり, 「当事者概念のインフレ(上野 2011: 72)」が懸念される中, 当事者を「ニーズを持った人々(中西・上野 2003: 9)」、「ニーズの帰属する主体(中西・上野 2003: 9)」と定義する立場がある(中西・上野 2003; 上野 2011)<sup>9</sup>。こうした限定された定義により, 当事者と他の関与者を分けることができる(上野 2011)。そして, 「当事者」は, 「当事者性」をキーワードとしたセルフヘルプ・グループの活動をはじめとした実践をなし(久保 2004), 専門家主義への対抗から, 当事者の視点でみる「患者学」「当事者学」を発展させてきた(中西・上野 2003)。また, 当事者が自分自身のことを研究という形で調べ, 公表し, 知識を共有する「当事者研究」が多くなされるようになってきた(綾屋・熊谷 2008; 浦河べてるの家 2005; 中西・上野 2013 など)。このように, 当事者, とりわけ病気や障害などを有する人々は単に医療・福祉的なサービスを受けるのみならず集い, 活動し, さらには知識を生み出し, 共有する状況にある。

本研究では以上の流れを受けて, 「当事者」を, 病気や障害, 生きづらさを抱え, 何らかのニーズを持った人, そして, 参集し知識を生み出し, 当事者同士, そして非当事者に働きかける人々を表す言葉として用いている。当事者はニーズにより規定されるので, 本研究では必ずしも病気を有する人々のみならず, 主観的な「生きづらさ」を抱える人々も「当事者」ととらえている。病気や生きづらさを抱えながら表現活動を行う人々は当事者であり, イベントに参加し, 表現者に共感する生きづらさを抱える人々も当事者であるにとらえられる。イベントを支援する人々などは, 「当事者」として共感する人もいれば, 「非当事者」として活動を支援する立場にある人もいることが考えられる。もっとも, 非当事者と当事者との明確な線引きは困難であり, 「当事者」概念はゆるやかに「非当事者」と接続されていることが考えられる。本研究では, そのような当事者と非当事者の重なりを

---

<sup>9</sup> この考え方によれば, 問題を生み出す環境に適応してしまつたらニーズは発生しないため(中西・上野 2003)「当事者」は『「問題を抱えた人々』と同義ではない(中西・上野 2003: 2)』

意識しながらも、病気や障害をはじめとした生きづらさを抱え、ニーズを持った人々を「当事者」として扱っている。

## 2.2 当事者の「つながり」と「知識」

ここでは、当事者のつながりと知識についてレビューする。具体的には、当事者間のつながり、アイデンティティ構築にかかわる自己とのつながり、社会とのつながりがいかなるものであるのか、当事者や表現にかかわる知識はいかに語られてきたのかをレビューし、本研究における知識の分析の視座である「弱さ」の視点を提示する。

### 2.2.1 当事者間のつながりー共通性を越えて

当事者の「つながり」の中でも、当事者間のつながりの重要性は認識されているところである。病気や障害を有する人々にとって孤立は重要な課題であり(上岡・大嶋 2010; 自立センター協議会 2001)、セルフヘルプ・グループの大きな意義は、孤立に陥りやすい当事者の孤立を解消することにある(Hill 1984=1988)。

当事者間のつながりの形成についての先行研究は、主に当事者が集まるセルフヘルプ・グループでの研究でなされており、当事者は共感を基につながり当事者間につくり、専門家のみではなしえない回復をなしてきたことが指摘されている(久保 2004; Katz 1993=1997; Hill 1984=1988; 平野 1995; Levy 1976)。セルフヘルプ・グループでは同じ体験をした人の間で、気持ちや情報、考え方の「わかちあい」が基礎になり、自己決定や社会参加という「ひとりだち」、自分への尊敬や社会への働きかけといった「ときはなち」(といったセルフヘルプ・グループの働き)がなされるといわれている(岡 1999)。このように、社会参加や社会への働きかけといった機能を含むセルフヘルプ・グループの基底をなすものとして、同じ体験をわかちあうことが挙げられる。

一方で、より詳細に、当事者間のつながりのあり方が研究され、単に共通性に基づく共感により当事者間のつながりがつくられているわけではないことも指摘されている。たとえば、セルフヘルプ・グループが一見同じように体験で参集しているようにみえながらも、個々の経験は固有であり、そうしたズレを認識し、許容しながら参集していることや(浮ヶ谷 2004)、参集は、迫真性を伴う物語が紡がれる場への帰属感によってなされていること(伊藤 2000)、見解の相違を提示し合い、語り合いを続ける中に共同性が見出されること(佐藤 2002)、相互支援は集団のアイデンティティが明確に固定されていないことでなされること(佐藤 2002)などが示され、これらはセルフヘルプ・グループが単に同じ経験をした人々が集まる場ではなく、共通性のみではなく、語る営みなどの

行為や要素によりつながりがつくられていることを示している。

そして、当事者間のつながりについては、経験が個別的で多様であるがゆえに、苦勞くらべなどの対立が生まれる危険があることがいわれている(荒井 2013)。また、グループ内で共感できない人、過剰適応してしまう人(綾屋・熊谷 2010)、当事者としての言説に同意できない人、といった当事者の集団に馴染めない人々の存在が指摘されている(自立生活センター協議会 2001)。そうした中、明確な共同体の物語の生ずる場に語りにくさを感じ、グループを渡り歩くことによって、むしろ雑多な物語が許容される場を見つける当事者の実践も紹介されている(福重 2013)。また、当事者による先駆的な実践として注目を浴びてきたべてるの家<sup>10</sup>において、近年は、統合失調症に加え、パーソナリティ障害やうつ病など多様な人々が増えきたことによって、今までのやり方が通用しにくくなることがいわれており(中村 2014)、多様な人々が参画する中での当事者によるコミュニティの実践のありようを考察することが求められている。

理論的な立場からは、コミュニティは有意義なものでありつつも、「当該コミュニティに関わる人はいいが、必然的にそうでない人を排除する(金子ほか 2009: 49)」、「強い規範が同調圧力として働き、自由で合理的な意思決定をかえって阻害する(金子ほか 2009: 49)」という「逆機能」を持つことがいわれている。また、集合的なアイデンティティを固定化することは、政治的な力を発揮する源になるとともに、抑圧にもなるジレンマを生じさせることが指摘されている(Gamson 1995)。セルフヘルプ・グループのような、当事者による参集を考察するうえでも、「ただ『仲間と会えば肯定的な感情をもてるようになる』と安直にはとらえられない(伊藤 2013: 157)」といわれている。このようにつながりはあればよいものではなく、時に抑圧的となりうることが想定される。

以上のように当事者間のつながりは、そのみではないものの、共通性を基本につくられ、孤立しがちな当事者に共感をもたらしている。しかしながら、当事者間のつながりにみられる排外性や、同調圧力、過剰適応、抑圧といった諸問題を見据えた共通性を越えたつながりをつくる知識を探索していくことが求められている。

## 2.2.2 自己とのつながり—価値転換を越えて

本研究では、「つながり」を人と人との関係のみならず、アイデンティティの再構築といった点に深くかかわるものとして扱っている。病気を有する人々の基本的な苦悩は「自己の喪失(Loss of

---

<sup>10</sup>浦河べてるの家についてはたとえば以下のように紹介されている。「社会福祉法人「浦河べてるの家」(小規模通所授産施設 2ヶ所、グループホーム 3か所、共同住居 3か所)と有限会社「福祉ショップべてる」からなる共同体。主に精神障害をかかえた 16歳から 70歳代までの約 150人が、北海道浦河町で多種多様な活動をおこなっている(浦河べてるの家 2005 著者紹介欄)」。

self)』といえるものであり(Charmaz 1983), アイデンティティを再構築していくことは, 疾患をコントロールすることや, 社会的役割をコントロールすることと共に慢性疾患を抱える人々の仕事(work)となる(Corbin and Strauss 1985)。

基本的には, 病気は負のものとしてとらえられ, 排除されるべきものとされる。医学的知識は疾病を治癒するための知識であり, 障害の分野においても障害を排除し, 健常者とできるだけ同じになるよう同化的な価値観の元でリハビリテーションが進められてきた経緯がある(熊谷 2009)。しかしながら, 病気や障害, 症状は, 単に排除されるものとして存在してきたのみではないこともいわれているところである。診断名が時に汚名返上のために求められることもあれば(ニキ 2002), リストカットがファッションとして注目を浴びるものとなり, うつ病が「人々から一目置かれるアイデンティティ(香山 2008: 143)」になろうとしている状況も指摘される。また, 過食や薬への依存, リストカットは生き延びる上で必要なものである側面があるとされる(上岡・大嶋 2010)。これらから, 病気や障害といった属性は単に悪いもので, 排除していくべきものと単純にとらえられるのではなく, 自己とのつながりを考える上で多様な意味合いを有している。

当事者がアイデンティティを再構築していく, つまりは自己とのつながりをつくっていく上での知識には様々なものがあると考えられる。病気を否定することも, 受け入れていくこともそのひとつであると思われる。そして, 病気や属性の「価値転換」がひとつ自己との関係をつくる手段として挙げられる。価値転換は否定的にみられてきた病気などの属性の価値を転換することで, 生きづらさを克服する上で鍵となるものとされる(田畑 2010)。自己の能力を発見し, 強調することで自己肯定をなす動きは, たとえば障害をひとつの文化としてとらえる障害文化において見受けられると考えられる。障害の文化には, 〈名づけ〉られる従属文化, 〈名づけ〉への反発である対抗文化, 〈名のり〉としての固有文化があるとされ(杉野 1997), 肯定的な自己を獲得していく知識を当事者は固有の障害文化を発展させることを通して育んできたと考えられる。耳の聞こえないろうを抱える人々は, ろうを機能の欠損とみるのではなく, 手話言語を用いる文化ととらえ「ろう文化宣言」を宣言した(木村・市田 1996)。障害者運動やセルフヘルプ・グループによる実践も, 独自の文化や伝統の創出を担ってきた(自立生活センター協議会 2001; Katz 1993=1997)。さらには, 当事者による芸術活動などでは, 障害者ならではの芸術的価値を追求するという新たなアイデンティティ形成のあり方を当事者は獲得してきた(倉本 1999; Barns and Mercer 2010; Vasey 2004; 服部 2003)。当事者による芸術活動は, 障害を健常者と異なる文化であるとみなすと共に, 自らの障害を能力や美に転化することによって(藤澤 2005; 倉本 2010, 1999; 西倉 2010; 金 1996), 否定的にとらえられてきた属性を価値づけてきた。

価値転換により, 抑圧されてきた当事者はアイデンティティを再構築し, 自尊心を取り戻してきたが, それで当事者の自己規定における問題が解決するわけではない。たとえば, 「やればでき

る」といったセルフコントロールの理念が生活習慣病をコントロールできない人にとって抑圧となることがいわれているが(浮ヶ谷 2004), それと同様に価値転換の規範は, 価値転換できない人々を窮地に追いやりかねない。また, 当事者の権威化や(向谷地 2009), 被害の主張から来る当事者の特権化(小池 2007), 当事者の聖化(伏見 2005)の問題が指摘されている。当事者の権威化は専門家や非当事者からの支配からの脱却に寄与する一方, 「支配者が専門家から当事者に入れ替わっただけ(熊谷 2009: 224-225)」の状況を生み出し, 権力構造を再生産してしまうことが危惧される。このような問題が危惧されることもあり, 不利益を受けている人の特権性を主張する立場はいまや過去の遺物となっているとされる(星加 2008)。経験が権威化されることで, 「他人の経験を排除(荒井 2013: 40)」されること, そしてそれを防ぐあり方を探っていく必要がある(荒井 2013)。

当事者の価値転換を基にした自己規定は, 肯定的なアイデンティティの獲得に寄与する一方, 同時に価値転換できない人を窮地に陥れ, 当事者の権威化, 聖化をもたらす危惧をはらんでいることが考えられる。価値転換がもたらす問題をいかに克服しうるのかを考察する上で当事者による自己規定における知識を探索することが求められる。

### 2.2.3 社会とのつながり—対立・同化を越えて

当事者と, 非当事者が多数を占める社会とのつながりには様々な形態があり, それは時に協力関係であり, 時に対立関係でもある。たとえば当事者は医療や福祉のユーザーとして非当事者の専門家と協力的な関係を有しているといえる。一方では抑圧されている状況に対する運動の形にみられるように当事者と非当事者は対立関係をなす時もある。セルフヘルプ・グループにおいては, 専門職やボランティアによって活動が支えられ, 協力関係を有している場合も多い(岡 1999; 葛西 2007; Powell 1987; 中田 2007)。また, 喘息の当事者の知識を検討した研究にて, 医療者と患者が共に学びあう姿勢や, 双方のパートナーシップ, 協働の重要性を示した研究もなされている(秋本 2010)。一方, 運動などにおいては, 「健全者文明を否定する(青い芝の会 行動綱領)」という立場に立ち, 異議申し立てや自己主張を社会に対して行い, 当事者の権利を勝ち取ってきた経緯がある(自立生活センター協議会編 2001; 横塚 1975=2007; Barton 2004; French and Swain 2004=2010)。病気や障害などの当事者は, 身体的苦痛のみならず, 「病気は墮落の証拠(Sontag 1977=1992: 209)」というイメージや, 社会的意味に苦しめられてきており, そうした社会的イメージを変容させるよう働きかけてきた。対社会的な実践の意図としては世間に流布しているような, 当事者のイメージを変えるような側面も有していると考えられる。障害者運動などが対社会の当事者の実践として注目を浴びがちであるが, セルフヘルプ・グループもそのタイプによっ

ては対社会の活動を活発に行っている。専門家などの非当事者と協力関係を結ぶセルフヘルプ・グループもあれば、専門家からの独立を基本的立場とするセルフヘルプ・グループもある。また、運動のように社会変革を意図した活動を行うグループもある。セルフヘルプ・グループには自己変革機能と共に社会変革機能があるとされ(岡 1986, 1988), 活動の志向がグループ内部に向かうものと、外部に向き、社会変革を促すものとに分類する考え方があることは(平野 1995; 野田 1998), セルフヘルプ・グループが対社会的な機能を有することを示している。さらには、セルフヘルプ・グループの社会に向けての外向きの活動としては、異議申し立て・社会の改変という形の他に社会参加という形があることが示されている(岡 1995)。セルフヘルプ・グループは、相互援助と共に、制度改善要求などの社会変革を「非人間化と疎外事態への抵抗(山崎・三田 1995: 184)」として行い、直接運動のような形はとらずとも、社会変革の基盤を醸成してきたとされる(Back and Taylor 1976; Gartner and Riessman 1977=1985)。セルフヘルプ・グループ以外でもディアビリティーアートやアウトサイダー・アートは、芸術的見地から障害を価値づけ(倉本 2010; 西倉 2010; 服部 2003; Maclagan 2009=2011), また純粋に芸術活動であるのみではなく政治的で、自己主張や抑圧への動きとしての障害者運動としての特徴、可能性を有するものであるとされる(Vasey 2004; 荒井 2011)。このように当事者はセルフヘルプ・グループや、運動、芸術といった活動の中で、社会との協力、対立、社会参加といったつながりをつくり、社会の中で生き、時に社会を変革するように働きかけてきた。

しかしながら、当事者と専門家などの非当事者のつながりについては、専門家など非当事者による支配、管理(Freidson 1970=1992; 中田 2007)も未だ残る課題であり、またそれへの対立・転換、対立(社会の否定)か同化(自己否定)かの選択を迫られるジレンマといったような課題(草柳 2004)も残されているところである。当事者が排除・抑圧されがちな状況において、健常者社会の根深い価値や規範を崩していく取り組みが求められているが(岡原 2012), 対立や同化に限らない当事者の社会とのつながりをつくる知識においては未知の部分が多い状況にある。また、浮ヶ谷(2007)が指摘するように、当事者の集団の枠を越えた広い視座から当事者をめぐる「つながり」を検討することが求められており、当事者はいかにして当事者内の枠を越えて、そして対立・同化を越えて社会とつながりうるのかの検討が求められている。

## 2.2.4 当事者の知識—「弱さ」を越えて

これまで、当事者は、当事者間、自己、社会との間で、共通性、価値転換、対立・同化といった観点でつながりをつくってきたことを示してきた。このようなつながりをつくる上での考え方や技法は当事者の知識といえる。ここでは、それらを統合し、当事者はいかなる知識を用いてつながりを



つくるのか、というメジャーリサーチクエスションに答えるため、そして学術的に知識科学的知見を積み重ねるための分析の視点となる知見のレビューを行う。

## (1) 体験的知識

当事者の知識にかんする知見としては、「体験的知識 (experiential knowledge) (Borkman 1976)」が重要である。これは、セルフヘルプ・グループにおける知識として見出されたものであり、医学的な専門的知識と対比してとらえられ、理論的というよりも実践的なもの、長期的というよりも「いまここ」のもの、分割されたものというよりも全体的なものであるとされる (Borkman 1976)。保健医療の分野においては、知識は専門的自然科学的知識である生物医学的知識と、病いの経験などに端を発する体験的知識とが対比して語られてきた。医学的知識は専門家によって体系づけられ発展し、そうした専門的知識は、多くの疾患の治癒を可能にしてきた。しかしながら、同時に、専門家が素人を支配するようになる「専門家支配」の問題や (Freidson 1970=1992)、不完全な不確実性を伴う医学的専門的知識をあたかも完全なもののように扱うことの問題が指摘されている (中川 1996)。また、専門的知識である科学的知識はリアリティの問題への問いに答えるように組織されていないという限界を有しているとされる (武井 1993)。医療の分野においては、科学的に細分化された医学的な専門的知識が重視され、全体を見据える視点が欠けていることが指摘され (Bateson 1972=1985; Dubos 1959=1964)、狭義の専門的知識をしのぐ全体的な複雑さを踏まえた知識の意義が強調される。そうした問題提起を受けながら、専門的知識と対比して、「体験的知識」の考察はなされてきた。Borkman (1976) は、体験的知識と専門的知識は相互に排他的なものではなく、時に専門家も体験的知識を尊重するとしている。そして、体験的知識を、専門的知識と比して劣っているものではないとする。また、体験的知識と同様に、専門家の専門性に対して、「日常生活を送る上で生じたさまざまな困難や支援を要する出来事に対処していく能力、体験者でなければ持ち得ない知恵、工夫、見方 (標 2008: 148)」である「素人の専門性 (lay expert)」についてもその存在が強調されている (Prior 2003; 松繁 2010)。当事者の知識を検討した研究にて、「チーム医療でより積極的な役割を果たす患者の新しい概念としてナレッジ・エージェント (秋本 2010: 109)」が提示されており、これは「知識創造の主体 (agent) であり、かつ知識共有と協働を促進する仲介者 (agent) (秋本 2010: 109)」であるとされている。こうした知見は、当事者は当事者特有の知識でもって、多様な人々や組織との相互作用をとっていることを示している。

このように、保健医療の文脈の中で、知識は科学的、医学的な専門的知識と全体的、実践的な体験的知識とに区分され、専門的知識の限界と、体験的知識の意義が語られてきた。Kiefer (2006=2010) は、保健医療において、専門的知識、体験的知識の双方の意義を認めつつ、人類学的調査にて見出しうる複雑で常に有機的に変化している社会システムに根づいている知識が、

自然主義的知識と比して証明や客観性において弱点はあるものの、問題を有効に理解し、他者に説得するうえで有用であるとする。そして、浮ヶ谷(2004)が指摘するように、いわゆる当事者の知識は、科学的知の様式によって退けられてしまい、専門知に比して明らかにされていない側面があることが考えられる。加えて、当事者の知識としてとらえられる体験的知識は経験すればわかる素人(lay)の知識とも区別され、問題理解や解決の型(template)を発展させるものであり、ある意味専門的知識のように洗練されているものであり、それらはセルフヘルプ・グループのみならず様々な文脈で生じるものとされる(Borkman 1990)。

当事者の知識はその重要性や存在が認識されているものの、その実態については未知の部分が多い。加えて、単に素朴に経験したからわかるということを超えて共有、洗練された当事者の知識の検討が求められているところである。本研究の目指すところは、つながりをつくるための当事者の体験的知識を見出すことといえる。

## (2) 表現にかかわる知識

本研究は当事者によるパフォーマンスなどの表現活動をフィールドとした研究である。表現にかかわる知見には様々なものがある。当事者と表現という観点で見れば、アウトサイダー・アートという形で当事者が新たな芸術的価値をもたらすという視点もあれば(服部 2003 など)、病院環境にアートを取り入れる取り組みが医療現場でなされていることなどが示されている(アートミーツケア学会編 2014 など)。また病跡学という分野にて「特異な性格や精神症状がその人物の創造性や業績とどのように関連しているか(林 2005: 2)」と、病む人の創造性という観点が検討されている。そして本研究フィールドとなる表現活動を通じた調査もなされ、そこでは表現活動にて表される当事者である人々の実践や考え方(杉本・伊藤 2010; 杉本 2011, 2013)、スタッフなど表現者以外の人々などの思いや経験(稲田 2014)が検討されている。しかしながら、知識としての検討、とりわけフィールドである病気の表現活動にとどまらない当事者の知識としての検討、また表現がいかに知識と関連するのかといった表現にかかわる知識の検討が課題として残されている。

表現にかかわる「知識」としては、「演劇的知」と表される知識が構想されている。「演劇的知」はひとつの「〈知〉の新しい範型(中村 1983: 3)」の表現のされ方である。「演劇的知」と表される知識は、科学の知と対比される知識とされる。つまり、「抽象的な普遍性によって分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化する(中村 1992: 135)」科学の知に対し、「個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする(中村 1992: 135)」知識とされる。そして科学的知の構成原理が普遍主義、論理主義、客観主義であるのに対し、コスモロジー、シンボリズム、パフォーマンスを構成原理とする(中村 1992)。コスモロジーとは場所や空間を「一つ一つ有機的な秩序

をもち、意味を持った領界と見なす立場(中村 1992: 133)」であり、シンボリズムとは「物事をそのもつ様々な側面から一義的にではなく、多義的に捉え、表す立場」、パフォーマンスは〈性能〉でもただなにかをやるだけのことではなく、「身体性を帯びて行為し、行動する(中村 1992: 135)」意味合いを含むものとされる。そして、パフォーマンスは身体性を帯びることで、自ずと「パトスの(受動的, 受苦的)な在り様(中村 1992: 135)」を含むものとなり、パフォーマンスは〈行動＝能動(アクション)(中村 1983: 259)〉と区別された、「パトス的な劇的行動(中村 1983 259)」ととらえられる。

「演劇的知」は、こうした構成原理を有する知の形態のひとつの表され方となっている。こうした知識は「演劇的知」のみならず、「パトス(受動, 受苦, 痛み, 病い)の知」「臨床の知」などとして示されている(中村 1982, 1983, 1992)。これらはすべて「〈知〉の新しい範型(中村 1983: 3)」を示しており、それらの違いは、「機械論モデルに対して演劇モデル(中村 1983: 3-4)」、「能動的知に対してパトスの(受動的, 受苦的)(中村 1983: 4)」, といった「重点の置き方のちがひ(中村 1983: 4)」であり、「ほとんど同じ知の形態(中村 1992: 109)」とされる。

とはいえ、本研究のフィールドは「表現」や「パフォーマンス」の活動であり、演劇的知、パトスの知が、「パフォーマンス」を構成原理とし、「演劇」がキーワードとなってくることは興味深いところである。「演劇的知」との名称にみられるように、こうした知識は本研究のフィールドとなる実践の「パフォーマンス」「表現」といった特性と密接に結びついており、その関係は、まず「演劇」や「パフォーマンス」はパトスの知を構想するのに「有力な手がかり(中村 1992: 112)」となっていることが挙げられる。たとえばインドネシアのバリ島において、忌避される魔女や悪魔を、退けるよりむしろ祭り上げる実践を手がかりにして、パトス(受苦, 情念, 受動)から自己を守り、文化に活力を与えるパトスの知が見出されている(中村 1983)。また、演劇の特質に新たな知識の体系をみることができる。演劇の特質は「人間と世界とを凝縮して重層的に捉え、描き出すこと(中村 1992: 116)」であり、「等身大の日常的な人間ではなく可能的な人間を表現することによって、人間の隠れた本質を捉えること(中村 1992: 116)」である。その特質により、機械論的モデルでは得られないものごとの理解の仕方を演劇から得ることができる。そして、劇的行動は、矛盾した方向性を持つようにみえるが、パトスの知として理解可能だという。パトスの知を構想した中村(1992)は、劇的行動が、情念に動かされた受動的行動とも、自己に責任をもった能動的行動ともとらえられ、「能動と受動という対比(中村 1992: 118)」で混乱する経験をしたが、その「能動と受動との一見矛盾した結びつき」は「身体性を帯びた人間の行為を介したもの(中村 1992: 137)」との理解に至ったという。このように「演劇的知」「パトスの知」は一見矛盾するような物事の結びつきを理解するものの見方となる。

表現にかかわる知識としては、演劇的知以外にもパフォーマンス<sup>11</sup>における身体化された知の重要性が述べられている(高橋 2005)。パフォーマンスは身体化された実践であり、権力に作用する力、境界を溶解、変容させる力があるとされる。そして、「身体化された知は、行動する知(高橋 2005: 198)」であり、「パフォーマンスの様態を用いた抵抗の実践であるべき(高橋 2005: 198)」であるという。パフォーマンスは「社会批評をエンタテインメントとして成立させ(鈴木 2011: 69)」、「自分は当事者ではないから関係ないと思っていた人々にも見て聞いてもらって、考えてもらおうきっかけを作るための試み(鈴木 2011: 69)」となることから、社会にコミットする姿勢がパフォーマンス研究に求められており(高橋 2005)、パフォーマンスを研究することによって当事者が社会にかにつながるか(働きかけるのか)を考察するうえで、大きな示唆を得ることができると思われる。

「演劇的知」が演劇を手がかりにして見出されたように、パフォーマンスを行う本研究フィールドにおいても近代科学的知が見落としてきたいわゆる、有機的、多義的、身体性を帯びた行為、といった要素を含む当時者の知識を見出すことのできる手がかりが多分に含まれていることが考えられる。また、パトスの知は矛盾した結びつきの理解を深める見方になりうる。当事者のつながりには、共感をすれば排他的な要素が生じる、価値転換しようとすればできない人が窮地に陥る、当事者として声を上げれば問題が当事者のものに矮小化されてしまう、といったような様々な矛盾するような困難や状況があることが想定される。そうした状況の理解を深め、社会にコミットしながら解決していく道筋を開いていくことが求められており、それにはパフォーマンスや表現という実践およびその意義を見据えることが重要になると考えられる。

### (3) 「弱さ」の視点

「パトス」は「情念だけでなく、受動、受苦、痛みなど、いわば人間の弱さにかかわるもの(中村 1983)」とされ、パトスの知は弱さにかかわる知といえ、知識を考える上で「弱さ」は重要な視点となっている。Borkman(1976, 1990)のいう「体験的知識」も、パトスの知と別個のものではなく、病む人の知識であることにおいてパトスの知の「弱さ」と通じるものであり、科学的、生物医学的知識との対比で考えられること、全体的、文脈的観点を重視することにおいてもパトスの知に通じるものである。

体験的知識やパトスの知で強調される「弱さ」は、単純に「強さ」に比して価値をもたないものでも、克服すべきことでもなく、絆を作り、文化に活力を与えるものであるとされる(松岡 2005; 向谷地 2002; 中村・金子 1999; 金子 1992; 鈴木 2011)。金子(1992)は、ボランティアを考察する

---

<sup>11</sup> パフォーマンスという言葉は様々な使われ方がなされるが、演技や芸能のみならず、社会的役割を演じ分けるなど「何げない普段の生活(高橋 2005: 19)」の振る舞いといったことも含まれるとされる(高橋 2005)。

中で、弱さや傷つきやすさ、脆弱さといったバルネラビリティが新しいつながりを創造するものであることを示し、熊谷(2009)は無力や不適応が、関係の多様性を生み、つながりをつくる上での強みとなることを示している。精神保健関係の当事者の世界においても「弱さ」の意義はよく語られている。困難な状況を生き抜いてきた人々は弱さを基にした共感によりつながり(Frank 1995=2002)、依存症などの病気においても、弱くあることが、経験を分かち合えたり、依存症などの悪循環を断ち切る起点となることがいわれている(葛西 2004)。精神障害者の当事者コミュニティであるべてるの家では、「弱さの情報公開」という理念を大切に(向谷地 2002, 2009)、「弱さを安心して見せられる社会(向谷地 2009: 177)」の方向性が探索されている。そこでは「“病気の体験を人に知られる”ということは、私に新しい可能性をもたらすもっともメリットのある暮らし方となっている(向谷地 2009: 178)」とされる。「弱さ」を積極的に表明していく精神障害者当事者の実践もみられ、これらは、「『強い自己』の相対化(小池 2007: 199)」「近代批判トーン(小池 2007: 193)」を含むものであり、「弱さ」は、当事者の自己規定や対世間への活動において重要な意味を持つものであると考えられる。子どもや病院や老人、障害者といった多面的な側面から「弱さ」を検討した知見からも、弱さの非生産性に起因する遊びやアートといったところの本質性などが表され、弱さと強さの二元論を脱却の方向性が示されている(高橋・辻 2014)。弱さは当事者の知識の重要な一側面であるが、つながりをつくる当事者の知識を包括的にとらえるには、弱さを越えた当事者の知識に通底するものについての理解が求められる。

「弱さ」は人々のつながりや新たな可能性を生み出すものとして注目されている(鷺田 2001)。「弱さ」を活用することは当事者の知識となっていると考えられ、「弱さ」は当事者間のつながりや、自己規定、当事者と社会との関係において、包括的に分析しうる視座となる。一方で、弱さの価値を示した知見は出ているものの、当事者の知識は必ずしも弱さに収斂されないことが考えられる。「弱さ」を前提としないような知識の可能性を探ることで、既存の研究では見出されなかった当事者の実践に通底する知識の理解が可能になることが考えられる。本研究で扱う病気や障害は「弱さ」に通じるものである。本研究は当事者のつながりをつくる知識を「弱さ」を視点に見据えつつ、一方では弱さを相対視し、既存研究ではとらえ損ねてきた包括的な当事者のつながりをつくる知識の理解を目指すものである。

#### (4) 「サブカルチャー」「生存」の視点

分析結果については次章以降に述べるが、当事者のつながりをつくる知識を包括的にとらえた際に、本研究結果からは「サブカルチャー」、「生存」の重要性が示されたので、ここでレビューを示しておく。

サブカルチャーとは「おおまかな定義づけ(伊奈 1999: 3)」として、「通例として」「メディア文化、

ユースカルチャー、対抗文化、アンダーグラウンドな文化、社会的な逸脱など」を指し、『由緒正しい』ものではなく、雑多で、しぶとく、たくましい魅力のあるもの、あるいは『裏』の、あやしげで危険な魅力を発散するものというイメージを喚起する」ものである。そして「そうしたイメージに加えて、『メイン』に対する『サブ』、すなわち『下位』という位置づけを持つ『下位文化』として」定義がなされている(以上伊奈 1993: 3 より)。表現活動では詳細は後述するがいい、サブカルチャーとしての活動の特性が重視されている。また、直接的にサブカルチャーとしての意識はなくとも、障害をユーモアを交えて表現し、経験などを笑うといった表現活動の実践の特徴もまた当事者の活動としては主流なものではなく、メインではないサブカルチャー的側面としてとらえることもできる。当事者の語りには「怒り」や「苦悩」と共に「笑い」の語りがあり、笑いの語りには耳を傾けてくれる人が増える一方、苦悩が覆い隠されることも危惧されている(稲沢 2006)。同時に、ユーモアが回復において重要であることも指摘されているところである(Herman 1992=1999; Wolin and Wolin 1993=2002)。アンダーグラウンドな、メインではないサブカルチャー的側面は笑いを含むといった表現活動の特徴も含め、表現活動の特徴として重視されている。当事者の実践におけるユーモアや笑いなどの観点の検討はなされているが、笑いやユーモアを含めた表現活動の特性をサブカルチャーといった観点からとらえることで、また従来見られてきた視点とは異なった当事者の知識の一側面が見出せることが考えられる。本研究では研究結果から見出されたサブカルチャーとしての当事者の実践という観点から新たな当事者の知識を考察する。

次に、研究結果から導き出されたもうひとつの重要な観点である「生存」についてのレビューを示しておく。「生存」という言葉は、病気や障害の当事者を含めて困難な状況生き延びてきた人を「生存者」ととらえる際等に用いられている。病気や障害、その他困難な状況生き抜いてきた人々は、“survivor”ととらえられ、その訳語として「生存者」が用いられる場合がある(中井 1999)。生存者(survivor)は、被害者(victim)、患者(patient)とは異なった当事者像を表すもので、心的外傷、家族関係の問題、がん、戦争などにおいて用いられている(Herman 1992=1999; Wolin and Wolin 1993=2002; 近藤・峰岸編 2006; Lifton 1969=2009)。生存者としての当事者のとらえ方は、「患者」や「被害者」といったとらえ方では見出しにくかった苦難生き延びてきた人々の意識や力、当事者への支援のあり方などの発見をもたらした。原爆や心的外傷生き抜いた人々が生存者として語られる研究では、生き残ってしまったことへの罪意識を感じる(Lifton 1969=2009)、経験を社会的行動に活かす生存者使命を感じる(Herman 1992=1999)、ユーモアや創造性などが逆境生き抜く力となる(Wolin and Wolin 1993=2002)などが示され、がん生き抜いてきた生存者についての研究では(近藤・峰岸編 2006)、治癒することを目指すのみでよいものではなく、慢性化している疾患の生活全般への影響を考慮した包括的な支援が必要になることなどが示されている。

本研究では以上の知見を受けて、表現活動がサブカルチャース的側面を持つ意義を考察し、「生存」という観点が当事者の知識といかに関連づけられるのかを視点にして分析を行う。

## 2.3 まとめ

本研究は、生きづらさを表現する実践から当事者のつながりをつくる知識を明らかにするものである。なお、本研究では、「生きづらさ」とは単に疾病にとどまらない苦悩を含み、個人的、社会的要素を含むものとし、「つながり」とは当事者間、自己、社会との関係を指し、「知識」とは客観的な情報のみならず、信念のような主観的な意識、技法といった要素を含むものとしている。そして「当事者」とは、単に疾病を有している者を指すのではなく、ニーズを有する主体を指している。

当事者のつながり—当事者同士の関係や、自己規定、非当事者を中心とする社会との関係—についての先行研究によると、当事者間のつながりとしては、セルフヘルプ・グループでのつながりがあり、そこでは共通性による共感がなされてきたことが示されている。自己規定については、負に見られてきた自らの属性の価値転換をなしてきたこと、非当事者が多くを占める社会とのつながりとしては、非当事者と協力関係を結んだり、同化を試みたりすること、そして時に運動などの実践で、権利復興や社会変革をなしてきたことが示されている。以上のような、孤立しがちな中での共通性でのつながりの形成、否定的な自己規定に陥りがちな中での自己の価値転換、抑圧されがちな中での異議申し立て、対立を通じた社会変容などの考え方や技法は当事者の知識といえる。

しかしながら、以上のような当事者の知識では対応が困難な状況が生じていることが指摘されている。当事者間の関係においては、同じ当事者といえどもその経験は多様であり、排外性や同調圧力、過剰適応、抑圧などが当事者間の共通性を基にしたつながりに生じうること、自己規定については、価値転換が当事者の権威化を生じさせ、価値転換の規範が当事者を窮地に陥れてしまうリスクを有すること、対社会の関係については、非当事者による支配や管理や、対立か同化かの選択を強いられるジレンマが生じることといった問題が指摘されている。ゆえに多様性がある中を共通性を越えていかにつながり、価値転換を越えた自己規定をいかに行い、対立・同化を越えた社会との関係をいかに構築するのか、といった課題が残されるが、そうした課題に対して既存の研究は十分に応えられていない状況にある。

体験的知識という言葉で語られるような当事者の全体的、实际的知識の、当事者のつながりの観点においての解明が求められており、そうした知識は、演劇やパフォーマンスなどのフィールドを通して解明される余地がある。バルネラビリティ(脆弱性)やパトス(受苦)などの検討を通して知識科学的観点からは「弱さ」の重要性が指摘されている。病気や障害を有する人々は弱さを有する人々であり、当事者の知識は弱さを視座に検討され、弱さの価値が諸研究にて強調されている。

しかしながら当事者の知識は必ずしも弱さに収斂されないことが考えられ、弱さも当事者の知識の一面といえる。弱さを前提にした視座を越えて、当事者の知識を分析することによって、既存研究ではとらえきれなかった当事者の実践に通底する知識を見出し、知識科学的知見を深めることが可能になると考えられる。



## 第3章 表現活動の実際

本章では本研究のフィールドである表現活動の実際を述べる。具体的には「こわれ者の祭典」という表現活動と「K-BOX」という2つの表現活動であり、これらの活動がどのような団体であり、どのような活動を行っているのかを述べる。そして、その他、メンバー個々が行っている活動や、表現者の日常生活について触れ、表現活動の重要な構成要素である観客について述べる。これにより、本章では当事者のつながりをつくる知識を考察する上での基礎となる情報を提示する。

### 3.1 こわれ者の祭典

#### 3.1.1 活動の概要

「こわれ者の祭典」は、精神・身体障害者を持つ人々がパフォーマンス活動を行う団体であり、イベント名である。イベント広報用フライヤー（広告用印刷物）には以下のように紹介されている。

こわれ者の祭典とは何か？

「病気」の体験発表&パフォーマンスイベント。「病気でどう苦しみ、そこからどう回復したか」をユーモアを交えたトークと、その病気に関するパフォーマンスで盛り上げる。現在まで、アルコール依存症、ノイローゼ、うつ、幻聴幻覚、過食症、引きこもり、脳性まひ、リストカット、自殺未遂、パニック障害、性同一性障害、などの体験者が出演した。平成14年5月に第1回「こわれ者の祭典」が新潟市総合福祉会館にて行われた。超満員170人を動員、会場を感動と笑いの渦に巻き込んだ。(2013年9月8日イベント用フライヤーなどより)

この紹介では端的に、こわれ者の祭典がパフォーマンスを行っていること、ユーモアを交えた活動であること、様々な病気や障害などを抱えた人たちによる活動であること、10年を越えて継続している活動であることなどが記されている。こわれ者の祭典の大きな特徴は、病気や障害やひきこもりなどの経験を有する当事者がステージ上でパフォーマンスを行うことにある。自作詩の朗読パフォーマンスをはじめ、様々なパフォーマンスが照明や音響などが考慮されたステージで大勢の観客の前で行う(図1)。



図 1 こわれ者の祭典新潟公演(2011年6月19日)

イベントは新潟、東京でそれぞれ年2回ずつ計4回定期的に行われている。会場は新潟では主に福祉会館といった公共の施設で行われ、東京公演はサブカルチャーイベントがよく行われるライブハウスでなされる<sup>12</sup>。観客数はその都度異なるが一般的な公演では新潟公演で70名程度、東京公演で100名程度の集客がみられる<sup>13</sup>。

「こわれ者」という名前については、月乃さんへのインタビュー記事(2012年9月14日、毎日新聞)によると、「思いつき」であり、「きれいな言葉は使いたくなかった。肉体は必ず滅びるので、人はみんなこわれ者だという思いも込めました」とあり、「こわれ者」という変わった名称には、きれいな内容を話したり、表現したりするわけではないイベントであることを表していることがうかがえる。「こわれ者」という名前には「障害者を表す表現として批判する人」もいて、「ネット掲示板に『病気をビジネスにするとはいなんだ』と書かれたことも」あったが、「笑いは潤滑油のようなもの」で、「出演者みんなに障害があることで、祭典が受け入れられるようになった」のだと思う、と語っている。

イベントでは毎回テーマが設定されており、イベント時のトークやパフォーマンスはテーマに沿った内容が意識される。テーマはたとえば以下の例のようなものがある。

- 「不登校を考えよう」(2014年9月21日)
- 「発達障害を考えよう」(2014年4月27日)
- 「偏見」(2013年9月18日)
- 「『生きづらさ』を、さらけ出そう」(2012年9月16日)
- 「ピアパワー 仲間の力」(2012年7月15日)

<sup>12</sup> 新潟公演は、新潟市総合福祉会館、東京公演は新宿ロフトプラスワンという会場では基本的には行われる。

<sup>13</sup> 10周年記念イベントなどの際は定期的な公演よりも多くの観客が集まる。

- 「みーんなビョウキだね！(2012年2月1日)」
- 「生きづらさから飛び出せ！」(2011年7月17日)
- 「生きづらくても大丈夫」(2011年1月9日)

このように「生きづらさ」、「仲間」といった活動のキーワード、「偏見」「不登校」といった当事者が抱える問題などがテーマに組み込まれる。

こわれ者の祭典は、2002年に第1回が行われ、それから10年以上にわたって活動が継続されている。活動をはじめのきっかけは、月乃さんの通っていた自助グループでの出会いにさかのぼる。この点については月乃さんへのインタビュー(末井 2013)でも以下のように記されている。

当時キリスト教徒になったんですよ。それは俺が入ってる自助グループがキリスト教系で、その自助グループに入るとキリスト教徒になる人が多いんですけど、教会の友達にノイローゼの男がいて、ギターがうまい木林くんっていう人なんですけど、彼と「病気イベントみたいなものがあるといいね」って話してたんですよ。(末井 2013: 291)

そして、月乃さんが自伝的著書(タイトル「窓の外は青」)を出版した関係で、その PR のためにラジオに出演し、そのことがきっかけでイベントの実現が現実味を帯びてきた。出演したラジオ番組にて、新潟のお笑い集団 NAMARA<sup>14</sup>代表江口さん、フリーアナウンサーの松井さん(2人ともこわれ者の祭典新潟公演の司会を現在に至るまで継続して行っている)と共演し、その後イベントが開始された。なお当初は1回の予定であったが(月乃 2011; 末井 2013)、現在に至るまで活動が継続されている。

### 3.1.2 メンバー

こわれ者の祭典のメンバーは、代表の月乃光司さん、副代表の Kacco さん、アイコさん、長男さんの4名となっている<sup>15</sup>。それぞれ、依存症や摂食障害をはじめとした精神疾患やいじめなどの

<sup>14</sup> 新潟のお笑い集団で、方言の「なまら」(すごい)にちなみ、1997年、「地方発のお笑いを作ろう」と江口さんが設立した(吉岡 2004)

<sup>15</sup> 厳密に誰がメンバーであるのかを規定するのは難しい点があるものの、一般的に現在のメンバーはこの4名として表現者間で認識されている。なお、第1回こわれ者の祭典から出場してきた長男さんは2014年度をもってこわれ者の祭典としての活動を終えようとしている(2014年12月13日長男さん主催イベント時トークおよび聞き取りより)。長男さんはこわれ者の祭典における自身の活動の集大成として、自作映像をまとめて披露するこわれ者の祭典映画祭を行った(2014年12月13日)。

生きづらい経験を有している。それらの内容はイベントにて語られる。次の一例はアイコさんの経験がイベントにて語られているところである。

アイコ: 私は強迫神経症なんですけれども、わかりやすい例を言うと、手を洗うことがとめられないとか。私の症状ではなくて、自分の考えていることが吹き出しみたいに出て、大勢の人の中にいるとみんながそれを見て、私の心の中を覗いているんだと思ったりして、無心になろう、無心になろうとするほどに、いろいろ考えてしまったりとか。

あと家の中の暴力がすごくたくさんあって、「おまえはだめだ、だめだ」と言われていたら、本当にだめなんだなって自分でもすごく思って、学校に行けなくなったりしたときがとてつらなかったです。

江口(司会)<sup>16</sup>: 今日初めての方も多いですからあれですけれども、おじいちゃんとかに殺されそうになったんですからね、ある日。

江口: 自分のお父さん、お母さんじゃないんだよね。

アイコ: はい。祖父ですね。

江口: 結局、お父さんは逃げちゃったんだよね。

アイコ: 父親もその暴力が嫌になっちゃって、家から出て行ってしまっ。

江口: いまだにあまり会えないみたいなの。

アイコ: そうですね。

江口: 今、お母さんと。

アイコ: 二人です。その祖父は亡くなったんですけど、最後までわかりあうことができなくて、その死んだあとのほうが余計につらかったんですよ。暴力を受けることが当たり前になっていて、暴力を受けない自分はどうやって生きていったらいいんだろうって。憎しみの対象がいなくなったことが、逆につらくなったんです。

江口: 俺、アイコちゃんの話でつらそうだなと思ったのは、最初の記憶の言葉みたいなのところで、お母さんがね。

アイコ: 最初、小さいころに、「ありがとうを言おう」とか、「ごめんなさいを言おうね」という言葉ではなくて、一番最初に言われたのが、「祖父を殺しちゃだめだよ」と言われたことが。

江口: わかります? ちょっと、元気よく「ちゃんと手を洗って」とか、そういうふうなんじゃなくて、「おじいちゃん、殺さないでね」ということが。(2009年12月13日、こわれ者の祭典新潟公演)

---

<sup>16</sup> 新潟のお笑い集団 NAMARA 代表で新潟公演の司会を務める江口歩さんを指す。

メンバーはそれぞれ表現活動をする際に用いる名前を用いて活動している。月乃さんは表現活動をする際に用いている名前を「本名的一部分を変更して(月乃 2011: プロログより)」「月乃光司」としたとしている<sup>17</sup>。以下に表現者自らが記載するプロフィールを示す。以下に示している内容は公演の周知に用いられるフライヤー(2013年9月8日公演用)などに記載されているものである。

月乃光司(アルコール依存症／引きこもり自慢)1965年生まれ。■10代の頃より醜形恐怖症, 対人恐怖症によりリストカット, 薬物乱用などの自殺未遂を繰り返す。引きこもり生活を4年間過ごす。24歳よりアルコール依存症になる。境界性人格障害と診断されて精神科病棟に3度入院。27歳から酒を飲まない生き方を始める。自助グループ活動により少しずつ回復。イベント以外では『落ちこぼれ会社員』として奮闘中。2009年「詩のポクシング」東京大会優勝。2010年新潟弁護士会人権賞受賞。

Kacco(摂食障害・引きこもり自慢)1967年生まれ。■28歳の時に, 躁鬱病, 摂食障害, パニック障害と診断され, 2度の長期入院と5年間の引きこもり生活を経験。摂食障害で体重は88キロから46キロへ激減。現在はイラストを中心に書道・詩を作るなど癒し系表現者として活躍中! 大手出版社のイラストを手かける傍ら, 引きこもりの人たちのサポート活動にも力を入れている。KHJにいかた「秋桜の会」居場所の代表・「K-BOX」代表・発声・ボイストレーナー。

長男(アダルトチルドレン自慢)1975年生まれ。■学校での成績が悪くて, 親から見離され, 山に捨てられて山師となる。しかし, 人生の鉱脈を見つけられずにうつ+社会恐怖を発症。ニート・フリーターなど転々とする。学歴コンプレックスが強く, 佐渡奉行のように出世に憧れるも, いじめられるだけのマゾ奉行に転落。現在は親子間を改善していく様々な活動に関わっている。02年に, 引きこもりの少年の周辺を描く映画「島に見える街」を監督。マスコミ等で話題になった。

成宮アイコ(強迫行為自慢)1983年生まれ。■機能不全家庭による暴力のストレスで幼少期からおかしな妄想や癖に悩まされ, 意味のない決まり事に縛られる毎日を送る。高

---

<sup>17</sup> しかしながら本名は必ずしも厳密に秘匿されているわけではなく, 月乃さんや Kacco さんが日常的に用いている名刺には本名の記載があり, 長男さんはステージ上以外の場では本名で話しかけたりする方がむしろ自然である状況であった。

校時代には体調を崩し、胃カメラの検査まで受けたが異常なし。その後、強迫観念と過大妄想の中、表現活動の世界に逃げ込む。不安が始まった時の逃避得意技は、九九を延々と数え続ける事。作詞作曲、歌、鍵盤演奏、詩、写真、短歌、映像、朗読、空間製作、などたくさんの表現手段を模索し個展などを行い、さまざまな分野で日々格闘中。

このように 30 歳くらいから 50 歳くらいまでのメンバーでこわれ者の祭典は構成されている。筆者がフィールドワークを始めたのは 6 年間ほど前になるので、当時は 20 歳代から 40 歳代、こわれ者の祭典が開始された時は月乃さんは 30 歳代、現在は、それぞれのメンバーが 30 歳代、40 歳代、50 歳代の節目を迎えつつある時期となっている。

病気は「～自慢」と紹介され、それぞれ病気の経験やひきこもりなどの経験を有していること、同時に会社員生活を送ったり、当事者でありつつ支援者としての活動を行ったり、様々な活動を行っていることが紹介される。

こわれ者の祭典のメンバーについては上記のとおりであるが、別途オーディションメンバーというメンバーがある。これは、以前、公演(2006年10月29日)のためのオーディションを行ったことがあり、その合格者を指している。なおオーディションは受けた人全員が合格しているとのことで、オーディションメンバーのうち何人かはその後も継続してこわれ者の祭典や、月乃さん主催の関連イベントなどに時折参加している。こわれ者の祭典の10周年記念公演(2012年9月16日)においては、オーディションメンバーによるステージが設けられた。しかしながら10周年記念公演といった例外を除いては、オーディションメンバーという名称が日常的に用いられることはあまりない。オーディションメンバーはこわれ者の祭典に出る際はゲストなど一出演者としてイベントに出演しており、出演回数が多い人もいれば、そうではない人もいる。オーディションメンバーである統合失調症の当事者の YOPPY さんは、こわれ者の祭典に参加する回数も過去に多く、メンバーのパフォーマンスのギター伴奏や自作曲などのパフォーマンス、当事者としてのトークなどを行っていた。フライヤーにも出演者として以下のように紹介される時もあった。

**YOPPY(統合失調症自慢・オーディションメンバー) ■19 歳で統合失調症と診断され、精神科病棟に計 8 回の入院。20 代の半分以上を入院生活についやす。30 代になって、精神病患者が通う作業所に行きながら音楽活動を本格的に開始！現在、場所を選ばず様々な場**

所でギター弾き語りをする。福祉施設やライブハウス、「生き様発表会<sup>18</sup>」や「こわれ者の祭典」など、県内外問わず精力的にイベントに参加している。音楽を通し様々な人との出会いから病気のリハビリと自分自身の生き方を模索する。(2010年12月5日こわれ者の祭典新潟公演フライヤーより)

メンバーは精神疾患を抱える人々が多いが、脳性マヒなどの身体障害を有する人も含まれていた。身体障害者が入ることによってこわれ者の祭典は「心身障害者によるパフォーマンスイベント」と称されることが多い状況になっている。また、身体障害がありこわれ者の祭典に継続してかかわっているオーディションメンバーの人もいる。イベント「こわれ者の祭典」を形作る人々は、精神疾患やひきこもりなどを中心としながらもそれらに限定されない様相を示している。

なお、長期的な視点でみるとメンバーの変化はみられる。たとえば2012年9月まで、「脳性マヒブラザーズ」というお笑いコンビを組んでいるDAIGOさんと周佐さんが、身体障害者の立場としてこわれ者の祭典のメンバーとして長く活動していたが、こわれ者の祭典を卒業するという形でメンバーではなくなった。他にも筆者がフィールドワークを始める前にメンバーとして活動していた人が脱退するということがあった。DAIGOさんと周佐さんについては以下のように紹介されている(2011年6月19日公演用フライヤーより)。

DAIGO(脳性マヒブラザーズ)1973年生まれ。■幼い時に「脳性マヒ」と診断され、小中学校と特殊学級在籍、高校は養護学校へ進学。ドキュメンタリー映画を創作し、「崇とその仲間たち」が神奈川県映像コンクール入選、山形国際ドキュメンタリー映画祭「日本パノラマ部門」招待作品となる。5年前に同じ脳性マヒの障がいを持つ相方、周佐則雄とお笑いコンビを「脳性マヒブラザーズ」を結成、TBS テレビ「筑紫哲也NEWS23」NHK教育「きらっと生きる」に特集される。身障者芸人ホーキング青山氏が主催するイベント「C-1 グランプリ」第1回、第3回と優勝！！現在は、ネットワークビジネスをしながら、NAMARA<sup>19</sup>の営業、お笑い舞台で活動中。NAMARA 所属。

周佐則雄(脳性マヒブラザーズ)1975年生まれ。■生まれつきの障がいで学生時代は養護学校に通う。卒業後東京の職業訓練校に通い、新潟で就職活動をしながら地元の福

---

<sup>18</sup> 新潟で行われている当事者による表現活動のひとつ。YOPPYさんは当事者の表現活動としては「生き様発表会」を中心に活動しており、近年こわれ者の祭典へ出演する機会は少なくなっている。しかし、月乃さん個人主催のイベント等にギタリストとして参加したりする場合は時折あるなどメンバーとの関係は続いている。

<sup>19</sup> こわれ者の祭典新潟公演の司会を務める江口さんを代表とする新潟のお笑い集団。

社作業所に通っていたが、どうしてもやりたかった「声優」の道を探しに入る。その時勘違いして入ったサークルで FM 新津、ラジオチャットで「ラヂラ暗愚王」のレギュラーになる。舞台経験も有り。市民劇「明和義人」新潟芸術文化会館公演に役者として出演。現在は、DAIGO とお笑いコンビ「脳性マヒブラザーズ」を結成、つつこみ担当。多方面で活躍中。NAMARA 所属。

2012 年 9 月 22 日のこわれ者の祭典東京公演は、「さようなら、がんばれ脳性マヒブラザーズ」というテーマで行われている<sup>20</sup>。脳性マヒブラザーズ(DAIGO さん、周佐さん)が卒業した理由としては「お笑いの道を進みたい」ことが挙げられている。そのことについては以下のようにイベントでも語られている。

周佐:はい。ちょっと僕たちの脳性マヒブラザーズから、ちょっと大切なお知らせがあります。えーと、9 月をもって卒業することになりました。

江口:解散?

周佐:解散じゃないですよ。解散じゃないですよ。みんな、シーンとしてるけど、それにはあんま興味ないんだね。いつも、なんか、「卒業します！」って言うと、「わあー」っていうのが来るかと思ったら。

江口:何を卒業するの?

周佐:こわれ者の祭典を卒業します。

江口:えっ? 健常者になるってということですか。

周佐:それはなりたいんですけどね。

月乃:あの、自己申告制で、もうこわれがだいたい治りましたんで、こわれ者の祭典を卒業して。お笑いの道に、ハンディキャップとか、そういうのをなしで、プロの道に突き進みたいということで。(拍手)

江口:おおっ。

月乃:今までは障害者枠のお笑いではグランプリを獲ったんですけど、もう障害枠じゃなくて、健常者枠でチャレンジするということで、そういうことで 9 月 16 日をもって卒業ということですよ。

江口:それにしてもウケてなかったな。

---

<sup>20</sup> 筆者がフィールドワークをしている多くの期間において、脳性マヒブラザーズはこわれ者の祭典の主要メンバーとして活動しており、本稿における記述の多くはこわれ者の祭典のメンバーとして脳性マヒブラザーズの二人を扱っている。



周佐:ちょっとお笑いの勉強も始めてるんですけど、もっともってね。卒業してちゃんと勉強して、ちゃんとウケられるようになろうと思います。はい。でもね。今年 10 周年ですけど、こわれ者祭典に入って私 8 年目になるんですね。その間に一人暮らしもしたし、脳性マヒブラザーズにもなれたんで、いろいろね。こわれ者の祭典からはもらったんで、これからはプロになれるように頑張ろうと思います。ありがとうございました。(拍手)(2012 年 7 月 15 日、こわれ者の祭典)

脳性マヒブラザーズの場合は、障害という枠組みを超えて、お笑いのプロとしての道を進んでいくことを志し、こわれ者の祭典を卒業した。こわれ者の祭典で得られたことが多く、活動に携わったことに感謝しながらも、病気や障害を基本的なネタとするこわれ者の祭典との活動の志向や活動のフィールドの違いがこわれ者の祭典からの卒業につながっていったことが卒業の理由として挙げられている。もっとも、卒業したからといってこわれ者の祭典のメンバーとの関係が断絶するというわけではなく、脳性マヒブラザーズがこわれ者の祭典のイベントを観に来たり(2014 年 12 月 13 日など)、例年行われる依頼されて出演するイベントに、こわれ者の祭典のメンバーと共に出演するなどメンバーと共に活動する機会も保たれている<sup>21</sup>。

Kacco さんがこわれ者の祭典でパフォーマンスするようになったのは、Kacco さんの活動が新聞で紹介されたことに端を発する。その記事を見た月乃さんが連絡をとったことが縁で Kacco さんがイベントに参加するようになりメンバーとなった。そして江口さんが代表を務めるお笑い集団 NAMARA で活動している脳性マヒブラザーズがイベントに出演するようになった(2012 年 2 月 1 日イベント時トークなど)。アイコさんは月乃さんのイベントを見に行き、そこから活動にかかわるようになった。このことについては、イベントでも以下のように述べられていた。

松本(司会)<sup>22</sup>:月乃さんは当時を覚えていますか? アイコちゃんと初めて会った時。

月乃:よく覚えています。「こわれ者」・・・。

アイコ:入る前です。

月乃:そうですね、アナザーチケットっていうライブハウスがあって、そこでやってて、イベントが終わったら、もうアイコちゃん今は健康そうになりましたけど、なんか見るからに、まあ、貞子<sup>23</sup>ですね、イメージとしては。

<sup>21</sup> 千葉県木更津市にて「吹く詩の宴」というイベントに、脳性マヒブラザーズが卒業した後も、脳性マヒブラザーズとこわれ者の祭典のメンバーが出演している。ここ数年毎年のように出演しており、直近では 2014 年 12 月 23 日のイベントに出演した。

<sup>22</sup> 東京公演でこわれ者の祭典の司会を務める映画監督の松本さん。

<sup>23</sup> ホラー映画映画「リング」などの登場人物。テレビから這い出てくるシーンになぞらえての説明。

松本:あー。

アイコ:しゃべれないから(笑)。

月乃:で、目見ないでこうなんか、やっぱジャパニーズホラーですね、どう見ても(笑)。オカッパみたいな人が近づいてきて。で、俺、初め、「刺される」と思ったんですよ。近づいてきたから。(笑)

松本:ああ、思う思う。

月乃:病気イベントやってていつか刺されるんじゃないかって、今でも思ってますけども(笑)。そしたら、うわあっ、近づいてきたと思って、ジャパニーズホラーですごく気持ち悪い女が(笑)。で、変な紙くれて、それがもんじゃくったみたいな紙で。

松本:うわっ、怖い。

アイコ:手に汗がベチャベチャで、紙もベチャベチャになるんです。

松本:ああ、そんな時からもう。

月乃:で、開けてみると、なんかミミズがのたくったみたいな字で、「あなたの言葉に感動しました」って書いてあって。で、「私のホームページ見てください。」と書いてあって、俺はこの女に一生かかわるまいとして固く決意したんですが(笑)、人生っていうのは。

松本:不思議な。

月乃:まあ、それからいろいろスタッフで手伝ってもらって。もう、でもそれもね、約 10 年前の話ですけど。

アイコ:そうです。

月乃:初めお会いしたのがが 19 ですからね。

アイコ:はい。だから、もう清く正しい純粋なメンヘラの感じで。今もそうなんですけど、前見れなくてプルプル手紙を渡したのがきっかけです。(2012 年 9 月 22 日イベントトークより)

こわれ者の祭典が始まった当初は、オープンな形で様々な当事者の人々がステージに上がり、パフォーマンスをしていたが、徐々にパフォーマンスを行う人が決まってきた、とのことである(2012 年 9 月 22 日、月乃さんより聞き取り)。そして今でも「メンバーに入れてほしい」「こわれ者の祭典に出演させてほしい」といった内容の問い合わせが時折ある<sup>24</sup>。たとえば、月乃さんが配信してい

---

<sup>24</sup> こわれ者の祭典に出演させて欲しいとの問い合わせがメールであったことがメンバー、スタッフに共有されたことがフィールドワーク期間中にも複数回あった。

たいラジオ番組でリスナーからの出演希望の声が紹介されたことがある<sup>25</sup>。その声に対しては、次のように月乃さんは回答している。以下は番組を進行する月乃さんと松井さん<sup>26</sup>のやりとりである。

松井(リスナーからのメールの紹介):こわれ者の祭典に出演したいなと思っています。どうやったら出演できるのか、教えてください。

(略)

月乃:ありがとうございます。こわれ者の祭典ですけれども、不定期ですけれども、オーディションというのをやっています。

松井:オーディションやってるんですか。

月乃:はい。実はこわれ者の祭典出たいというお問い合わせをたくさんいただくんですけど、全員の方に出てもらいたいですけれども、結構難しいので、以前1回オーディションやってみんなで出てもらって、みたいなことがあったんですけど、次いつやるかはまだはっきり決まっていないんですけど、そういった機会をまたホームページ等で発表しますんで、ぜひその時応募していただけたらと思うんですよね。

このように、多くの人にパフォーマンスをしてほしいという思いはありながらも、新たなメンバーの加入は現在のところ予定がない状況である。この理由としては、いくつか考えられるが、ある程度決まったメンバーで行うスタイルが定着してきていることや、「(メンバーが新たに入るとイベントに)毒がなくなって福祉イベントになってしまうのではないか」という意見がメンバーから述べられたことがあるように(2012年9月26日)、確立されてきたスタイルが変わってしまうことへの危惧がメンバーの中にあるのかもしれない。筆者がフィールドワークを開始する前の時代には様々な人がこわれ者の祭典に出演していたという話を時折メンバーから聞くが、現在メンバーの加入において積極的な動きはみられない状況にある。

現在こわれ者の祭典のメンバーは、月乃さん、Kaccoさん、アイコさん、長男さんであることが内部で認識され(こわれ者の祭典の会議2012年9月26日など)、観客等外部にもそのようにとらえられていると考えられる。もっとも、メンバーの加入については議論が継続している。脳性マヒブラザーズが卒業したことを受けて、メンバーに誰かを入れるかどうか、という議論が打ち合わせでなさ

<sup>25</sup> 月乃さんはラジオ番組を企画・配信していたことがあり、そのラジオ番組による。引用は、ラジオ番組「月乃光司のハート宅配便～あなたの心に届く33%の生きる力～」第147回、2012年4月23日配信より。

<sup>26</sup> フリーアナウンサーで江口さんとともにこわれ者の祭典新潟公演の司会を務める松井さんは月乃さんと共にラジオ番組配信を行っていた。この引用はその一部。

れたこともあった(2012年9月26日)。明るいキャラクターである脳性マヒブラザーズが脱退した後に「陰と陽のバランス」をいかにしてとっていくか、という課題がメンバーやスタッフの打ち合わせで提示され(2013年10月25日)、苦悩の渦中にある「ギリギリ感」が出せる人の参入がもっとあってもよい、という話の流れからメンバーの加入が議論された(2013年10月25日)。しかし、少人数でわかりやすくイベントを行っていくのがいいのではないかと、この意見で一応のまとまりがみえ(2014年12月23日)、今後の変化の可能性も残しながら、新たなメンバーの参入は積極的に検討されていない状況にある。

### 3.1.3 関係者・協力者

こわれ者の祭典はメンバー以外にも様々な関係者・協力者がいる。たとえばイベントでの司会者、イベントを手伝うボランティアスタッフもいればイベントに招かれトークやパフォーマンスをするゲストもいる。ここではそうした活動を支える人々について述べる。

#### (1) 司会者

新潟公演の際の司会者は、新潟のお笑い集団 **NAMARA** の代表である江口さんと、フリーアナウンサーの松井さんが務めている。こわれ者の祭典は、月乃さんと江口さんがラジオ番組で共演したことに端を発し、当初は **NAMARA** のイベントとして行われていた。江口さんによる著書(江口 2011)には月乃さんのコメントが記載されている箇所もあり、そこには以下のように記されている。

今から9年前の平成14年2月、私は江口歩とラジオ局のスタジオで対峙した。江口歩は「月乃さんは、何かやりたいことがありますか?」と聞いてきた。「病気イベントをやりたいのです・・・」と私は答えた。番組のエンディングで江口歩は「近々、月乃さんと病気イベントをやります」と断言したのである。現実にタイトルを「こわれ者の祭典」として3か月後の平成14年の5月にイベントは超満員の観客を集めて開催された(月乃さんによる記述、江口 2011: 88より)。

このような経緯から当初は江口さんが代表を務める **NAMARA** のイベントとしてこわれ者の祭典

は行われていた<sup>27</sup>。その後 NAMARA 主催ではなく、こわれ者の祭典(実行委員会<sup>28</sup>)が主催するイベントへと変遷していった。そのような変化がみられるものの、江口さんは継続してこわれ者の祭典の新潟公演の司会を務めるなどこわれ者の祭典の協力者であり続けている。江口さんはお笑い集団の代表であり、障害者イベントであるこわれ者の祭典においてユーモアを織り交ぜるのに大きな貢献をしている。そのユーモアの織り交ぜ方は毒を含むもので、障害を笑ってはいけないというタブー意識に強く働きかけるものであり、こわれ者の祭典を特徴づける上で司会者の江口さんは重要な役割を果たしている。

江口さんと共にこわれ者の祭典を司会者として支えている松井さんは、舞台上にいる健常者としてのスタンスでイベントに出演している立場となっている(以下引用 小林 2012 より)。「時にブラックユーモアも交え、一瞬、出演者や観客がたじろいでしまいそうな鋭い質問もする」江口さんに対し、松井さんは、「笑いが『ギリギリ』の線を越えないよう、出演者と観客へのフォローをすること」が役割となっているとのことである。そして、『「堅苦しい顔で、まじめなことだけを言っても、関心は持ってもらいにくい。ただ人前で話すことに慣れていない出演者には、どう答えればいいのか分からなくなることもある』。そんな時、うまく質問を重ねたり、雰囲気や和らげたりする。『出演者と観客を結ぶ』という司会者のやりがいを強く感じる。学ばせてもらうことも多い」という。「松井さんにとって精神障害は、祭典に協力するまで身近な存在ではなかった」が、大学時代、「精神的に不安定になったことを思い出し」、「生きづらさや心の病について『誰にでも起こり得ることなのかもしれない』ということに気付いた」。このような司会者の松井さんの思いにみられるように、こわれ者の祭典は当事者イベントであるが多くの多様な生きづらさを抱える人々の共感を生み出す要素を併せ持つものとなっており、出演者と観客を結ぶ役割を司会者は担っている。

東京公演の司会は、開始当初は江口さんが行っていたが、現在は江口さんとつながりのある映画監督の松本さんが行っている(2011年1月9日、松本さんからの聞き取りより)。松本さんもお笑いの世界で活動していたこともあり、イベントを福祉イベントの枠を越えてエンタテインメントとしてイベントを形作るのに貢献している。

このように司会者によって、笑いや毒のあるイベントが形作られ、イベントは刺激的なものになり、時に雰囲気が和らげられ、出演者と観客が結ばれる。イベントを進行し、活動をつくりあげる上で司会者の影響は大きい。

---

<sup>27</sup> たとえば 2004 年 11 月には、こわれ者の祭典東京公演の記事が載っているが、そこでは主催は「新潟お笑い集団 NAMARA」となっている(吉岡 2004)。

<sup>28</sup> こわれ者の祭典実行委員会は厳密に組織されているものではないが、会場を借りたり、問い合わせ先として記載したりと、イベントを運営する主体として用いられている言葉となる。

## (2) ゲスト

公演の出演者には表現者、司会に加え、ゲストが含まれる。ゲストは、新潟公演では、吃音者のグループメンバー(2011年6月19日)、新潟県薬物依存症者を抱える家族の会世話人(2010年12月5日)など、主に新潟で活動する家族等含む当事者の人々が招かれ、その幅は様々な障害や病気、生きづらさにまたがっている。また、当事者のみならず新潟で活動する精神科医(2009年7月12日など)も出演したこともあった。このように新潟公演ではゲストには、時折専門家等の参加がみられるも、県内で活動する当事者の人たちが中心となって招かれ、体験談を話すことが多い。

一方、東京公演では、メディアへの出演をしていたり、著書を出版していたりする著名人のゲストが招かれる場合が多い<sup>29</sup>。こうしたゲストの違いは、新潟、東京それぞれの公演を特徴づけている。月乃さんは活動を通して様々な人脈を築いており、そうした人脈がイベントに多様なゲストを招くことを可能にしていると思われる。また、面識がなくとも、時には路上で声をかけて出演してもらうこともあったという(月乃 2011など)。SNS含むインターネットを通して出演を依頼することもあるが、断られることも多いという(2011年7月17日など聞き取りより)。そうした出演への過程を経て、活動に継続して深くかかわる著名人のゲストもおり、観客の動員に影響を与えたり活動を特色づけていたりしている<sup>30</sup>。

## (3) ボランティアスタッフ

こわれ者の祭典は、多くのボランティアスタッフの協力で成り立っている。イベント当日には回によって差があるものの、10名程度のボランティアスタッフが集まる。ボランティアスタッフは会場の準備や受付、配布物の準備、物販物の管理、ステージまわりの譜面台の出し入れ、金銭管理、移

---

<sup>29</sup> たとえば次の文章に挙げられている人物がゲストとして示されている。「この9年間に、中島らも、加護亜依、さかもと未明、雨宮処凛、戸川純、ハヤブサ選手、ホーキング青山、湯浅誠、田代まさし、小田原ドラゴン、かつらボクサー小口選手、香山リカ、田ロランディ、遠藤ミチロウ、西原理恵子、赤木智弘、福島泰樹、東ちづる、大槻ケンヂ、細川紹々ら多くの皆様にイベント出演をしていただいた(月乃 2011: 184)」

<sup>30</sup> 中でも作家の雨宮処凛さんは観客としてイベントを見に来たことが縁で、こわれ者の祭典の名誉会長となっており(月乃 2011)、イベントへの出演のほか、著書を月乃さんと共同で執筆したりしている(雨宮 2007; 月乃・雨宮 2008 など)。また、精神科医の香山リカさんが定期的にゲスト出演し、こわれ者の祭典と共同して「香山リカのみーんなビョウキだね！」(中島映像教材出版)というDVDを作成するなど、継続した関係がもたれている。

動時の車の運転などを行っている。継続してボランティアスタッフとして活動している人も多く、当日のみならず、打ち合わせなどに定期的に参加し企画・運営にかかわるスタッフも数名おり、筆者もそのうちのひとりとして活動させてもらっている。

新潟県に在住しボランティアスタッフを長年行っているミルさんは、新聞記事でこわれ者の祭典を知り、活動にかかわるようになった。精神保健福祉士や社会保険労務士の資格を有し、病院などでの勤務経験を経て、現在社会保険労務士として県内で勤務している。イベントでは、新潟でのイベント終了後の打ち上げ交流会の運営、受付や物販の管理などを主に行っている。ミルさんは活動の開始当初(第 1 回こわれ者の祭典)からほぼ全期間にまたがって活動に関与しており、こわれ者の祭典はじめ、表現活動について熟知している人のひとりであり、本研究においても貴重な情報を多々提供していただいた。

同様に継続して関わっている丸山さんは、旅行会社の営業や社会福祉士、看護補助などの勤務経験を有し、現在は福祉関係の仕事をしている。活動にかかわるようになって 6~7 年ほどになる。活動にかかわるきっかけは、こわれ者の祭典のファンである知人より活動を教えてもらったことによる。その後活動にかかわるようになり、ボランティアスタッフを継続している。フライヤーの各関係機関への配布やメディアへのイベント周知など広報的活動を担当することが多い。また、こわれ者の祭典は新潟、東京以外にも福島公演(2009 年 2 月 28 日)、秋田公演(2009 年 9 月 20 日)を行っており、こうしたライブの企画・運営は丸山さんが中心となって行われていた。また、筆者も継続してかかわっているボランティアスタッフの一員であり、予算管理、その他の補助をしている。こわれ者の祭典は数多くの活動に共感するボランティアスタッフの協力の元行われており、時にイベントを企画するなどの活動を行っている。

東京公演と新潟公演では地理的な違いからかイベント当日に来られるスタッフも異なる。もっとも、東京公演においても東京および近隣に在住している何人かのボランティアスタッフが継続してかかわっており、物販や打ち上げ交流会の運営、イベント時の配布物の準備、写真撮影などの協力を行っている。

### 3.1.4 公演の概要

ここでは、公演の概要を記す。「こわれ者の祭典」の公演の主となるのは、計年 4 回程の新潟公演と東京公演で、他にこわれ者の祭典と名のつくイベントには、いくつか他の団体等から依頼を受けてなされるものがある。

## (1) 新潟公演

新潟公演は、年に2回、新潟市総合福祉会館で行われる。観客数は通常70～90名程度で<sup>31</sup>、司会は江口さんと、松井さんであり、主に新潟で活動するゲストが呼ばれる。公演には何かしらのテーマが与えられるが、それは、吃音の当事者がゲストで招かれた際は「伝える」(2011年6月19日)、HIV陽性者のゲストが招かれた際は「偏見」(2013年9月8日)、といったようにその回のゲストなどの状況に合わせて設定される。代表的な公演の当日の流れは以下の通りになっている。

- 9:00 スタッフ、出演者集合、会場準備
- 10:30 音響確認等
- 11:30 スタッフ、出演者打ち合わせ、進行確認、リハーサル
- 13:00 開場
- 13:25 司会者舞台へ。前説
- 13:30 公演第1部
- 14:45 休憩
- 15:00 公演第2部
- 16:00 公演終了

会場は、広いバスケットボールのゴールなども設置されている体育館のようなホールが用いられる<sup>32</sup>。会場準備では、観客が靴を履いたまま入場できるようにシートが敷かれ、椅子が並べられる。そして、物販ブースが設置され、徐々に会場がイベント用につくられていく。会場が設営されている間、マイクの状態などがステージで確認される(図2)。会場の入り口付近には立て看板が設置される(図3)。

---

<sup>31</sup> 第1回こわれ者の祭典や10周年記念イベントなど100名を大きく超える動員数の時もある。

<sup>32</sup> ホールが確保できない時など別の広い会議室などが使われる時もある(2010年12月5日など)





図 2 こわれ者の祭典新潟公演リハーサル風景(2012年2月12日)

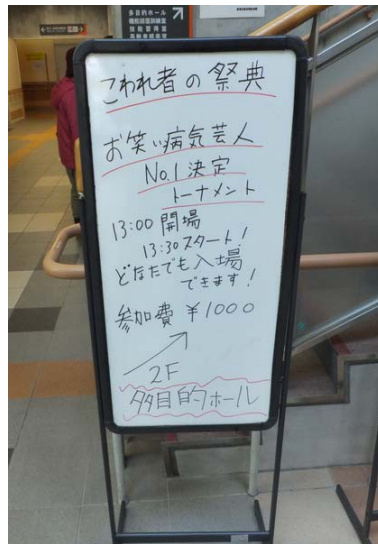


図 3 案内看板(2012年2月12日)

ある程度会場の準備が終わると、メンバー、スタッフ、司会者、ゲストなどが集まり、簡単な打ち合わせをする。簡単にそれぞれが名乗る程度の自己紹介がなされ、当日のイベントの進行等の確認等がなされる。打ち合わせ時には、月乃さんより当日の進行表が配られる。進行表には、イベントのコンセプトやテーマ、タイムテーブル、出演者の動き、司会者のトークの振り方、などが簡潔に用紙 1 枚程度にまとめられている。その進行表に沿ってイベントの流れが説明される。イベント中のボランティアスタッフの役割には、受付や物販、音響管理、ステージ上の物品の出し入れ(マイクスタンド、椅子、譜面台など)、車いすユーザーの出演者のステージの上げ下げ、イベント終了後の打ち上げ交流会の観客の誘導、交流会の進行などがあるが、そうしたスタッフの役割も打ち合わせで調整される。そして、パフォーマンスの詳細は省略されながら、実際に出演者がステージ

に上がり、リハーサルがなされる。そこで、スタッフの動きや物品の動き、どのマイクを利用するか、どこでどの音楽を流すか、といった点が確認されていく。打ち合わせ、およびリハーサルが終了すると、各々昼食をとり、出演者は着替えをするなど、イベントに向けての準備が進められる。

開場時間(多くは 13 時)になると、ホールのドアが開けられ、観客が入場する。開演 30 分前に開場時間が設定されているが、10~20 名程度の観客がすでに並んで入場を待っている状況が多い。観客は入場すると、受付で参加費を支払い、配布物を受け取る。

開演時間 10 分ほど前になると、司会者による開演前のトークにて、来場してくれたお礼や、イベントの紹介などがなされる。お笑い集団 NAMARA 代表の江口さん、フリーアナウンサーの松井さんというイベントのプロフェッショナルによるトークであり、時にユーモアを含ませながら、観客を楽しませる(図 4)。



図 4 開演前トーク時の会場の様子(2012 年 2 月 12 日)

開演時間になるとイベントが開始される。照明が落とされ、パフォーマンスの開始を予感させる。パフォーマーは、紙袋で作ったマスクをつけてステージにあがり、入場する。紙袋は何処でも手に入るような簡単なもの<sup>33</sup>であり、紙袋のマスクを外し、メンバーの紹介がなされる(図 5)。

---

<sup>33</sup> 2013 年頃より紙袋にこわれ者の祭典のロゴを貼ったものを用いている。このロゴはゲスト出演したこともある漫画家の小田原ドラゴンさんが作成したものであり、ロゴのついた紙袋はイベントで販売され、活動の収入源の一部となっている。



図 5 紙袋のマスクをかぶっての入場(2012年2月12日)

フライヤーに記載されているような自己紹介の内容が司会の松井さんより紹介され、それが終わると、「病気だよ！全員集合！」とかけ声がかかけられ、公演が始まる。これは表現者の誰かが(時にはゲストが)、「病気だよ！」と声をかけると、会場の観客と共に「全員集合！」と声を合わせる取り組みで、こわれ者の祭典の恒例となっているものである。みんなが声を合わせられるように、司会者の案内や進行がなされたうえで、こうしたパフォーマンスはなされる(図 6)。



図 6 病気だよ！全員集合(2014年4月27日)

イベントが開始されると、その後は、詩の朗読などのパフォーマンスと、病気や生きづらさの経験、伝えたいメッセージなどを含んだトークが進行していく。また、ゲストを交えたトークやパフォーマンスもなされる。パフォーマンスを行う際には、照明が落とされ、演出的な環境がつくられる。一部トークを行う際や、休憩中の様々なアナウンスを行う際は、照明が付けられるなど、舞台上の演

出には気が配られる。衣装にも気を配られ、月乃さんは、自らがひきこもっていた頃に来ていたパジャマを着て、Kaccoさんは女装して、パフォーマンスをすることが多い(図 7, 図 8)。



図 7 パジャマ姿の月乃さん(2012年2月12日)



図 8 女装姿の Kacco さん(2012年2月12日)

パフォーマンスの合間には、病気や生きづらい体験のトークがなされる。特にトークにおいては、その回その回のテーマに沿った内容が意識される。公演のエンディングでは出演者がステージに上がり、一言ずつメッセージが発せられる。そして、イベント開始時と同じく「病気だよ！全員集合」とのかけ声で終了する。イベントが終了すると、観客は退出する。出口の近くには、物販のブースが設けられ、メンバーや出演者の出している書籍、CD などの販売がなされる。メンバーは、物販ブースで希望者に応じて、購入された販売物にサインしたりする。また、メンバーが観客を見送りながら、観客と言葉を交わす機会となっている(図 9)。



図 9 公演終了後の出口付近(2012年2月12日)

公演が終了すると、観客の一部は、打ち上げ交流会へと向かう。会場の出口付近で参集した後、ボランティアスタッフの案内で、会場へ向かう。会場は福祉会館から徒歩 20 分程度の場所にある居酒屋でいつも同じ場所で交流会は行われている<sup>34</sup>。観客が交流会に向かっている間、メンバーやボランティアスタッフ、出演者、その他観客のうち協力してくれる人により、会場が元の状態に戻される。交流会は必ずしも毎回メンバー全員が参加するわけではないが、多くのメンバーも打ち上げ交流会に参加する。交流会はおよそ 20 名強の参加者数となる場合が多く、初めて参加する人もいれば、毎回のように参加している人もいる(図 10)。



図 10 打ち上げ交流会の様子(2014年9月21日)

打ち上げ交流会がはじまり、しばらく経つと、参加者の自己紹介が順になされる。自己紹介する

---

<sup>34</sup> 一部例外的に、会場の確保ができない場合など異なる場所で行われることもある(2013年9月8日など)



時の名前は本名でなくても構わない。自己紹介したくない時はパスすることもできる。自己紹介の場では、「自分はこういう病気をもっている」という話がなされる場合も多い。精神疾患やひきこもりなどの当事者であることが表明されることが多いが、身体的な疾患のことを述べる人もいる。また、当事者のみならず、福祉関係者であったり、当事者の家族であったりすることが語られる場合もある。自己紹介が終わると、しばらくテーブルでそれぞれ話をし、席を移動して様々な人と話す参加者もみられる。その後、参加者のパフォーマンスがなされる時間が設けられる。これは新潟公演時の交流会でこそなされる取り組みで、こわれ者の祭典のメンバーも公演では披露していない詩や即興のパフォーマンスを行ったりする場合がある。交流会参加者のパフォーマンスはたとえば、自作の詩の朗読であったり、お笑いのようなパフォーマンスであったりする。それが終わると、各々隣席の人と話をしたりしながら、徐々に会場を後にし、最後はひとつのテーブルに集まる感じになり、打ち上げ交流会は徐々に終了する。

## (2) 東京公演

東京公演も新潟公演と基本的には同様な形で行われる。ステージ上でメンバーが、パフォーマンスを行い、病気の経験や、回復に至るきっかけなどが表現される。しかしながらいくつか異なる点もある。大きく異なるのは会場で、東京公演はサブカルチャーイベントがよく行われる場所で行われる。そのため、イベントの印象としては福祉イベントというよりはサブカルチャーイベントのような雰囲気会場は醸し出している。会場は、体育館のような設備の新潟公演の会場とは異なり、イベントを行う上で必要な照明やステージ、各種音響機材が設置されている会場であり、観客がアルコールを含む飲食をしながらイベントを楽しむことが可能なものとなっている(図 11)。



図 11 開演前の会場の様子(2012年1月8日)

ボランティアスタッフは新潟から2~3名程度、そして、現地集合のボランティアスタッフが5~10

名程度集まる。東京公演でイベントを手伝うボランティアスタッフもまた、何人かの新潟公演でのスタッフと同様に常連のスタッフとして継続してイベントを手伝っている。新潟公演とは異なる司会者、またギター伴奏を行う人などの協力を得ながらイベントは行われる<sup>35</sup>。会場時間になると、観客が入場する。観客数は、新潟よりもやや多い、90～110名程度の集客である場合が多い<sup>36</sup>。開演の時間を迎えると、新潟公演と同様に紙袋をかぶってメンバーが登場し、イベントが進む(図12)。



図12 イベント開始時の様子(2011年7月17日)

東京公演では著名人のゲストが出演する傾向がある。そして、テーマも新潟公演では「不登校」や「発達障害」など具体性を持って設定されるのに比し<sup>37</sup>、東京公演では「生きづらさ」など、抽象的な幅広い話題に対応できるものになっている<sup>38</sup>。このように新潟公演と東京公演は異なったテーマは設定されている<sup>39</sup>。その背景としては、集まる人のニーズの多様さに対応する必要性や、ゲストが広く生きづらさにつながる活動を展開している著名人であったり、異なる病気や障害を持つ複数人であったりとの傾向を受けて、特定のテーマに絞り込みにくいことなどが考えられる。東京公演においても新潟公演と同じく「病気だよ！全員集合！」のかけ声でイベントは開始され、終了する。そして新潟公演と同様に打ち上げ交流会の場が設けられている。交流会には新潟公演より多くの50～60人程度が参加する大規模なものとなる。交流会は東京のボランティアスタッフが主となって運営し、自己紹介や出演者との交流がなされる。

<sup>35</sup> 司会は映画監督の松本さんが務め、パフォーマンス時のギター伴奏をタダフジカさんが務めている。

<sup>36</sup> たとえば、観客総動員数は2011年7月17日96名、2012年1月8日100名、2012年9月22日86名となっている。観客数は会場(ロフトプラスワン)が把握しており、そのカウントによる。

<sup>37</sup> 「不登校を考えよう」(2014年9月21日)、「発達障害を考えよう」(2014年4月27日)など

<sup>38</sup> 「生きづらくても大丈夫」(2011年1月9日)、「みーんなビョウキだね！」(2012年2月1日)など

<sup>39</sup> 2013年10月5日会議時の月乃さんの発言より

### (3) その他の「こわれ者の祭典」公演

「こわれ者の祭典」と名のつくイベントは団体である「こわれ者の祭典」が企画する以外にもなされている。たとえば、福島市(2009年2月28日, 福島県文化センター), 秋田市(2009年9月20日, 秋田アトリオン)にてこわれ者の祭典が行われたことがある。これらは、こわれ者の祭典のボランティアスタッフをしている丸山さんの企画によるものであり, 30名程度の観客を動員した。また, 2011年には「こわれ者の祭典 in 横須賀『かつこ悪いことって, かつこいい!』』というイベント(9月23日)が行われ, 「木更津発! 地域福祉セミナー 福祉から“吹く詩”へ『吹く詩の宴 11』』というイベントの一部に「こわれ者の祭典」が行われていた(2011年12月23日)。なお, 木更津でのこわれ者の祭典およびメンバーの出演は数年にわたって継続して行われている。これらは出演依頼を受けて行われている活動となる。このように自らが主宰するものとは別途に行われるメンバーが参加するイベントも「こわれ者の祭典」として行われる場合がある。

#### 3.1.5 パフォーマンス

こわれ者の祭典でなされるパフォーマンスには, 自作詩の朗読, 映像の上映, お笑いなどがある。自作詩の朗読は, 月乃さん, Kaccoさん, アイコさんが行い, 長男さんは自作映像の上映を行う。脳性マヒブラザーズはお笑い芸人としてのパフォーマンスを行う。オーディションメンバーとして活動する YOPPYさんは自作曲を歌う。パフォーマンスは以下のようにフライヤー(2010年12月5日新潟公演用)では案内されている。

- アルコール依存症自慢。引きこもり自慢。月乃光司による絶叫朗読
- 摂食障害自慢。引きこもり自慢。Kaccoによる女装パフォーマンス
- 強迫行為自慢・アイコによるパフォーマンス
- 脳性マヒブラザーズ(DAIGO&周佐則雄)によるお笑い
- 統合失調症自慢・YOPPYによるメッセージソング

同じ自作詩の朗読パフォーマンスであっても, そのスタイルは表現者や作品によって異なる。音楽が伴う場合, 伴わない場合があり, 音楽はCDを流す場合もあれば, ギタリストなどの演奏が伴う場合がある。朗読のスタイルも, 月乃さんにより絶叫朗読という形での朗読パフォーマンスがなされる場合もあれば, 「癒し」をテーマとする Kaccoさんの朗読のようにそうではない場合もある。朗読される自作詩には, 表現者の経験や伝えたいメッセージが含まれている。作品には時に具体的な病名や経験が内容に含まれることも多い。月乃さんはたとえば醜形恐怖の体験を以下のように



示す。

僕は 10 代の頃、自分の顔が醜いと思い込み  
醜形恐怖症という病気でした  
高校生の時はクラスメートと話すことができなかった  
(2011 年 6 月 19 日)

アイコさんは社会不安障害や家庭内暴力の経験を表現する。

現在私は SAD 社会不安障害という病気で通院を続けています  
特定の関係での会食恐怖 静かな場所での体の緊張 人前で電話をする時の手の震え  
人々が座っている部屋への入室恐怖などなどが現在私の持つ主な症状です(2011 年 6 月  
19 日)

また家庭内暴力については以下のように表現される。

幼いころ、家庭内暴力が日常の景色だった。  
悔しくて悲しくて、殴られたほほと、父親が殴り壊したガラスの窓。  
私に降ってきたガラスのかけら(2009 年 12 月 13 日など)

表現される内容には自らの経験が含まれることが、イベント中に以下のように語られることもある。

月乃:「変質者としての私<sup>40</sup>」というリクエストがありまして、ありがとうございます。ちょうど私の病歴みたいなのが詳しく書いてありますんで、こういう病気になって今ここにいるんだなというのがわかると思うんです(2011 年 9 月 23 日)。

Kacco: 自分の病気の経験から、死ぬことしか考えられなかったんで、その時の状態を作った詩でした(2011 年 9 月 23 日)。

YOPPY: 自分が一番具合が悪かったのが 20 代, 19, 20, 21 くらいがいろんなこと, 症状があつて, 入退院の連続で。今思い返すと一番せつぱつまっていたのが 28, 29, 30 ちょ

---

<sup>40</sup> 月乃さんの作った詩, 文章のタイトルのひとつ

っと前くらいで、だけど今思い返すと自分で自分を責めたり、自分で自分を苦しめてただけなんじゃないかなって思います。だけどその頃つらくてつらくて、その頃を思い出した曲です(2011年9月23日)。

作品には自らの経験が反映されるが、自らの経験そのものを常に表すわけでもない。たとえば、Kaccoさんが、女性の会社員を主人公にした物語を自作詩にして表現したように(2009年12月13日など)、創作を含めて表現されることもある。

そして、自らの経験などと共に、伝えたいメッセージが自作詩に表される。たとえば月乃さんは、「人生なんでもあり」という作品で、以下のように表現する

アルコール依存症になってよかった  
お酒をたくさん飲んで肝臓を壊して  
医療費をたくさん払い  
我が国の経済に貢献した  
(月乃さん作「人生なんでもあり」より)

アルコール依存症の経験がユーモアを含ませて表現され、「アルコール依存症になってよかった」と自分の経験を肯定していく姿が表現される。また、「仲間」の大切さが表現されたりする。

僕と同じ匂いを感じる人たち  
それは僕の仲間だ  
僕と同じ「生きづらさ」を持つ人たち  
それは僕の仲間だ  
(略)

仲間がいれば、僕は生きていける  
(略)  
鼻水とよだれを流しながら  
生き抜いていこう、仲間 (月乃さん作「仲間」より)

自作詩以外には、脳性マヒブラザーズによるお笑いや、長男さんによる映像などが作品として挙げられる。脳性マヒブラザーズによるお笑いには、自らの障害をネタにするものもあればそうでない

ものもある。たとえば「お医者さん」というコントでは、脳性麻痺で手足の自由がきかない中で、注射をされたり、尿を採取したりする動きが取り込まれる。長男さんが出演する場合は、自作映像が上映されることもあるが、毎回行われるわけではない。行われる際は、スクリーンを会場に設置しプロジェクターで映像を投影させる。なお、映像上映については、それに特化したイベント「こわれ者映画祭 2014」(2014年12月13日)が長男さん主催で行われたことがあった(図13, 図14)。映画祭は月乃さん、Kaccoさんの進行の元行われた。



図13 こわれ者映画祭フライヤー(2014年12月13日用)



図14 映像作品上映イベント(2014年12月13日)

映画祭では出演者に対し、主演男優賞、主演女優賞といった賞が受賞された。映像は5分から30分程度のもので、こわれ者の祭典で上映されたものも含まれていた。Kaccoさんや月乃さんもいくつかの作品で出演している。作風としては既存映画のパロディ色のあるものであったり、馬

鹿馬鹿しさが感じられるものがあったりと、こわれ者の祭典の雰囲気にあったものとなっている。月乃さんは、長男さんの映像が、こわれ者の祭典に強く「アングラ(アンダーグラウンド)な感じ」をもたらしたといい(2014年12月13日)、こわれ者の祭典のアンダーグラウンドな雰囲気といった特性が様々なメンバーの作品、パフォーマンスを通して形づくられることがわかる。また、映画祭には出演者等関係者の出席が多いように見受けられ、こわれ者の祭典の定期公演とはまた異なった長男さんの人脈の元での参加者、観客が多く見受けられるような状況であった。このように、同じこわれ者の祭典関連のイベントであっても、行われる場所や内容によっては、イベントの様子や、観客は異なってくる。

パフォーマンスは、音響やステージ装置、衣装などによって彩られる。イベントの全体的な進行と共に、マイクの音量や照明などはリハーサルで確認される大事な点である。また、表現者は衣装などに気を配る。パフォーマンス時の照明の操作や、CDの操作などを含む音響の管理などもパフォーマンスにとっては重要であり、リハーサルなどの機会を通して、確認される。衣装については、月乃さんは、イベント時には、パジャマを着てパフォーマンスを行うことが多いが、これについては、イベント中に以下のような説明がなされる。

月乃:なんでパジャマ着てるんだろってみなさん思われてると思います。このパジャマは何かといいますと、私結構長期間ひきこもっててうちでお酒飲んだりしてたんですけど、その当時このパジャマを着てうちでひきこもっていたんですね。(略)このグループは過去のことをどう明らかにするかということをテーマにしていますんで、(略)今会社勤めもなんとかできるし、仲間もいるし、しあわせだなと。でも昔はこんなにつらかったんだと思いたしながらパジャマを着てるんですね。(2011年9月23日)

パジャマ姿はひきこもっていた頃の姿であり、その頃の経験を思い出し、示していくためにパジャマを着てパフォーマンスしていることが語られる。Kaccoさんは女装してパフォーマンスを行う。Kaccoさんは女装について、下記のように語っている。

Kacco:急にこれ(女装)じゃないですから。ただ小さい頃からずっとコンプレックス持っていて。たとえばあの、足がちっちゃいからこの女性モノがはいるんですね。この服もこれも男性だったら華奢な身体なんで(着られないのだけれども)、ずっと小さい頃から(華奢な身体であることなどが)コンプレックスで。まあ、そういうのが全部コンプレックスだったんですが、病気をしました。躁うつ病や摂食障害や、パニック障害。そんな中でイラストを描くという表現の世界に出会って、そこでは自分らしさを出していいってことを教えてもらっ

たんです。自分らしさ、個性を大事にしていい世界だ、そしたらコンプレックスだとずっと思っていたのが、それは生きづらさのままで一生生きていかなきゃならないんだけど、コンプレックスも個性にかえられないかなって思ったときに、これがあつたわけですね。(略) 結局これも表現の一つで、コンプレックスを個性に変えたっていうメッセージを伝えていきたいなっていう。

月乃:男らしいとか、女らしいとかじゃなくて、Kaccoらしい生き方。

Kacco:そうですね、唯一らしいがあるとしたら、Kacco らしければ、自分らしければそれでいいなと(2009年2月28日)

このように Kacco さんの女装の演出は、コンプレックスを個性に変えていく姿であり、「自分らしさ」の表現であることが示される。このように、表現者のメッセージは、その作品と共に、衣装や演出の総体によって表される。

### 3.1.6 トーク

イベントこわれ者の祭典はパフォーマンスとトークで構成される。トークで表現される内容は主に「生きづらい時の経験」と「今<sup>41</sup>に至るきっかけ」で構成される。その内容は特に新潟公演ではテーマに沿ったものとなる。以下、テーマについての説明がなされる場面を示す(以下引用は2011年6月19日、こわれ者の祭典新潟公演、テーマ「伝える」より)。

松井:では今日のテーマですが、「伝える」。「伝える」というのがテーマになっていますので、では、どうしてこの「伝える」というのをね、テーマにしたのか、月乃さん、お願いします。

月乃:そうですね、「伝える」ということは私、長くできなくてですね。でも、いろいろ上手くしゃべれなかったりとか、DAIGO君みたいに言葉がちょっと不自由だったりとかありますけれども、自分の真っ直ぐな気持ちが、伝わるようなことをね、今日はメッセージとして届けたいと思って「伝える」というテーマを選びました。

そして、テーマに沿って以下のように自らの経験が語られる。

Kacco:えーとですね、困った経験っていうのは、やっぱり自分が病気で苦しかった時に、一番は病院の先生に伝えること。

---

<sup>41</sup> 生きづらさの最も大きい渦中を脱した状況)

松井:あ、病院の先生に伝える。なんのために病院に行ったか分かんないですもんね、先生との話ね。

Kacco:そうなんです。でも、診療時間って本当短いんですね。そんな中でやっぱりいろいろ聞かれて、「え、どうなんですか？」って言われるから、「いやあ、すごい調子悪いです」って。そのぐらいしか浮かばなくて。中にはいろんな感情とか気持ちがあるんだけど、それを上手く説明できなくて。そう。結局そうすると毎回同じ薬、「じゃあ、またいつもの出しておきます」って言われるわけですよ。それで出されると、その薬で本当に副作用があったことがあるんですけど、副作用があっても、「またいつもの出しておきます」って言われるから、もうめっちゃくちゃ気持ち悪くて戻したりしてて。それがやっぱりすごいしんどかったですね。病院のエピソードっていうか。

(略)

アイコ:私、高校時代の時が一番生きづらいなと思ってたんですけど、その時は、人に伝えるのは自分の気持ちじゃなくて、人に見られたい自分を一生懸命伝えていたんですね。こう見られたいからこう言おうとか、こう思われたいからこうやって返事をしようっていうのを。自分の気持ちではないものを一生懸命伝えていて。だから……。

江口:それはまさしく Kacco さんとイコールだよな。

アイコ:なので、なんで伝わらないんだろうっていうのは、自分の気持ちを伝えてなかったから伝わらないんだなっていうのは、過ぎた今だから思いますね。

(略)

月乃:今は、まあしょうがないんですけど、10代の時とか20代の時、あのね、何を考えるか分からない男っていうのは気持ち悪いんですよ(笑)。それをね、今、屈辱の記憶ほじくるとね。なんかだから、コミュニケーション不能になってしゃべられないんです。で、じーとして冷や汗流して苦しんでるんですけど、そうするとやっぱり気持ち悪がられる。

江口:それはそうだな。

月乃:なんかね、何考えてるの？ってこう言われたりとか(笑)。いろんなこと考えてるんですよ、私。難しいことも。日本の政治とかプロ野球のこととかいろいろ考えたりする。

江口:プロ野球、難しいか(笑)。

月乃:(笑)まあでも、気持ち悪がられる。それが。

松井:もう、言葉が出ずにもう汗が出るっていうか。分泌液まで出ちゃって。

月乃:そうそう。分泌する。もうただ、仁王立ちで分泌しているだけですから、もうただひた

すら気持ち悪がられて。

江口:いやあ、いや、俺、大体想像つく。本当に。

松井:へええー。

江口:まだ、でもまだ気持ち悪がられるだけいいじゃん。まだそこも、さっき言ったように無  
関心までいかれるとね。うわあ、キモイと。

(略)

**Kacco:**なんか、言葉にするのってすごく自分にとってハードルが高くて、で、今、自分の  
中で感じてるものとか抱えてるものとか、見つからないんですよ。言葉探しやっても。  
なおかつそういう時って頭が回転するのがすごく遅くなってるんで。で、見つからなくて。  
当初は、私、摂食障害あるんですよ。で、過食症と拒食症っていううちの過食症のエピ  
ソードで、ごはんを家族が寝静まった深夜に1升ぐらい食べちゃうんですけど、その時、  
言葉じゃなくてももうどうしても、それまでは家族が寝静まってから食べてたんだけど、も  
うどうしてもやりきれなくて、で、家族が見てる前で。

松井:やった。

**Kacco:**グワーツとやって、それでやっとなあ、自分の子どもは普通じゃないんだ、やっとな  
病気だって認めてもらって肩の荷が下りたんです。

松井:あー。

江口:そういう伝え方なのね。

**Kacco:**どっちかというとそうですね。言葉で言うのが苦手です。

このように生きづらい経験が時にユーモアも交えながら語られる。それと共に、回復のきっかけと  
なるような体験が以下のように語られる。

松井:2つ目の質問なんですけど、伝えることができずごくうれしかった時。さっきと質問  
またね、意味が真逆になりますけど、伝えることができずごくうれしかったこと。そして、  
皆さんに、伝えることについてのメッセージをぜひお願いしたいと思いますので。月乃  
さん、お願いします。

月乃:私ですね、まあそんな冷や汗を流してた人生で、精神病院に3回入院したんです  
けど、病院を退院した後、そういう当事者が通う自助グループみたいなどころに行った  
んですよ。それで、それで旅行に行ってますね、ヤングミーティングっていうね、35歳  
以下が当時ヤングだったんですけど。

江口:(笑)ちゃんとそこ押さえておかないといけないな。

松井:(笑)押さえておかないと。

月乃:まあ、アル中の世界、アルコール依存症の世界なんだけど、ちょっとトウは立ってるんですけど。でもすごみんなね、普通の若者にみえたんですよ、その人たちが。で、同じアルコール依存症つつつても俺だけなんか異常で、みんなさわやかな若者じゃんって思ったんですよ。そしたら、ひとりひとり話し始めたら、みんな手首に傷があって、それこそアイコさんや Kacco さん達みたいに、伝わらなくて苦しくて、病院に入院してオーバードーズ<sup>42</sup>してみたいなのをみんな話して、ええーっと思って。こんなに俺と同じような人がいっぱいいるのかあと思って。で、そのまま若い子、俺たちみんなで雑談したんですけど、手首に傷がない人のほうが少なかった(笑)。

江口:え、手首に傷がないほうが？

月乃:ほとんどがその集まりではリストカットしたあとがあったの。で、私、すごリストカットしたあとがあるのを気にしてて、今も微妙に時計で隠してるんですけど、これ今、今日後ほど物販物買うとこれ、手首の傷見せるっていうサービスが(笑)。

松井:サービス(笑)

江口:どこがサービスだって。

松井:どんなサービスですか(笑)。

月乃:まあ、そんなことで。それで、あぁと思って。でもその時ね、すごく伝わることがうれしかったわけ。手首に傷があって恥ずかしいとか、人前で冷や汗かいたっていうのは、みんなね、そんな話すると、「うんうん」とかうなずいてて、あ、これは、このマイナスの、俺のマイナスが伝わるじゃんと思って、それがとっても伝わることがうれしかった。

江口:だから、ここ(こわれ者の祭典)はさ、変な話、自助グループになってたわけだからさ。立ち上げ当初は。だからもうお客さんのほうからね、「見て見てー」が結構いたからね。「このリストカットなんか甘い、月乃さん」みたいな。「私、アームカットよ」みたいな感じで出てくるんですから、本当にね。

月乃:で、メッセージなんですけど、なんかマイナスのところをね、伝える場所が皆さんにあるときとすごく楽になると思うんで。今日、実は折り込みに自助グループ案内って新潟のいろんな、言友会<sup>43</sup>さんの案内もありますけど、そういう当事者グループの会が一覧にあります。そういうところに行って自分のマイナスのことを話したりとか、今日これが終わった後、実は交流会と称して近くの居酒屋に行ってみんなで雑談するんです

<sup>42</sup> 自傷行為として薬を過剰に服用することをいう。

<sup>43</sup> 吃音の自助グループ。この回では言友会より2名がゲストとして参加していた。



けど、ぜひそういうとこに参加していただいて、今まで話せなかったような、アイコちゃんの話したみたいな自分の病気のこととかね、誰かにちょっと話すと、みんな「うんうん」ってうなずいてくれると思うんで。そうするとね、伝えることの楽しさがきつと始まると思うんですけど。

江口:まあ、それぞれいろんな病気自慢していただくっていう。

月乃:そういうことですね。

以上のように自らの生きづらいつ験と回復のきっかけが語られる。当事者の立場としては参加していない司会者が、当事者である表現者の話を引き出していくスタイルで経験は語られ、生きづらいつ験の表現にユーモアが加味される<sup>44</sup>。また、自らの経験などを話すトークと共に、イベントの展開上組み込まれるトークもある。たとば以下のようにイベントの開始時には司会者の自己紹介がなされる。

江口:えー、そういうわけで元気大使<sup>45</sup>、あらためまして新潟のお笑い集団、NAMARA、江口歩です。今日はどうぞよろしくお祈いします。(拍手)

松井:はい。そういう中、私、先ほどまで番組やっておりましたが、はい。FM放送ナビゲーターをしております松井弘恵と申します。よろしくお祈いいたします。(拍手)(2011年6月19日)

表現者が出演する前には司会者がイベントの導入として挨拶や観客への感謝や、イベントの説明がなされる。また、メンバーの紹介がなされたりもする。こうした司会者のトークもイベントの重要な一部である。また演出的に以下のように月乃さんがイベント開始時に案内をすることがある。

月乃:じゃあ、今日新作の朗読をします。初めにちょっとごあいさつみたいのから。今日は今オープニングなので、オープニングのあいさつからさせていただきます。

僕たちのイベント、こわれ者の祭典によくこそいらっしやいました。今はイベントのオ

---

<sup>44</sup> もっとも江口さんは身体障害者手帳5級を有しているとのことで、そのことがイベントで語られる場合もある。しかしその機会は多くはなく、江口さん自身の経験を話すよりむしろ、メンバーに比べたら5級なんて恥ずかしくていえない、と言ったように表現者の経験談を際立たせるような意味合いで表され、江口さん自身の当事者性が強調されることはあまりない。

<sup>45</sup> 新潟県が任命している健康づくりにかかわる「元気大使」を任命されていることのトークがあった後の自己紹介となっている。

ープリングです。最初に、会場の皆さまにお願いがあります。皆さんと共にイベントに集中したいので、携帯電話のご使用ですけれども、電源を必ず入れておいてください。ご自宅から緊急の連絡があるかもしれません。お電話でお話してください。私はまったく気にしません。

(略)

手首に傷が多ければ多いほど、この会場では正常となっております。今日、この会場では手首に傷がない人は異常者です。障害者手帳を持っていない人は異常者です。

ここで業務連絡をします。今日はとても大切なイベントです。ボランティアスタッフの方々、たくさん参加してくださっています。スタッフは今日一日イベントを支え続ける力です。大切なお客さま、大切なイベントを守るために真剣に伝えることがあります。できるだけ、できるだけいい加減にスタッフの仕事をやってください。できるだけ手を抜いてください。隙があればずる休みをしてください。これが一番重要なことです。

責任感。責任感だけは絶対に持たないでください。あなたがいなくてもイベントはまったく困りません。頼みます。責任感、責任感だけは絶対に持たないでください。

受付や物販のスタッフにお伝えします。何といてもお金のことは大切です。必ず、必ずお金の精算がピッタリと合わないようにしてください。お金の計算がピッタリ合うととても不吉な感じですが。不自然です。できるだけお金や物販物から目を離してください。お金や物販物がなくなりましたら、それは欲しい人が持っていったので、スタッフみんなで喜んでください。欲しい人にモノがもらわれていくことは、とてもいいことです。

もう一度繰り返します。できるだけいい加減にやってください。100 パーセントの力を出さないでください。3 パーセントぐらいで十分です。なるべく、なるべく手を抜いてください。

スタッフの皆さま、そして今日会場にいらしたお客さまの皆さま、人生をなるべくいい加減に生きてください。お金やモノにこだわらないでください。人生に絶対責任感を持たないでください。まじめに生きようとか、人によく思われたいとか、人に嫌われたいとか、ちゃんと生きようとか、立派な人になろうとか、決して思わないでください。

(2009年12月13日)。

このように、自作詩の朗読や演出されたパフォーマンスと同様に、トークもまた演出的に展開されており、。こうしたユーモアを交えたトークはパフォーマンスイベントとして観客に楽しんでもらえるような要素を含んでいる。そして、ユーモアやパフォーマンスを重ねて表現者のメッセージは発せら

れる。

### 3.1.7 運営

こわれ者の祭典の運営は、メンバーやスタッフによってなされている。フライヤーなどには「こわれ者の祭典実行委員会」と問い合わせ先がなっており、代表の月乃さんに連絡ができるようになっている。イベント「こわれ者の祭典」前後には、メンバーとスタッフにより、時にこわれ者会議といわれる打ち合わせがなされる(図 15)。イベント前には次回イベントに向けての打ち合わせがなされ、イベント後にはイベントの振り返りやその他意見交換がなされる場合が多い。また、フライヤーの配布先や、予算上の検討、東京公演時の移動についてなど、運営上、事務的なことが確認、検討される。メンバーやスタッフは日々はそれぞれ職業生活を送っていることもあり、会議は平日の夜間に福祉会館の会議室等でなされる。



図 15 打ち合わせ(2012年5月16日)

会議では、たとえば「マンネリ化しつつあること」「時間がいつも予定よりも長引いてしまうこと」といった問題点が挙げられ、課題などが検討される。そして、たとえば時間が長引くということを各々が意識してパフォーマンスの内容を考える、といった対応策が共有される。また、2012年度は、活動が10周年を迎えることもあり、定期的なイベント共に、10周年の企画についての話が度々なされていた。10周年イベント<sup>46</sup>では、プログラム構成もいつものステージに加え、会場内での交流会、それぞれの障害などの特性にあわせた分科会などが企画された。イベントは大規模になることから、会議の回数も多く設定され(2012年7月29日、8月22日、9月5日)、会議も、当日参加するオーディションメンバーや10周年記念イベントに参加するスタッフなども加えた参加者の多い規

<sup>46</sup> 10周年記念「こわれ者の祭典」ダイナマイト！(新潟)、2012年9月26日

模の大きいものとなっていた。

活動の金銭的な収入は主にイベントの参加費によって賄われる。参加費は新潟公演で 1,000 円、東京公演で 1,500 円に設定されることが多い。参加費の用途については会議で検討され、次回以降の運営に必要な金額は残し、利益が出た分は、メンバーやゲストに分配される。しかしながら分配される金額は多くなく、いうならば交通費程度である。イベントを行う際には、移動や時に宿泊、会場の利用、ゲストへの謝金、フライヤーやアンケート用紙の印刷・発送、フライヤーのデザインの謝礼、ホームページのサーバー利用料金、その他備品(照明やマイクなど)、などにかかわる費用がかかる。これらの費用を差し引くと手元にはほとんど残らず、1 回のイベントで得られる金額は、基本的に 1 回のイベントを行うことで消えていくような状況が長く続いている。新潟公演が福祉会館でなされることの理由は金銭がかからないことが大きな理由となっている<sup>47</sup>。

活動の周知は様々な形でなされている。こわれ者の祭典のホームページやメールマガジン、各々のメンバーが作成・管理しているブログ、ツイッター等のインターネット媒体が周知方法として活用される。また、インターネットのみならず、フライヤー(図 16)の配布や関係機関への FAX などにより周知がなされる。具体的には、各々のメンバーが企画・参加しているイベントの配布物にフライヤーを含ませたり、会場となる福祉会館や、文化会館、各種福祉機関や、美術館、大学や専門学校等教育機関、図書館、飲食店などにフライヤーを送付、配置している。



図 16 こわれ者の祭典フライヤー(2014年9月21日用)

新聞社やテレビなどの取材は積極的に受け入れており、活動をより多くの人に知ってもらいたいという立場をとっている。新聞や各種メディアなどに取り上げられることも度々あり、活動の周知

<sup>47</sup> 福祉会館を利用するには、営利目的の活動ではない、等の条件がある。

に寄与している。

## 3.2 K-BOX

### 3.2.1 活動の概要

こわれ者の祭典と共に、本研究のフィールドとなるもうひとつの表現活動は K-BOX という団体によりなされる活動である。K-BOX は、心の病やひきこもりなどの経験を有する人が所属するプロダクションで、こわれ者の祭典の副代表を務める Kacco さんを代表として運営されている。K-BOX ではライブ活動をはじめ様々な活動を行っている。

K-BOX という名前については、『『K-BOX』の K は、Kacco の頭文字。BOX は、皆が集まれる箱という思いが込められる(池上 2010)』という。K-BOX を紹介するフライヤーには、現在活動中の主要なメンバーの写真と、K-BOX の紹介がなされており(図 17)、ここでは K-BOX が、「心の病を抱えた方やひきこもりの方などがプロデュースを受けてアーティストやタレントとして所属しているプロダクション」であることや、MUSIC 部門・PERFORMANCE 部門・ART 部門、TALENT 部門といった複数の部門で編成されていることなどが示されている。



図 17 K-BOX フライヤー(2014 年 10 月 19 日配布)

こうした複数の部門の存在は、K-BOX でなされるパフォーマンスの幅の広さを示しており、こわれ者の祭典ではあまりなじみのない「アート」といったイラストや絵画といった表現をする人々も K-

BOX のメンバーにはいる<sup>48</sup>。

K-BOX は 2011 年に 5 周年を迎え、「5 周年記念感謝祭」というテーマでライブがなされていた (2011 年 12 月 18 日)。ただし活動自体は、「K-BOX」となる以前より「レッスンルーム」という名で行われており、「K-BOX」と名を変えて 5 周年となっている。レッスンルームの頃から数えるとおよそ 2012 年時点で 10 年ほどの期間となり(2012 年 3 月 10 日イベント時の Kacco さんのトークより)、こわれ者の祭典の活動期間とほぼ重なる。

活動は、毎週のレッスンと呼ばれるメンバーの練習と、ライブ活動が柱となっている。Kacco さんの思いとしては、「引きこもったり、心の病を抱えたりした人たちは、その経験を持っているだけで、いい表現活動ができるはず」であり、「レッスンという磨く作業と、輝けるステージを用意できていれば、いずれジュエルボックス(宝石箱)になれるのではないか」との思いがある(以上引用、池上 2010 より)。Kacco さんは、自らがイラストという表現活動を通してどん底から抜け出すことができた経験を有しており<sup>49</sup>、その経験が K-BOX を運営する動機になっている。

Kacco さんは、K-BOX の活動全般を統括すると共に、レッスンでは各々の表現者に指導し、リーダーシップをもって活動の運営にあたっている。作品は、アート部門のメンバーはイラストなどの制作、音楽部門のメンバーは自作曲などのライブでの演奏、パフォーマンス部門のメンバーは自作詩の朗読パフォーマンスなどを行っている。ライブ活動が主な活動の場であるが、ひきこもりアートフォーラムといった新潟市主催の当事者による作品展示のイベントなどにおいて作品を出展したりと K-BOX ライブ以外の活動も行っている。また、アート部門のメンバーの作品は、ライブの場でイラストなどを展示したり、ポストカードにしての販売されたりしている。

音楽は、メンバーのタナベーさんは主としてジャズピアノ、Merry'z というロックバンドはロック、純名さんはピアノ弾き語りといったように様々な分野にまたがっている。メンバーの作詞、作曲した曲は、ひきこもりアートフォーラム、長岡市民活動まつりのテーマソング、通信制高校のサポート校の校歌等に採用されている<sup>50</sup>。

---

<sup>48</sup> こわれ者の祭典でも、月乃さんや Kacco さんをはじめ、イラストレーターとして活動している人はいる。しかしながら、団体としてこわれ者の祭典でイラストや絵画の活動が強調される様子は見受けられない。

<sup>49</sup> Kacco さんは度々、イベント等において辛かった時に旅行会社の営業マンの知人よりイラストのオファーを頂いたことがきっかけで回復に向かうことができたことを語っている。またその様子は対談集でも記されている(月乃 2007)。

<sup>50</sup> 純名さん作「命の勲章」、「未来を担う子どもたちへ」という作品など。

## 3.2.2 メンバー

### (1) メンバーの概要

K-BOX のメンバーは、20 名程度で、年齢は 10 歳代から 40 歳代まで、男女に広くわたっている。「こわれ者の祭典」が、メンバーをある程度固定されているのに対し、K-BOX では広くメンバーを受け入れており、メンバー構成は比較的流動的である。筆者がかかわっている期間においても、新たに参入してきたメンバーも複数名存在し、体調悪化などで休養することになったメンバー、仕事が忙しくなったり、個人での表現活動を進めていきたく思い退会していったメンバー、また、体調が回復し、表現活動を再開するようになったメンバーも存在した。また、表現者のみならず、見学という形で参加している人、レッスン生という立場で、ライブ等には出ないが、表現活動を行っているという人たちの姿も見受けられた。また、表現活動を行わず、K-BOX のライブでの受付などスタッフ業務に専念するメンバーの姿も見受けられた。

個々のメンバーでいうと、活動を統括する Kacco さんは、摂食障害やひきこもりの経験を有しており、K-BOX の代表を務めている。K-BOX やこわれ者の祭典の活動に加え、数々の著作活動や講演会、イラストレーターとしての似顔絵ライブなどの活動(図 18)、ひきこもりサポート活動などの活動を行っている。似顔絵ライブは県内様々なイベントでなされる。それは、道の駅や住宅展示場でのイベントであったり、地域の祭であったりする。



図 18 似顔絵ライブ(2010 年 10 月 24 日)

調査期間中ライブに出演する機会の多かったメンバーとしては、Kacco さんと共に司会を担当している Red さん、そして Wattan さん、コウキさんで構成される機会の多いロックバンド Merry'z

<sup>51</sup>, ジャズピアノを中心としたパフォーマンスを行うタナベさん, 自作詩の朗読パフォーマンスを行ういっしーさん <sup>52</sup>, ピアノの弾き語りを行い, シンガーソングライターとして活動する純名さん, アート部門で活躍する Renka さんなどが挙げられる。メンバーはそれぞれ心の病いなどの経験を有している <sup>53</sup>。メンバーが K-BOX で活動するようになるきっかけとしては, Kacco さんが非常勤で当事者のサポートをしている病院での Kacco さんとの出会い, こわれ者の祭典や K-BOX などのイベントなどが挙げられる。たとえば, コウキさんは K-BOX とかかわるようになったきっかけを次のように語る。

コウキ:そうですね, ひきこもる前なんですけど, 学生時代にギター演奏やってまして, その後ひきこもった時に, 精神科の病院で, さっき紹介にもありましたように, 居場所ってのを。  
Kacco:私がやっておりました。こうみえてびっくりなんですけど私非常勤でね, 病院なんかに行ってるんですね。そこでこう, 今を苦しんでいる人たちと向き合っているんなお話をうかがったりしてるんですけど, そんなのが週に1回はっています。そこで実は彼, コウキと出会ったんですよ。(ふれ愛さくら祭り, 2010年4月25日)

K-BOX では年末にスペシャルライブというゲストを呼ぶ大規模なライブとその後の大宴会を行っているが, そこでも Kacco さんが病院で行っている取組みに参加しているメンバーが観客として来場し, 忘年会に参加している状況が見受けられた(2012年12月23日など)。また, ひきこもりアートフォーラムで K-BOX のステージを見て, K-BOX のメンバーになった人もいた。このように, ひきこもりや心の病を抱える当事者は, Kacco さんの病院での取組みや, 様々な K-BOX のイベントを通して K-BOX にかかわるようになり, メンバーとなっていくことがうかがえる。

---

<sup>51</sup> 複数のメンバーでユニットを組んでの活動も行われており, Merry'z はそのひとつである。その時々  
のライブ等演奏時において Merry'z のメンバーは加わったり減ったりする。Merry'z(メリーズ)という  
名前由来はひつじ年生まれの人が多かったことによる。

<sup>52</sup> 現在いっしーさんはミュージック部門で活動することを目指しており, パフォーマンスは行っていない  
(2014年時点)。

<sup>53</sup> Red さんは対人恐怖や難聴など, Merry'z のメンバーはそれぞれ, うつ病や睡眠障害, ひきこもりな  
ど, タナベさんは本人いわく「幻聴の病気」, いっしーさんは地下鉄サリン事件の被害者で躁うつ  
病などを抱えながら休職や転職を繰り返した経験, 純名さんはパーソナリティ障害など, Renka さん  
はアルコール依存症などといった病気や経験を有している。



## (2) メンバーの人生経験例

### 1) 自伝的著書にみるいっしーさんの経験例

K-BOX にて詩の朗読などのパフォーマンスを行ういっしーさんは 1960 年代生まれの男性のパフォーマーである。著書『『自転車』でいこう』(いっしー 2010) にて、人生経験の詳細が記されている。以下にその一部を引用して示す(以下の引用部分の「」表記内はいっしーさんの著作『『自転車』でいこう』による)。

子供の頃問題児だった。「今だったら傷害事件として訴えられるような事件」を起こし、クラスメイトを傷つけてしまった。それ以来「友人と呼べる相手はできなかった(p.43)」。中学生の頃ははじめられ、「蹴りを入れられ」、「ゴム製のベルトで鞭のようにひっぱたかれた(p.43)」。

17 歳の頃、20 歳になろうとしていた東京にいた姉が、「病気のため亡くなってしまった(p.104)」。「突然の不幸(p.105)」で、アパートの荷物の整理を母とした。「姉の分まで生きなくては」と思い、「どんなにきつい時でも自殺願望はでなかった(p.105)」。大学に 1982 年に入学した。当時「廃れきっていた(p.22)」学生運動をやり、大学を中退した。サラリーマンをしている時に、地下鉄サリン事件の被害にあい入院した。サリン中毒の症状で、部屋が本当は明るいのに暗く感じた。

事件の 1 週間後には仕事を始めたが、無意識のところダメージが蓄積され、「睡眠薬がないと眠れないという生活(p.29)」が始まった。「常に誰かに監視され、会話を盗聴されているような不思議な感覚に襲われるようになった(p.37)」。会社を無断欠勤して、富良野のペンションに滞在した。「様子があまりにもおかしいので(p.38)」ペンションのオーナーが連絡し、母と叔母がペンションにやってきた。一旦自宅に帰り、4 か月ほど入院した。躁うつ病の病名がついた。会社を退職し、故郷へ戻り、実家の近くの電気工事の会社に就職した。資格をもっていたので「現場代理人見習い」として就職したが、「責任の重い、高い知識とコミュニケーション能力の求められる仕事(p.41)」で、「ペーパードライバー(p.41)」で勤まる仕事ではなかった。「現場代理人候補として華々しいスタートを切ったはずだったが、実際には全く使い物にならなかった。その結果ストレスで体調不良に陥り、2 回退職(p.42)」し、3 年弱で退職した。

楽しかった思い出もあった。地元の山岳会に入り、そのおかげで「会社での辛い日々を耐えられた(p.48)」。また、FM の生放送を昼休みに聞くのが楽しみだった。「昼休みになるといつも車の中で一人ラジオを聴いていた(p.49)」

退職してから、現在の会社に入るまで、ひとり暮らしをしたり、職業訓練校に行ったり、短期間未経験の職種にチャレンジしたが、「二つの会社を両方とも一か月でクビになった(p.52)」。そして、現在の会社に入社し、結婚し、二人でマンションに住むという順調な日々を

送った。「がんばって仕事をして、休日には職場の仲間とスノボに行ったりして人生を楽しんでいた(p.53)」。結婚した時は「天にも昇るくらい幸せだった(p.55)」。アパートで1年くらい暮らした後、中古のマンションを購入した。

順調だったが平成18年秋、突然体調を崩した。慣れない警備の仕事を応援で行くことになり、「立っているのもしんどく(p.58)」なり、かかりつけの心療内科に「休んだ方がいい(p.58)」と言われた。マンションのローンもあり、妻は泣き崩れたが、1か月の休職を取ることにした。職場復帰したが、体調の悪さは変わらず、再度休職した。仕事にナーバスになり、大きなミスをしてしまいそうになり、パニックになった。「精神的負担の『軽そうな』清掃部門(p.61)」を希望し、給与は下がったが、「職場移動させてもらった(p.61)」。清掃の仕事は、「周りはほとんど女性だらけ(p.62)」で圧倒された。清掃の仕事は肉体労働であり、「熟練を要するもの(p.62)」で、プレッシャーとなった。妻に早期のガンが見つかった。治癒可能なものだったが、給与が下がってマンションの生活ができなくなるのが大きな不安だった。そして、「余りにもわがままで自分勝手なお願いとはおもいつつも(p.65)」、「生活が苦しいです。がんばりますので、もう一度設備部門でやらせて下さい(p.64)」と上司にお願いした。勤める会社は「病人にも理解を示してくれる素晴らしい会社であった(p.65)」。設備部門に戻ることができ、うつ状態は「嘘のように解消された(p.65)」。その頃長年療養してきた父が死に、平成19年の12月に、些細なことから妻と大ゲンカをし、ある日、自宅に帰ってみたら妻の私物がすべて消えていた。そして離婚が成立した。平成20年10月に、仕事で「本当に大きな失敗をしてしまった(p.68)」。「きつとまたまた設備部門から清掃部門へと現場移動することになるだろう(p.68)」と不安になったが、上司の配慮のおかげで、清掃部門ではなく、ビルの駐車場係として勤務している。給与は下がったが、「失業だけは免れて実家で母と暮らして(p.69)」いる。

今に至るには様々なサポートがあった。父の古くからの知り合いのYさんは、別のビル会社の所長をしている人で、「人生の危機にいかにか立ち向かうのか(p.90)」を教えてくれた。「Yさんの知り合いの知り合いということで紹介(p.93)」された産業カウンセラーのI先生から言われた、「『人とかかわるのが大切です』という言葉を大切にしようと思っている(p.98)」。「人と接する機会を意識的に作っていると、それが自分にとってセーフティネットになっていくんだなど最近やっとわかってきた(p.98)」。そして「何とか元気でやれているのは母親のおかげ(p.102)」である。「I先生つながりで、心の病いを抱える人、元ひきこもりの方々と出会い(p.137)」、定期的に接している。K-BOXのライブに向けて、詩をつくり、朗読の練習をしている。「20代、30代の若者の多い団体(p.144)」なので、「最高齢の新人(p.144)」であった。今年(2010年)は、「このK-BOXで、自分を表現しきりたいと思う(p.144)」。

このように、K-BOX のメンバーのいっしーさんは、地下鉄サリンの被害を受けたり、仕事上のストレスを抱えていたり、休職や転職を繰り返したり、離婚したりといった経験を有している。また、躁うつ病の診断を受けたりと心の病を抱えている。もっとも、著書が出版されてから、時間もたっており、様々な状況は変化している。現在、いっしーさんは駐車場係とは別の業務に就いており、K-BOX にも新たにメンバーが加わり、「新人」ではなくなっている。また、現在はミュージック部門での活動を志しており、朗読はしていない状況となっている。

## 2) 人生経験を語るイベントからみるメンバーの経験

K-BOX に所属するメンバーの人生経験はイベントの場で随時語られる。中でも、2012 年 3 月 10 日に行われた「K-BOX Presents～トークライブ(笑) 新潟には…可愛い？輝いてる？カッコイイ？『こんな 40 代もいるんやでえ～っ！』」というイベントでは、40 代の K-BOX のメンバーの人生がトークライブという形で時間をかけて語られていた(図 19)。ここに出演したのは、Kacco さん、Renka さん、いっしーさんであり、それぞれ摂食障害やアルコール依存症、うつ病、ひきこもりなどの経験を有している。



図 19 トークライブで体験を語る K-BOX メンバー(2012 年 3 月 10 日)

トークライブでは明るい雰囲気の中で、生きづらかった時の経験が語られた。Kacco さんからは以下のように、病気のこと、職業歴、受診時の困難や世間の視線が辛かったことなどの経験が語られた。

Kacco: 過去はですね、いっしーと共通の部分があって、躁うつ病とパニック障害と摂食障害、過食症とか拒食障害といわれる摂食障害、それからひきこもりは 5 年間という経験を持っているんですね。28 の時にそういったふうに診断されたんですけど、それまでって

いうのは普通にね。私はサラリーマンをやってたんですが、いろんなやっぱり仕事を、自分に合ってるものを探そうと思って転々としたんですが、最後に自分が勤めていたところが不動産業者さんで、私はなぜ不動産業者だったかっていうと、別に不動産がやりたくていったんじゃないで、さっき言ったように自分に合っているところを探して行って転々としてる中で、これもやってみようってなったんですね。

たとえば屋内で事務の仕事をやれば、それが合わないと思えば、今度は外で肉体労働をやってみようかと思って測量士さんの仕事をね、補助ですけどやった時もあるんですよ。1日30キロぐらいの棒を担いで歩いて、また置いて、担いで歩いて。

**Renka:** 補助ってことは、基本、棒を持ってたんですか。

**Kacco:** 持ってましたし、トランスっていうのも測ってましたよ。専門用語出しちゃったけど、あの測るほうね。それもやったりしたんですが、それでまた外が冬寒い、夏暑い、自分の体には厳しいなあと思ってまた中へ行って営業へ回ったりとかね。そんなふうにしてる中で不動産業に勤めたんですね。その時にはじめに症状が出たんです。何が出たかっていうと、会社に行くと頭が痛い、めまいがする。もっとひどい時は吐き気がする。会社へ行って「おはようございまーす」って言った瞬間に行くところが、社長のところじゃなくてトイレに向かうっていうね。気持ち悪くて。で、もう心臓バクバクするし、変な汗は出てくるし。で、ほら、社長もそういう姿を見れば、ああ、仕事できないんだと、今日は無理だなと思って「帰っていいよ」って言うんですけど、その「帰っていいよ」が、最初は半年に1回ぐらいだったものが、だんだんスパンが短くなっていくのね。1カ月に1回、1週間に1回。

そうしたら、仕事できないでしょう。で、病院を転々としてたんですね。最初、そういう症状は内科だと思ったから内科から入ったんですけど、いろいろ紹介されて、神経内科も行った、脳外科も行った、で、最後に行き着いたのがやはり精神科で、そこで躁うつ病と、パニック障害と、摂食障害と。

これねえ、なった方は分かると思うんですけど、どれひとつでもすごいしんどいですよ。摂食障害で苦しんでる人もいっぱいいます。躁うつ病で苦しんでる人もいっぱいいます。パニック障害もそれだけで苦しんでいる人いっぱいいるんです。私、ヘレンケラーでいう三重苦ですよ。で、先ほど言ったひきこもりはなぜなったかっていうと、そういう病気がまだ皆さん世の中に認知されてないっていうか、変な理解のされ方がされていて、ひどい言い方ですけど、精神科に行くような人たちはちょっと頭がおかしいかぐらいのことを言われていた時代だったんで、そんなところに実際自分が行ってね、っていう自分が許せなくなりました。たまには、そういう病気でありながらも、うちで過ごしてるだ

けじゃなくて、外の空気吸いたいとか思うじゃないですか。で、外行くと聞かれるのがこれですよ。「今日、お勤めお休みですか?」と。グサーツとくるのね。

いっしー:あれはきついですね。

**Kacco:** そうそうそう。だって今日だけじゃなくて、明日も休みだし、昨日も休んでましたからね。だから、そうすると外へ行けないでしょう。また聞かれたらどうしようとか思って。それで外行かなくなったら、それがひきこもりだっていうんだね。私がやってた時はね、そういう「ひきこもり」っていう名前すらなかったんです。結果、後々ひきこもりというのができて、そこにあてはめられたタイプなんですけど、まあ、そんな苦しみはねえ、過去には私の場合ありましたね。

でもね、さっき言った不動産業に勤めるまでは、皆さんには申し訳ないけど順調ですよ。ある意味ではね。学校も小中高と普通に過ごしてて、部活もやって<sup>54</sup>、短大まで行って、そこも別に何もなく、社会に出て。で、働き初めて 20 歳, 21 ぐらいかな。働き出して 28 まではいたって。バブルの時は一番お金を稼げる不動産にいましたから、私は。

**Kacco** さんは幼いころから男らしくないことにコンプレックスを感じてきたが、それを個性に変えて、表現するようになった。それが女装パフォーマンスであり、女装をすることで、学校などからも講演の依頼がくるようになった。そのことが次のように語られる。

**Kacco:** そしたらファッションに、絵にと幅が出てきたっていうことだね。なるほど。いや、なぜね、今、衣装のことを触れたかっていうと、今日冒頭にね、この姿を見て、そして声を聞いた時に男性だって、なんでこんな格好をしてるの? って思われた方多いでしょうって振りましたよね。やっとその部分をお話しようと思うんですが、実は昔はこの衣装に隠れている裏側って実はコンプレックスなんです。

私は小さい時から手が小さいとか足が小さいとか、比較的普通の男の子と比べたら華奢だったし、あんまり男の子っぽくなかったんです。で、親からは「男の子らしくなさい」とか、学校へ行けば「もっと堂々として男らしくしろ」というのを散々言われてきてたんですね。で、言われれば言われるほど、「ああ、自分はそうなんだ」って駄目な自分を認識するようになって、どんどんトラウマにもなって。だけどそういうのって、別に男らしくしようと思ってガチッとできるわけでも、足が大きくなるわけでも、手が大きくなるわけでもないですよ。ずーっとそれはもう人に言えない、今はねえ、言ってますけど、その当時ずーっと持ってたコンプレックスだったんです。手が小さい、足が小さ

---

<sup>54</sup> **Kacco** さんはバレーボールの選手として活躍していた(2012年2月12日イベント時トークほか)。

い、華奢っていうのが。

で、ずーっとコンプレックスを持ってたら生きづらいですよ。コンプレックスってほんと、皆さんも多かれ少なかれあると思いますが、すごく生きづらいもので、私はさっき言ったように、今、イラストを描いたりとか、こういうふうなトークイベントで司会進行、それからライブの司会進行とか、自身の詩を朗読するようなパフォーマンスライブとかもやらせていただけてますけど、そういう世界に入った時に「個性が大事だよ」って。「個性があるからこの世界でやれるんだよ」っていう話をしてくださった人がいたんですよ、私に。「個性ってもっともっと出していいんだよ」って言われて、すごく楽になった。そのシーンをね、今でもずっと覚えているんですけど、楽になったし、個性って生きやすいなって思ったんです。それまで躁うつ病やパニック障害、摂食障害で沸々としてた自分がね、なんかこう目の前になったものが、霞がパッと晴れたようなそんな気分だったんですね。

で、もともと持ってるこのコンプレックスをもう一回振り返ってみたんですよ。男らしくしろってずっと言われてきたものを何とかできないかな。トラウマにして、やっぱり人に触れられると傷ついて、自分で言うのは嫌でっていうそのままにはしたくないと思ったときに、「利用しちゃえ」と思ったのね。

実際、私もうその時ステージに立ち始めてましたから、「ここだ」と思ったんですよ。普通の男性だったら入らない7号や9号の衣装を着ちゃえて思ったんです。私ね、足が24センチなんですよ。(笑)

だから、今日もそうなんですけど、これ普通に女性の方が履くヒール、そのまま履けるんですね。体も華奢だから、さっき言った9号とか7号の衣装が着れるし、背もね、今、今日ヒールがあるから高くみえるかもしれないんですけど、170ないんで、まあ、女性だったら今ね、全然そのくらいの人、普通にいらっしゃるんでね。じゃあ、それをステージから個性に変えて発信しちゃえということで、こういった衣装で常に私は今、ステージに立つ時にこのスタイルで上がらせていただけてます。

実際それで発信し始めたら、いろんなところから逆にオファーいただいてですね、中学校とか高校とか、大学もそうですけど、いろんなところからオファーをいただいて講演させてもらったりとか。そういう時もね、学校によってはすごいんですよ。電話くるでしょう、「今度いついつ講演お願いできますか?」と。「ああ、空いてるんで大丈夫ですよ」、「ピンクの衣装で来てください」と。おい(笑)、「分かりました」。昔、学校からさ、そんなふうにくるって思わないじゃない。今そういう時代です(笑)。だから、学校でお話させてもらう時もこういった衣装から、今お話ししたようなメッセージも添えて皆さん

にお届けしてるんですね。

現在、Kaccoさんは病院で週2回非常勤で当事者同士が語り合う場の活動を行っている。先に挙げたように、K-BOXのメンバーにはこの場でKaccoさんと出会った人も複数いる。このトークライブでもRenkaさんが病院でKaccoさんに出会ったことが示されている。

**Renka:**水曜日と金曜日にいらっしゃるんですね。

**Kacco:**多分、皆さん分かってないよ、どういうことか。

**Renka:**あの一、ひきこもりの人たちとか、そういうね、心の苦しみ、病を持つ子たち、若い子たちが集まって人とのコミュニケーションを取ろうみたいな会があって、そこでもこういう司会進行的なことをしてるわけですよ。

**Kacco:**そうです。これねえ、もうRenkaがね、今、話に触れたからちょっと補足しますけど、ある新潟の病院のほうで私ですね、今、週に2回、水曜日と金曜日、そういった病院に入院されてる患者さん、それから通院してこられる患者さんと向き合ってますね、いろんなお話をしてる場所があるんですね。そこの代表をやってるから、非常勤ってということで今、病院へ行ってらるんですけど、それがあって、そこで彼(Renkaさん)とも知り合ったのもあるし。

いっしーさんは先に挙げた著書(いっしー 2010)で書かれているような出来事を含め、経験を以下のようにイベントで語る。いっしーさんはビルのメンテナンスの仕事をしており、以下は仕事で多くのストレスを抱えていることを話している内容である。

**いっしー:**ビルのメンテナンスの仕事をしてるんですが。

**Kacco:**普通で考えたら楽じゃんね、そんなね、待機してりゃあいいんだってさ、仕事しないで。

**いっしー:**そうなんです。何かあったときには大変なことをやったりしますが、普段は待機が多くて。それが、なんか自分が変なことを言って怒らしたりしたらどうしようみたいな恐怖でね、ものすごいストレスになってますね。

そして1995年の地下鉄サリン事件の被害者となった経験も語られる。

**いっしー:**まずですね、1995年に地下鉄サリン事件というのがありまして、6,300名ぐらい

の被害者が出たんですけど、私はその被害者の一人で、新潟県になんか 12 人いるとかいう。

(略)

いっしー:地下鉄の日比谷線というのに通勤途中に乗っていて、で、バタバタと人が倒れ始めて、慌てて逃げただけでも足が思うように動かなくてみたいな、そんな世界でしたね。

そして事件後、転職を繰り返すようになった。

いっしー:最初、電気工事の会社に勤めたんですね。私、ビルの管理の仕事をしてたんで、電気工事士一種という資格を持ってたんですね。それはちょっと難しい試験で、そこで現場代理人という結構、工事全体を仕切る人の見習いみたいな感じでその電気工事の会社に入ったんですが、いや、ペーパードライバーでそんな資格なんて持つもんじゃないですね。ほんとに、仕事は全くできない、人間関係も作れないで、もう入社した時点からかなりのうつ状態でしたから、だから、その会社に 3 年近くいましたけども、まあ地獄でしたね。

Kacco:地獄でしたか。何、じゃあちょっと順番整理するけど、サリンの後にうつとか躁うつとかが出てきたわけ？

いっしー:その前も軽い薬は飲んでたんですけど、ひどくなったのはサリン後ですね。

Kacco:サリン後ね。で、新潟に帰ってきて、まさしく今度は心の病だよな、そっちのほうがつくなくていつて。で、仕事をしていてもしんどくて、資格はあるけど仕事ができない。

いっしー:そうですね。だから、長期休職をその会社で 2 回しましたね。

(略)

いっしー:その後 3 回転職して、今の会社で 10 年目ですね。

Renka さんはアルバイトなどしながら、10 年ほどひきこもっていた。社会人になってから付き合いで飲むようになり、徐々に酒をおいしく感じるようになってきた。今はこんな風に話せるが、昔はそうではなかった。アルコールが入ると「どんとこい」となった。

Kacco:アルコール入ったらどうだったの？

Renka:まあ、それはもう「どんとこい」でしたけども。

Kacco:あ、アルコールが入ったら人前でも話せたんだ。



Renka:もう、喜怒哀楽ドカンでした。

Renkaさんは高校を卒業後、運送会社に就職した。運転の経験が浅い中、運送の仕事を行うこと、長時間勤務等が重なり、レンタルスキーの仕事や、親類のやっている石材店の仕事などの職業経験を重ねた。

Renka:1日12時間以上労働が続いて、で、ある時もう会社の駐車場まで車で着いて、いざ止めようかなっていう時に、嫌だっつってもう逃げました。

Kacco:逃げました(笑)。

Renka:逃げたんです。

Kacco:逃げたというのは、そのまま辞めたってこと?

Renka:いや、そこで、弱いんですね。幼い、人任せ、甘えて生きてきた部分もあったんで、やっぱり。もうとにかくそこでまずひきこもりです。入社拒否ですよ。「電話きてるよ」つつつても、「うーん、知らない、俺もうあんなどこ知らない」。もうフェードアウトするように辞めて。

Renkaさんはアート部門で活動し、イラストの制作などを行っているが、ステージ上に出るときは衣装、ファッションなどにこだわりがみえる。Kaccoさんが女装について語るように、Renkaさんも衣装等について、過去の経験と照らし合わせて以下のように語る。

Renka さ、そのスタイルには、たとえばさっき話してきた過去からの影響でこうなったとかって話はあるのかな。

(略)

Renka:いや、本当ね、ちっちゃい頃、遡ると本当恥ずかしがり屋で、幼稚園の時、徒競走ありますよね。で、「頑張れーっ」って声援されるのが恥ずかしくて。

(略)

Renka:恥ずかしかったとか。でも、それが入院している間にいろいろ考え方も変わってって、開き直っちゃったんですよね。もう俺は俺だと。

Kacco:まあ、もともとそうなんだけどね、本来ね。ただ、そこに気づかないんだよね。

Renka:そう。

Kacco:「俺は俺だ」で本当はいいんですよ。だって、誰の人生を代わりに生きてるわけじゃないんだから。

Renka: そう。変に斜めに見ますからね。「個性が大事だ」「あなたはあなたでいいんだよ」って言われても、「ふん、何言ってやがる」という考えでいたわけですけども、自分も。そういうのが、いいんだ、俺でと。途端にはじめてこうなっちゃいました。

Kacco: ああ、それがこの衣装にも出てるわけね。

Renka: もうだからやりたいことをやる。まずそうなった時に絵が、まあ昔からやってたりしたし、絵を描くのは好きではあったわけですので。ここから入りつつ、自分のやりたいことをやろうと思って。

Kacco: ああ、絵だけじゃなくてファッションもってことだね。

Renka: だからこれも、自分もアート作品みたいなものなんです。

入院は借金がきっかけとなった。精神科への偏見を自分も持っていたが、入院によって考え方が変わった。

Renka: それがですね、自分の場合アルコール依存症だったじゃないですか。

Kacco: ああ、言ってたね。

Renka: これ、とんでもない数々失敗しましたが、お酒の。すごい失敗してるんですよ。

Renka: 酔っ払ってですね、家族カードってあるじゃないですか、クレジットカード。

Kacco: ああ、クレジット機能の付いたカードね。

Renka: あれで借金作りました。

(略)

Renka: で、白状して、入院するわけですよ。アルコール依存症として。それで入院して、自分自身をすごい見つめ直す時間ができたわけです。それと、でも最初の時はこちらろん、自分はそういうところになぜひきこもりの時から行かなかったかっていえば、偏見を自分も持ってたわけです。精神科っていうところに。

いざ入ってみて、偏見なんていうのはもうないです、まず。偏見を考える余裕もないんです。まず自分を治したいから。

そして、Kaccoさんが進行している病院の会でKaccoさんにつながるようになり、「スイッチが切り替わった」。自分なんか「もう駄目だ」と思ったことで逆に社会にかかわるようになった。

Kacco: そっかあ。で、まず開放病棟に行けたわけだ。

Renka: 行けて。そのね、病院、何か知らないけど、この人(Kaccoさん)がいるんですよ。

(略)

Renka: 知り合ったのは、実はまだ偏見を持っていた時に、自分はひきこもりなんかじゃないよと思ってる頃、2003年に1回だけ親に誘われてしぶしぶ行ったところで1回お会いして、連絡先の交換とかはしてるんですけども。

(略)

Renka: そこでいろいろ話したり、あと他の子だとか、ほかの年配の長期間入院してる方とかを見てる間に、何かスイッチ切り替わったというか。何でしょうね、一番単純にいうと、俺なんかもう駄目だと思ってたわけですよ。今、生きてること自体。俺なんか世界に必要とされてない、俺なんか1人いなくなってもなーんにも世界に、社会に影響ない。

Kacco: 影響ないと。

Renka: ないと思ってたし。それが逆になんていうんでしょうね、社会にかかわらない、何かしらの形でかかわるべきだと思うようになったし。

そして、表現者それぞれ現在は仕事や日常の生活を送りながら、K-BOXの活動を行っている。K-BOXの活動については、イベントに出演したり、作品を出展したり、といった活動を行っていることが語られる。

Kacco: ね、今そんなことやって。そして、このK-BOXに入ってきたんだけど、K-BOXでは、やってることをぜひ。

(略)

Renka: 6月にですね、ひきこもりの経験者や、今、実際ひきこもっている人の、もしくはそういう人の親の方とか知ってる方、そういう人たちを対象にしたアートフォーラムというフォーラムがあつて。

Kacco: ひきこもりアートフォーラムというね、今回は5回目になりますかね。

Renka: これもある意味、入院中に知って、入院中に最初に、第2回だったんですけど出品したのがきっかけなんですけど。

Kacco: 絵を描いてね。

Renka: で、道が開けてきて、で、今があつて、今このアートでやってて、それが今度6月にまたあるんですよ。

Kacco: はい。6月の2日3日だったかな、土曜日・日曜日。絵の展示があつたり、ライブがあつたり、音楽も聴けます。

(略)

Renka:で、絵描いたりしつつなんですけど、今ほんと、そのアートフォーラムに向けての集中ですね。

(略)

Kacco:なるほど。それが現在でね。こういった絵も描いてます。後ほどね、見えない方ほどうぞ、帰り際でも見てってください。ぜひね。

でも、昔、さっき言ったように私と一緒に絵の世界あきらめたじゃない。ねえ、一回はさ。で、そこからまた絵につながったんだもんね。

Renka:そうです。

Kacco:私もそうなんですよ。絵の世界をあきらめて、親にいわれてね、そんなの氷山の一角しか食べていけないんだから、絶対あんたじゃ無理よっていわれて私はあきらめたでしょう。でも今ね、イラストをまた描いてますからね。

これからの展望としては、当事者としての「見本」としての活動を行っていききたい旨が語られる。

Renka:これから、まあ、現在進行形な部分もありますけど、ほんと、こういうことでちょこちょこ話出てきますけど、まだ偏見もありますし、本当、悩んでいる人たちもいます。

Kacco:増えてるからね。

Renka:当事者の方。本当、そのまた悩んだりうつになったりするのが高年齢化してますし。ひきこもりも高年齢化してるんですよ。

(略)

Renka:自分もまあ、主治医の講演会について行って、ひきこもりの子を持つ親の人たちの前で、元当事者、まあ、ほぼまだ当事者じゃねえかとか自分で思いますけど、話す機会とかもありますけど、ほんと、何か支援できることがあればとか思ってますし。そういう中で、いい見本でもあり、悪い見本でいたいっていうか。

(略)

Renka:話それましたけど。でも、ほんと、道化でいたいし、ありのままの自分出していくしかないし。それが何かの役に立つなら、どんどん率先して参加していきたいなと思ってます。

いっしーさんは K-BOX と共に仕事のかかわる生きづらさが続いていくであろうことについて語る。

いっしー:まず、これからの話ですかね。まあちょっとこの K-BOX とは離れますけれどもね、仕事のほうが今ちょっと、これからを何も語れない状況に今ありましてですね。

Kacco:え、それどういうこと？

いっしー:私はある公共機関の建物管理の仕事をしてますが、その用途が変わるものから、その変わった先、どういう体制になるかということがまだ何も決まってないんですね。(略)

いっしー:そうです。だから、最悪のことをね、考えたりしながら。

Kacco:そうだよ、だからクビだよ、君は、うん。

いっしー:だから、仕事を普段、待機しているのも苦痛だって先ほど言いましたけども、期間を1年区切りで契約してる人とそうじゃない、私はそうじゃない方なんですけど、そうじゃない人がいたりして、非常に微妙な空気だね。

Kacco:ああ、会社の中がね。

いっしー:会社の空気が。ただでさえ・・・。

Kacco:言葉が足りないよねえ、いちいち私が補わなければ(笑)。

いっしー:だから発達障害<sup>55</sup>なんです。

Kacco:ああ、分かった分かった。それが発達障害なんだって。

以上のように、イベントの場で明るい雰囲気やユーモアとあいまって、若いころの経験や仕事の経験、病気の経験、表現活動の経験などが語られる。そして、現在も生きづらさは続いていることも語られる。それぞれ経験していることは多様であるが、病気の偏見や仕事や家庭、学校での人間関係のつらさなど、生きづらい経験として多くの人に共通した内容を含むものになっている。

### 3) パフォーマンスを行うようになった経緯—音楽を例に

K-BOX では、夏に音楽に特化した企画ライブがなされることがある。このライブは K-BOX のミュージック部門で活動するメンバーが企画し、実施している。ライブは、ジャズピアノやギターやピアノの弾き語り、ロックバンドの演奏、トークという構成になっている(図 20)<sup>56</sup>。

---

<sup>55</sup> いっしーさんは 40 歳代後半になって発達障害の疑いと指摘されているとのことである。

<sup>56</sup> 配布された案内には、メンバーのメッセージや、ライブのプログラム、パフォーマンスされる曲名等が記されている。

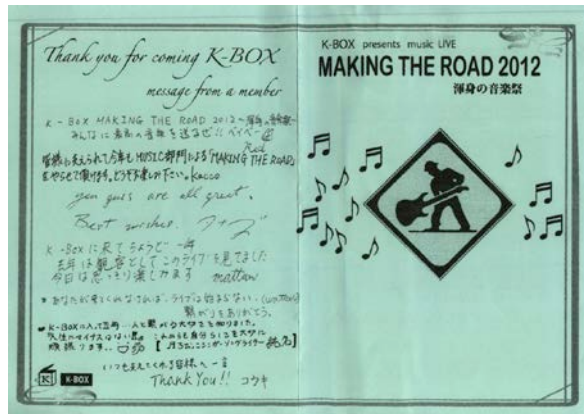


図 20 MAKING THE ROAD 2012 ライブ時配布物(2012年7月22日)

そしてこのライブでは、出演者がいかにして表現活動をするようになったのか、が語られた。純名さんは、ピアノを幼稚園のころからやっており、音楽が好きだったという(以下の引用は 2012 年 7 月 22 日イベント「MAKING THE ROAD 2012」より)。

Kacco: やりだしたのはいつ?

純名: 私の場合は、ピアノを習い始めたときからになるので、幼稚園。

(略)

純名: (同じクラスの子が) みんなピアノを習ってて、私も習いたって言って、ほんとそこらから始まりで、それから、ピアノで奏でる音がすごい大好きで。

(略)

純名: (転校して) やめたりはしてんですけど、きっかけはやっぱここですね。習ってた期間のトータル、すごく短いので、技術は全然及ばないんですけど、昔からうちの母いわく、自分の感覚で勝手に覚えて弾いていく子だったという逸話があるので、もうほんと好きだったんだなと。

コウキさんは音楽が嫌いだった。

コウキ: 小学生の頃って、音楽のおの字も大嫌い。

(略)

コウキ: 生活の中にもほとんど。テレビとかに流れるのはあっても、ほとんど、何だろう、音楽らしい音楽ってなくて、基本、子どものころって音楽大嫌いだったんです。

Kacco: 成績が悪かったとか、音楽。

コウキ:やる気がなかったっていうか、音痴とかいろいろいじめのネタにもなるんで、基本的にやりたくなかったんですね。

Kacco:そんなのがやっぱりいじめのきっかけになるのかな。なるんだな。

コウキ:なりましたね。結構下手を理由に居残りもそうだし、あと。

Red:あったね。

コウキ:そうそう。何だろうね。下手なのになぜか指揮者っていうか、班長っていうか、ほら、あるじゃない。そのパートリーダーっていうの？ああいうのを押し付けられたりとか。

Kacco:分かる。だって、基本的にはリーダーシップ取れる人<sup>57</sup>だからね、うちのメンバーの中でね。今日もこのセッティングだったりなんか、いつも声掛けてリードを取ってくれるから。

コウキ:でもね、押し付けられるって、結構嫌なんです。基本、誰もやりたがらないことをリーダーのおまえ、やれやみみたいな。

Kacco:なるほど。そっか、そっか。

コウキ:望んでやったわけじゃないんで。

コウキさんは音楽が嫌いだったが、あるロックバンドの演奏を聴いて衝撃を受け、のめり込んだ。

コウキ:それを聴いたり、見たりしたときに、すごくショックを受けたんですよ。

Kacco:ショック？

Red:どういうこと？

コウキ:衝撃。何だ、こいつらはと。こんなことやるやつらがいるのかと。

(略)

コウキ:それを見たときにすごく衝撃を受けて。で、何だろう。最初にやっぱりのめり込んだんですよ。

Kacco:聴くほうに？

コウキ:そうそう。聴くほう。おっかけだったり、そんな感じでのめり込んで。なんかそうこうしてうちに、俺もなんかやらずにはいられないみたいな、いても立ってもいられないような。

Wattanさんはラジオを聞いて、音楽をやり始めるようになった。

Wattan:はい。思い返すと、結構中学時代からラジオを聞くラジオっ子だったんです。

---

<sup>57</sup> コウキさんのことを指す。コウキさんは K-BOX での活動歴も長く、K-BOX ではリーダー的役割を果たすことが多い。

Red: テレビっ子じゃなかったんだ。

Wattan: テレビも見てましたけど、きっかけ自体は、やっぱり FM。それで、すごいやっぱり。そのほうからやっぱりロックにはまっていたんだと思う。

そしたら、ひきこもりになっちゃってみたいな。

Red: ラジオがきっかけでひきこもったの？

Wattan: いやいやいや。ひきこもりは、別の原因なんですけども。で、そのひきこもってる間は、ギターをやろうかなあとって。

タナベーさんは、育った家庭環境に音楽があり、音楽を学ぶために留学もしていた。

Kacco: タナベーは、いつごろから自身が音楽やるようになったの？

タナベー: 自分は、祖父もすごい洋物が好きな人で。

Kacco: 西洋の音楽。

タナベー: そのおじいさん結構レコードを集めるのが好きだったんですよ。当時、まだ CD なかったですけど。

Kacco: レコード。

タナベー: プレーヤーとかしっかりしたの持ってて。で、そのときにオーケストラの一番うまい演奏のものを幼稚園ぐらいからって感じだったんです。

Kacco: そうか。おじいちゃん、おばあちゃんが聴いてたものが耳から入ってきた。

タナベー: 父と母もそんな感じの人で、そのうち母がピアノが多少。で、もううちの母が、歌、オペラみたいな、オペラのソプラノみたいな歌を歌ってるんです。うちの母が、音楽を勧めて早かったんですよ。小学校のときにそういう音階とか、ああいう練習をよくさせられました。

Kacco: なるほど。英才教育じゃない。すごい。

タナベー: で、兄とか、父親がやっぱり好きで、レッドツェッペリンとか、ディープパープル、ローリングストーンズとかも知ってましたし。なんで、中学校入るころに、要は、うちはエレキギターがあって、ギターもらって、それでギター始めたりとかしてたんですけどね。

当時は、ピアノがどうか、こうとかじゃなかったんですけど、多少ピアノも知ってました、それで。留学させてもらった時に、ジャズピアノとジャズギターっていうのをやりました。ですけど、当時といえば、音楽を、良質な音楽だからといって、それを聴かされて、それでどんどんどんどん影響を受けていったなというのは覚えてます。(2012年7月22日イベントより)



以上のようにミュージック部門のメンバーには、昔から音楽が好きだった人も、そうではなかった人もいる。また、幼いころから音楽に触れてきた人もいればそうではなかった人もいる。このように、何らかの形で音楽に触れ、病気などの経験を経ながら、現在まで K-BOX という場で音楽を続けている。

### 3.2.3 ライブ活動

#### (1) ライブ活動の概要

K-BOX の活動は、ライブ活動と、毎週行われているレッスンを軸となっている。ライブ活動は、音楽や朗読に特化した企画ライブ、ゲストを招へいするスペシャルライブなどを合間に挟みながら、毎月のように行われており、こわれ者の祭典より頻繁に開催されている。ライブの基本的な構成としては、所属するメンバーのパフォーマンスとトークとなっており、こわれ者の祭典と似ている。しかしながら、異なっている点も多々ある。

一般的な K-BOX のライブは 15 時から 2 時間程度かけて行われる。会場はこわれ者の祭典の新潟公演と同じ会館が用いられるが、視聴覚室という、こわれ者の祭典で用いる会場よりやや小さい部屋で行われることが多い(図 21)。



図 21 K-BOX ライブ会場(2012 年 8 月 19 日)

会場には、ピアノがおかれており、ライブ時には照明や音響設備が活用される。ライブ会場の入り口はフライヤーなどが貼りあわせられ(図 22)、会場の入口付近には立て看板が設置され、ライブ会場であることがわかりやすく示される。



図 22 ライブ会場入り口(2010年12月23日)

開場時間になると、観客は入場料を支払い会場に入る。入場料は通常は 500 円に設定されているが、年 2 回、夏と冬に行われるスペシャルライブでは 800 円となる。観客数はその都度変わるが、こわれ者の祭典より小規模であり、おおよそ 20~30 人程度である。こわれ者の祭典と同様に何回も見かける観客の人たちもあり、リピーターも複数人いることがうかがえる。こわれ者の祭典に来ている観客の姿も時折見受けられる。

開演時間になると司会の Kacco さんと Red さんにより、K-BOX の紹介がなされ、受付で配布された資料を元に、今後の K-BOX の予定(メンバー出演イベント、Kacco さんの講演会、次回ライブ案内など)が紹介され、パフォーマンスが始まる(図 23)。



図 23 司会の Kacco さんと Red さん(2011年1月23日)

K-BOX の紹介や今後のイベントなどの案内が終了した後に、メンバーのパフォーマンスがなされる。パフォーマンスは、主にミュージック部門のメンバーの音楽や、パフォーマンス部門のメンバーによる自作詩の朗読パフォーマンスとなる。パフォーマンスの合間にはトークが挟まれる。

トークでは、病気の体験も語られるが、病気の話よりも日常生活上の近況などの話が語られる場

合が多い。こわれ者の祭典に比して、病気の表現は少なめで、パフォーマンスに重点をおく印象を受ける。しかしながら、たとえば、ひきこもりアートフォーラムという新潟市主催のイベントにおいて K-BOX のライブが組み込まれているが(2009年3月21日, 2010年2月21日, 12月12日など), このように福祉イベントの一部として行われる時などは、病気の話に比重がおかれやすくなっている。K-BOX のライブといっても状況や求められている内容に応じて、病気や生きづらさの話の比重を大きくしたり, 小さくしたりと調整がなされている。

全体的な構成やトークの内容に限らずパフォーマンスにおいても病気や生きづらさの比重は異なってくる。たとえば、タナベーさんは、ライブ 1 回につき 2 曲程度のジャズピアノの演奏を行うが(図 24), こうしたパフォーマンスにおいては、病気の経験が直接的に詩の朗読のように反映されているわけではない。



図 24 パフォーマンスするタナベーさん(2011年2月20日)

一方、詩の朗読パフォーマンスを行ういっしーさんは自らの経験を元にした作品を表現する。以下は、いっしーさんのパフォーマンスの一部である(2011年6月18日)。

いっしー:次は、去年の3月20日に作った作品です。ちょっとガラッと雰囲気変わりますけれども。去年の3月20日、あることの15周年ということで作品をひとつ作りました。聞いてください。

(朗読)

「15周年」

今年は記念すべき年だ。俺が東京から新潟に帰ってきて15周年なんだ。あつという間だったような、果てしなく長かったような。いろいろ経験をさせてもらった。そんな話をしたいと思う。

この際は上記を述べた後、パフォーマンスが開始され、次いで、地下鉄サリン事件にあったこと

や、その後の仕事や病気の話など、病気や生きづらさのことが表現された。こうしたいっしーさんの朗読のようなパフォーマンスの内容では病気や生きづらさの比重は大きくなり、病気や生きづらさの表現される割合はこのようにパフォーマンスの形態によっても異なってくる。また、同じ音楽のパフォーマンスであっても病気の経験の表現の比重や、表現内容は異なってくる。音楽のパフォーマンスは、タナベーさんのジャズピアノのようなものもあれば、Merry'z のようにロックバンドの形態をとることもあれば、純名さんのピアノの弾き語りのような形態をとることもある。Merry'z は、カバー曲を演奏する時もあれば、人とのつながりの重要性を歌う「TSUMUGU」というオリジナル曲などを披露することもある(図 25)。純名さんは、「ひとりで疲れた時は仲間を探そうよ」といった歌詞が含まれる明るい曲調の曲を披露したり、苦しかった時のことを歌詞にして表現することもある。また、それぞれのパフォーマンスは単独で行われるのみならず、ミュージック部門のパフォーマーが詩の朗読パフォーマンスの伴奏などを担当したりと、それぞれのメンバーの間で共演がなされることもある。



図 25 Merry'z のパフォーマンス(2012年2月19日)

アート部門のメンバーはライブの場でのパフォーマンスをする機会は少なく、ひきこもりアートフォーラムといったイベントへの出品や、K-BOX が行っているチャリティーアート展などへの出展(2011年7月3日-31日)などがなされている。また、K-BOX のライブでは、アート部門のメンバーの作品が、絵はがき等の形で展示、販売され(図 26)、ライブ中にその案内がなされる。



図 26 ライブ時に販売される物販物(2011年5月8日)

数は少ないものの、時にはアート部門の表現者によるライブ活動がなされることもある。たとえば、ライブペイントという形で、アート部門のメンバーがパフォーマンスとしてステージ上で音楽を流しながら、トークをしつつ絵を完成させていくという取り組みがなされることがあった(図 27)。また、「トークライブ&爆笑お絵かき大喜利!」という形で、Kacco さんによる進行の下、出されるテーマにしたがって絵を描いていく、といった取り組みもなされていた(図 28)。この取り組みは 2014 年時点で 3 回目となっており、アート部門のメンバーがライブなどの場で活動する定期的な機会となっている。



図 27 アート部門のメンバーによるライブペイント(2011年5月8日)



図 28 アート部門のメンバーによる大喜利(2014年11月25日)

ライブの構成も年月が経つ中で変わりつつある。詩の朗読パフォーマンスは以前は毎回のように行われていたが、詩の朗読パフォーマンスを行う人も少なくなり、あまり行われなくなってきた。一方でスポットライトステージというひとりのパフォーマーがひとつの企画を行うという時間が設けられるようになり、アート部門のメンバーが自作の紙芝居を用いたパフォーマンスを行ったり、そこに経験談なども織り交ぜてイベントを進行していく姿も見受けられている。このように、ライブの構成が音楽や自作詩朗読に限らない形になる中で、アート部門のメンバーのライブ出演の機会が増えつつあるように感じられる。

ライブのエンディングには、前回のライブから当日のライブの月の間に誕生日を迎える観客がステージに招かれる。同じ期間に誕生日を迎えるメンバーも紹介され、純名さんのオリジナルの誕生日を祝う歌を交えて、出演者と共に、誕生したことを祝いライブを終了するのが恒例となっている。

K-BOX のライブは比較的小規模であり、その分、通年にわたり数多くなされている。ライブでは季節感豊かな演出がなされる。例年、その時期ごとに、バレンタインデーの話題がトークにのぼり、春には桜が会場に飾られ、ハロウィンやクリスマスの季節には、そうした季節にあったセッティングや衣装が設定される(図 29)。





図 29 ハロウインの演出(2010年11月3日)

K-BOX のライブには、隔月程度の頻度で行われる定例ライブ以外にも、朗読や音楽などに特化した企画ライブがある。たとえば、先にも挙げたように **Making the Road** というミュージック部門のパフォーマーによる音楽に特化したライブが行われ、毎年の定例イベントになりつつある<sup>58</sup>。同様に朗読分野では「魂の朗読会」(2011年9月19日など)というイベントが、アート部門のメンバーによる「トークライブ&爆笑お絵かき大喜利！」(2014年11月25日など)などが行われている。夏(8月)と冬(12月)には、外部からゲストを招いてのスペシャルライブが例年開催される。ゲストは、県内で音楽活動やパフォーマンス活動を行っている人々を中心となるが、県外から招かれることもある。ゲストも複数回呼ばれ、K-BOX になじみ深い人もいれば、そうでもないひともある。Kacco さんが似顔絵ライブなどの活動をする中で知り合ったパフォーマーが呼ばれることもある。先回のスペシャルライブでは、ステージマジックやピアノ演奏などの活動を行っている人がゲストとして招聘された。ゲストも様々な病気や生きづらいつらい経験を抱えていることも多く、トークではゲストの病気や生きづらいつらい経験の体験談が語られることも多い。

こわれ者の祭典と異なり、ライブの後の交流会が設定されているわけではないが、年2回のスペシャルライブの後には、交流会が行われる。そこでは、観客、メンバー、ゲストが参加する。会場は新潟駅近くのなじみの居酒屋を貸し切って行われる。交流会がはじまってしばらくすると、ギターがメンバーやゲストをはじめとして様々な人に手渡されながら、会場で演奏されたり、歌が歌われたりするのが恒例になっている。ライブはメンバー自身の手により運営されている。会場の設営や機材の管理もメンバー自身が行っている。また、Kacco さんのマネジメントやメンバーのメイクなどのサポートしているスタッフのように、パフォーマンスをするわけではないが運営を継続的にサポートしている人もいる。こわれ者の祭典は、少数のメンバーがイベントがある際に集まり、活動していくような形に対し、K-BOX はライブ回数も多く、後述するレッスンなどライブ以外でメンバー同士

<sup>58</sup> 先ほど挙げた2012年7月22日以外にも、2010年7月18日、2011年7月24日にも行われている。

が会う機会も多い形をとる。こうした実践形態の違いから、K-BOX がひとつの家族のような共同体を構成しているような雰囲気を醸し出している。ライブ活動等を通してそれぞれの表現団体の特徴が垣間みえる。

## (2) ライブ活動の多様な場と形態

こわれ者の祭典は東京で定期的に公演を行っているが、K-BOX は東京での公演等は企画されていない。しかしながら、県内を中心に各地でパフォーマンスを行っている<sup>59</sup>。また、音楽やパフォーマンスを前面に出したライブもあれば、ライブペイントのようなライブもある。トークを中心としたライブが行われることもある。こわれ者の祭典の県外での公演のいくつかをこわれ者の祭典のスタッフの丸山さんが企画、運営していたように、K-BOX の県外のライブもひとつ丸山さんの企画の元行われている(2009年9月12日、福島県郡山市)。

ライブは主催するのみならず、他のイベントの一部をなすような形で行われる場合もある。たとえば新潟市主催のひきこもりアートフォーラムというひきこもりイベントの中のひとつのプログラムとして K-BOX のライブが行われている<sup>60</sup>。ふれ愛さくら祭(2010年4月25日)という福祉イベントにおいても、Kaccoさんとコウキさんが出演し、パフォーマンスを行っている(図30)。



図 30 ふれ愛さくら祭への出演(2010年4月25日)

このような福祉色の濃いライブも時に行われ、このような場合には、イベントに参加する当事者や支援者など福祉関係者が観客の多くを占める。そして、トークには病気の内容が濃く反映される。以下に、ふれ愛さくら祭における、冒頭のトークの一部を示す。ここでは、Kaccoさんの摂食障害

<sup>59</sup> フィールドワークを行ったものだけでも、2011年1月23日には、長岡駅近くの市民センター地下1階イベント広場にてライブが行われていた。2011年6月18日には、同じく長岡駅近隣のイベントのできる飲食店でのライブが行われていた。

<sup>60</sup> 2009年3月21日、2010年2月21日、12月12日、2012年6月3日など



などの経験と共に、コウキさんの不眠症やうつ病の体験が語られる。

Kacco:紹介ありがとうございます(拍手)Kaccoと申します

コウキ:コウキです。

Kacco:今日はね、これより 30 分くらい 2 人でトークをさせていただくという事で、(略)実はですね、私は数年前にパニック障害、そして摂食障害、・・・コウキはなんだったんだっけ？私ばかり、躁うつ病、パニック障害っていっぱいあるけど、彼も実はあるんですよ。

コウキ:うつ病と

Kacco:うつ病ね、

コウキ:それから睡眠障害を。

Kacco:睡眠障害ってちなみにどんなのですか？

コウキ:まあ不眠症ですね。不眠症といった部類の。

Kacco:ああ、いっぱい寝すぎたり、寝れなくなったり。

コウキ:そうです

Kacco:私もね、多い、少ないでいえば、過食症、拒食症という両方がある、(略)コウキはうつ病でどんなエピソードある？

コウキ:え〜と、やっぱり落ち込みが激しくて。全部マイナスにみえてしまうので、人とつきあいうまくできず、近くで声かけてくれてるのに、悪いようにとらえてしまって、なんかこう、うたがってかかるといいますか、どうしてもその、信じれないようなといったことがありましたね。(2010年4月25日)

このように K-BOX のライブやメンバーの出演は福祉の場で多くなされるが、一方で、病気やひきこもりの当事者の活動でありながら、福祉イベントではない場においてパフォーマンスがなされる場合も多い。たとえば、地域の祭のプログラムで、県内で活動する様々なパフォーマーがステージでパフォーマンスを行われる際に、そのうちの一部を K-BOX が担うことがある。新潟県三条市で行われているヤマタノオロチ伝説祭(2009年5月31日、2011年10月10日など)ではその祭りの企画の一部を K-BOX が担当していた。Red さんの司会で、K-BOX のプログラムは野外ステージで行われ、野外でのステージが映える、祭を盛り上げることのできる Merry'z や純名さんといったミュージック部門のメンバーやグループがパフォーマンスを行っていた(図 31)。



図 31 地域の祭でパフォーマンスする Merry'z(2011年10月10日)

また、例年、新潟県内の企業の祭において、K-BOXのメンバーはパフォーマンスを行い、イベントを盛り上げている(2010年10月24日、2011年10月23日など)。この場でもミュージック部門のメンバー、たとえば Merry'z や純名さんがパフォーマンスを行っていた。会場は体育館であり(図 32)、そのステージでパフォーマンスは行われていた。こうした祭などのイベントではミュージック部門のメンバーがパフォーマンスを行うと共に、Kaccoさんは同時に似顔絵ライブのブースを出している。そして来場者の似顔絵を描きながら、同時に K-BOXのメンバーのステージがうまいくよう、様子を見たり、メンバーに対して指導をしたりと気を配っている。子連れの観客も多く、子どもに人気のヒーローものなどのステージがある中、K-BOXのメンバーがパフォーマンスを行っていた。



図 32 地元企業の祭での会場の様子(2010年10月24日)

Kaccoさんは、イベントで知り合ったパフォーマーを K-BOXのスペシャルライブにゲストとして

招き、パフォーマンスをしてもらうこともあり、地域でのイベントへの Kacco さんやメンバーの参加は K-BOX の活動の場であると同時に、ゲストとのつながりをつくる場であったりと、パフォーマンスを行う場以上の意味合いを時に有している。

また、東日本大震災のチャリティライブが複数回にわたって行われたこともあり、こうした取り組みも定例ライブ以外のライブ活動といえる。これは 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災を受けて行われ、ライブを通して募金が呼びかけられた。その際の会場は、新潟市内の地下ショッピング街の中にあるイベント会場であったり(2011 年 6 月 25 日)、ジャズ喫茶であったり(2011 年 6 月 18 日)、大型ショッピングセンター内のあったりした(2011 年 7 月 9 日)<sup>61</sup>。

以上のように、様々な場所で、様々な形態をとってパフォーマンスはなされる。福祉会館で定期的になされるライブは K-BOX 単独のものであり、K-BOX を見に来る人々が観客となるが、祭で行われるパフォーマンスを観る人々は、多くは K-BOX を知らない祭に来ている人であったり、ショッピングモールなどに買い物に来て、偶然その場に居合わせる人であったりする。このように、生きづらさを深く抱えた当事者が安心して集まることのできる閉鎖的な場とは異なった、気軽にパフォーマンスに触れられるような状況を K-BOX はつくりあげている。ひきこもりアートフォーラムのような福祉的な場においては、福祉的な発言や内容の度合いが強くなり、祭やショッピングセンターのような場ではその度合いは薄くなる。福祉系以外のイベントにおいては、病気や障害は、K-BOX の説明、つまりはひきこもりや心の病を体験して表現活動をしているという説明、はなされるものの、病気の体験トークは少なく、純粋に場を盛り上げるパフォーマーとしての役割を果たしている。Kacco さんによると、「福祉色の濃いイベントとそうではないイベントとのトークの内容やステージ構成などは差をつけている」(2011 年 7 月 9 日聞き取りより)とのことである。こうした形で、さりげなく当事者の活動や存在を世間にアプローチするという実践が K-BOX のライブ活動のあり方からは見出せるように思われる。

## 3.2.4 ライブ活動以外の活動

### (1) レッスン

K-BOX の活動は、ライブ活動と、毎週日曜日昼から夜(13 時から 21 時位)にかけて行われているレッスンという練習の機会が柱となっている。レッスンは福祉会館にて、ライブの会場となっている視聴覚室や、ほかピアノが利用できる部屋などが借りられ行われる。公民館などの一室が用

---

<sup>61</sup> なお、チャリティライブの結果、111,293 円の義援金が集まり、2011 年 9 月 27 日に日本赤十字社新潟県支部に寄付された(2011 年 9 月 27 日配信 K-BOX メールマガジンなどより)。

いられることもある。レッスンの場ではそれぞれのメンバーがパフォーマンスに向けての練習や作品作りを行い、お互いに意見を交換したり、代表の Kacco さんにアドバイスをもらったりする(図 33)。また、定例ライブほかイベントに向けての事務的な作業や、企画についての話し合い、新メンバーの自己紹介などがなされる。



図 33 曲作りを行う Merry'z(2012 年 2 月 26 日)

レッスンは、パフォーマンスの質を高めあい、メンバー同士が定期的に集まれる機会となっている。こわれ者の祭典は、事前に打ち合わせなどは行われるが、毎週のように定期的に集まる機会はなく、作品の制作やパフォーマンスの練習も個々の表現者によって基本的には進められており、こうしたレッスンの場があることは、K-BOX の特徴となっている。

## (2) 楽曲提供・出版・展示・テレビ出演など

K-BOX のメンバーはレッスンやライブ活動を中心に様々な活動を行っている。前述したように、音楽部門のメンバーが生み出した曲は、ひきこもりアートフォーラムや長岡市民活動まつりといった活動のテーマソング、通信制高校サポート校の校歌などとして活用される場合がある。こうした活動は、ライブ活動とは違ったプロダクションとしての K-BOX の活動としてとらえられる。そうして作られた作品については、以下のようにライブで説明される時がある。

純名：「ひきこもりアートフォーラム はじめの一步展」というイベントの第 1 回から K-BOX はライブのほうで歌わせていただいているんですけども、今年このアートフォーラムも第 5 回目ということで、(略)テーマソングを作らないかというお話をいただきまして、私たち K-BOX の中から、先ほど歌った Merry'z さんと、それから私と、曲を 3 曲出したんですね。

で、どの曲がテーマソングに、1 曲選ばれるという話だったので、どれが選ばれるんだ

ろうなと思ってたら、先日やっとその結果が届きまして、なんと何らかの形で 3 曲ともすべてがこの「ひきこもりアートフォーラム はじめの一步展」の曲に使われることに決まりました。(略)1曲目が「命の勲章」という曲です。この曲は、どんなことがあっても、それはみんな自分の中の勲章。どんな人生も誇れるものなんだよという思いで書きました。その次歌わせていただくのが「はじめの一步」という曲です。この曲の中にも 1 曲目の「命の勲章」と同じく、どんなことにも意味があるんだよというメッセージをメインに詩を書いて曲を付けました。(2012 年 4 月 15 日、ライブ時トークより)

なお、純名さんは新潟県内のいわゆるご当地ゆるキャラのテーマソングをつくっている<sup>62</sup>。その一部は、純名さんが制作した CD、「愛 Love・・・」に収録され、その CD はイベント会場や、道の駅<sup>63</sup>などで販売されている。また、パフォーマンス活動を競うテレビ番組に出演し(2012 年 9 月)、それに関連したソロライブもなされたこともある(2012 年 9 月 8 日)。このようにライブの場以外に楽曲提供したりテレビ番組に出演したりといった活動が K-BOX メンバーの一部ではなされている。

アート部門のメンバーの作品は、K-BOX のライブで展示されたり、イベントで展示されたりする。新潟市の地下街でトークライブが行われた際には、そこに出演した Renka さんの作品が展示され、観客は自由に鑑賞できるようになっていた(図 34)。また、新潟市のイベントであるひきこもりアートフォーラムへの出品や、チャリティーライブの一環として展示がなされたこともあった<sup>64</sup>。



図 34 トークライブで展示される Renka さんの作品(2012 年 3 月 10 日)

<sup>62</sup> 2013 年に、新潟県長岡市栃尾地域のキャラクターである「あぶらげんしん」のテーマソングを、2014 年には新潟県胎内市のキャラクターである「やらにゃん」の公式ソングを提供している。

<sup>63</sup> 地域(長岡市栃尾地域)のキャラクターのテーマソングを含む楽曲を収録した CD で栃尾の道の駅で販売されている。

<sup>64</sup> 2011 年 7 月 3 日から 31 日にかけて新潟県燕市のギャラリーでなされた K-BOX 主催のチャリティーアート展など

パフォーマンス部門に所属していたいっしーさんは、地下鉄サリン被害や躁うつ病の体験などの自らの経験を記した本を出版(いっしー 2010)し、イベント会場などで販売している。このように表現者は K-BOX を起点としてライブ及び、その他の形をとりながら活動の幅を広げている。

### 3.2.5 「こわれ者の祭典」との関係

K-BOX は「こわれ者の祭典」とは別の団体、活動であり、それは K-BOX を主催する Kacco さんが強調するところでもある。Kacco さんは、自身が K-BOX の代表であり、かつこわれ者の祭典の副代表を務めるという双方の活動のキーパーソンとなっていること、双方とも当事者による表現活動であることなどもあり、こわれ者の祭典と同じように思われることもあるがそうではない、との思いを持っていることを語っていたことがあった(2013年8月13日、聞き取りより)。「こわれ者の祭典」と「K-BOX」は双方とも新潟市を中心的な活動の場としており、病気やひきこもりなどの経験を有する人々がパフォーマンスをする。しかしながら、違いもあり、たとえばメンバーの数やメンバーの入れ替わり方などが異なる。こわれ者の祭典は、短期的なメンバーの変化はなく、長期的に変化がみられるのに対し、K-BOX ではフィールドワーク期間を通して、メンバーが変わりゆく様子が度々みられた。離れていく人も、新規に入ってくる人も双方 K-BOX では見受けられた。パフォーマンスの内容も類似している点も多いながら、こわれ者の祭典が直接的に病気の経験をトークやパフォーマンスで表現していくのに対し、K-BOX では、必ずしも病気や生きづらさが直接的に表現されるわけではない音楽やアートの分野に活動の幅を広げているなどの違いが見受けられる。また、メンバー同士が会う頻度や、一種家族のように感じられるつながり方は K-BOX に特徴的なところかもしれない。

こわれ者の祭典と K-BOX は共通点も多いものの別の活動であることは、双方のメンバーに認識されている。活動は基本的には別個に行われているが、こわれ者の祭典、K-BOX 双方の表現者が共に出演するイベントが行われることもあった<sup>65</sup>。このイベントでは、こわれ者の祭典の新潟公演にて司会を担当している江口さんや松井さんが司会を担当した。こわれ者の祭典からは月乃さんや脳性マヒブラザーズ、オーディションメンバーである YOPPY さん、K-BOX からは Kacco さんや純名さん、タナベーさん、が出演していた。組織としては、脳性マヒブラザーズは、こわれ者の祭典のメンバーであり NAMARA 所属の芸人、Kacco さんは、こわれ者の祭典の副代表かつ K-BOX

---

<sup>65</sup> 2011 年には、こわれ者の祭典のボランティアスタッフとして活動している丸山さんの企画の元、(2011年4月23日「伊達直人チャリティライブ」が行われた。「伊達直人」は漫画タイガーマスクの主人公の名であり、ライブが企画・実施される時期に、「伊達直人」を名乗る人からの贈り物が児童施設などに届けられる事象が相次いだことにちなんでいる。

の代表、というように所属している組織が個人においても混交している状況にあった。このように、双方の表現者が出演するイベントもあれば、純名さんがこわれ者の祭典においても Kacco さんの朗読のピアノ伴奏として出演したように(2009年2月28日、こわれ者の祭典福島公演)、こわれ者の祭典のイベントにおいて K-BOX のメンバーが出演することもある。K-BOX のメンバーである発達障害の当事者であるなみなみさんがこわれ者の祭典にゲストとして出演したこともある(2014年9月21日など)。逆に、K-BOX のライブに脳性マヒブラザーズが出演したこともある(2009年9月12日)。そして、パフォーマンスするのみではなく、K-BOX のライブにこわれ者の祭典のメンバーが観客としてみにくる、そしてステージに上るといったこともあった(2011年12月18日)<sup>66</sup>。

こわれ者の祭典の2012年9月16日の10周年イベント「10周年記念「こわれ者の祭典」ダイナマイト!(新潟)」は、構成プログラムも多く、規模の大きなイベントとなっていることから、多くのスタッフを必要としていた。このイベントにおいては、K-BOX、こわれ者の祭典双方に深く関係する Kacco さんの呼びかけにより、K-BOX のメンバー数人が<sup>67</sup>、スタッフとして協力し、運営前の会議に出席したり(2012年8月22日など)、当日のボランティアスタッフとして活動していた。このように、それぞれ別個に活動しながらも、それぞれのメンバーが共同してパフォーマンスを行ったり、それぞれのイベントに参加したり、それぞれの活動を手伝ったりと様々な形で交流がなされている。

### 3.3 その他の活動

表現者は団体としてのみではなく、各々で様々な活動を行っている。個々で行っている活動は、ライブや講演など多岐に渡っており、自らが企画するものもあれば、外部から依頼されて行うものもある。また、インターネットやテレビ、ラジオなどのメディアへの出演や、インターネット等メディアを通じた様々な活動を展開している。ここでは、メンバー個々で行っている活動を中心に、それぞれの団体の活動とは単純に括れない活動について述べる。

---

<sup>66</sup> この際は、K-BOX のライブ前に月乃さん主催のイベントが同じ会場(福社会館)で開催され、それに出演していた月乃さん、アイコさん、DAIGO さんが、K-BOX のライブに観客として来ており、ライブ終了時に Kacco さんに促され、K-BOX のステージに上がっていた。

<sup>67</sup> こわれ者の祭典10周年記念イベントでは K-BOX の純名さん、コウキさん、まりっぺさん、ヒロカさんなどがスタッフとして活動していた。

### 3.3.1 個々のメンバーのライブ活動

月乃さんは、自身が企画して数々のライブ活動を行っている。自殺予防週間<sup>68</sup>に自殺予防イベントを行ったり(2012年8月25日「ストップ!自殺 ～はいつくばっても生きていこう」など)、著書を出版した記念のライブを行ったり<sup>69</sup>、受賞に関連づけてイベントを行ったりしている(2010年12月26日「安吾絶唱」など<sup>70</sup>)。こうしたイベントでは、ゲストが招かれ、ゲストと共にパフォーマンスが行われたり、イベントの趣旨に沿ったトークが展開されたりする。たとえば自殺予防イベントにおいては自殺未遂経験者や支援者として活動する人々と共にイベントを行い自殺問題について考えられる機会となっている(2012年8月25日など)。「安吾絶唱」では、坂口安吾の詩を朗読する、といった活動となり、各々のイベントの主旨に沿ってライブ活動は行われる。また、月乃さんは自殺やメンタルヘルス、といった分野のみならず、「ポエトリーリーディング in サブカルチャー(2013年7月13日)」といったサブカルチャーイベントを行うこともあった。月乃さんが主宰するライブは新潟、および東京を中心とした県外の双方で行われることがある<sup>71</sup>。

こわれ者の祭典のメンバーでは、アイコさんも自身の主催による「カウンター達の朗読会」というライブを行っている。2011年10月29日に行われたライブでは、「カウンター達の朗読会 vol.4 ～生きる衝動をぶちまけるための 57577」というタイトルで行われた。この企画は、単発で行われているものではなく、継続して行われている。案内のフライヤーには「いじめ、家庭内暴力、リストカット、不登校、うつ病・・・正しくは生きられなかった詩人が『生きること』をさらけだして叫びます」とあり、ゲストの詩人と共に生きづらさをテーマにした詩の朗読のパフォーマンスを行うイベントとなっている。脳性マヒブラザーズは自らが出演している映画の公開記念イベントとしてライブを行ったり(2009年9月24日<sup>72</sup>)、周佐さんが家族との関係やこわれ者の祭典などの活動を含む自らの人

<sup>68</sup> 「9月10日の世界自殺予防デーに因んで、毎年、9月10日からの一週間を自殺予防週間として設定し、国、地方公共団体が連携して、幅広い国民の参加による啓発活動を強力に推進」するもの(自殺対策大綱より)。

<sup>69</sup> 2013年4月7日「吾妻ひでお・西原理恵子『実録!あるこーる白書』(徳間書店)出版記念イベント!」など。

<sup>70</sup> 「新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する『安吾賞』(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット:3)」を新潟市が表彰しており月乃さんは、2010年に新潟市特別賞を受賞している。

<sup>71</sup> たとえば、「ストップ!自殺(2012年8月25日)」は東京で、「安吾絶唱(2012年8月25日)」は新潟で行われている。

<sup>72</sup> 「映画『降りていく生き方』公開記念イベント」としてトークライブが行われた。



生を表現するオペラライブ<sup>73</sup>というライブを行ったりしていた(2010年10月13日)。

以上のように、こわれ者の祭典のメンバーはそれぞれ単独でライブ活動を行う機会も多い。もっともこれらは、個人の主催で行われているものの、こわれ者のホームページで案内がなされていたり、こわれ者の祭典実行委員会が問い合わせになっていたりと、個人の活動と団体の活動の区分は明確ではないところがある<sup>74</sup>。

### 3.3.2 講演会など

各表現団体のメンバーは時折、当事者としての講演活動を依頼され行っている。講演会ではたとえば、月乃さんは、こころの健康づくり講演会「どん底からの出発」という市民向けの講演会を県内自治体からの依頼で行い(2010年10月7日)、自らの家族とのかかわりや、こわれ者の祭典について語っていた。この講演会では最後に「僕はサバイバー」という自作詩の朗読パフォーマンスを行っており、講演会でも単に講演を行うのみならず、パフォーマンスが組み込まれる場合が多い状況となっている。また、外部から依頼されるのみならず、自らが講演を企画し行う時もある。たとえば、月乃さんは、2011年に「人生は終わったと思っていた(新潟日報事業社)」という著書を出版したが、それに関連づけて、新潟市内で講演会を行った(2011年12月18日)。その他、月乃さんの講演会は、学校、公民館(2012年7月20日など)、教会(2013年6月13日など)などでの講演が多数行われている。また、大阪(2012年10月7日)や佐渡(2012年10月6日)など県外や新潟市以外で行われることもある。

Kaccoさんも、定期的に上越市で講演を行い、K-BOXのライブの際にも案内がなされる(図35)。また、月乃さんと同様に、行政や学校、当事者組織や支援者団体などをはじめ様々な組織、団体から依頼を受け、講演会を行っている<sup>75</sup>。

<sup>73</sup> このライブは「AKIRA&周佐ライブ～セルフストーリーオペラ～だいじょうぶマイフレンド」とのタイトルでなされ、月乃さんらとも共演する機会の多い、アーティスト、作家であるAKIRAさんと共に行われた。

<sup>74</sup> この点についてはこわれ者の祭典の会議で確認がなされ、メンバーのイベントの案内をこわれ者の祭典のホームページで周知することの同意は形成されている。

<sup>75</sup> Kaccoさんは自らを紹介するフライヤーを作成しており、そこでは過去の主な講演会との記述があり、多数の講演を行っていることが示されている。そこでは、「過去の主な講演会」として以下のように挙げられている。【2008年】5月 新潟県立西新発田高校、6月 上越市市学校保健会総会、10月 上越市立雄志中学校、柏崎市元気館ふれあい祭り、11月 千葉県～吹く詩の宴～、新潟県立上越総合技術高校、【2009年】9月 第45回POTA全国研修会、10月 埼玉県 日本医療科学大学、11月 官城県 全国ひきこもり家族会、上越市立織東中学校、【2010年】3月 新潟市 西川学習館、4月 ヤングリース新潟 総会、新潟市ふれ愛さくらまつり、9月 糸魚川市 心の健康づくり講座、12月 新潟市 グランマーレ新潟

～【ひきこもり】と【心の病】が教えてくれたこと～  
**Kacco 癒しの講演会**  
**「乗り越えて見えてきたホントの自分!!」**

Kacco (カッコ)  
 幼少時に絵画展、舞台発表、パソコン講習と  
 数回され度々入退と引きこもり生活を経験。  
 現在はイラストを中心に書道、詩を書くなど  
 楽しんでいる。現在は「ひきこもり」  
 大手出版社のイラストを手掛ける傍ら、  
 ひきこもりの人たちのサポート活動にも力  
 を入れている。  
 また、最近では「Kacco 癒しの講演会」が  
 学校や福祉の施設をはじめ多くの会場に  
 求められ全国各所で開催されている。

～主なメディア出演～  
 ONIKU 教育アングラ「福祉ネットワーク」  
 ○NHK 放送「KACC」  
 ONIKU 教育アングラ「晩報明くるっ」と日本  
 ○NHK 朝日・新潟日報・毎日新聞-ほか

～主な活動～  
 ONPO 協.A. 福祉にいがた「秋祭の会」事務局代表  
 ○K-BOX: 代表  
 ○「こわれ者の祭典」副代表

■日 時：2011年1月30日(日) 13時開演/13時30分開演  
 ○13時30分～15時/講演会 ○15時～18時/おれあいタイム

■会 場：上越市市民プラザ (2階 第4会議室)  
 〒943-0821 / 上越市土橋 1914-3

■料 金：一般1000円/高校生500円/中学生以下 無料

■問い合わせ先/kacco 講演会事務局 TEL: 090-6047-6261



図 35 Kacco さん講演会フライヤー(2011年1月30日用)

月乃さんや Kacco さんは、単独で講演会活動を活発に行っているが、単独の講演会ではなくとも、表現団体に所属しているメンバーがシンポジウムのような場で自らの体験や思いを語ることもある。K-BOX のメンバーの VEA さんは、新潟市主催のひきこもりアートフォーラムのトークセッションで当事者として、自らの体験を語っていた(2010年12月12日)。語られた VEA さんの体験は、理系の大学に行ったが、研究室でストレスがたまっていたこと、なんとか卒業したが、病状もよくなり、就職の内定も辞退したこと、母親がひきこもりへの取り組みを重点的におこなっている病院を探し、そこに行ったこと、そこで Kacco さんに会い、K-BOX にかかわるようになったこと、などとなり、親の努力、そしてそれに報いることの重要性をメッセージとして発していた。

この場面では、こわれ者の祭典のメンバーとして活動している長男さんの進行の元でトークセッションがなされていた。先に挙げた Renka さんも主治医の講演会の際に経験談を話すこともあるという(2012年3月10日、イベント時より)。このように表現活動のメンバーは表現活動の枠を越えて個々で当事者としての講演会等の活動を行っている。

### 3.3.3 メディアを通じた活動・著作活動など

#### (1) ホームページなど

表現者は様々なメディアを用いて情報を発信している。こわれ者の祭典、K-BOX 共にホームページを開設し、情報を発信している。メンバーの多くはブログを開設し、ツイッターやフェイスブック、

mixi などの SNS, メールマガジンの発行等を通して, 情報発信し, インターネット上で, 自らの活動等を表現している。

## (2) 動画配信

ライブ活動などのイベントがインターネット上に動画配信される場合も多い。こわれ者の祭典を動画配信する時もあるが, 月乃さんが個人的に行っている各種イベントも動画配信がなされることもある。動画配信することによってイベント会場のみでは得られない多数の視聴者が得られている(月乃 2011)<sup>76</sup>。

動画配信は生放送の形でなされるが, アーカイブされ, オンデマンドの動画として残る場合も多い。K-BOX は特に動画配信は行っていないが, 環境が整えば, 動画配信がなされる場合もある(2012年3月10日イベントなど)。動画配信は, 多数の人々が集まるイベントの場でなされる場合もあるが, 動画配信の番組としてスタジオ等で観客を入れずに撮影, 配信される場合もある(図36)。



図 36 スタジオからの動画中継(2011年12月23日)

こうした動画配信等を行う際は, 会場に用いる機材やそれを扱う人材がある場合は, 会場の管理の元行われるが, 会場に環境が整っていない場合には, 音響や配信のための機材やそれを扱う協力者に依頼し, そうした人々や機材を整えた上で行われる。

---

<sup>76</sup> しかしながら, 動画配信については, 会場における集客集が少なくなるという懸念もあり, こわれ者の祭典の会議においては, 事前に動画配信を周知しない方がよいのではないか, という意見も出されていた。そうした背景を受けて動画配信は事前に周知されることもあるが, イベント当日に SNS などインターネット上で周知されることが多い状況にある。このような動画配信の形態からは, 広くメッセージを配信することと共に, 同じ場所で同じ時を過ごす, というライブ活動の形態に表現活動が価値をおいていることがうかがえる。

また、より気軽に、スマートフォンひとつあれば配信できるような形の動画配信も行われることがある。たとえば、アイコさんは時折、こわれ者の祭典のイベントの始まる前などに短時間の動画配信を自らのスマートフォンを用いて行っていた。この動画配信にはこわれ者の祭典のメンバーやスタッフも出演することもあった(2014年9月14日, 9月21日)。この際は、こわれ者の祭典の東京公演の会場についてから、準備が始まるまで、新潟公演の会場準備が一区切りついてから出演までの少しある時間帯に配信がなされメッセージが届けられていた。

### (3) メディア出演など

表現者はテレビやラジオなどの番組に出演することもある。テレビの出演は、月乃さんが、福祉系の番組に依存症の当事者として複数回出演し(2012年3月1日など<sup>77</sup>)、脳性マヒブラザーズは障害者バラエティーTV番組「笑っていいかもーバリバラ2時間スペシャル」(2009年12月4日)などに出演した<sup>78</sup>。こうした場において表現者は、自らの経験について話したり、意見を述べたり、パフォーマンスを行ったりする。こわれ者の祭典や、K-BOXの活動についても新潟で放映されるニュース番組などで複数回にわたり取り上げられ、紹介されている(2013年5月30日, 2012年3月19日, 2010年6月21日など)。また、新聞や市の広報などにもイベントの案内が掲載されることもある。メンバーや関係者へのインタビューが連載されたり(2012年8月等)、月乃さんへのインタビューが含まれる書籍が出版されることもあり(末井 2013など)、テレビや新聞、書籍などのメディアに活動はたびたび取り上げられる。

### (4) ラジオ番組配信

取材を受けてメディアに取り上げられるのみならず、月乃さんはラジオ番組を企画、配信していた。月乃さんはサバイバーとインタビューし、その模様をラジオで配信していた。インタビューを配信したラジオ番組は、2009年から「ハート宅配便」という番組で始まり、2012年よりハートエナジーという番組に変わっていった。ハート宅配便では女性サバイバーに主に焦点をあて、こわれ者の祭典の司会を行っている松井さんと共に番組が進行されていた。また、ハートエナジーとなってか

---

<sup>77</sup> 「ハートをつなごう」(NHK)等福祉系の番組に時折出演する機会がある。この回では YOPPY さんも月乃さんの朗読のギター伴奏として出演していた。

<sup>78</sup> 脳性マヒブラザーズは 2011 年には複数回にわたり、新潟から大阪まで旅をしながら 1000 人笑わす、という企画の元、テレビ出演をしていた。出演していた「バリバラ」は「バリアフリーバラエティー」の略であり、障害を笑うことの是非を問うことも含め、障害と笑いに焦点をあてた番組である。2011 年 12 月 9 日には、障害者によるお笑いを競う企画である「バリバラ笑っていいかも Show-1 グランプリ」に出演している。2011 年 7 月 19 日には再現ドラマの出演者としてバリバラに出演している。

らは、共にライブを行ったこともある本宮宏美さんで行うようになり、2014年に最終回を迎えた。番組では、生きづらさを抱える人々と月乃さんとのインタビューが主な内容であり、全国各地のコミュニティ FM、ネットラジオで配信されていた。月乃さんが配信しているラジオ番組のインタビューの相手は、生きづらさを抱えるサバイバーであり、時にはこわれ者の祭典のメンバーであったり、著名人を含む、イベントでゲスト出演してきた人などのこともあった<sup>79</sup>。たとえば、こわれ者の祭典のメンバーのアイコさん(第31回2010年2月1日)、K-BOXの純名さん(第96回2011年5月2日)も出演したことがある。月乃さんは様々な機会を用いて出演者に出演依頼をしており、べてるまつりに出演した際には、べてるの家のメンバーにインタビューを行い、収録がなされていた(2011年8月27日)。収録では月乃さんがICレコーダーを手にとりインタビュー相手に会いに行き、インタビュー内容が録音され、番組ではインタビューを録音したものが流される。インタビューの放映前後には月乃さんと共演者のトークがなされる。そこで、リスナーからのメッセージが読み上げられたり、インタビューの感想などが語られたりする<sup>80</sup>。こうしたラジオ番組の配信にあたっては、他のイベントでも度々協力を得ている技術スタッフの協力も得ながら行われてきた。また、こうしたラジオ番組を行っており、出演してもらえませんか?と出演依頼をし、インタビューさせてもらうことにより、こわれ者の祭典等他のイベントのゲスト出演等につながる人脈をつくり、ゲストとの継続した関係をつくってきた。

## (5) 著作活動

表現者による著作活動もなされている。月乃さんが今まで出版してきた書籍には、自伝的小説(月乃 2001)、詩集(月乃 2006)、対談集(月乃 2007)などがある。共に活動している人との共著もあれば(月乃・雨宮 2008; 高橋ほか 2003; 西原・月乃 2010 など)、月乃さんのインタビューが収録されている著作が出版されたり(末井 2013)、文章を寄せている書籍もある(江口 2011 など)。月乃さんは過去に漫画家として活動していたこともあり、自著や、新聞のコラムにイラストを描くなど<sup>81</sup>、イラストレーターとしての活動も行っている。Kaccoさんも、共著者として自身の経験を記し(高橋ほか 2003)、文庫本の表紙イラストなどを手掛けている。K-BOXのいっしーさんは、自らが被害者となった地下鉄サリン事件や、抱えてきた生きづらさ、表現者としての活動などについて書かれた自伝的著書『『自転車』でいこう』を出版している。このカバーイラストは Kaccoさんが手

<sup>79</sup> 「月乃光司・本宮宏美のハートエナジー」の前には「月乃光司のハート宅配便」という番組をこわれ者の祭典の司会をしている松井さんで行っており、2012年9月に終了した。内容は双方ともインタビューを主としたものとなっている。

<sup>80</sup> 時には録音されたものではなく、実際にスタジオにゲストが来て話すこともある。

<sup>81</sup> 雨宮処凛さんによる「生きづらさを生きる」(新潟日報)という連載のイラストを月乃さんは手掛けている。

がけており、K-BOX のライブ会場等で販売されている。

こわれ者の祭典としては、2006 年に「こわれ者の祭典 DVD」、2011 年には「香山リカのみーんなビョウキだね」という DVD が発売され、それぞれの DVD にはこわれ者の祭典の公演などが収録されている<sup>82</sup>。このように、書籍や DVD などの形でメンバーは自身の経験や活動を表している。出版された書籍や DVD はイベントの場で販売され、購入してくれた人にサインを書くなどのサービスがなされる。

### 3.3.4 各種イベントへの参加・出演

以上のように、団体としての公園やライブ活動以外にも多くの個々のメンバー主催でのライブ活動や講演会、様々なメディアを通じた活動が行われている。他にも、表現活動がゲストを招いて活動を行うように、他機関や他者から依頼を受けて表現者が活動を行う機会も多い。たとえば月乃さんと脳性マヒブラザーズは北海道の浦河べてるの家が行っているべてるまつりにゲスト出演した(2011 年 8 月 27 日, 28 日)。べてるの家の実践は統合失調症などの当事者を含む精神保健福祉関係者には広く知られており、『『苦勞の主人公』になる(向谷地 2009)』、『弱さを絆に(向谷地 2002)』といったべてるの家の実践から生み出された言葉は、当事者、精神保健福祉関係者に多くの影響を及ぼしている。なお、べてるの家の人々と月乃さんやこわれ者の祭典の関係者は、過去にも共演をしたことがあり<sup>83</sup>、このような関係からべてるまつりへの出演につながっていることが考えられる。2011 年のべてるまつりでは、月乃さんや脳性マヒブラザーズはゲストとしてパフォーマンスを行い、続いての幻覚&妄想大会のコメンテーターを務めた。パフォーマンスでは、脳性マヒブラザーズはコント、月乃さんは自作の「僕はサバイバー」という詩の朗読などを行った。イベント会場では、こわれ者の祭典の DVD や関係する書籍などが販売され、べてるまつりに来ている人にこわれ者の祭典を知ってもらうきっかけとなったことが考えられる。そして、イベント閉会後の懇親会に参加し、べてるの家の関係者との交流を深めていた。

その他、「若者の自殺と自立を考える」(2013 年 6 月 15 日, 9 月 18 日)というイベントに、そのイベントのコーディネーターを務めた NAMARA の江口さんと共に、他の出演者と共演し<sup>84</sup>、自作詩「仲間」の朗読やパネルディスカッションを行っていたこともあった。このイベントへの出演には江口さんとのつながりから月乃さんの出演に至ったことがイベント時に紹介されていた。また、表現の

<sup>82</sup> 「こわれ者の祭典 DVD」は NAMARA で購入可能である。そしてそれぞれの DVD の制作は映像関連の仕事をしているメンバーの長男さんが深く関与している。

<sup>83</sup> 田口ランディ×月乃光司ジョイント朗読(2009 年 4 月 9 日)など。

<sup>84</sup> 「若者の自殺と自立を考える」では、脳科学者の茂木健一郎さん、精神科医の香山リカさん、障害者の就労を積極的に行っている経営者の渡邊幸義さんと共演した。

世界で活躍している人々が行っているイベントの一部にゲストとして出演し、自らの家族関係などの人生経験を詩にしたパフォーマンスを行うこともあった(2013年12月28日など<sup>85</sup>)。専門家が集まる学術的な場でパフォーマンスが行われることもあった<sup>86</sup>。Kaccoさんは、祭などのイベントの場(2013年10月26, 27日など)や、道の駅(2013年5月3~6日など)など様々な場で多数の似顔絵ライブを行っており、そこで知り合った人にK-BOXのライブにゲスト出演してもらうこともある。先に挙げたようにK-BOXに所属する表現者も様々な組織や人から依頼を受けて、パフォーマンスを行っている。

このように自らが主催するのみではなく、当事者の組織やパフォーマンス関係の人々に至るまで様々な人々や組織とつながる中で、個々の表現者の経験が伝えられたり、パフォーマンスがなされたりする。パフォーマンスの聞き手は時に当事者であり、時に支援者であり、時に学術関係者であったりと広がりを見せている。

## 3.4 表現者の日常

表現活動で活動する表現者にとって、表現活動は日常の一部であり、表現者は日常生活において表現活動の場とは異なった顔を持ちながら暮らしている。ここでは表現活動をしている人々の表現活動以外の日常生活のありように触れると共に、表現活動がいかに表現者に位置づけられているのかを示す。

### 3.4.1 会社員などとして

表現者の多くは、会社員としての日常生活を送っている。たとえば月乃さんやいっしーさんはビル管理の仕事をしており(月乃 2011; いっしー2010)、アイコさんは会社員として働き、web制作等の仕事をしている<sup>87</sup>。月乃さんやいっしーさんが表現する自作詩には、過去の会社員としての生活の辛さなどが表現される時がある。DAIGOさんは、芸人として活動しながら、障害者の就労支援に力を入れている企業に営業として任命され、活動している<sup>88</sup>。オーディションメンバーとして

---

<sup>85</sup> アルカン・ヴォイス・シアター『フォト・スラム』という、作家や詩人として幅広く活動するドリアン助川さん主催のイベントに月乃さんは参加した。

<sup>86</sup> 2014年5月4日 アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会など

<sup>87</sup> アイコさんは長く新潟市内で勤務していたが、2014年に表現活動が縁で転職し、東京に居住し、イベントの運営やweb制作の仕事を行うようになっている(2014年11月29日聞き取りなど)。

<sup>88</sup> 木原大吾さんの営業任命式(<http://www.isfnet.co.jp/blog/?p=3697>, 2014年4月14日投稿記事, 閲覧), および2014年4月20日のフィールドワーク時の聞き取りより。

かかわっている YOPPY さんは、食品業のアルバイトをしながら表現活動をしており、そのことが表現活動で語られることもある。K-BOX のメンバーには、いっしーさんのように会社員として働いている人もいれば、障害者として就労しながら表現活動をする人もいる。また、筆者がかかわっている期間に仕事に重点をおくようになり、表現活動から遠ざかっていく人もいた。YOPPY さんは職場に病気であることや、表現活動をしていることを特に伝えているわけではないとのことだが、イベント中のトークで語られることがあったが(2009年12月13日など)<sup>89</sup>。月乃さんの場合は、職場には活動を「知っている人もいれば、知らない人もいる」という状況であり、会社には表現活動等の活動を「休日のボランティア活動」として認識されているとのことであった(2014年3月22日聞き取りより)。月乃さんの職場の同僚の人達がイベントを手伝っていたこともあり(2013年12月8日など)、必ずしも表現活動を行っていることが秘匿されているというわけではなかった。しかしながら、YOPPY さんのように、職場には活動のことをあまり言っていないという人も見受けられる状況であった。

家庭生活としては月乃さんはイベントが縁で知り合った人と40代半ばで結婚し、母と3人で暮らしているとのことである(月乃 2011ほか)。その他こわれ者の祭典メンバー、K-BOX のメンバーは独居している人もいれば、家族と暮らしている人もいる状況であった。本研究は表現活動について記述しているが、多くの表現者は会社員や家族の一員等として生活を送っており、表現活動は日常生活の(重要な)一部に位置づけられている状況であった。

### 3.4.2 表現者として

先に挙げた種々の表現活動は、それぞれの表現者にとって重要な日常の一部である。表現者の中には、日常は職業生活などを送りながら、表現活動を休日などを利用して行っている人もいれば、表現活動等の活動を生活の主としている人もいる。Kacco さんは、「癒し系表現者」として、K-BOX のプロデューサー、イラストや似顔絵などの活動、病院での相談員、講演会などを行っており、表現活動はひとつの職業的な活動でもあるといえる。あるイベント時(2012年9月22日、こわれ者の祭典東京公演)には、「イラストって食べますか?」「普通のお仕事、バイトとかされてるんですか?」との質問が観客よりなされていた。その際 Kacco さんは、「普通のお仕事は基本的にはしてない」と答え、加えて、最初はそれだけでは食べられなかったということを述べていた(以下 2012年9月22日こわれ者の祭典東京公演より)。

---

<sup>89</sup> そうしたトークがイベントでなされた後に病気のことを同じ職場の人に話す機会があったことが YOPPY さんがインターネット上に記載している文章にみられたこともあり、状況は変わってきている(2013年1月23日ブログ記事など)。



**Kacco:**でも、やっぱり自分は一度決めたこの絵の世界でどうしてもしがみついていたし、ここでやっていきたいなと思ったときに、どうやったらじゃあそれをね、食べれるようにできるんだろうって考えたわけですね。で、自分でお仕事待ってても駄目だなあと考えたときに似顔絵の練習したんです。それで、イベントとかお祭りとかいろいろあるじゃないですか。そういう時に「似顔絵ライブ」と称してお客さまの似顔絵を描いて販売するっていうのを始めて。そしたらちょっと潤ったんですね。

そしてイラストのみではなく、様々なことをして「食べていく」。

**Kacco:**それがまたね、やってれば、またそれを取り巻いて見てる人がいてくれて、そしたら、今度ここでやってみない？ あそこでやってみない？って少しずつこう広がって。急にはやっぱり食べられないんですけど。

で、駄目だった時、これでもまだ食べられないってなった時、いろんなものを付加したんですね。だから、イラスト一本で私は食べられません。

しかしながら、「きれい過ぎるかもしれない」が、表現をすることは「心の豊かさ」を得ることであり、お金のみの話ではないことが強調される。

**Kacco:**でも、思うことが一つあって、なんかこの世界入ってすごく、年々なおさら「ああ、やっぱりそうだな」と思って感じることがあるんですけど、前はやっぱり自分も、人がたとえばいい車に乗ってたら乗りたいとか、人がいいお金を給料でもらったら自分も欲しいなって思ってたんですけど、今思うのはなんかそういうことじゃなくて、お金は確かにこの絵を描く仕事とかがってすごい安いですよ。そんなによくはないけど、でもその分、似顔絵を描いて外に出ることでいろんな人とつながれたりとか、そこからやっぱり人のつながりをすごく強く感じれたり、人のあったかみを感じられたり、本当に今、人に支えられて自分があることも再確認できたりとか、すごく、お金の豊かさじゃなくて心の豊かさを。これ、ちょっときれい過ぎるかもしれないんですけど、でも本当に思うところで、心の豊かさがすごく付いたなあと。お花を見て「きれいだな」って思う気持ちになれる自分、余裕がある自分がすごく「ああ、いいなあ」って。自分で思うのもおかしいんだけど、そんなふうに思ってます。

このように、表現活動等で「食べていく」のは決して簡単なことではないが、工夫をし、表現してお金をもらう機会を広げる中で表現活動等で生活していくようになった Kacco さんの経験が語られていた。そして表現活動はお金をもらう手段であるが、それだけではない、人とのつながりが得られることなどが表現活動を行うメリットとなっていると語られていた。このように Kacco さんは、会社員等として暮らしながら表現活動を行うのとは違った形で表現活動が日常生活に組み込まれている。

Kacco さんはこのように、表現活動が食べていくための手段のひとつとなっているが、脳性マヒブラザーズの DAIGO さんや周佐さんもまた、芸人として日々活動しており、パフォーマンスが職業となっているといえる。そして、長男さんは映像関連の仕事を職業として行いながら、パフォーマンスにて自作映像を披露するなどの活動を行っており、日々の仕事の業務と関連した表現活動を行っている。こうした人々は表現活動や支援活動を職業としながら、もしくは職業生活と関連する表現活動をしながらこわれ者の祭典や K-BOX などの活動を行っているにとらえられる。

### 3.4.3 当事者として、支援者として

表現活動それぞれのメンバーは病気や障害などの経験を有しており、病気や障害の当事者としての日常を送っている。アイコさんや YOPPY さんは医療機関に継続してかかりながら生活を送っていることや受診時の経験などを表現活動の場で話すこともある。月乃さんは複数の自助グループへの参加を長期にわたって継続している。K-BOX のメンバーの多くも、継続して医療や福祉のサービスを活用しつつ、日常生活を送っている。

また、表現活動自体が、当事者同士で支援しあう活動にとらえることが可能であり、表現者は表現活動をしているという点で支援者としての側面を持つにとらえられる。それはステージ上での活動のみならず、講演会などの活動をとっても同様と考えられる。加えて、職業的活動として支援者的側面を有する場合もある。Kacco さんは、病院で当事者の居場所をつくる活動をし、長男さんは主に精神保健福祉を扱う映像関係の仕事をしながら、同時に当事者支援の NPO などの活動を行っており、支援者的側面が強く感じられる活動を職業として行っている。表現者は自らが当事者であり、かつ様々な形で支援者として活動を行っている状況にある。

### 3.4.4 表現活動の位置づけ

表現者はそれぞれ、職業生活をはじめとした日常生活に時に困難さを感じながら、医療や福祉サービス、セルフヘルプ・グループなどを活用しながら日々暮らしており、そうした日常生活の中

に表現活動は組み込まれている。表現者は日常、会社員などとして、当事者として、表現者としてなどの立場で暮らしている。それらはそれぞれ別個なものではなく、表現活動が同時に当事者の活動であったりと、重なり合うものとなっている。そして表現を中心としている人から、支援者的立場の要素が強い人までそれぞれの立場の度合いは個々の表現者によって異なりながら、それぞれの立場、活動が重なる中で日常生活が構成されているといえる(図 37)。

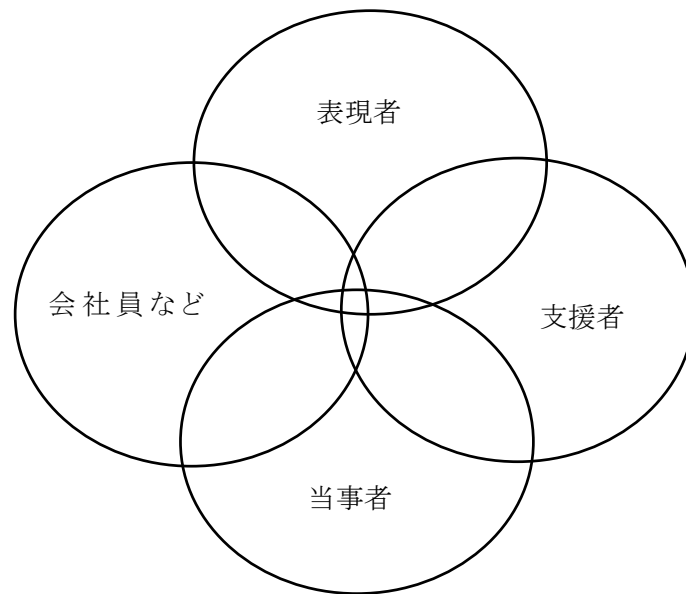


図 37 表現者の日常生活上の立場(筆者作成)

表現活動の位置づけ方は表現者によって異なっている。月乃さんは表現活動や講演会を県内外多数行い、著作の出版やメディアへの出演も多数行っている状況であるが、プロの表現者として活躍しようとしているわけではないという。表現活動の場においても、会社員としてダメ社員でいることが語られたり、表現されることも多く(2013年6月1日イベントなど)、「すごく職場に行くのが嫌で、会社にいる間は『1時間こうして椅子にすわってればいくら金が入る』とか考えてる」(月乃・雨宮 2008: 18)と記載されることがある。しかし、「仕事は、無能で社会不適格者の僕を、社会へつなげてくれる重要な場所」、「痛みが自分のエネルギー源」、「傷ついていく場数が僕の生きる技術の習得」(月乃 2011: 165)であり、会社員としての生活を重要視していることがうかがえる。そして、こわれ者の祭典は決して儲からないけれども行っており、ストレス発散であり、社会適応の練習であり、生活の一部であるとする(月乃・雨宮 2008)。

一方で表現やパフォーマンスを軸に生活しており、それを願う人もいる。脳性マヒブラザーズはプロの芸人として活動をしていきたいと思っており、KaccoさんもK-BOXの運営はじめ表現活動に

かかわる部分が生活の多くを占め、表現活動を生活の軸においている。K-BOX の純名さんは、「できれば音楽で食べられるようになりたい」との思いを持っており、近年はライブ活動の他に、CD を販売したり、新潟県内のご当地キャラクターのイメージソングを複数制作するなどシンガーソングライターとしての活動の幅を広げている。打ち合わせでは、DAIGO さんから、こわれ者の祭典にて、「パフォーマンスと、脳性マヒブラザーズのレベルアップを図りたい」、周佐さんより「パフォーマンスする場所なのか、病気の関係なのかかわからない。無理に分けなくてもいいが、曖昧な部分が多い」との提言、問題提起がなされ(2011年2月5日)、表現活動の位置づけについての問題意識や迷いを表現者が有していることがうかがえた。

表現活動の位置づけは、日常生活の大部分を占め、職業的な意味合いを持つ人もいれば、そうではない人もいる。しかしながら、一方が表現を重視し、他方は重視していないというものでもなく、表現活動自体は重要なものとして位置づけられている。しかしながら、その重視の仕方は表現者によって少し異なってくる。また同じ人であっても様々な志向を同時に持っている。たとえば基本的に会社員としてなどの生活を有し、プロとして活動する意図のない人の中では時に「(当事者としての)素人の魅力」を出していくことが表現において重視される。これは表現として洗練されているものとは異なった魅力を打ち出す志向ととらえられる。一方では、表現活動には、パフォーマンスの質の向上を目指す姿勢のようなものも同時に強く表れてくる。それは長期にわたりパフォーマンスイベントとして活動が継続されていることや、声やマイクの音量、楽器の音響、照明等のパフォーマンスの質の向上へのこだわり、こわれ者の祭典においてはプロの芸人やアナウンサーの参加、K-BOX においては、Kacco さんのリーダーシップのもと、有料でパフォーマンスを行うことに対する責任感がメンバーに浸透していること、などに見て取れる。当事者による芸術活動は、素人的な「病気や障害があっても行える」立場で行うのか、プロ志向的なパフォーマンスの質を追求する立場で行うのかの両極でとらえられがちに思われる。しかしながら、当事者が行う表現活動はそれぞれの極の立場がみられるも、パフォーマンスの質の向上を目指す立場と素人としての魅力を引き出す立場の双方にまたがった実践が見受けられる。素人(Lay)の知識と専門的(Professional)知識という知識の分類と共に、素人の知識とも異なる体験的(Experiential)知識の視点が提示されているが(Borkman 1990)、そのありようは、パフォーマンスのありようにおいても同様であるように考えられる。パフォーマンスや芸術活動にも素人的な立場と専門的な立場があり、それぞれに出せる魅力がある。病気の表現活動においても、素人的な立場を重視する人もいれば、専門的な立場を重視する人もいる。しかしながら、やはり表現という点において素人でありながら質の高さを追求するところがあり、そうした素人的な立場とプロフェッショナルな立場が重なり合うところで生み出される素人の魅力が表出されるよう取り組んでいるように見受けられる(図 38)。

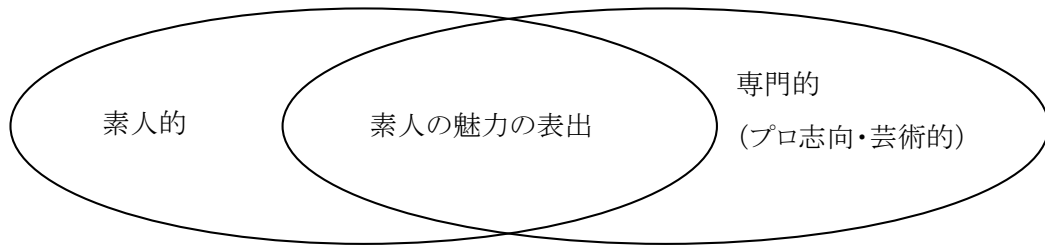


図 38 表現活動の位置づけ(筆者作成)

表現活動に対してはプロ志向の人、そうでない人、それぞれ表現者の中にいるが、活動全般にわたってパフォーマンスの質は重視されている。そこには素人の魅力を出すというような、素人的、専門的双方の視点が重なる表現活動の位置づけが垣間みえる。

## 3.5 表現活動の観客

### 3.5.1 観客の姿の例

観客には様々な背景の人がいる。ここではまず、何名かの観客の姿の例を示す。

#### (1) 「こわれ者」という言葉が響いた人

ある女性の観客は、塾経営などをしていたがそれをたたみ、ふとこわれ者の祭典が載っている自殺防止の冊子を目にしたことがきっかけで表現活動に参加するようになった。冊子にあった「こわれ者」という言葉に響くものを感じ、連絡先に電話したところその連絡先が月乃さんの連絡先であり、イベントのことを教えてもらったという。そしてこわれ者の祭典を見に行ったことがきっかけとなり、K-BOX に見学に行くようになった。今後 K-BOX で活動をしていこうと考えるようになり、現在 Kacco さんにも相談に乗ってもらっている(2014年9月21日交流会時間聞き取りなどより)。

#### (2) 演劇活動などを行う人

ある人は、こわれ者の祭典に観客としてよく見に来る人であり、時折スタッフとして活動している人である。新潟市で育ち、県外の大学に進学した。大学時代に心を病み、アルバイトなどをしながら現在生活している。大学時代に誘われて演劇活動を行うようになり、現在は演劇に加え、イラス

トなどのアート系の活動などに至るまで幅広く活動している。また、ブログやツイッターなどで活発に情報発信をしている。こわれ者の祭典については脳性マヒブラザーズがテレビで旅をする企画をやっていて、それを見たことがきっかけになってイベントに来るようになったという。やはり、自らがパフォーマンスを行っているということもあり、「パフォーマンスを観てみたい」という気持ちがある(2014年9月16日交流会時間聞き取りなどより)。

### (3) メンタルヘルス系ではない人

ある人はこわれ者の祭典や K-BOX のイベントに複数回来ている常連の一人である。見た目問題<sup>90</sup>の当事者であり、新潟県の上越地方に住んでおり、長時間かけてイベントに来ている。見た目問題の集まりが富山であり、それに参加するため富山に行くことも多いという。その人は月乃さんが行っているラジオ番組を聴き、活動を知るようになった。また、上越市で定期的に行っている Kacco さんの公演にも行ったりしている(2014年8月10日聞き取りより)。

### (4) 様々な活動に参加している人

ある人は、関西方面に住んでおり、様々な当事者の活動に参加している人である。こわれ者の祭典には新潟も東京も何度かいったことがあり、特に K-BOX のスペシャルライブでは常連となっている。新潟の表現活動以外にも、全国各地の発達障害やひきこもり関係のイベントに参加している。小さい頃より対人関係など「いろいろと怖かった」という。イベントに参加する際はネットカフェなどに宿泊したり、18 きっぷといった安く移動できる手段を用いて、様々な活動に参加し、ネットワークを築いている。新潟の表現活動につながったのは、ひきこもりをテーマとした講演会に行った時に講師をしていた精神科医が新潟の人で、その人のつながりで Kacco さんとつながったという。表現活動については特に何か経験があるわけでもなく、今後行うつもりもないという(2014年8月10日など聞き取りなどより)。

### (5) 関東地方に住む人

関東地方に住んでいるある人は、主に東京でのイベントに観客として活動に参加している。統合失調症と診断されたり発達障害の疑いを指摘されたりして、病院に通院している。新潟のイベン

---

<sup>90</sup> 「顔や身体に生まれつきアザがあったり、事故や病気によるキズ、ヤケド、脱毛など『見た目(外見)』の症状がある人たちが、その『見た目』ゆえに日々ぶつかりやすく、抱え込みやすい様々な問題(「見た目問題」解決 NPO 法人マイフェイス・マイスタイルホームページより)」と説明される。

トに行くこともあり、K-BOX のスペシャルライブに行った際は Renka さんと趣味が合い、今度のスペシャルライブにも行く予定である。病気であることを知らないと自分を「怠け者である」ように感じたりと、自分を責めることも多かった。「社会性がない」という感じで人からみられることもあり、Kaccoさんの「個性を大事に」というメッセージに共感できる。表現活動にかかわるようになったきっかけはインターネットで「生きづらさ」と検索したこととなる。検索した結果、精神科医の香山リカさんや香山さんが出演しているこわれ者の祭典の DVD などにたどり着き、イベントに来るようになった。漫画家を目指していたことがあり、過去には出版社に持ち込んだりしていた。今でも自分が仮装などのパフォーマンスをした写真を撮ったり、小説を書くなどの活動をしている(2014年11月29日交流会時間聞き取り)。

このように、表現活動にかかわる人たちの多くは当事者として等の経験を有するなど様々な背景があり、様々なことをきっかけにして活動に参加している。表現活動はしない人もいるが、何らかの形で表現や芸術活動にかかわる人もいる状況となっている。

## 3.5.2 観客の特徴

### (1) 年齢・性別など

観客の性別はこわれ者の祭典、K-BOX 定例ライブ、その他多くの表現の場において、男性も女性もそれぞれ一定割合おり、どちらかの性別の観客数が極端に多いような印象は受けない。年齢層は幅広いが、東京公演の観客の年齢層が新潟公演よりも若いように見受けられる。これには、大都市部(東京)と地方都市(新潟)という開催場所の違い、サブカルチャーイベントを行うような会場(東京)と福祉会館という会場(新潟)という会場の違い、著名人なのか地元で活動している人なのかといった招かれるゲストなどの違いなどによるものと考えられる。特に迫真的なパフォーマンスが伴う内容や、サブカルチャー色の強さ、メンヘラ、ひきこもり、といった扱うテーマの状況から、20歳代くらいの若年層が観客の中心となるよう想定され、実際、特に東京公演での観客にはそのような年齢層の人々の参加が多いように見受けられる。しかしながら、こわれ者の祭典も始まってから10年以上経過し、主要メンバーも40代後半、イベントを共に盛り上げる司会の江口さんも同世代という状況になる中、彼らと同世代、もしくはそれ以上の年齢層の観客も、公演の場所やパフォーマンスが行われる背景、状況の違い<sup>91</sup>によっては多く見受けられる。筆者が複数回会う機会

<sup>91</sup> 表現者自身の企画によるライブなのか、他組織から依頼されたライブなのか、パフォーマンスか講演かといった違いが表現活動にはある。

のあったある人は、K-BOXをはじめ、時にはこわれ者の祭典やその他表現活動に関連するイベントに継続して観客として参加している人であるが、仕事を定年退職して何年か経つという年代の人であった。そして、昔うつ等の病気で仕事を休んでいたことがあるとのことであった。こうした例のように、高齢といわれる年代の人々もまた当事者として活動に共感し、参画している様子が見受けられる。また、表現活動に参加する人々には、疾患などを有する当事者というわけではなく、その親の参加も含まれる場合がある。表現団体としても、ゲストとして当事者の親を招く機会は複数あった<sup>92</sup>。筆者は、K-BOXの交流会にて、60～70歳代と見受けられる、成人した子が複数いる女性と話す機会があったが(2013年12月15日)、その女性は、子どものひとりがひきこもりとなり、県内の居住地にて親の会を立ち上げた、という話をしてくれた。このような状況から、おそらく、たとえばゲストで当事者の親が出演するなどの際は特に観客の一定割合は当事者の親ではなかったかと推察される。また、ある他団体のイベントに表現者(月乃さん、長男さん、YOPPYさん)がゲスト出演した際には(2014年5月25日)、当事者の保護者世代の人が多く見受けられ、表現者自身もそのような旨の発言をイベント中に発していた。

以上のように、観客は20～40歳代くらいの年代の男女の当事者の人たちを中心としながら、10代の若い人から60～70歳代という年代の人、時に非当事者や表現者の支援者に至るまで多岐に渡る。幅広い年代層が集まる背景としては、ひきこもり等従来若年層を中心とした諸問題を抱える人々の高齢化といった時代的背景や、当事者の親という観客層の存在も考えられる。

## (2) 当事者、専門職等、表現活動をしている人

こわれ者の祭典では、イベント後の打ち上げ交流会があり、その際は出席者が自己紹介をする機会がある。自己紹介では、自らの病名や、ひきこもりの経験があることが語られることが大多数で、こわれ者の祭典に来る観客、特に交流会に来る人々には病気やひきこもりなどの経験を有する当事者が多いことが推察される。

また、公演(こわれ者の祭典)の最後の方には、観客から質問やコメントなどを受け付ける機会もあり、そこでの発言から観客の特徴が一部うかがえる。あるこわれ者の祭典の東京公演(2012年9月22日)で発言した人は、知的障害者の支援をしている人であり、ある人は発達障害を持ちながらイラスト等を描いている人であり、ある人は躁うつ病で入院が嫌だったということを語っていた。また、福祉関係者、リハビリ専門職など専門職の人々や福祉を学ぶ大学生などの参加者と筆者は打ち上げ交流会などで接してきた経験もあり、そうした支援者側の人も観客の一部を占めていると思われる。このように、イベントに参加している人々には病気や障害の当事者もいれば、そうした

<sup>92</sup> たとえば薬物依存の当事者の親(2010年12月5日)、発達障害の当事者の親(2014年4月27日)がゲスト出演し、当事者の親としての経験や行っている支援活動の話などが語られた。



人々を支援する人も一定割合いることが推察される。

加えて、何らかの表現活動を行っている人もいる。先に挙げた人たちの中でも、演劇活動を行ったり、漫画や小説を書いている人たちが見受けられた。そしてメンタルヘルス上の問題を抱えていたり、医療機関に受診していたりと当事者としての側面も有する人たちであった。そうした当事者でありかつ表現活動自体に関心が高く、またそうした経験を有する人が観客には一定割合含まれることが考えられる。

このように病気の当事者であったり、支援者であったり、表現活動をしている人が観客には多く含まれることが推察される。

### (3) その他ー表現や福祉以外の文脈からの参加者

表現活動は、祭などのイベントや商店街の一角、ショッピングモールなどで行われていることがあり、状況によっては、福祉とも表現活動とも関係の薄いその場に居合わせた人が観客として参加することがある。祭などのイベントに出演する K-BOX の演奏を見に来る人々は祭に来ている人々が観客になり、ジャズカフェなどで行われる時は(2011年3月12日など)、その店の常連の人が観客になったりする。また、表現活動は時折ゲストが招かれるが、ゲスト目当ての観客も多いことが考えられる。ある地元の高校野球のチームの監督がゲストで招かれた K-BOX のライブ(2009年12月23日)では、K-BOX の定例ライブの客層とは異なる壮年期以降の男性が多く見られた(2009年12月23日)。これはゲストの話聞きに来ることを目的とした人々の参加が多かったことによることが考えられる。また、ある月乃さんが主催したイベントは、映画等に出演している女優がゲスト出演していた(2014年8月4日)。イベントの休憩時間などには、ある観客はゲスト出演した女優と出演作についての話をしていた。他にもゲストに音楽活動を行うアーティストが招かれる際、または共同で行われる際には、そのアーティストのファンであるという人も数多く見受けられた<sup>93</sup>。こわれ者の祭典、特に東京公演では、メディア出演や書籍の出版なども行う著名人のゲスト参加がなされることが多く、ゲストに魅かれて参加する観客も多いことが想定される。このような状況はゲストに魅かれてイベントに出演する人の多さと、映画など一見福祉的な文脈とは関係のない分野から興味をもってイベントに来場する人々の存在を示唆する。

加えて、活動やメンバーを支援する人が観客となることもある。K-BOX の年に2回ほどの規模の大きなライブ時には、イベント後の交流会が行われるが、そこでは K-BOX や Kacco さんを昔から支援してきた人たちの参加もみられる。こうした人々の中には40歳代の Kacco さんが慕っ

---

<sup>93</sup> 新潟を中心に活動するアーティストと共に行ったイベントでは、そのアーティストのファンであると述べる人がいた(2012年6月9日)、県外で活動するアーティストがゲストで出演した際には、その人のファンであり県外からイベントに来たと述べる人がいた(2013年8月18日など)。

る Kacco さんの親ほどの年代の人にも含まれる。表現活動に参加する観客の特徴は、ライブ活動や祭などへの出演、講演会、著作活動などのイベントの多岐にわたる特性に依るところが大きい。福祉関係の専門職を対象とした講演会に招かれる際にはもちろん福祉関係者が観客の中心になるし、当事者向けの講演会に行くときは、当事者が聞き手の中心になる。また学校などで講演会を行う際は、学生、生徒が主とした聞き手となる。また一部、大学の卒業論文の題材にしたり、ものを書くことを学ぶ学校に通っていてその課題として取り上げようと考えている、といった人々の姿がみられることもあった(2013年9月8日など)。

このように、当事者や支援者、表現活動に関係する人以外にも、偶然パフォーマンスの場に居合わせる人や、ゲストに魅かれる人、表現者の関係者といった人々の観客としての参加がみられる。表現活動の観客は多くは生きづらさや病気などを抱える当事者であることが考えられるが、必ずしもそうであるわけではなく、観客の特性はイベントの性質により異なってくる。

### 3.5.3 観客の属性の重なり

表現活動では、様々な立場の観客の参加がみられるが、当事者の立場と支援者の立場は明確に区分することは困難な場合もあり、観客はそれぞれ当事者として、もしくは支援者等として単一の立場で参加しているわけでもないことも多い。あるこわれ者の祭典東京公演後の交流会(2014年3月22日)に参加していた人は、メンタルヘルス系の病気の当事者でありながら、同じ当事者の相談業務をNPO等で行っているという人であった。また、こわれ者の祭典、特に新潟公演の交流会では、参加者が交流会の会場で詩の朗読などのパフォーマンスを行うこともある。そうした実践からは、観客の中には当事者であり、同時に支援者であったり表現者であったりと、複数の属性の重なりが多く見受けられることが想定される。

また、こわれ者の祭典や K-BOX などの表現活動における表現者、スタッフ、観客は明確に区分できないこともある。スタッフは、常にスタッフとしてのみの立場で動いているのではなく、たとえば東京公演ではスタッフとして主として参加している人が、新潟公演で観客として参加するという状況も見受けられる。K-BOX やこわれ者の祭典のメンバーがお互いのイベントの観客になったりと、表現者自身も他の様々な表現活動の観客になることもあれば、K-BOX のメンバーがスタッフとしてこわれ者の祭典の活動を支援することもある。また、ゲストが別のイベントで観客となることもある。たとえば K-BOX のライブにて招かれたある女性アーティストは、自らが摂食障害の体験を持ち、音楽活動を行っている。そして K-BOX のライブのみではなく、月乃さんの行っているラジオ番組に出演するなど表現活動との関係を深め、こわれ者の祭典に観客として参加することもあった。彼女は音楽活動を行うと共にカウンセラーとしての活動も行っており、表現活動をする人であり、

当事者であり、支援者でもあり、と重複した属性を有し、同時に観客でもあった。

観客は当事者であったり支援者であったり、表現をする人であったりするが、そうした属性は時に重なっている。また、あるイベントではゲストやスタッフや表現者である人が別のイベントでは観客になることもある(図 39)。このように観客の属性は他の様々な属性と時に重なっている。

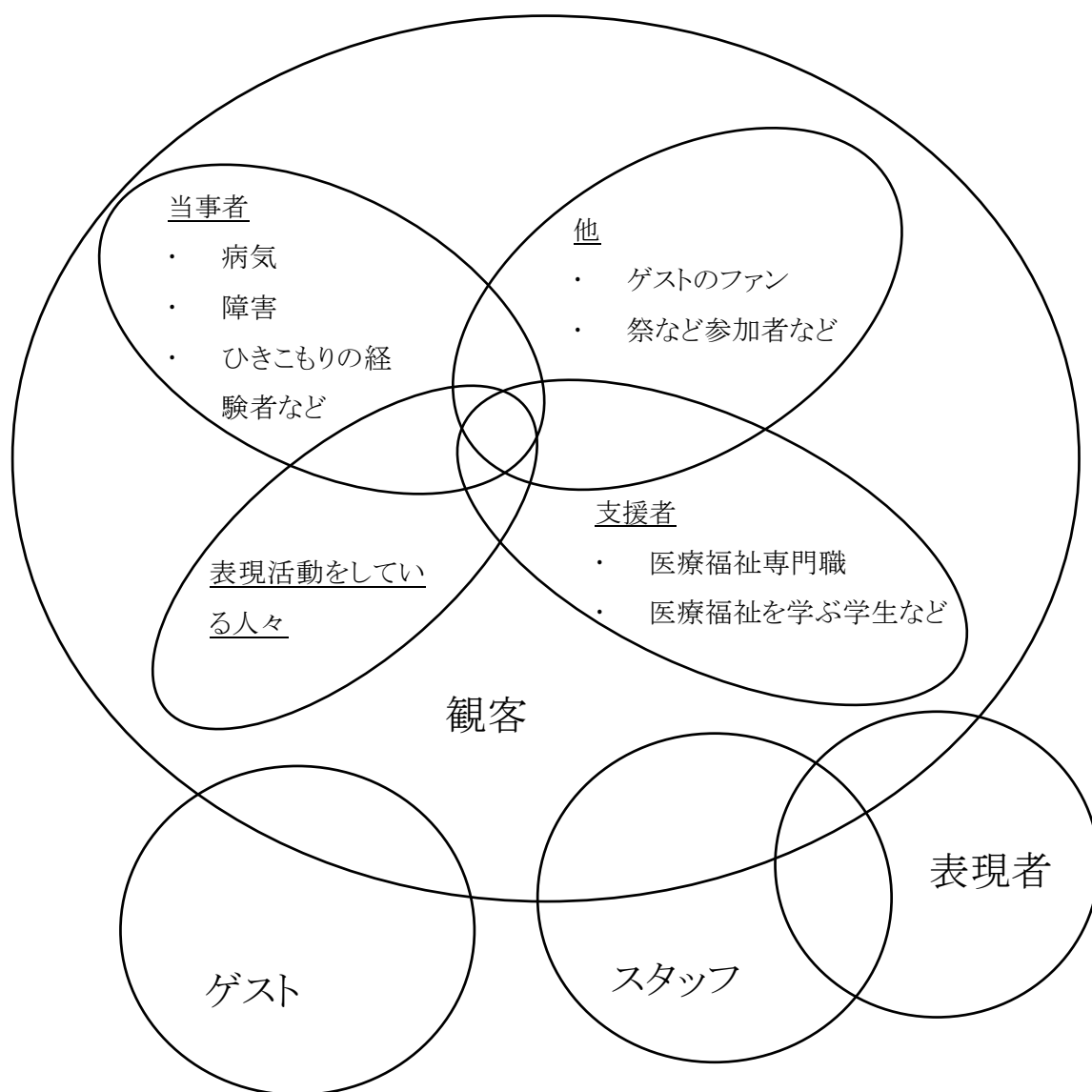


図 39 観客の属性の重なり(筆者作成)

### 3.5.4 活動に深くかかわる観客とゆるやかにかかわる観客

#### (1) 初めての客とリピーター

観客にはイベントに初めてくる人もいれば、何度も通うリピーターの人もいる。こわれ者の祭典等でイベントの開始時に、初めて来た人、今まで来た人、それぞれ、司会者などの声掛けにより挙手してもらうことがある。それらの様子を見てみると、多くのイベントにおいて一定割合リピーターの人がいることがうかがえる。もっとも挙手する人の割合を見る限り、たとえばこわれ者の祭典の定期的な公演においては、リピーターが大多数を占めているわけではなく、初めて来る人の割合の方が多い印象を受ける。また、イベントによってもその比率は異なってくる。たとえば月乃さんがこわれ者の祭典以外の場でパフォーマンスや講演をする際、こわれ者の祭典を知っているかどうかを観客に尋ねることがあるが、「こわれ者の祭典」というイベントでない場合はそこで「知っている」と挙手する人の割合は少数派である。このように、活動のことを知り、リピーターとなって何度も関連イベントに参加するような人もいれば、初めてこわれ者の祭典や K-BOX などの活動に触れる、という人が混在している状況で多くのイベントはなされる。リピーターであるかどうか、活動を知っているかどうか、などの点において深く活動にかかわる観客もいれば、そうではない観客もいる状況となっていることが考えられる。

#### (2) 打ち上げ交流会に来る人と来ない人

打ち上げ交流会に来る人の割合はごく一部の例外というわけではなく一定割合いる。たとえば東京公演では 100 名程度の参加があれば 40～50 名程度、新潟公演で 70 名程度の参加があれば 20～30 名程度が打ち上げ交流会に参加することが一般的な参加者の姿である。打ち上げ交流会にはこわれ者の祭典の公演と同じように、何度も筆者も会ったことがある人もいれば、初めて参加する人の姿も見受けられる。打ち上げ交流会では飲食費の実費等含め、金銭的、時間的コストがかかるにもかかわらず、一定割合の人が交流会に参加し、自らの生きづらさを語り、観客や表現者と関係を結ぼうとする。単純に打ち上げ交流会に来る／来ない、によって活動との関係が推し量れるわけではないものの<sup>94</sup>、交流会に来る／来ない、はひとつの、活動に深くかかわる人であるのか、そうではない人なのかの基準になりうると考えられる。

---

<sup>94</sup> 関係者やスタッフなどとして、活動に密接にかかわっているながら打ち上げ交流会に来る機会が少ない人もいる。同様に観客においてもリピーターでありながら、打ち上げ交流会には来ない人もいる。

### (3) イベントに意図して来る人と偶然居合わせる人

表現活動は多様な場、形態でなされる。定例ライブなど表現者自身の主催により行われることもあれば、他の組織や人が主催して行われるイベントに招かれて参加することがある。双方のイベントにおいて表現者自身の活動を見に来場する人もいるが、表現者自身のことを知らないという人も多く見受けられる場もある。また、K-BOX の活動にみられるように、地下街やショッピングセンター、祭の場などでイベントが行われる際は、買い物や祭りに来ている人が立ち止り、パフォーマンスやイベントを楽しむ姿が見受けられる(2011年6月25日など)。表現活動に参加する人は、意図して来る人と、そうではなく偶然その場にいる人とがおり、そうした基準により、活動に深くかかわる人と、ゆるやかにかかわる人が生じてくることがうかがえる。

### (4) ライブに来る人と他のメディアで活動に触れる人

表現活動に触れるメディアも単一ではなく、触れるメディアによって観客の幅も変わってくる。たとえばライブ活動ならば、そのライブに来ている人が観客となるが、一部のライブ活動等は動画サイトなどで中継されることもあり、それらを見る人や、それらがアーカイブされたものを見る人もまた観客といえる。会場に来ている観客数は、こわれ者の祭典新潟公演で約70～80人程度、東京公演で90～100人程度、K-BOXのライブでは20～30人程度、という観客数が一般的なものとなるが、動画中継がなされるとそれよりはるかに多くの人々がライブを視聴する。たとえばあるこわれ者の祭典東京公演(2011年7月17日)では、動画配信サイトの公式チャンネルに採用されたこともあり、18,000人くらいのアクセスがあったことが報告された(2011年8月17日会議より)。表現活動に触れる観客は、定期的なライブ活動はもちろんのこと、そのみではなく、動画中継や出版された書籍やラジオなど様々なメディアに触れる人々が観客となっていることがうかがえる(図40)。直接ライブに来る人とそうではなくインターネットや書籍等で活動に触れる人によって活動にかかわる深さの度合いが変わってくることが考えられる。

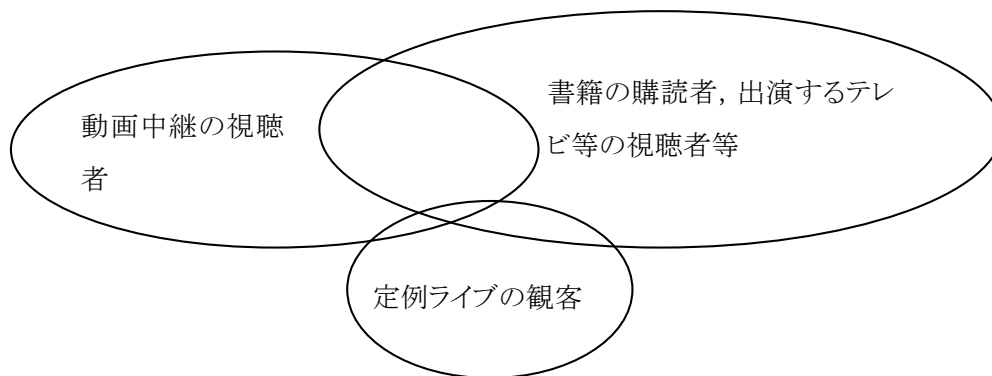


図 40 メディアの広がりと客層(筆者作成)

### (5) 活動に深くかかわる観客とゆるやかにかかわる観客

表現活動は様々な場や状況でなされ、さまざまなメディアを通して表現活動に触れる人がいる。そうした状況や表現媒体に応じて、観客と表現活動との距離が異なってくるのが考えられる。表現活動を観にライブ会場に来て、交流会などに繰り返し参加している人は表現活動に深くかかわる観客ととらえられるであろうし、それに対して、そうではないが、表現活動に触れる人は表現活動にゆるやかにかかわる観客であるにとらえられる(図 41)。一言で観客といっても、深くかかわっているといえる人もいれば、ゆるやかな形で表現活動に参加している人もおり、観客は様々なレベルで表現活動にかかわる人たちが構成されている。パフォーマンスという形態をとることによって幅広い範囲から活動にアクセスすることが可能になっていることが考えられる。

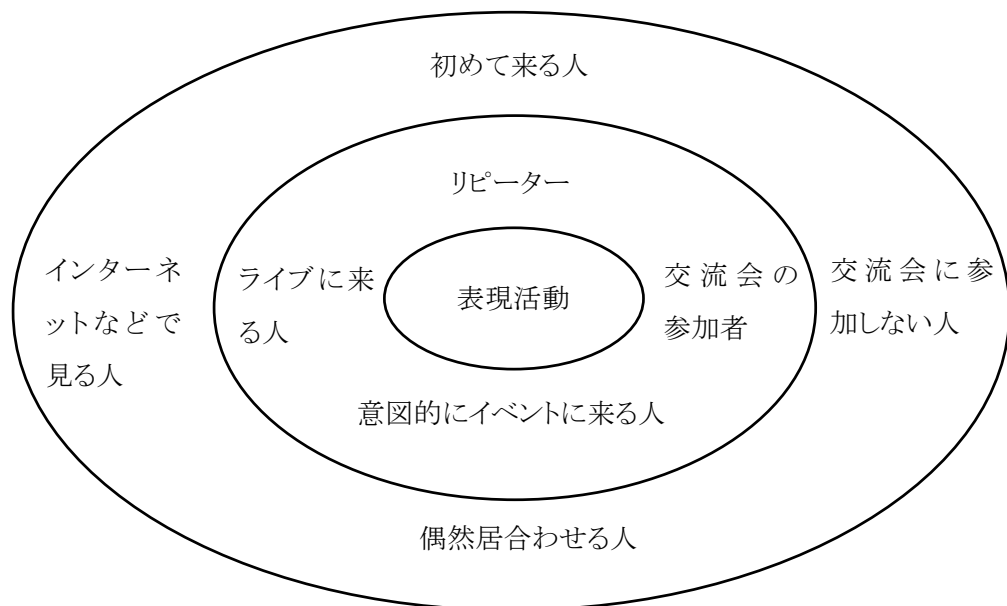


図 41 活動に深くかかわる観客とゆるやかにかかわる観客(筆者作成)

### 3.5.5 観客の表現活動にかかわるプロセス

観客が表現活動にかかわるプロセスは様々なものがある。先に挙げた人たちも、ふと冊子をみかけたり、インターネットで検索したり、テレビで表現活動のメンバーの活動をみたりとしたことがきっかけとなって活動につながっていた。こわれ者の祭典に来ている何人かの観客(もしくは観客であり支援者)については、インタビューを基に記述された研究があり(稲田 2014)、ここでは、観客や支援者がこわれ者の祭典を知った、かかわったきっかけとして、「出版されている月乃さんの書籍で活動を知った」、「ニュースを見た」、「こわれ者の祭典の名誉会長である雨宮処凛さんのファンだった」「新聞でみた」「社会福祉士養成校で知り合いから紹介された」といったことが挙げられている。また、それぞれ、通院していたり、病名はないけれども生きづらい経験やひきこもりの経験を有していたり、絵を描くなどの創作活動をしていたり、福祉の仕事を行っている人がいたり、徐々にスタッフとしてかかわるようになっていたりしていることが示されている。そして、メンバーのパフォーマンスや、観客同士のかかわりなどを通してお互いに共感しあい、観客や支援者の中で共感が広がっていくありようが示されている(稲田 2014)<sup>95</sup>。

以上を鑑みると、観客が表現活動にかかわるようになるプロセスとしては、生きづらさの経験や、創作活動、福祉的な活動などの経験を有している人が、メディアや知人を通して活動を知り、表

<sup>95</sup> このインタビューの回答者の多くは筆者も面識があり、一部同様の話を聞いている。

現活動にかかわっていくというありようが見て取れる(図 42)。

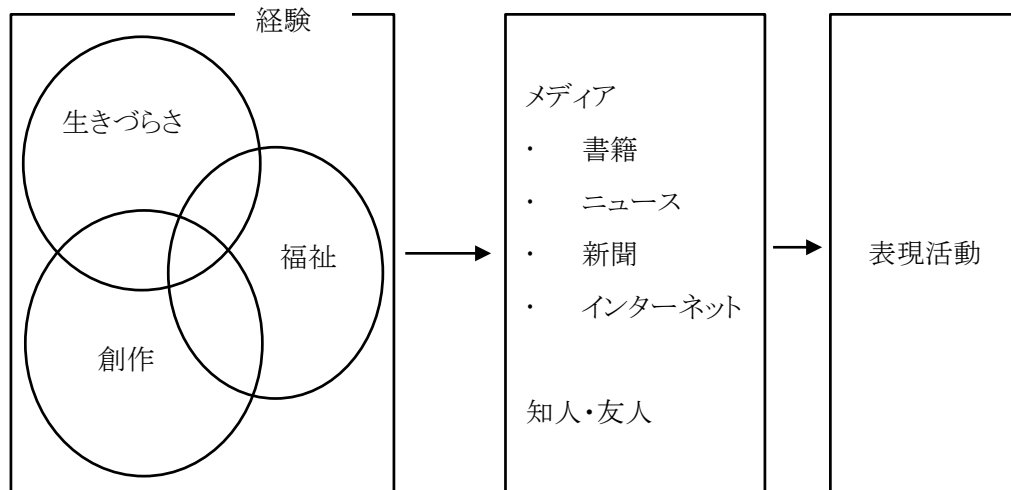


図 42 表現活動にかかわるプロセス(筆者作成)

### 3.5.6 活動への反応・評価

#### (1) こわれ者の祭典アンケートより

こわれ者の祭典や K-BOX のライブなどイベントが行われる際は、受付を通して様々な案内が記載された配布物が配られる。そこには、出演者の近日行われるイベントの案内、出版やラジオ放送の案内などが含まれ、K-BOX のライブではメンバーの活動が記載された新聞記事のコピーなども含まれる。配布物の中にはライブのアンケートも含まれており、その内容は、イベントを知ったきっかけや、感想、連絡先などが記載できるようになっている。アンケートのみで観客の反応やイベントの評価の全容を理解することは困難であるが、ある程度の観客の反応は推察できると思われる。アンケートの感想欄には、イベントに対して肯定的な反応が多く記されており、表現活動に対して、肯定的にとらえている人が多いことが推察される。記述内容としては、「生きやすくなった」、「共感した」、「また来たい」、「楽しめた」、「心動かされた」という内容が主なものとして挙げられた



(表 1)<sup>96</sup>。

---

<sup>96</sup> なお、アンケートは 2014 年 9 月 14 日のこわれ者の祭典東京公演時のものを中心にとりまとめたものである。アンケート内容には、個々の経験の詳細が書かれているものなどもあるが、ここでは、複数人において類似した記述がみられる、一般的な観客の反応ととらえられるものを提示する。

表 1 アンケート記述内容例

| 記述内容要約   |            | 記述例  |
|----------|------------|--|
| 生きやすくなった | 前向きになれた    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生きる勇気をもたらった。</li> <li>・ 前向きになれた。</li> </ul>   |
|          | 生きやすくなった   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少し生きやすくなった</li> </ul>   |
|          | 生き方の参考になった | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後の生き方の参考にしたい。</li> <li>・ 何かヒントにさせていただきます。</li> <li>・ いろいろな方のお話を伺えて、方向がみえてきたような感じになりました。</li> <li>・ 過去とうまく折り合いをつけ、新たな道、関係を作り直せたらと思っています。</li> <li>・ 一番自分の嫌な事をしゃべってしまうと、楽になれるとおっしゃっていたことが、印象に残りました。</li> </ul> |
| 共感した     | 共感できる      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 僕も同じような経験をしたので気持ちはわかります。</li> <li>・ アイコさんのお話に共感しました。</li> <li>・ 自分だけじゃないんだと思いました。</li> <li>・ 私も生きづらさの真ただ中にいます。</li> </ul>   |
|          | 過去を思い出す    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私も生きづらさを抱えてきました。同じ気持ちだった頃を思い出します。</li> <li>・ 自分が自助グループに通っていた頃を思い出しました。</li> </ul>   |
| 楽しめた     | 楽しめた       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自虐的で面白かったです。</li> <li>・ 思っていたよりも楽しくエネルギッシュなパフォーマンスでした。</li> <li>・ かなり重苦しい感じの会と思っていたが、逆に面白すぎて涙が出てしまいました。</li> </ul>  |
|          | ゲストがよかった   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゲストがよかった。</li> </ul>  |
| 心動かされた   | 感動した       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 感動をありがとうございます。</li> </ul>   |
|          | 驚いた        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本音トークに驚いた。</li> <li>・ 熱いライブに圧倒された。</li> </ul>   |

アンケートという方法にも起因すると思われるが、全体的に肯定的な反応が多い結果となっている。共感できるという記述も複数みられ、当事者の参加が広くみられることが考えられる。また、参考になった、という記述もあり、イベントが生きづらさを抱えている人々が新たな生き方や視点を拡大していく一助となっていることがうかがえる。アンケートからは、共感したり、他の人の生き方を知ったりといったセルフ・ヘルプグループ的な機能を表現活動が有することがうかがえると共に、それのみではなく、「楽しめた」、「心動かされた」というようにパフォーマンス活動であるからこそ感じられやすい思いを参加者は有していることがうかがえる。

## (2) メディアを通じた反応

月乃さんがこわれ者の祭典の司会をしているフリーアナウンサーの松井さんと共に行っているラジオ番組(月乃光司のハート宅配便)において、リスナーの反応が、リスナーからのメールの紹介という形で紹介された。

松井(リスナーのメール紹介):私はうつ病を発症し、現在無職でひきこもり中の 30 歳の女性です。AC<sup>97</sup>でもともと自傷傾向がある私でしたが、ある時、希死念慮がひどくなり、一度自殺に失敗した時、ぐったりしながらインターネットで「自殺」というキーワードをググると、月乃さんのページが現れたのです。そして、月乃さんのイベント「ストップ！ 自殺～どん底からの出発」をユーストリームで食い入るように、泣きながら見ました。あれだけ死にたかった私は、月乃さんと出会い、月乃さんのラジオや動画がたくさんあるから、死ぬのはこの後でもいいやと思いました。

そして、かかってみたいけど行けなかった精神科、月乃さんがおっしゃる「心のかぜですから」という言葉に背中をポンと押され、現在は精神科に通院中です。投薬が中心ではありますが、サイコドラマというグループセッションも始めて、ほんの少し前向きです。

病院に行く勇気を下さり、ありがとうございます。欲をいえば、もっと仲間とつながりたいです(ハート宅配便第 145 回)。

このように、自殺を試みたことがある人が、表現活動に参加することによって、医療の助けを借りるようになり前向きになれたといった状況がラジオ番組のリスナーより報告されている。こうした内容は活動の意義の一端をうかがわせるものと考えられる。また、別の回<sup>98</sup>では、「こわれ者の祭典や

<sup>97</sup> アダルトチルドレンの略

<sup>98</sup> 「月乃光司×本宮宏美『ハートエナジー』」第 73 回。

K-BOX が居場所になっている」とのリスナーのコメントが取り上げられており、表現活動は観客にとっての居場所といえる場となっていることがうかがえた。

ラジオ番組のみならず、ツイッターなど SNS 含め、インターネット上において、イベントについての反応がみられることも多い。たとえば「ストップ！自殺」という月乃さん主催のイベント(2012 年 8 月 25 日)において、月乃さんは何人かのゲストと共にイベントを行い、インターネット動画中継を行った。そこでは、「死んでなくてよかったと思わせてくれる。」「腹抱えて笑いました。」「リアルで見ました。ちょっと圧倒される。あと笑いもある。」「『ストップ！自殺』のイベントを見ていると、ほっとして気持ちが落ち着きます。」といった観客の反応がみられた。こうした内容は、イベント時のアンケート等でもみられる反応であり、動画中継という手段であっても、共感したり、笑ったり、圧倒されたり、といった観客からの反応があることがうかがえた。また、新聞記事において観客の反応が示されることもあった。月乃さんの講演を聞いた 60 歳代の女性は新聞に以下のように寄稿していた。

心身障害者のパフォーマンス集団「こわれ者の祭典」を立ち上げ、朗読パフォーマンスを織り交ぜた月乃光司先生の講演は私の考えを覆すものでした。

先生は自らの苦しい体験や病気をあるがままに受け入れ、生々しく赤裸々にユーモアを交えたパフォーマンスで聴衆に語りかけてくださり、感動と喜びで心から拍手を送らせていただきました。

(略)100 人いれば 100 通りの生き方があります。みんな違う道を歩みながらも、お互いの心を思いやり、声を掛け合って生きていくことの大切さをあらためて考えさせられました。(2012 年 10 月 13 日、新潟日報)

こうした反応からは、表現活動が、多様な生き方、考え方に触れる機会になり、感動を呼ぶなどの肯定的な評価が観客によりなされていることがうかがえる。また、60 歳代という年齢層の高い層の人々の共感も得られていることがうかがえる。このように表現活動は共感できたり、生き方を知ることができたり、楽しめたりと多様な側面から意義が感じられており、多くの人から肯定的な反応を得ている状況となっている。

### (3) 外部からの評価など

表現活動を行う中でメンバーやその活動は文化的、人権的、芸術的見地から評価され、いくつ

かの賞を受賞している<sup>99</sup>。2010年に月乃さんが受賞した安吾賞は、新潟市ゆかりの作家坂口安吾にちなんだ「生きざま」を評価するユニークなものとなっている<sup>100</sup>。そこでは、月乃さんは次のように評価されている。

月乃さんは引きこもり生活やアルコール依存症、自殺未遂などつらい時期を過ごされましたが、アルコール依存症を克服し、現在は心身障がい者によるパフォーマンス集団「こわれ者の祭典」代表として活躍されています。

自らの病気体験をユーモアに転化するというかつてない方法で心や身体に障がいをもつ方々、病気に苦しむ人たちに光を当て、生きる力を与え続けている月乃さんの活動に心から敬意を表したいと思います。(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット: 3)

DAIGOさんや、いっしーさんは作った映画や著作の受賞歴があり<sup>101</sup>、表現者の中には各種パフォーマンスの大会などにおいて、いくつかの結果を残している<sup>102</sup>。以上のように、受賞や競争的な活動において、制作物やパフォーマンスが評価されている。しかしながら、受賞や競争的な活動ではなくとも、表現活動が継続してなされていることや、パフォーマンスはじめ、講演会や楽曲提供に至るまで様々な外部機関から依頼を受け行われていること自体が外部から一定の評価がなされていることを示している。

---

<sup>99</sup> たとえば、月乃さんは、第65回新潟日報文化賞社会活動部門・個人(2012年)、新潟弁護士会人権賞(2010年)、第5回安吾賞新潟市特別賞(2010年)、新潟市民文学奨励賞・新潟出版文化賞受賞(2001年)などの賞を受賞している。

<sup>100</sup> 安吾賞は「新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する『安吾賞』(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット: 3)」と説明され、「『国籍、年齢、性別、職業・を問わず、その生きざまが安吾のそれに通ずる』と当初から謳ってきた選考基準(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット: 3)」に準じて賞を授与する新潟市の事業である。なお、第5回安吾賞は日本文字・文化研究者のドナルド・キーンさんが受賞しており、月乃さんが新潟市特別賞の受賞となった。新潟市特別賞は例年、「新潟市にゆかりのある方にお贈りする(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット: 3)」ものとなっている。

<sup>101</sup> DAIGOさんは、自身が作成したドキュメンタリー映画「崇とその仲間たち」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭「日本パノラマ部門」招待作品に選出され(2001年)、K-BOXのいっしーさんは、2010年日本文学館出版大賞ノベル部門特別賞を自伝的著書『自転車』でいこうにて受賞している。

<sup>102</sup> たとえば月乃さんは詩のボクシングという詩の朗読を競う大会にて、東京大会優勝を(2009年)、脳性マヒブラザーズは、障害を持つ当事者によるお笑いを競うテレビ番組企画である「『バリバラ』SHOW-1 グランプリ優勝」を果たしている(2010年)。K-BOXでは純名さんが、ピアノの弾き語りにて、2012年9月から11月にかけて、「egg! Live」という出演者がパフォーマンスを競うテレビ番組に出演し、継続して出演するための票を獲得し連続出場を果たしている。

#### (4) 活動に対しての否定的な反応・評価

表現活動に対しての反応は、概ね肯定的なものが多いが、活動を否定的にとらえる声もある。月乃さんと江口さんの対談が記載されているウェブサイト<sup>103</sup>では以下のような発言が記録されている。

月乃: (活動に批判的な人もいるという話を受けて<sup>104</sup>) 差別撤廃の運動をしている人で、テレビのお笑いみたいに笑うことは意味があるとは思えない、と言っていましたね。彼の好きなやり方というのは、もっと真面目に。軽い調子みたいのがあまり好きではないと言っていましたね。

(略)

月乃: 賛否両論はあって、ないとあれだよ。1 回目のアンケートを見せて貰った時に、ほとんどが賛が多くて、ホントなのかな、と疑問に思って、こんな変な集まりなのに、感動しましたみたいなものに疑問に思っていて、しばらくしたら 2, 3 否の方が入っていて、逆に安心しましたけど。

江口: 僕なんか最低だというバッシングがありましたからね。それはそれで受け止めていましたけど。

このように、病気や障害を笑ったり、パフォーマンスイベントとしていわば病気や当事者を見世物にするようなスタイルに対して反感を持つ人もいることがうかがえる。「ネット掲示板に『病気をビジネスにするとはなんだ』と書かれたことも」あった(2012年9月14日, 毎日新聞), 『『病気をネタにして奇をてらっている』とか『マスコミに載ればいいのか』という批判(月乃 2013: 137)』もあったという。イベントでも、「司会者をやめさせろ」「こわれ者の祭典という名前を変えろ」といった批判が多かったこと(2013年6月15日イベント時トークより), 「こわれ者とは何事だ」との批判的な問い合わせが NAMARA にもあったこと(2013年1月13日イベント時トークより)が語られることもあった。筆者もスタッフとしてこわれ者の祭典新潟公演の受付で観客の対応をしている際に、ある 60 歳代くらいの男性の観客から『『こわれ者』なんて言い方は新潟ではしない。東京発のイベントかと思っていた』と批判的な口調で言われたこともあった(2013年1月13日)。この意味する内容は、

---

<sup>103</sup> こわれ者の祭典は何処から来たか? <http://sky.geocities.jp/tukino42/evint/taidan.html> 2011年3月15日閲覧

<sup>104</sup> 筆者注

東京では障害者を笑いものにするようなイベントがあるかもしれないが、新潟ではそんなことはしない、というような意味合いが含まれているように感じられた。こうした批判は一定割合であることは垣間みえるのであり、表現者も自覚しているが、月乃さんは「障害者を『こわれ者』と表現することなど、批判を受けることは覚悟の上でのチャレンジだった(2012年8月27日、毎日新聞地方版)」とし、アイコさんは、イベントに毒がなくなり、こわれ者の祭典が福祉イベント化することを危惧していた(2012年9月26日、打ち合わせ会議にて)。

このように、批判が一定割合あることを自覚したうえで、イベントに毒を盛り込んだり、活動の魅力を創り上げることを表現活動は意識している様子が見えてくる。また、月乃さんはメッセージを届け、「世の中に対して切り口を作る(月乃 2013: 136)」ことを重要視し、そのために、こわれ者の祭典はマスコミや著名人の出演、お笑い、ユーモアを活用しているという(月乃 2013)。笑ったり目立ったりすることは、批判を受けることであるが、そうした側面自体が活動の目的、狙うところとなっていることもうかがえる。

## 第4章 他の当事者活動との比較

本章では、病気の表現活動と他の当事者の活動を比較することで、当事者活動としての病気の表現活動の位置づけを明確にし、病気の表現活動の特性の理解を深める。本研究フィールドは病気や障害の当事者が表現活動を行うという特徴ある活動であり、既存の当事者による活動と共通点と差異を有している。それらを明確にすることによって、当事者の活動としての病気の表現活動の全体像の理解を深めることができると考えられる。また、当事者活動の中での表現活動の位置づけが整理されることによって、表現活動で見出される知識が、当事者の知識としてどの程度の普遍性を有するのかの理解につながると考えられる。

本章ではこれらの観点から、他の当事者活動との比較を通して当事者活動としての病気の表現活動の位置づけを明確にする。具体的には当事者活動として広く普及している形態をとるひとつの自助グループ<sup>105</sup>への補助的な調査を元に病気の表現活動と比較する。次いで他の当事者グループ等の実践と病気の表現活動の比較をし、当事者の活動の中での病気の表現活動の位置づけを考察し、表現活動の理解を深める。

### 4.1 ある自助グループの実践

病気の表現活動は、当事者によってなされる活動のひとつである。当事者によってなされる活動の代表的なものにセルフヘルプ・グループがあり、筆者は、ひとつのグループに複数回参加した。そのグループは、表現活動のメンバーが時折通っているグループのミーティングであり、筆者はその紹介を受けて参加した。会は無名を原則としており、厳密に組織立っているわけではなかった。筆者はそれらのミーティングにおいて運営調整的な役割を果たしている人に紹介してもらい、ミーティングに参加させてもらった。論文等に全体的な印象等について記述する許可は得たものの、個々の参加者に調査許可を得るのは難しく、ここでは各個人の語った詳細の記述はしていない。

参加した会は「米国生まれの断酒セルフヘルプグループ(葛西 2007: 2)」であるAA (Alcoholic Anonymous) 系のグループである。AA はアルコホーリック(アルコール依存者)のセルフヘルプ・グループで、「嗜癖の問題を取り扱うセルフヘルプ・グループの原点(福重 2013: 71)」といわれて

---

<sup>105</sup> ここでは「自助グループ」と「セルフヘルプ・グループ」という言葉は厳密には使い分けておらず、ほぼ同様の意味合いで用いている。ただ、グループを紹介してくれた人は「自助グループ」と言う機会が多く、補助的な調査としてアクセスしたグループを指す際は本文では「自助グループ」と示している。



おり、世界 170 か国に 200 万人以上のメンバーがいるとされる(福重 2013)。AA は類似のグループに影響を与えており、「薬物依存者の NA(Narcotics Anonymous), 脅迫的ギャンブラーたちの GA(Gamblers Anonymous), 摂食障害(過食など)を抱えた人の OA(Overeaters Anonymous)などが、AA のやり方を取り入れる形で設立(福重 2013: 71)されている。そしてアノニシティ(無名性)を尊重するなどの特有のルールや考え方を有している。筆者はミーティングに 2014 年に 4 度ほど参加した。ミーティングには誰でも参加できるオープンミーティングと当事者のみが参加できるクロードミーティングが設定されており、フィールドワークはオープンミーティングに行われた。そのグループのオープンミーティングは夜間(19 時ごろ)より開始されていた。すべての調査の機会において、オープンミーティングといえども、筆者以外は皆当事者である状況であった。しかし、「過去には支援者の人が来たこともあれば、卒業研究のテーマにするために学生が来たこともあった」<sup>106</sup>とのことであり、外部からの参加も全くない状況ではなさそうであった。活動は公共の建物の一室で行われていた。出席者数は概ね 10 人弱くらいであり、女性の参加がみられることもあったが男性の比率が高い様子であり、男性のみのことも複数回あった。集まりには継続して長年参加しているように見受けられる人もいれば、初めて参加するという人もいた。初めて参加するという人の中には、病院から紹介を受けてきている様子の方が何人かいた。

ミーティングは一定の形式に従って行われていた。参加者が集まると、グループが発行している冊子、出版物が各参加者の手元に配られ、たとえば、無名であることが原則であることといった内容の一部を読んでいく。読まれる箇所は、毎回のように読まれる箇所もあれば、回によって異なる箇所もあった。そしてその後、黙想し、一定のテーマが決められてひとりひとり話していく。テーマは、たとえば「初めて活動に来たときのこと」といったテーマが挙げられていたが、それに関連することを話す人が多いものの、必ずしもそうではない時もあった。場を進行する役割の人がいて、その人の進行により会は進められていた。

参加者は「〇〇(本名ではないニックネームのようなもの)です<sup>107</sup>」と名乗り、参加者は「はい、〇〇」と軽く答え、それからそれぞれの経験を話していく。「言いつ放しの聞きっ放し」というように、話し手はただ話し、聞き手はただ聞いていく。話した内容についての議論などはなされない。参加者はただ黙って聞いており、時折うなずいたりしている様子も見受けられる。話は深刻な経験談もあれば、時折ユーモアのある話がなされることもあった。その際は参加者には笑ったり、失敗談などに苦笑したり、といった反応がみられた。声は静かに淡々と話されることが多いが、話が盛り上がると声が大きくなるようなこともあった。

体験談が話されている間に袋が回され、協力できる人はそこにお金を入れていく。活動の資金

<sup>106</sup> 運営調整的な立場の人にミーティングが終わった後に聞いた際に教えていただいた。

<sup>107</sup> 「〇〇(「アル中の」など)の〇〇です」と名乗っていることも多かった。

は当事者による自発的な献金によってなりたっているとのことであった。一通り回ったところでミーティングは終了する。そして依存しているものをやめて何年といった記念日になると、それが表彰されたりする。

一定の流れの進行の前後には、定期的なミーティングとは異なった、グループが関係する組織のイベントの案内がなされることもあった。また、開始前には、近隣の医療機関についてのニュースなどの話が雑談のようになされることもあった。

## 4.2 病気の表現活動との比較

### 4.2.1 表現活動との共通点

筆者が参加した当事者グループの会合と病気の表現活動は重なることもあれば異なることもあった。共通点にはたとえば以下のようなことが挙げられる。

1. 自らの経験を語ること
2. 体験談には時にユーモアが混じること
3. 定期的になされていること
4. 参加に自由さがあること
5. 一定の手順により行われること
6. 寄付金を袋をまわして募ること

自らの経験を語ることは双方当事者の活動において中核となるところである。また、時にユーモアが語りに混じり、ある程度定期的になされており、誰でも予約等なくとも参加できるような雰囲気であることも共通した特徴であるように思われた。AA 系列の自助グループは匿名性を重視しており、参加するにあたって申し込みも不要であり、名乗る必要もない。ただ会場に行けば、そのグループに参加することができ、表現活動を見に来る観客も同じ立場であるように感じられた。こわれ者の祭典の打ち上げ交流会では交流会に来た人が各々自己紹介し、多くの人が病気などに起因する体験談を語っている。言いたくないときはパスできるなど、そのルールや語り方はこうした自助グループのそれと似ている。

また、一定の手順に沿って行われることも共通した点であるように思われる。特に自助グループでは単に体験談を語るのみならず、黙想したり、その活動の基盤となっているような文章を読み上げるなどの手順が踏まれる。そして、語る人が何か語った時に「はい、〇〇」とその人の名前(ニック

クネーム)を挙げて反応することなどは特徴的な振る舞いであるように感じられた。こわれ者の祭典において、マスクをかぶって入場したり、「病気だよ！全員集合」のかけ声でイベントが始まったり、と形は異なれども一定の特徴的な手順の下で行われることがある。そして時にイベント、こわれ者の祭典や月乃さん主催のイベントなどで、寄付金を入れる袋が観客に回される中で寄付金を募っていく取り組みがみられるが、こうした病気の表現活動のいくつかの要素は自助グループでの取り組みを参考にして表現活動に取り入れられながら形作られていったものであると考えられる。

## 4.2.2 表現活動と異なる点

表現活動は自助グループ等から多くを学び、その要素を取り入れる中で形作られてきており、自助グループとの共通点は多くある。しかしながら、一方で、筆者が参加した自助グループとは異なる点もいくつか挙げられる(表 2)。

表 2 病気の表現活動とある自助グループとの違い

| 病気の表現活動        | ある自助グループ         |
|----------------|------------------|
| 広く公開されている      | 語る内容はグループ内部に留める  |
| パフォーマンスとして表現する | 経験を語る            |
| パフォーマーと観客がいる   | 話し手(当事者)が聞き手になる  |
| 入場料を取る         | 無料で参加する          |
| 外部社会に働きかける     | 外部社会に働きかけようとはしない |

まず、1 点目は、病気の表現活動は広く公開されており、多くの人々に見てもらいたく出演者自身願っている活動であるのに対し、参加した自助グループは原則公開されていないという違いが挙げられる。表現活動は、フライヤーを広く配布し、SNS やメーリングリストを通じた周知がなされ、会場にも人目を引くような看板が設置されたりと、広く開かれた様相を示している。一方で、当該自助グループは、定例のミーティングでは簡潔な案内が実施会場の案内板になされている程度である。また、当事者のみが参加できるクローズドなミーティングに加え、関係者などが参加できるオープンなミーティングが設定されているものの、非当事者などに対して積極的な参加を呼び掛けているわけでもなく、筆者が参加した際も非当事者の参加は見受けられない状況であった。2 点目は、病気の表現活動は何らかのパフォーマンスが伴うが、自助グループはただ語るのみであるという違いが挙げられる。病気の表現活動は詩の朗読などのパフォーマンスをユーモアを交えて行うことが大きな特徴となっており、それによりエンタテインメント性が加味されているが、語り等にユ

一モアが混じることはあれども、自助グループはエンタテイメントとして成立させようとはしない。3点目はそれに加えて、表現活動は表現者と観客と二分される傾向にあるが、自助グループは参加者として語り手と聞き手は同一の立場である。パフォーマンス活動であり、表現活動は時に100人以上の参加者が集まるが、自助グループの定例のミーティングの参加者は10人未満位の小規模である。こうした表現活動であることに伴って、4点目、表現活動は入場料をとるが、ある自助グループは無料で参加できる、5点目、表現活動は外部社会に働きかける要素を持つが、自助グループは外部社会に働きかけようとはしない、といった違いが生じてくることが考えられる<sup>108</sup>。

以上のように表現活動と自助グループには共通性と共に差異がみられる。表現活動が重視していることの多くは自助グループのそれと一致する。特に自らの経験を表出し合い共感することは双方において重要な要素になっている。また、集金袋をまわして資金的な協力を得るというやり方をこわれ者の祭典に取り入れるなど、運営において一部自助グループの要素を表現活動に取り入れていること、月乃さんは自らが自助グループにつながったことが回復において最重要事項であったことを表現活動の場で多く表現すること、などを鑑みると、表現活動はセルフヘルプ・グループの否定からではなく、セルフヘルプ・グループをひとつの基盤としてパフォーマンスなどの特徴的な要素を加味し、発展してきたものといえる。

## 4.3 表現活動の位置づけ

### 4.3.1 セルフヘルプ・グループとしての表現活動

本研究のフィールドとなる活動は、当事者による活動のひとつである。当事者の活動の代表的なものとしてセルフヘルプ・グループがある。本章において広く普及している形態を採用しているセルフヘルプ・グループを例に挙げ、表現活動との比較を通して、表現活動がセルフヘルプ・グループの否定から始まったものではなく、むしろセルフヘルプ・グループを基盤にエンタテイメント性等の要素が加わって発展してきたことを示してきた。しかしながら、単にセルフヘルプ・グループといえども、その内実は多様である。

セルフヘルプ・グループの分類においては、グループの関心がメンバー内に向くものと、社会改革に向くもの、スティグマを改めようとするものと、社会を問題視し、改めさせようとするものに分かれるとの見解が出されている(Katz and Bender 1976; Gartner and Riessman 1977=1985; 平野1995)。日本においても、セルフ・ヘルプグループの分類については検討され、そのうちのひとつ

---

<sup>108</sup> しかしながら、ひとりでも多くのまだ会につながっていない当事者に、活動を知ってもらうことの重要性は重視される。

にセルフヘルプ・グループの活動のレベルと活動のベクトルの 2 軸で分けるあり方がある(野田 1998)。活動のレベルとは、「当事者個々人の抱える問題をどこで(どの範囲で)解決しようとしているかということ(野田 1998: 26)」とされ、「当事者内の責任の範囲内での『自己完結的な努力』と制度・施策の活用等のように社会的な取り組みとして解決を図ろうとする『一般社会のレベルでの解決・緩和』を両極とする軸(野田 1998: 26)」で表される。一方、活動のベクトルとは「問題の解決に向けての働きかけの対象をどこに求めているかということ(野田 1998: 26)」とされ、「節制等の自己規制をしたり、当事者個人を励ましたりという『自己内部への働きかけ』と、制度化・施策化を要求して運動するというように、社会に対して何らかの対策を講ずるように働きかける『一般社会への働きかけ』が両極となる(野田 1998: 26)」とされる<sup>109</sup>。こうした「自己内部」や「一般社会」といった軸を設定する考え方は、自己規定や対外的なアプローチについての当事者の知識を考察する本研究と親和的であり、本研究フィールドとなる表現活動の当事者活動としての位置づけを考察する視点として用いることにする。

活動のベクトルとレベルを軸とした分類では、AA(Alcoholic Anonymous)などが、自己完結的努力、自己内部への働きかけの活動(ステージⅠ)、親の会や障害者団体連合会などが、自己完結的努力、一般社会への働きかけの活動(ステージⅡ)、疾病、障害者の「友の会」などが、一般社会レベルでの解決・緩和、自己内部への働きかけの活動(ステージⅢ)、社会運動的な活動が、一般社会レベルでの解決・緩和、一般社会への働きかけの活動(ステージⅣ)の例として示されている(図 43)。

---

<sup>109</sup> さらに、野田(1998)は、活動の拡がりの 2 つのルートを組み合わせ、6 つの志向群としてのセルフ・ヘルプグループの分類を提示している。

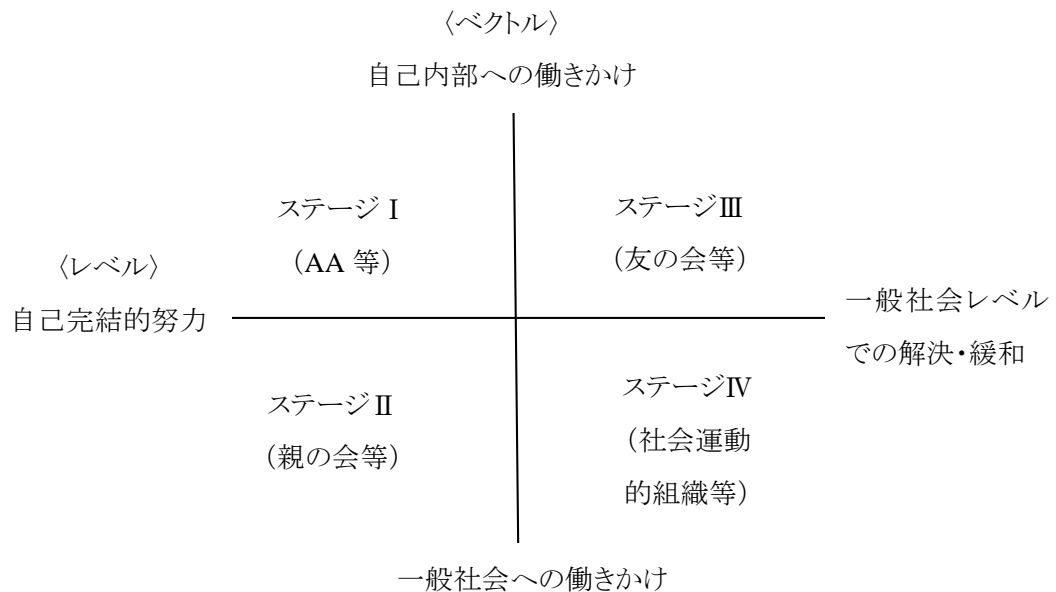


図 43 セルフヘルプ・グループの活動のステージ(野田(1998: 26)の図 2-1 より一部改編)

こうしてみると、一言でセルフヘルプ・グループといえども、活動の考え方や方向性は異なっており、様々なタイプがあることがわかる。セルフヘルプ・グループの活動の幅は広く、本研究のフィールドとなっている表現活動とセルフヘルプ・グループとは同じとも異なるともいうことは難しい。今回筆者が参加したグループは、歴史のあるグループであり、ひとつの代表的なセルフヘルプ・グループの形態であるといえる。しかしながら、それもまた先に挙げた 4 つのステージ I に属するタイプのひとつであり、他の形態のグループも多い。また、典型的なあるタイプとみられるグループも必ずしもそうではない側面を持つことがうかがえる。匿名性を重視し、自己完結で政治的な活動をしなことを信条としているグループであれども、ミーティングの常連のメンバーではお互いに本名を知っていることもあり<sup>110</sup>、必ずしも厳密に匿名なわけではないことがある。また、自己内部への働きかけ、自己完結型のセルフヘルプ・グループと位置付けの努力、自己内部への働きかけを志向するグループと捉えられる AA も小規模なミーティングとは異なる規模の大きなイベントを企画、実施し、政治活動という形は決してとらないが、多くの人々に対しての働きかけ、広く社会に活動を知ってもらおう働きかけ—それは未だつながりえないアルコール依存症者に活動につながってもらおうためという意図が大きい中であって—を行う時もある(図 44)。

<sup>110</sup> 補助的なフィールドワークにおいて常連の参加者同士がミーティングが終わると本名で会話している様子がうかがえることもあった(2014 年 8 月など)。

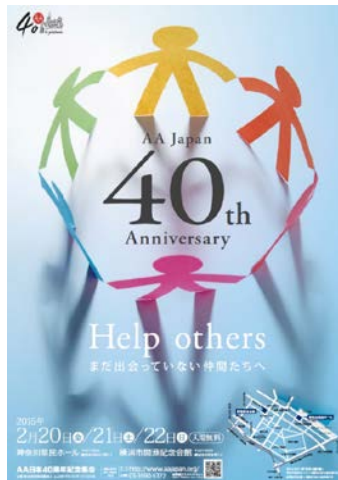


図 44 AA の大規模な集会 (40 周年記念) のパンフレット

フィールドワーク中でも、「断酒会と違って AA は会費もなければ会員名簿もない」、「断酒会ではカリスマ的な人がいるが、AA はそういったこともない」、といった声が聞かれることもあり、ように同じような依存のグループであっても、そのやり方や組織において違いがみられることがうかがえた。このように、あるひとつのグループであっても様々な面を有していたり、一見同じようにみえるグループでもその性質は大きく異なっていたりする。

セルフヘルプ・グループが「同じような問題をかかえている個人(またはその家族)が自分自身の問題を自分自身で解決するために、意図的かつ自主的に結成され、しかも専門職から独立した活動を展開している持続的な小集団(岡 1988: 12)」であるならば、表現活動もまたセルフヘルプ・グループの一種としてもとらえることができる。また、セルフヘルプ・グループといえどもそのタイプは、自主性を重んじるものもあれば、専門家や行政がある程度主導しているようなタイプというタイプの違いもある(Powell 1987)。保健所や保健センター等がかかわる子育てグループや健康づくりグループといったグループもまたセルフヘルプ・グループとしてとらえられることもある(本保 1998)。このような立場に立つとすれば、自主性が弱くともセルフヘルプ・グループととらえることが可能であり、セルフヘルプ・グループとそうではない活動の境も曖昧に思える。一見対極的な立場にある専門家の活動とセルフヘルプ・グループとの境も明確ではないこともうかがえ、厳密に考えると何がセルフヘルプ・グループであり、何がそうでないかの判断は難しい。

病気の表現活動においても、100 人以上の多くの人々が集まるライブもあれば、10 人にも満たない少人数しかいない状況でイベントが行われることもある。パフォーマンスが中心の時もあれば、トークが中心の時もある。入場料を K-BOX の定例のライブやイベントこわれ者の祭典のように取るイベントもあれば、とらないイベントもある。本研究のフィールドとなっている 2 つの表現活動でもそ

の参集の頻度や構成人数、パフォーマンスの内容、組織、リーダーシップのあり方等において同じ「表現活動」であれども異なっている。

表現活動やセルフヘルプ・グループに見受けられるように、それぞれに多様なあり方や特性を有していることが当事者活動のあり方のように思われる。そしてそうした広さや各々の活動の特性の重なりを有しつつ、大まかな傾向性として、病気の表現活動は公開されている活動であり、対外志向を有し、フィールドワークを行った自助グループは非公開で対内部指向を有していると考えられることができると考えられた(図 45)。

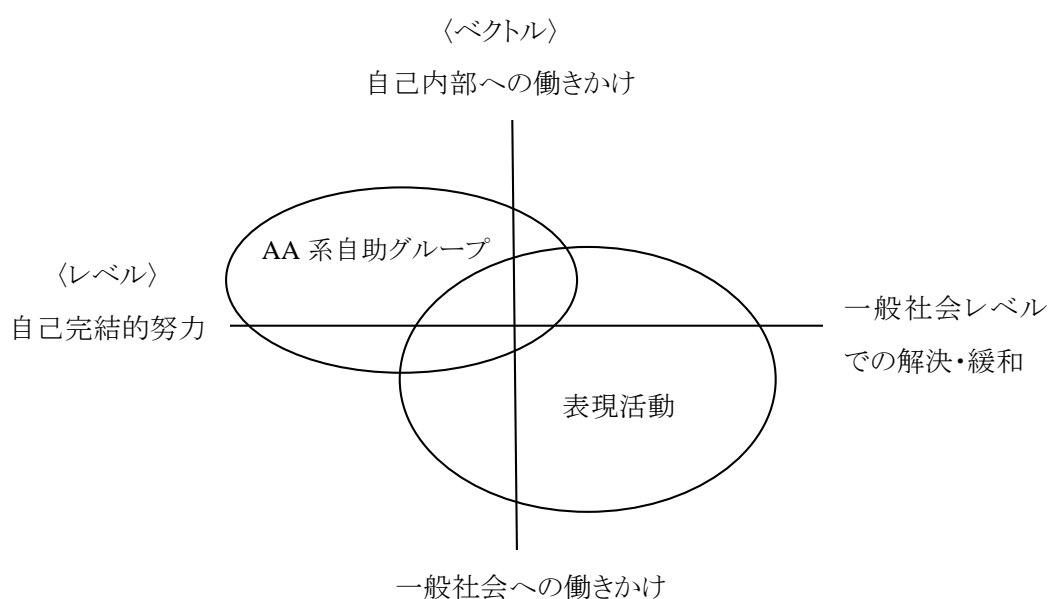


図 45 病気の表現活動の位置づけ(筆者作成)

### 4.3.2 〈思考〉と〈参集の枠組み〉の軸における表現活動

当事者の活動をとらえる視点には、先に挙げた活動のレベルやベクトルの軸以外にも様々なものがあることが考えられる。たとえば、こわれ者の祭典のスタッフとして長年活動のサポートをしているミルさんは、自身がメンタルヘルス上の問題を抱えていたことがあり、パソコンのチャット上でメンタルヘルス系のつながりをつくり、多くのオフ会に参加したという。その際、多くのグループはネガティブ傾向にあり、長続きしないことがあったという。そしてこわれ者の祭典の魅力のひとつはポジティブではなくとも、ネガティブにならないところであるという(2014年9月14日聞き取りより)。また、特定の病気ではなく、「生きづらさ」という枠でなされることもこわれ者の祭典の特徴だという声もメンバー(長男さん)やミルさんから聞かれ(2014年9月14日など)、こうした点も表現活動として



の特徴であると考えられる。しかしながら、たとえば「アルコール依存ならば、当事者と非当事者の境ははっきりしているが、アダルトチルドレンとなると曖昧なところがある(2014年9月5日、月乃さんより聞き取り)」といった考え方もあり、いわばアダルトチルドレンも「生きづらさ」と似たような曖昧さを有し、「生きづらさ」で集まるのが絶対的な他の当事者活動との違いというわけでもないように見受けられる。これらの例を参考に、たとえば、「ネガティブーポジティブ」、「特定の疾患ー生きづらさ」という軸を想定し、そこに病気の表現活動を落とし込み、他の当事者活動との重なりと表現活動の傾向を見出すことも可能である(図46)。こうした分類から考察された図からは、病気の表現活動は他の当事者活動と大きな共通点を有すること、当事者活動はそれぞれに特徴的で多様な広がりを持つことがうかがえる。

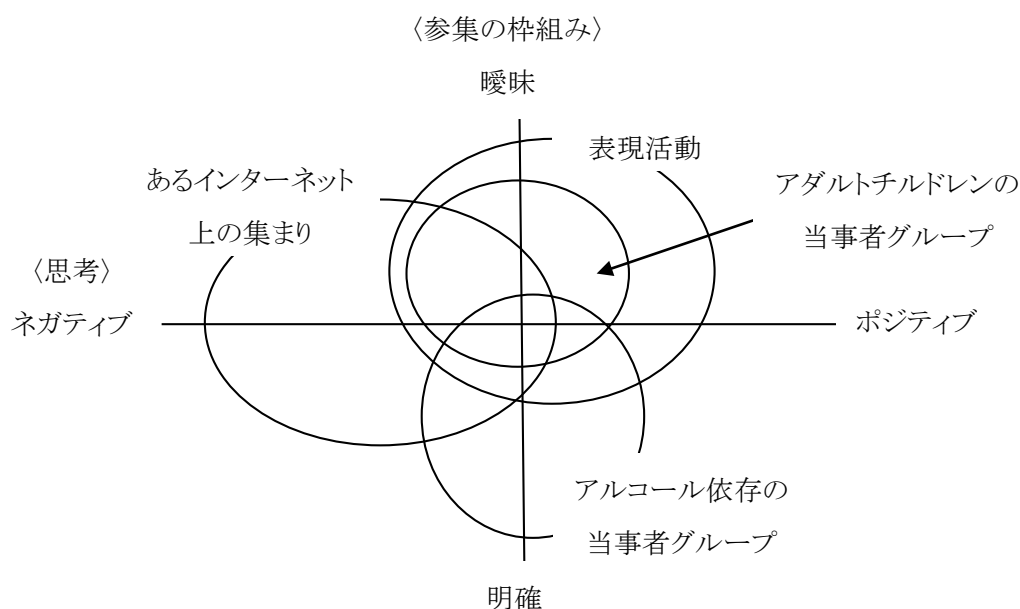


図 46 〈思考〉〈参集の枠組み〉の軸を想定した表現活動の位置づけ(筆者作成)

### 4.3.3 「表現活動」の中での分類

また、同じ表現活動<sup>111</sup>といえども、表現活動と一括りにできるものではなくそれぞれに特徴がある。たとえば、精神疾患を抱える当事者による、ユーモアを多く交えた活動を行い、幻覚&妄想大会のようなパフォーマンス的要素があったりと、病気の表現活動的な要素のあるべてるの家の活

<sup>111</sup> 本論文では「表現活動」とは本研究フィールドの活動を指しているが、ここでは本研究フィールド以外の芸術活動やステージ上での体験発表等を行う活動を含めて例外的に「表現活動」と表している。

動がある<sup>112</sup>。そして、こうしたよく知られている表現活動とこわれ者の祭典や K-BOX などの表現活動とは違いもある。こわれ者の祭典のメンバー(月乃さん, 脳性マヒブラザーズ)がべてるまつり(2011年11月)にゲスト出演した際の経験を通して、月乃さんは、「よく似たようなものだと思っていたが違う」、「べてるの家は素のままの表現をしているが、こわれ者の祭典は『つくっている』」、つまりはエンタテインメント、パフォーマンスとしての要素が多く加味している、という印象があったと感想を述べていた。

同様に、同じ表現活動といえども、K-BOX とこわれ者の祭典では、こわれ者の祭典が自らの経験を元にした詩の朗読パフォーマンスがパフォーマンスの内容として多いのに対し、K-BOX の表現内容としては、朗読パフォーマンスもなされるものの、歌であったり、ジャズピアノであったり、絵画やイラストであったりと、いわば芸術作品が多いといった違いもある。アウトサイダー・アートなど芸術活動や実践の多くもまた、自らの経験をそのまま表現するというよりは病気や障害などの経験や特性を活かした枠組みを突き抜けたような魅力が特徴となり(服部 2003)、芸術的価値が作品に見出せることが考えられ、その点において K-BOX との類似点が見出される。

このように考えると、表現活動といえどもまたその内実は多様であり、こわれ者の祭典が素のままの表現に加え、「つくられた」表現をしたり、K-BOX が表現内容としては、自分の経験というより、音楽やイラストなどの作品の制作といった要素が強いといった、当事者による表現活動等のあり方の多様性が見出せる(図 47)。

---

<sup>112</sup> こうした活動も表現活動のひとつとここでは暫定的にとらえることにする。

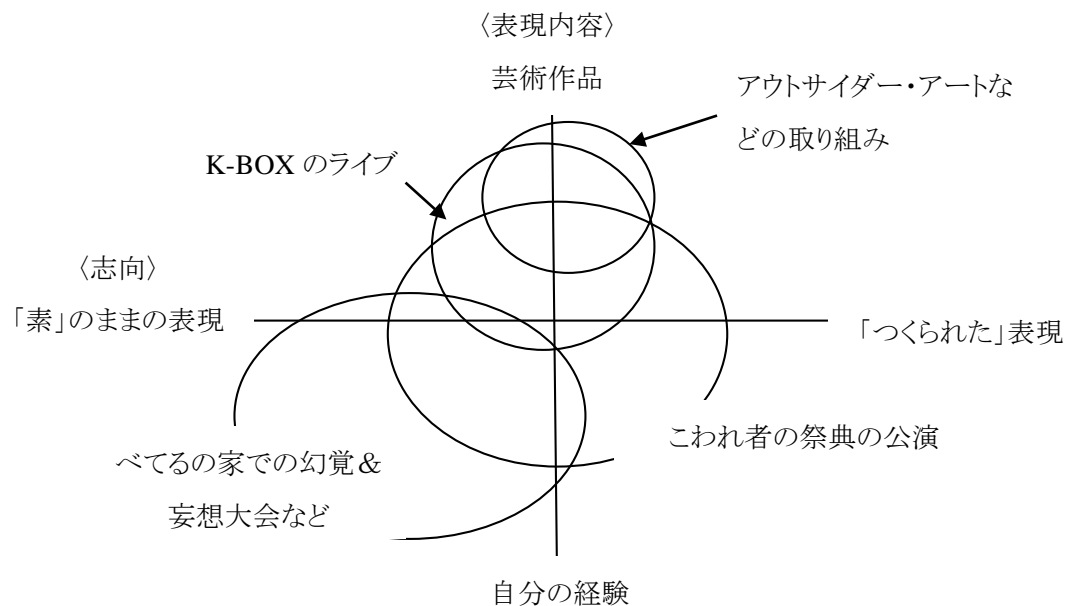


図 47 表現活動の中での分類(筆者作成)

## 4.4 当事者活動の特性の重なりと多様な当事者活動のひとつとしての表現活動

病気の表現活動と、自助グループを含む他の当事者活動の特性の重なりや違いを検討することは、病気の表現活動がいかなる活動であるのかの理解を深める上で、また、表現活動からは得られた知見が当事者の知識としてどれだけ考察に値するものであるのかを検討する上で重要である。そして当事者活動としての表現活動をとらえようとした際に気づかされるのは当事者活動の多様さと、ひとつの当事者活動が有する多様な側面である。当事者活動と一言でいっても多様であるし、その中のひとつのセルフヘルプ・グループといえども多様なグループがある。また、同じ活動やグループ、たとえば典型的な匿名性や政治的活動をしないようなタイプの当事者グループであっても、そうではない側面もある。

こうしたことから、病気の表現活動は特徴的な活動でありながら、他の当事者活動と決定的に異なる点は意外と少ないのではないかと思われる。そして、病気の表現活動のみが突飛な活動なのではなく、他の様々な当事者活動と特性が重なりあうものであることが考えられる。いわば表現活動は自助グループなどの様々な当事者グループと決定的に異なる点が意外と少ない点で当事者の活動のひとつとしてとらえられ、また、様々な活動と異なる点を含むことで、既存の当事者の

活動では見出されにくかった当事者の知識を照射できる可能性を有していると考えられる。

本章においては、補助的なフィールドワークを中心に、他の当事者グループの実践を提示しながら、それらとの比較を通して表現活動の位置づけを考察した。その結果、表現活動は大まかな特徴としては、対社会的な意識と実践の形態を有すること、曖昧な枠組みで参集すること、ネガティブに陥らないこと、パフォーマンスとしてつくられた表現をすること、といった特徴があることが考えられた。しかしながらこのような特徴は、あるひとつのグループと比較するならば違いといえるかもしれないが、自助グループ全般、当事者活動全般としてみるならばそのような特徴を有する活動が存在しないわけではない。また、自助グループを定義することは難しく、とらえ方によっては表現活動も自助グループとみなすこともできる。表現活動においては、あるタイプの自助グループでなされていることが、パフォーマンスイベントにしても、打ち上げ交流会などの場においても多く取り入れられている。月乃さんが作品でよく表現し、表現活動の根底をなすひとつのテーマといっても差し支えない「仲間」という言葉も、元々は自助グループで使われているものであることが度々示される(NHK ONLINE 2014 など)。こうしたことから、表現活動の起源のひとつは紛れもなく自助グループであり、自助グループを基盤とし、多くの共通点を持たせながらエンタテインメント性などの要素を加味し、表現活動は形作られていることが考えられる。このように、表現活動と、自助グループはじめ他の当事者活動は重なり合う部分が多くある。これらのことから、表現活動は、特徴的な活動でありながら、多様な広がりをもつ当事者活動のひとつととらえられるように思われた。

本研究は本研究フィールドに特有の知識のみを見据えるものではなく、病気の表現活動の実践を通して、「当事者の知識」を考察することを目的としている。病気の表現活動は特徴的な実践でありながら他の当事者活動と多くの共通点を有していることから、表現活動で見出される知識は、ひとつの当事者活動に存在する知識として考察しようと考えられる。また、それでも病気の表現活動が他の当事者活動と比べて特徴的な要素があることで、今までの当事者の実践にも含有されていたが、未だ明らかにされていなかった知識が照射され、それらを明らかにすることが可能になることが考えられる。当事者活動の形態も多様化しており、病気の表現活動もまた他の当事者活動と多くの共通点を持つひとつの当事者活動である。ある特定のタイプの自助グループの多様な側面と共に、どのタイプにも広くまたがるような要素の強い表現活動のような実践の双方を見据えることにより、当事者の知識の理解を深めることができると考えられる。こわれ者の祭典や K-BOX の実践は、様々な要素をあわせもつ特徴ある当事者活動のひとつであり、当事者の知識を考察するのに適したフィールドであるように考えられる。

なお、本章においては、自己内部や一般社会への働きかけといった視点を元にした枠組みが提示されているセルフヘルプ・グループとの比較を行ったが、当事者の実践を整理するには様々な視点が考えられる。本章で示した〈参集の枠組み〉、〈ポジティブ思考ーネガティブ思考〉、〈表

現内容)、「素」のままの表現—「つくられた」表現」といった視点もひとつの視点であるが、別の視点も想定しうることが考えられる。今後は当事者の活動をとらえる軸を整理して行くことで表現活動の特性がより明確になると考えられる。

本章では、当事者活動としての表現活動を考察し、表現活動への理解を深めた。そして、表現活動は特徴的なものでありながら、他の当事者活動と特性が重なり合う中で位置づけられること、当事者活動と一言でいえども多様であり、同一グループにおいても多様な側面を持つこと、表現活動が、特徴的でありつつ、同時に自助グループはじめ、他の当事者活動と多くの共通点を有しながら実践を展開していることを本章で確認した。これを踏まえ次章からは表現活動から見出せる当事者の知識について考察する。

# 第5章 表現活動における「生きづらさ」のつながりと知識

これまで本論文において、表現活動の概要や実際を示してきた。また他の当事者活動との比較を通して、当事者活動としての表現活動の理解を深めてきた。本章においてはそれらを踏まえながら、リサーチクエスチョンに示した、当事者間、自己、社会とのつながりという枠組みに沿いながら、表現活動にみられる「生きづらさ」のつながりとそれをつくる知識について分析する。

## 5.1 当事者間のつながりー共感, 差異, 越境

### 5.1.1 「共感」によるつながりー差異ある中での共感

最初に、当事者間のつながりについて検討する。病気の表現活動にかかわる人々は活動を通して当事者間でつながっている。K-BOX では日常的にレッスンの場を通してパフォーマンス活動を作り上げるために集まっており、こわれ者の祭典も定期的なイベントに向けての打ち合わせや共演などを通して当事者であるメンバー同士の関係を継続している。観客にも当事者の人々が多く、パフォーマンスの聞き手として、そしてイベント後の交流会などを通して観客同士、また表現者と観客間でつながっている。さらにはパフォーマーとしてではなく、スタッフとして活動に参画している当事者もあり、スタッフとして、表現活動にかかわる他の当事者の人々との関係を築く人もいる。オンラインでのイベントの動画配信を通して活動を見る人などを含めると多くの当事者が活動を通して様々な形でつながっているといえる。

病気の表現活動は、このようにイベントなどを通して様々な当事者間のつながりをつくっている。そしてそのつながりは「生きづらさ共同体」と表されることがある。それはたとえば以下のように表現される。

月乃:そうですね。私も 27 歳ぐらいのとき病院に入院して、私は自分で死にたいと思っていたけど、何か「生きづらさ共同体」みたいな、今日の集まりもそうですけど、そこにたまたまつながることによって、皆さんから命をもらっているんで。(2009 年 12 月 23 日、こわれ者の祭典)

「仲間」という詩には以下のように「共同体」としてつながることを願う文言が含まれる。

僕と同じ匂いを感じる人たち

それは僕の仲間だ

僕と同じ生きづらさを持つ人たち

それは僕の仲間だ

(略)

生きることができない者同士が

悶え苦しみながらも

ともに生きていく共同体を作ることができたら(月乃光司作「仲間」より)

表現活動は「生きづらさ共同体」「仲間」という生きづらさのつながりを意識している。「生きづらさ」によるつながりは、こわれ者の祭典の特徴的なところであることをスタッフのミルさんやメンバーの長男さんは述べていた(2014年9月14日など)。表現活動に(特にこわれ者の祭典に)特徴的な「生きづらさ」は曖昧さを含む言葉で、「生きづらさ」という括りは特定の疾患などに限らず、ある程度の広がりをもってつながりをつくることを可能にする。このように苦しみという点で共通しながら、広がりをもつ「生きづらさ」を軸として、「仲間」としてつながることを表現活動は願っていると考えられる。

「仲間」という言葉について月乃さんは以下のようにラジオ番組で語っている。

はるな愛:月乃さんは、この「仲間」という詩をどんな思いで書かれたんですか。

月乃光司:そうですね。私、あの、精神科病棟に入院して、どん底だったんですけど、アルコール依存症の自助グループっていうのを病院に紹介されて入ったんですね。ああい  
うセルフヘルプって「仲間」っていうんですよ。私、初めて行ったら、「今日、来た仲間、  
座ってください」って言われて、「え、今日会ったばかりなのに仲間?」と思って。仲間  
って言う言葉がすごく違和感あったんですね。なんか、

「飛び出せ青春」、みたいな感じで。だけど、通ううちに、同じような痛みとか、ぶざまさ  
とか、あと・孤独ですね、やっぱり。すべてあの、メンタルでも、あるいは身体でも、あの、  
障害があって生きづらさがあって、最終的にはどうしようもない孤独みたいなのをみんな  
共有していると思うんですけども、そこでつながる人が仲間なんだってわかった時に、  
「仲間」というのが私の中で重大なキーワードになって。で、今も私、生きているのは、仲  
間のおかげなんですけれども。(NHK ONLINE 2014: 9)

表現活動において、当事者だからこそ分かり合える共感重要である。「仲間」というつながりも

「孤独」を共有し、共感することによってつくられていると考えられる。ある当事者の観客は「健常の友達もいるけど、自分のことを話すと『重い』といわれる」と語っていた(2014年11月29日)。このような言葉にみられるように、やはり当事者にしか分かり合えないことを話し、共感する場として機能することは表現活動において重要なこととなっている。共感イベント上のトークでもなされる。たとえば、次のように、YOPPYさんとアイコさんは、他人の視線が気になってつらい、という点において共感を示す。

アイコ:ほんとにちょっとうつっぽくなるときってほんとに何でもない会話なんですけど、たとえば、こう目が合っちゃってそらしたら、偶然そらただけで、あ、この人私のことすごく嫌いになったんだって思い込むんですね。

YOPPY:わかります,わかります。

アイコ:後から思うと、なんだったんだろうって思うんですけど。

江口:うなずいてましたね。そういうのあるの？

YOPPY:常にあります。(2009年2月28日,こわれ者の祭典)

また、アイコさんは、以下のような詩をつくり、「同じだね」と共感することの重要性を表現する。

「同じだね」ってそう言ってくれたときに

誰かの苦しみの中に自分の過去を少し重ねたときに

「ああ それ分かるわ」って笑ったときに

苦しんできてよかったのかもしれないとほんの少しだけ思う瞬間があるんです

そのために生きてる(2012年9月22日,こわれ者の祭典など)

ライブなどの活動に「笑い」が起こる際にも共感が生じる。たとえば、K-BOXのライブ時(2014年6月15日)において、純名さんが自らの診断名などについて話しているときに、「人格障害というイメージが悪いから、パーソナリティ障害とかってなったみたいですけど、まあ似たようなものですけどね」という内容を話した後に、会場は軽く笑いに包まれた。こうした笑いは、病名などにまつわる意識や経験の共感から生じているように感じられる。

共感でつながる場として、こわれ者の祭典の公演終了後の打ち上げ交流会も重要である。思い思いに経験を語りながら、各々のテーブルで観客同士、観客と表現者を交えてつながりがつくられていく。ある新潟公演では打ち上げ交流会にて徐々に会場から観客が帰宅し、10名弱の少人数の参加者が最終的に会場に残った際に、近隣のいくつかの精神科の医療機関の話で盛り上



がっていた(2014年9月21日)。このように、たとえば精神科病院に通院している、といった共通性を持ち、共感できる人々がつながる場と表現活動やその後の交流会はなっている。表現活動において、共感は極めて重要なものとして認識されており、共感は当事者間のつながりを作るうえで重要な役割を果たしている。表現活動は「生きづらさ共同体」「仲間」というつながりを共感をもとにつくっているといえる。

表現活動のつながりは、共通した経験を基にした共感によるところが大きい。しかしながら一方で、「生きづらさ共同体」「仲間」といったつながりにおいては、そのつながりを構成する人々の経験の多様性もまたひとつの注目すべき点となる。表現者の疾患、経験などは共通点がありながらも多様である。たとえば表現者には、アルコール依存症の人もいれば、摂食障害の人もいる。またそれを見に来る観客やゲストもまた同様に多様な経験を有している。

月乃さんは、依存症などのみならず、様々な障害などの特性を視野に入れて活動を行っており(月乃 2013)、「様々なマイノリティ」と一緒にイベントを行えることをうれしく思っている<sup>113</sup>。そして自作詩の「仲間」で表現される「仲間」には、多様な疾患や状態像が含まれることが表現される。

幻聴幻覚妄想, 全世界 2500 万人の統合失調症の皆様

僕の仲間だ

人格障害, 解離性障害, 性同一性障害, 発達障害

僕の仲間だ

「本当はさみしかった」「本当は認められたかった」

「本当は愛されたかった」「本当は僕のそばにいてほしかった」

僕と同じ葛藤を, 持ち続ける人たち

僕の仲間だ(月乃光司作「仲間」より)

このように、「生きづらさ共同体」や「仲間」と表されるつながりを構成する人々には多様な経験を有する人々が含まれる。そうしたことから、「生きづらさ共同体」「仲間」にみる当事者間のつながりは、差異ある中での共感によるつながりととらえられる。

多様な経験がある中を当事者間でつながる仕掛けは表現活動の様々な状況の中に埋め込まれている。たとえばイベントのゲストとして HIV 陽性者(2013年9月8日)、セクシュアルマイノリテ

---

<sup>113</sup> 2014年11月29日イベント時トークなどより。この日東京で行われたイベントには、自閉症スペクトラムやセクシュアルマイノリティ、家族問題、高次脳機能障害などの当事者によるパフォーマンスがなされた。そしてそこでは様々なマイノリティとイベントができることをうれしく思っている旨の発言がなされていた。

ィ(2013年1月13日)が招かれた際は、ゲストを含めた出演者に共通したテーマがイベントに設定された。HIV陽性者がゲスト出演する際には、「偏見」、いじめられた経験を持つセクシュアルマイノリティのゲストが呼ばれた際には、「ストップ!いじめ」と、多様な経験の中での共通したテーマが設定され、イベントが行われていた。このように、ひとつの仕掛けとして多様な経験の中に含まれる共通項を設定することで、差異ある中での共感が可能になることが考えられる。月乃さんはラジオ番組にて、自作詩「仲間」を朗読し、そこでラジオ出演者は、以下のように語っている。

はるな愛:なんか、印象に残ったフレーズとかある?

グレース:後半にあった、やっぱり、愛されたいと思っていた・・・

はるな愛:「本当は愛されたかった」・・・

グレース:「本当は愛されたかった」というところとか・・・

はるな愛:「本当は認められたかった」・・・

グレース:そうですね。やっぱり障害者になると、私の場合はですけれども、なかなか認められなかったりとか、「できへんやろ」って思われたりとかで、けっこう否定的な言葉を言われてきたりとかしてきたので。やっぱり、ああ、みんな障害が違って、そんな気持ちになっている人は仲間なんだよ、って言うてくれたら・・・すごく楽になります。(NHKONLINE 2014:

8)

ここでは、障害が違う人もまた、「障害は違って」気持ちを共感できる「仲間」であることが示されている。また、「ダメな部分」での共感が語られることもある。

アイコ:わざわざお休みの日に来て、そして、イベントが終わったあとに、「自分もこんなふうにダメなんです、ダメなんです」っていうことを教えてもらったときに、ものすごく気持ちが楽になるんです。私にとっては「こうしたら治るよ」って言われることより、「あっ、それ、分かるわ」って言われた方が、すごく気持ちが楽になるんです。(2012年7月15日、こわれ者の祭典)

このように、疾患名等とは異なる同じ共通した感情や思いなどで共感することで当事者としてのつながりがつくられる。「生きづらさ共同体」「仲間」といったつながりをつくる上では、多様な疾患や状態像の経験を有しているが、その中で「痛み」や「孤独」、「生きづらさ」、「ダメな部分」というゆるやかな幅を持つ共通項が設定される。K-BOXのRenkaさんは、「いろんな症状をみんな持っていて、細かいところはわからないくても、みんな心の病で尊敬しあっていけるのがよい」といった内

容の発言をしていた(2014年11月24日 K-BOX イベント時)。この「心の病」でのつながりは「生きづらさ」と同様、差異ある中での共通性でつくられていることが考えられる。

表現活動では、既存のグループにはないつながりがつくられている様子もうかがえる。あるイベントに来ていた人は、こわれ者の祭典に来る人には『「ちょっと病んでいる」といった感じの人が多」というとの見解を述べていた(2014年11月29日)。これは健常者同士でも障害者同士でもないつながりが表現活動で作られている可能性を示している。このように、ゆるやかな共通項を新たに設定することで、既存のグループには入りにくい様々な困難を抱えているといった、どこのグループにも属せない人々のつながりがつくられる道筋が表現活動によって開かれることが考えられる。表現活動では、共感により当事者間でつながっている。共感はたとえ疾患や経験に差異があれども、そこに共通項を新たに見出しながらなされていく。

### 5.1.2 差異の活用によるつながり

表現活動を通したつながりにおいては、共通性や共感が、時にそれが差異ある多様な経験を有する人々同士のつながりであれども極めて重要であることが示された。加えて、多様な人々が集まり、パフォーマンスする表現活動では時に、差異に価値をおくような実践もみられ、単に共感に収斂されない方法でつながりがつくられていることが考えられた。たとえば、以下のようなやりとりで示されるように、舞台上で身体障害と精神障害の違いを際立たせるようなパフォーマンスもなされることがあった。

DAIGO:ぶっ飛ばしたいのはねえ、五体満足なくせに「生きづらい」とか「どうしていいか分からない」とか、そういうばかな精神障害者ですよ。

(略)

DAIGO:俺なんてね、歩けない、しゃべれないっていう脳性マヒなんですけど、こいつら、普通に歩いてしゃべれるのに、生きづらいとか、死にたいとか(笑)。

(略)

月乃:俺だって頭髪障害<sup>114</sup>だよ。今、頭髪障害、身体障害者5級に認定するように直訴してるんだよ。身体障害者だよ。おまえはこの苦しみが分かるか。(2011年7月17日こわれ者の祭典東京公演)

こうした月乃さんと DAIGO さんが罵り合うようなやりとりを月乃さんは「罵詈雑言合戦」といい、ま

---

<sup>114</sup> 月乃さんは髪が薄くなることを「頭髪障害」といい、ネタにすることがある。

た、「舞台上で罵詈雑言合戦やりたい」と述べている<sup>115</sup>。このように表現活動は、お互いの共通点に共感しながら、同時にお互いの分かり合えない状況をネタにしてパフォーマンスを行うことがある。差異をパフォーマンスやトークで積極的に用いるのは、笑いを引出し、エンタテインメントとしてイベントの価値を高める上で有効であることが考えられる。また、差異を用いたパフォーマンスは、単にエンタテインメントとして面白いのみならず、病気や生きづらさを抱えているという点で同じ人々でさえも、お互いに分かり合えない状況が多々あることを示すものとも感じられる。

差異は必ずしも当事者間のつながりの中で排除されるものではないことがうかがえる。笑いを生み出すこともあれば他の価値が付与されることもある。K-BOX で活躍する純名さんは、「人間関係の勉強のために私は K-BOX にきた(2012 年 4 月 15 日、K-BOX ライブ時トークより)」という。また、月乃さんは次のようにいう。

月乃: 傷つくことがもう生きることのスキルアップなんですね。だから、仲間系でちょっと傷つく訓練を、もっと社会に長いスパンでいれば、出たときにもっと傷つきますから、仲間系の微妙な傷つき方を繰り返していくと、傷つき慣れるんです。(香山リカのみーんなビョウキだね DVD より)

また、著書の中で、傷つく体験をスキーで転ぶ体験にたとえ、次のように記している。

スキーで転ぶことは生きることで、「恥をかくこと、傷つくこと」だと思う。それは苦しいことかもしれないが、何回か経験すれば慣れてしまい、余計なプライドも消えて(かつての僕はなぜか異常にプライドが高かった)、生きられるようになっていく(月乃 2011: 109)

これらからは、「仲間」内でつながることは、傷ついたり、恥をかいたりして、傷つくことであって、そうした経験には人間関係を学ぶ意義があることがわかる。また、アイコさんは、「ダメダメ」な姿をさらす人をみて救われたことと共に、「他の生き方」を知ることができたことを語る。

江口: ピアパワーということがテーマですけど、アイコさんにとってそういう支えとか、そういうものって、どういう？

アイコ: そうですね。私はこわれ者に入る前は、本当に学校にも、家にもあんまり居場所がないなって思っていたんですけど、みんなと一緒にうまくできないときは、先生とか、周りの大人って、「こういうふうにしなさい」とか、「みんなと同じくしなさい」というふうに、みんな

---

<sup>115</sup> 2014 年 3 月 8 日、月乃さんのツイッターによる発言より

なちゃんとした大人たちしかいなかったんですけど、こわれ者とかに出会って、もう 10 年も一緒にいるんですけど、すごくみんな本当に舞台下りでもダメダメで、本当に。

DAIGO:失礼だろ。

アイコ:それで、そういう自分以外のダメな人とか、かっこわるいところを自分から言う人たちに会ったのは初めてだったんですね。それで、それまでの周りのかっこいい大人たち、理想の大人たちみたいなものに、「こうなりなさい、こうなりなさい」って言われてできなかったときに他の生き方をたくさん知ることができて、治し方じゃなくて、手段をたくさん教えてもらったので、それで自分の居場所ができるようになった気がします。

江口:月乃さんのダメサポートのお陰で。

アイコ:そうですね。DAIGOさんの凶々しさのお陰で。(2012年7月15日こわれ者の祭典より)

このように、今まで会ってきた人と違う人と会うことで「生き方を知る」ことができることが語られる。生き方を知ることの意義は、「生き方の参考になった」とのイベントのアンケートの回答<sup>116</sup>などにも記されているところであり、こうした違いに価値をおく視点は、表現活動においてみられるところである。K-BOXでは、わたん<sup>117</sup>さんが、K-BOXに入って「いろんな人たちを見ることで自分のキャパが広がった。K-BOXのメンバーは個性が強く、いろんな人がいるんだなということが分かり、ひきこもりの時よりも孤独でなくなった」と述べていた(2014年11月24日、K-BOXイベント時)。このように、共通性と共に、様々な差異に触れることで、新たな生き方を獲得する、孤独が和らぐといった意義ある体験を表現者や関係者はしていることが語られる。

差異は生きづらさを抱える者同士がつながるパフォーマンスの場を作り上げる資源になると同時に、傷つき、人間関係を学ぶつながりをつくる資源となる。時に差異があることで、生き方を知り、かえって孤独が解消されたりすることがある。このように当事者は表現活動において共通性による共感を大事にしながらも同時に差異の様々な利点を用いて多様な経験を有する当事者間のつながりをつくり、その価値を生み出している。

### 5.1.3 越境によるつながりー福祉, 芸術, サブカルチャー

病気の表現活動では、病気や障害などを持った当事者同士のいわば福祉的な活動であると共

---

<sup>116</sup> 2014年9月14日イベント時のアンケートなど

<sup>117</sup> わたんと Wattan は同一人物であるが、わたんはアート部門で活動する際に用いられ、Wattan はミュージック部門で活動する際に用いられるステージネームとなっているとのことである。

にエンタテインメント性が重されるパフォーマンス活動でもある。また、こわれ者の祭典はアンダーグラウンドなサブカルチャー的要素が強い活動であることが特徴的な点となっている。こうしたイベントの特性は、当事者間の今まで作りえなかったつながりをつくっていることがうかがえる。月乃さんは以下のように記している。

イベント(こわれ者の祭典等)は自分達が社会的少数派であることを前提として、その中で共感、共同体意識を持つことで「生きづらさ」の多い現実を生き抜いていこう、ということコンセプトとしています。秘密結社めいた共感、つながりを深めるために、お笑い、下ネタ、差別用語を多用します。必ずしも「人間みな同じだ」ということはテーマとしていません。切り口としては、サブカル内アングラであり、その「石の下の虫」めいたヌル<sup>118</sup>のようなつながり感が、「生きられない人間が、ギリギリ生きられる力」を得ることができるきっかけとなるのでは、と考えています(月乃 2014)。

このようにサブカルチャー的要素を活かして、当事者間の強固なつながりをつくることは表現活動(特にこわれ者の祭典)の狙いとするところのひとつとなっている。加えて、表現活動も様々であり、幅の広い聞き手を見据えた活動もなされている。特に活動が、福祉的のみならず、芸術やサブカルチャーの分野に跨ることで、多くの当事者の活動へのアクセスを促していることが考えられる。

こわれ者の祭典、K-BOX 共にユーモアを交えたり、パフォーマンスイベントとして観客に楽しんでもらおうとしている。K-BOX は団体としてライブを行う時もあれば、ショッピングセンターでメンバーがライブを行ったり、地域の祭や企業のイベントに出演したり、新潟県内の地方のゆるキャラのテーマソングを作り、イベントに出たりとさまざまな福祉的な活動の場以外の場でパフォーマンスを行っている。K-BOX は当事者による「プロダクション」として自らを規定し<sup>119</sup>、質の高いパフォーマンス、作品を提供することを意識する。そして、福祉的活動であると共に時に芸術、作品の創造を志向した側面を有する活動としての側面が強調される。このように、表現者は時に芸術的な側面

---

<sup>118</sup> 「ヌル」とは何であるかと、SNS を通して筆者が月乃さんに尋ねたところ、「私、プロレスの味方です」という本(村松 1994)に記載があることを教えてもらった。そこには、「げんげ」という「下魚の類(村松 1994: 218)」の魚の特徴として、「本体をトロリと包む寒天状のヌルの存在が一大特徴(村松 1994: 218)」と説明される。そして、げんげは「しよせんは下魚(村松 1994: 219)」として切り捨てられるモードも店に漂えば、逆に、「げんげを注文する客同士には、何か微妙な連帯感めいたものが生じるらしい(村松 1994: 219)」と記されている。月乃さんはこの「ヌル」をたとえに、虐げられ、排除されがちな人々、アンダーグラウンドな場で集う人々のつながりについて記していると考えられる。

<sup>119</sup> K-BOX フライヤー、オフィシャルホームページなどの紹介より

を打ち出し、時に様々な場で、活躍の場を広めるために動いている。

そして、福祉的な場以外の場でも、さりげなく表現者が当事者であること、表現活動が当事者による活動であることを示すことも多い。K-BOX の多様な場でなされる活動では、ほとんど障害の経験などの話がされないこともあるが、自己紹介やパフォーマーの紹介において、軽く K-BOX の紹介と共に、病気や障害を持っていながら活動をしている旨が紹介されたりする。観客は祭に来て人々であったり、ショッピングセンターの客であったりと、病気や障害とは関係のない人々も多く含まれてくる。そこでパフォーマンスで存在を示し、病気の内容が少しでも触れられることで、病気や障害を持つ人々の存在や K-BOX のことがより広い範囲の人々に周知される。セルフヘルプ・グループの限界として、参加する人が問題を抱える人のごく一部であることが挙げられている(岡 1988)。当事者内部においても未だつながりえない人々は多数存在するのであり、エンタテインメントとしての活動の特性をもたせ、福祉的な枠組みを超えて多くの人々の目に触れるような活動を展開することは、当事者であれども今までつながりえなかった人々のつながりを形成する上で有用であると考えられる。

また、表現活動では、ゲストを目的に来場する人が多数見受けられることもある。共感することが目的の人が多いが、パフォーマンスを楽しみに来る人もいる。パフォーマンスの場やサブカルチャーイベントであることで、より気軽に、もしくは福祉活動とは異なった観点で多くの人々が活動にアクセスできることが考えられる。K-BOX のメンバーには、大きな会場でのイベントで K-BOX の活動を知り、徐々に K-BOX のメンバーとして活動するに至った人がいた。表現活動は福祉やパフォーマンス、サブカルチャーといった複数の特徴を有することで人のアクセスの場を広げており、それが当事者間のつながりをつくる一助となっていることが考えられる。

表現活動が文脈の越境を通してつながりをつくるということは、表現活動が観客を引き付けるといふ意味のみならず、当事者である表現者間のつながりをつくるという側面もあることがうかがえる。K-BOX は、単にプロダクションとして作品を生み出すのみならず、K-BOX を通してひきこもりや心の病を持つ人がつながる場となっている。Kacco さんは、それぞれが個々でパフォーマンスなり、制作活動なり、音楽活動を行っていた人々が集う場に K-BOX になることを願っている(2014 年 6 月 15 日ライブ時トークより)。K-BOX の実践は芸術的立場と福祉的な立場の双方を見据えたものとなっている<sup>120</sup>。表現活動は芸術と福祉の立場を越境することで、広く開かれた場から当事者のアクセスを可能にし、それぞれ個で活動していた芸術活動をする当事者がつながる場となる。病

---

<sup>120</sup> もっともここでいう芸術や福祉は単純に二分できるものではないと考えられる。当事者が芸術的才能に恵まれることがあることはいわれているところであり、療法的な観点から地域づくりといった観点に至るまで芸術活動のいわゆる福祉的意義も多くある。K-BOX においては Merry'z というバンドが、通信制サポート校に校歌を提供するなど、福祉と芸術が交わる場での活動も活発に行われている。

気の表現活動では、芸術や福祉の間を往来しながら、その重なりの中で活動をしなが、当事者間のつながりがつくられている。

以上に示されるように、病気の表現活動は福祉に加え、芸術的観点や、エンタテインメント性をもたせたサブカルチャーイベントであることで、広く今までつながりえなかった当事者のつながりをつくる入り口となっていることが考えられる。加えて、表現活動は、様々な当事者の活動へと人々をつなぐ出口的な役割を果たすことが期待されている。こわれ者の祭典では、多くのセルフヘルプ・グループなどの連絡先を紹介した案内を配布している。この案内はさりげない活動にみえて、ひとつの活動の重要な要素となっていることがうかがえる。セルフヘルプ・グループの案内についてはイベントにおいて以下のようになされる。

月乃: 今日、お手元に配布しました紙に自助グループっていうところがあるんですね。私も、実はアルコール依存症の自助グループのメンバーなんですけども、こうやってお互いにカミングアウトをしあって、お互いの生きづらさを共感し合う場所ってというのが、結構、実は、この福祉会館なんか、いろんな集まりやってるんですけども。そういった場所で、いつも話せない自分の痛みとか、恥ずかしいことを人前で話すと、すごく生きるの楽になるんで、何か一步そこに行ってみると、皆さんも生きるエネルギーがわいてくるんじゃないかと思うんで、ぜひ見てみてください。(2013年1月13日こわれ者の祭典)

月乃さんは活動の動機として、エンタテインメント性を持たせた活動をしたかったことと並んで、自助グループのことを知ってもらいたかったことを挙げており(2013年6月1日イベント時トークより)、多くの人に身近な自助グループや相談できる場所があることを知ってもらうことは活動の柱となっている。月乃さんは以下のようにいう。

月乃:(自助グループのことを知ったのは)やっぱり病院に入院したからなんですね。そうじゃなかったら、気づかなかったと思うんですよ。それが実は私のイベント活動の結構、根本なんですけど。イベントに来て下さったら、セルフヘルプのことを知らない人にも、今日みたいなセルフヘルプの話、よくするんですけど。そして、その会場で、いろんな引きこもりの会、依存症の会、とかいろんな会の一覧を書いて、みんなに配っているんですよ。その中で、自分の特性に合ったピアサポートにつながってくれたら・・・みたいなのが実は、イベントの趣旨の重要なことなんですね。(NHK ONLINE: 10(一部省略))

月乃さんは自助グループで救われたことをイベントがある度くらいの頻度で述べ、現在も複数の



自助グループに通っている。Kaccoさんは、ひきこもり関連の自助グループ組織にてリーダー的役割を果たしており、K-BOX所属のなみなみさんもAC関連のセルフヘルプ・グループに時折参加しているという(2014年11月24日イベント時発言より)。表現活動では、自らが自助グループなどの活動にかかわっていることや、そこで救われたことを述べられ、イベントをひとつのきっかけにして、生きづらさを抱える人々それぞれがそれぞれに合うつながりをつくってもらうことを表現者は望んでいる。

以上より、病気の表現活動は、様々な分野にまたがる活動を展開し、当事者の表現活動へのアクセスを促す、それに加えて様々な形でなされている当事者活動の中で自分に合った当事者活動につながるひとつの窓口になるといえる(図48)。

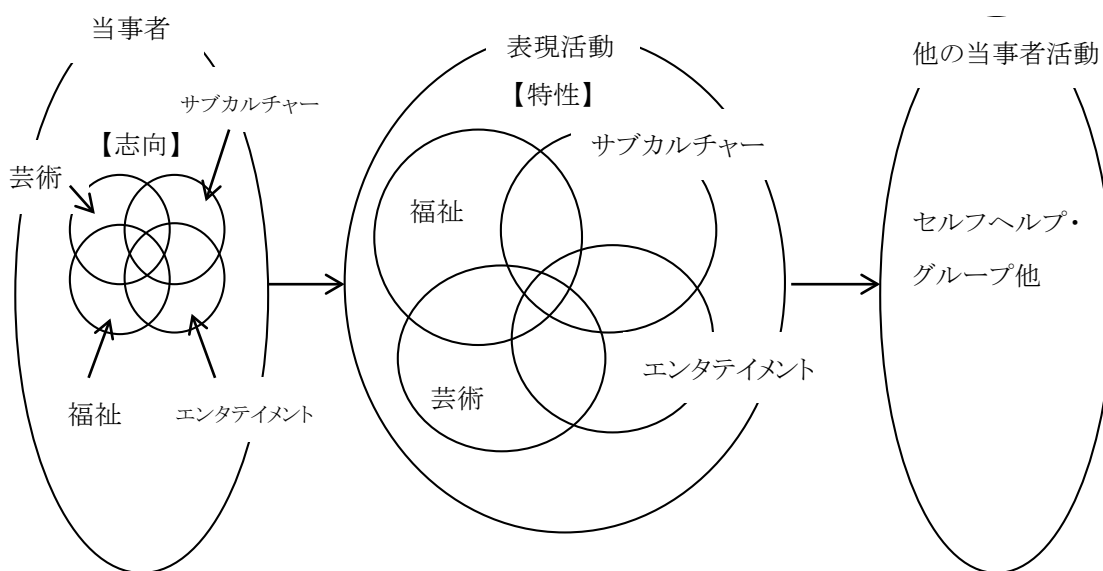


図 48 越境を通した当事者間のつながりの形成(筆者作成)

当事者がつながりをつくる場は多様であり、あるタイプのセルフヘルプ・グループが合う人もいれば、合わない人もいると思われる。そして、必ずしもつながりさえすればよいというものでもなく、自分にあつたつながりが探索されていくことが重要であるように思われる。表現者間では、対人関係を克服したわけではなくやはり今でも苦手であることが話題に上がる。ある日の打ち合わせでは、「ネットカフェの個室が落ち着く」ことがメンバー間で共感された(2014年1月24日)。また、同日「こわれ者の祭典はたまにしか会わないのがいい」という話も聞かれた。これはメンバー間の関係が悪いというわけではなく、それぞれに適した当事者間のつながりのあり方があることを示している

と考えられた。こわれ者の祭典にもいくつかの批判もあり、なじめない人もいるであろうし、K-BOXのような表現活動をするを基本にして、毎週のように集まりながらパフォーマンスを作り上げていくあり方が合う人もいれば合わない人もいるかもしれない。患者会に対して、「組織の一員となることに抵抗がある」「知らないグループには入りにくい」などの理由で拒否感を感じる人々がいることがいわれている(高橋 1998)。同じ活動であっても、人によっては有益である場合もあればそうでない場合もあれば、同じ人であっても時期によってある活動が有益であったりなかったりすることも考えられる。それでも自分なりにつながりを見出していくことができれば、それは孤立を抱える当事者のにとっては望ましいことであるように思われる。病気の表現活動は、越境することで、多様な志向を有する当事者がつながる入口になり、また別の活動へつながる出口となるという、表現活動を越えた当事者間がつながる仕組みを有していると考えられた。

## 5.2 自己とのつながり—価値転換と弱くある自己規定

### 5.2.1 価値転換

病気の表現活動で主に表現されるのは、表現者の経験であり、自分自身のことである。そこでは、自らの病気や障害などの特性の価値を転換することの重要性を表現する姿がみられる。たとえば Kacco さんは、「コンプレックスを個性に変える」ことをメッセージとして表現活動で発する。Kacco さんは女装してパフォーマンスをするスタイルをとって活動しており、それは、「コンプレックスを個性に」変えた姿であるとする。

**Kacco:** 私は小さい時から手が小さいとか足が小さいとか、比較的普通の男の子と比べたら華奢だったし、あんまり男の子っぽくなかったんです。で、親からは「男の子らしくしなさい」とか、学校へ行けば「もっと堂々として男らしくしろ」というのを散々言われてきてたんですね。

(略)

そういう(パフォーマンスの)世界に入った時に「個性が大事だよ」って。「個性があるからこの世界でやれるんだよ」という話をしてくださった人がいたんですよ、私に。「個性ってもっともっと出していいんだよ」と言われて、すごく楽になった。

(略)

じゃあ、それをステージから個性に変えて発信しちゃえということで、こういった衣装で常に私は今、ステージに立つ時にこのスタイルで上がらせていただいています。

実際それで発信し始めたら、いろんなところから逆にオファーをいただいてですね、中学校とか高校とか、大学もそうですけど、いろんなところからオファーをいただいて講演させてもらったりとか。

(略)

昔、学校からさ、そんなふうにくるって思わないじゃない。今そういう時代です(笑)。だから、学校でお話しさせてもらう時もこういった衣装で、今お話ししたようなメッセージも添えて皆さんにお届けしてるんですね。(2012年3月10日イベント時トークより)

**Kacco:**なんか、自分がおかしなところがあってもそれが個性だと思うとこんなに楽なんだという経験をして。そうしたら、ずっと嫌で自分から言えなかったですね、やっぱり、コンプレックスって、なるべく人の目には出さないように、言わないようにしていたんですけども、逆に人前に出せないコンプレックスを個性にできないのかなと思ったんですよ。(2013年6月1日イベント時トークより)

**Kacco** さんのいう、コンプレックスなどの負の側面を「個性」のようなポジティブなものに変えていくことは、当事者の自己規定における重要な戦略になっている。病気についての考え方についても **Kacco** さんは **K-BOX** のイベントのトークにてメンバーの躁うつ病の体験の内容が出てきた際に、「躁うつはうまくコントロールできれば表現にはよい方向に働く」といったことを述べていた(2014年11月24日)。これは単純に病気が悪いというものではなく、様々な症状も見方によっては、普通の人にはできないことができるという価値を有するという価値転換的な病気や症状の解釈ととらえられる。ある表現活動の観客の人は、自らが当事者であり、作業所に自分がよいと思う服装で行ったところ、社会性がないというように判断されたという経験をし、**Kacco** さんの女装パフォーマンスや「個性を大事に」という言葉に共感したと語っていた(2014年11月29日)。コンプレックスを個性に変える、個性を大事にするという **Kacco** さんのメッセージは負に見られてきた属性の価値転換につながると共に、「それでいい」といった現状への強い肯定感をもたらすことがうかがえる。

価値転換的な考え方としては月乃さんもまた述べるところである。月乃さんの「人生なんでもあり」という詩の中では、「アルコール依存症やひきこもりでよかった」との表現がある。

アルコール依存症になったから  
生きる痛みを知ることができた  
アルコール依存症になってよかった

そして、同作品に「神様、ぼくに生きづらさを与えてくださり感謝します！」と、「生きづらさ」がある人生を肯定していくあり方が示される。これもまた、苦しめられてきた病気や生きづらさに価値を見出すひとつのあり方となり、病気の表現活動においても、自分の身体や人生において、病気や生きづらさの価値を転換し、単に排除されるべきものとしてとらえられがちな病気や生きづらさに意味を見出していることがうかがえる。こうして表現活動においては、自らの負にとらえられてきた属性に価値を見出していく価値転換がなされ、そのあり方をメッセージとして活動を通して発せられている。

## 5.2.2 弱くある自己規定

表現活動において、病気や障害の価値転換をなすことは重要なことである。一方で、病気の表現活動からは、当事者は、自らの弱さやマイナスの側面を強調する自己規定をなすことが示唆される。たとえば、月乃さんは「会社ではダメ社員である」ということを時折たとえば以下のように表現している。

月乃: 普段、月から金まで会社員なんですけど、ものすごい、もう言葉にならないくらい無能会社員ですね。(2011年6月4日)

このような弱さやマイナスの側面を表していくあり方は、「現実の世界で、傷つきながら、恥をかきながら、歩いていこう。みっともなく生きよう。ぶざまに生きていこう。人に笑われて生きていこう(月乃 2006: 10)。「かっこわるく生きていきたい(月乃 2009: 11)」という表現にも表れる。これらは、価値転換と表される自己規定とは異なった、意図的、能動的に弱くあるあり方ととらえられる。月乃さんは、必ずしも多くの人から見て無能会社員とみなされるような会社員ではないかもしれないが、表現活動では、自分が無能会社員であることがよく語られる。コンプレックスについては、以下のように表現される。

容姿負け組の逆襲

コンプレックスは人生の隠し味

コンプレックスが人間の魅力

私が欲しいのは劣等感です

コンプレックスを、むしろ増やしていこう (月乃光司作「ラストサムライ」より)

こうした表現は、「コンプレックスを個性に」という考え方と類似しつつ、また異なるものとしてとらえられる。こうした表現からは、弱さを克服した自己を形作るもの、負に見られてきた特性の価値転換を純粹に示すものでもない、(そのような要素もありながらも)ただ、能動的に弱いままにあらうとし、それが人間の魅力を構成しているとの見解が見出される。月乃さんがほぼすべてのパフォーマンスの場で頭髪が薄いことをネタにして「頭髪障害」と表現することや、司会者の江口さんから病氣や障害の経験などをネタに笑われたりというイベントの進行がなされること、およびそれを受け入れ活用している表現者自身の姿も、笑われたり弱くあることを意図していることの表れの一端のように見受けられる。弱さやかっこ悪さを曝すことは聞き手、受け手に安心感をもたらす。たとえば以下のような作品中の文言がある。

僕の情けない生き残ってきた人生体験を聞いた高校生から手紙が来た。

その手紙にはこう書かれてあった。

あなたの話を聞いて、僕はとても安心しました。

こんな人でも社会復帰してるんですね。

こんなあなたでも生き残ってきたんですね。

僕はとても安心しました。(月乃光司作「僕はサバイバー」より)

弱くあり、それを表現することは、弱さや生きづらさを克服してきた姿を示すのとは対極的なものであり、聞き手を安心させる。克服してきた姿を示されることは克服できる可能性への希望が開かれると共に、できない自分を突き付けられることが考えられる。表現活動が示す当事者の自己規定は、「生きづらさ」を克服するモデルではなく、「こんな人でも生きていける」ことを示す弱くあるままの姿を示すモデルを提示する。そして、作品中には学校での講演で聞き手が安心したことが示されるが、アイコさんが「こわれ者とかに会って、もう 10 年も一緒にいるんですけど、すごくみんな本当に舞台下りでもダメダメで(2012 年 7 月 15 日イベント時トーク)」と話すように、表現者間でダメな人同士出会うことで救われることが語られる。また、過去を隠すのではなく、「恥ずかしいこととか、マイナスのことを」表現していくことが自分にとってもよいことで、「人から喜んでもらえる」と月乃さんは述べる。以下は月乃さんによる発言内容の一部である。

隠したいっていうか、自分の過去は隠していい面ばかり出すっていうか、まあある種ふつうの考えですけど、だけど最近逆にね、生きるのバツと楽になって今充実しているのは、逆に恥ずかしいこととかマイナスのことを思い切って言っているからで、それが結構生きる喜びなんだな、と思う。人からむしろ喜んでもらえるのはそういうことなんだって最近分かってきた。

(高橋ほか 2003: 52)

月乃さんが生き方を変える大きなきっかけとなった出来事として、自助グループでの「オープン・スピーカーズと呼ばれる、自分自身の体験談を発表する時間(月乃 2006: 8)」での出来事が挙げられる。そこでは「年のころ 50 歳前後と思われるスーツを着こなした立派な紳士のアルコール依存症者(月乃 2006: 8)」が以下のように言った。

その紳士は一呼吸置いてから、こう絶叫した。「今の私は、自分のアパートの 2 階の部屋から見える、窓の外を歩く女子高生を見ながらオナニーはしません！」それから礼をして、颯爽と退場した。(月乃 2006: 8-9)

この紳士との出会いにより、月乃さんは「自分のぶざまなところもみつともないところも普通なら恥ずべきところとして隠すべき場所を、さらけ出して生きていく生き方がある(月乃 2006: 9)」ことを学んだ。この経験については、月乃さんは多くの場所で語られているが、たとえば出演したラジオ番組では以下のように語っている。

月乃光司:あ、俺と同じだな、と思って。その時ね、生まれて初めて見たわけ。その、なんていうか……かっこわるくて変なことを堂々と言う人を(笑)。まあ、一種の「恥の博覧会」みたいなものになった時に、「恥をかいていけな」というのが自分が社会復帰できない大きな理由……それはちょっと親子関係もあるんですけども、それで、まあ、恥をかいても堂々としてさらけ出せる場所があれば生きていける、みたいなのが、その自助グループから私がもらった力なんですけどね。(NHK ONLINE: 9)

価値を落としていくあり方は、月乃さんはパフォーマンスにおいていわゆる下ネタを多用する傾向にもみられる。これはパフォーマンスの質を追求する立場としては「必ずしも褒められるものではない<sup>121)</sup>」と月乃さんは考えている。しかしながら「病気」の表現活動は、時にパフォーマンスとしての質の高さよりも、「くだらなさ」「素人としての魅力」を重視した考え方に基つきながらなされる。「下ネタは低レベルに落とす最高の武器」であり、弱く、格好悪く、低レベルであることは、「くだらなさ」や「素人としての魅力」を生み出している。

月乃さんは「笑われて喜ばれるのもよい」と感じているが、一方で同じこわれ者の祭典のメンバーであった脳性マヒブラザーズはプロの芸人として「笑われる」よりも「笑わせる」方向性を重視する。

---

<sup>121)</sup> 以下、2011 年 2 月 5 日こわれ者の祭典打ち合わせ時の発言より

もともと「くだらなさ」「素人っぽさ」を表に出すことを重視する月乃さん自身も、表現活動を行うにあたっては、声の出し方や、マイクなど音響、ギター伴奏などについて、パフォーマンスの質が高くなるよう気を配るなど、パフォーマンスの質もまた同時に重要視している。このように、必ずしも質を落とすやり方で一貫しているわけではなく、むしろ質を高める取り組みがなされているが、「くだらなくある」「弱くある」といった価値を落としていくようなあり方は、ひとつの重要な考え方として表現活動の根幹をなしているものであると考えられる。

病気の表現活動では「弱くある自己規定」が自己とのつながりをつくる知識として見出された。この「弱くある自己規定」は、弱い存在として自己を意識することという意味合いに加えて、否応無く弱い存在であることを受け入れるというよりもむしろ能動性をもって弱くあろうとする意味合いを含むものとして本研究では用いている。病気の表現活動では、単に弱さを有するのみならず、能動性をもった、弱くある自己規定をなす人々の姿が見受けられる。

## 5.3 社会とのつながりー当事者性の付与, サブカルチャーとしての実践

### 5.3.1 「対世間」志向の活動

表現者は、表現活動を行っているとき以外は会社員や家族、地域社会の一員として日常を過ごしている。そうした意味において生きづらさを抱える当事者は社会の中で暮らしており、社会につながっている。加えて、病気の表現活動は、「対社会」「対世間」に向けた対外的な活動を志向している。月乃さんは、安吾賞の受賞式で配布されるパンフレットに次のようなコメントを寄せている。

坂口安吾を落伍者によるメッセージ活動の先駆者だと思っています。

「墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」(墮落論)この言葉こそ、現代の我々にもっとも必要なメッセージなのかもしれません。

私は、落伍者としてのメッセージの方法を日々模索しています。

私のもっとも興味あるところは、安吾が世間や社会、そして日本に向けてメッセージを放ったところだ。

依存症の当事者グループの枠を乗り越えて、対社会そして対世間の活動をしていくことが、なんといっても私の目標です。

言葉の散弾銃を世の中へ撃ち込みたいのです。

言葉は散弾銃です。割れた銃弾が無数に飛び散り人々の心に届くこと、そんな活動をした  
いのです。

1年間で3万人を超える人々が、自ら命を絶つ私たちの国へ向けて・・・。

今回の受賞を励みとして落ちきった世界から見える希望を、多くの方々に伝えていきたい  
と思っています。

(第5回安吾賞授賞式配布パンフレット:7)

こうして表されるように、当事者グループの枠を越えて「言葉の散弾銃」を「対社会」「対世間」に  
向けて発していくことを月乃さんは目指している。月乃さんはじめ表現者たちが、イベントを運営し、  
ステージ上でパフォーマンスを行い、著作活動を展開するのは、社会に対しての働きかけを行う  
意味合いが強い。そして、そのありようは単純な協力関係でもなければ、対立関係でも、社会を糾  
弾するようなものではなく、社会全体に潜む生きづらさを抱えている人々にメッセージを発していく  
という形をとっている。

こわれ者の祭典は月乃さんが『こわれ者の祭典』というタイトルにしたり、著名人の方々になるべ  
く出してもらおうと努力しているのは、ある意味目立とうと思っているからです。世の中に対して切り  
口を作るのがわれわれの役割だと思っています(月乃 2013: 136)」と記すように「目立とう」と、そし  
て「世の中に対して切り口」を作ろうとしている。このように、活動の社会への波及、「対世間」の活  
動については表現者自身強く意識するところとなっている。そして、時に広く行政などともつながり  
ながら活動はなされている。行政と表現活動の接点は、新潟市長がこわれ者の祭典および関連イ  
ベントに参加することもあること(2012年9月16日, 2014年12月13日など), 安吾賞といった新  
潟市の事業の受賞者に表現者が選ばれること, 行政の補助金を得てイベントを開催すること  
(2012年6月9日, 新潟市補助事業「痛みの絆」など), 様々な公的な活動に参画すること(長  
岡市民活動まつり, 新潟市ひきこもりアートフォーラムなど), などに見て取れる。そして行政側の  
認識は, 新潟市のホームページにおいて, まちづくりトーク・市長と語る会という企画の内容の記  
録が残されており, そこに垣間みることができる。そこにはこわれ者の祭典についての市民発言者  
と, 市長の回答が残されている<sup>122</sup>。それによると, 発言者による「9月16日に行なわれる『こわれ  
者の祭典』などのイベントを市長から県外に向けて発表してほしい」という発言に対して, 「『こわれ  
者の祭典』は, 行政が直接関わりにくく, その部分を民間の方からやっていただき, 継続している  
ということで, 新潟の誇るべき地域力, 市民力の一つだと認識している。」「新潟市長としてもいろいろ

---

<sup>122</sup> 平成24年度前期まちづくりトークの内容 西区意見交換  
[http://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/shimin/towntalk/h24towntalk/h24talk\\_naiyou/kocho201207091402.html#cms10](http://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/shimin/towntalk/h24towntalk/h24talk_naiyou/kocho201207091402.html#cms10) 2014年11月13日閲覧 2013年1月16日更新記事



るな場で伝えていくことは十分に可能で、そういう考え方、そういうことで悩む人が新潟に集まり話し合う機会が持てること自体、有意義である。『べてるまつり』のようになれば、活性化効果という面からも評価させていただけるわけで、支援できるので、私としても考えたい。」との市長の回答を得ている。このように、表現活動はイベントを越えて広く普及することを願っていると同時に、行政側にしても、「地域力」、「活性化効果」という点について価値が見出されており、権利の主張やサービスの享受、といった観点とは異なったつながりがつくられている。特に行政からサポートを受けるという形ではなく、ひとつの地域力として当事者の活動が期待されている点は注目に値する。

表現活動は、社会とのつながりを強く意識しており、パフォーマンスといった特徴を活かしつつ、行政などを含めた様々なアクターと様々な形で社会とのつながりをつくっている。

### 5.3.2 当事者性の付与によるつながり

病気の表現活動から見出される非当事者や社会とのつながりのありようのひとつには「仲間」として当事者性を多くの人に付与していくありようが考えられる。「仲間」や「生きづらさ共同体」と表されるつながりは、概ね「主に身体障害やメンタルヘルス系の生きづらさを抱えている人」といった枠組みが設定されてはいるがその基準は曖昧なものである。そこには単純に「当事者」として強固に枠組みを設定するわけでもなく、「皆が当事者」というように、無制限に参集の枠組みが拡張されているわけでもないつながりのありようが見出される。イベントで語られる内容は幅広く、精神疾患などの病気のことから、ひきこもりのような状態像、モチないこと、いじめ、仕事での人間関係など多岐にわたっている。このような表現のありようは、参集の基準における条件のゆるさ、当事者と非当事者の同一性を示唆するが、健常者とは異なる当事者としての特徴もまた表現される。こわれ者の祭典においては、「健常者も、障害者も関係なく、みんなどっかかしらこわれ者だよねっていう意味合い」があることが司会の江口さんにより語られ、月乃さんはそれに対し、「そうですね。人類みなこわれ者ってことで。ただ、まったくそれで人間みんな平等なんですけど」と同意しつつ、「一見こういう舞台上になると、普通な感じですけど」「キャラじゃないんです。本物なんです。それは伝えたいと思います。」と、当事者としての特異性が語られる(2013年1月13日イベント時トークより)。また、「病気」がイベントの内容やテーマには通底しており、「病気だよ！全員集合！」というかけ声が毎回こわれ者の祭典時において発せられることも、「病気」という枠組みがひとつの参集の基準となっていることをうかがわせる。

このように「病気」「障害者」という経験と、「こわれ者」「仲間」「みんな」という人物を指す曖昧な、包摂的な表現の双方が駆使される中で活動は行われている。「生きづらさ共同体」に入るか入らないか、当事者であるかないか、は厳密には設定されず、時に全人類を含むように感じさせる表

現がなされることもあれば、時に当事者と非当事者は異なる者として表される。「生きづらさ共同体」の境界は曖昧なままに据え置かれ、そこでつくられるのは、疾患別の括りとも単純に共通性ともいえない包摂的な参集の基準を持った「仲間」という当事者間のつながりとなっている。

もっとも参集する人々の「仲間」としてのつながりはゆるやかなものであり、「病気」を持っていたり「障害者」であったりするわけではない人々が参集するにしても、そうした人々の経験が深刻ではないというわけではない。月乃さんの記す、「通常、私たちが行っているイベント(こわれ者の祭典等)は自分達が社会的少数派であることを前提として、その中での共感、共同体意識を持つことで『生きづらさ』の多い現実を生き抜いていこう、ということコンセプトとしています。秘密結社めいた共感、つながりを深めるために、お笑い、下ネタ、差別用語を多用します。必ずしも『人間みな同じだ』ということはテーマとしていません(月乃 2014)」との内容は、広く当事者性を世間の人々に付与することを狙っているわけではないことを示唆する。しかしながら同時に、単純に『アルコール依存症=病気』を、世間的に話題になり、おしゃれな感じで伝えたいという事をコンセプト(月乃 2014)」としたライブも行っていきたいと記し、「秘密結社」めいた共同体意識と、「世間的に話題」となるような活動の双方を視野に入れた活動を模索していることがうかがえる。実際に表現活動には、K-BOX の幅の広い活動にみられるように、「世間的に話題」となるような活動もなされ、こわれ者の祭典にも「秘密結社」のみならず「世間的な話題」となる要素が含まれていることが考えられる。そして、これら双方の視点に基づく活動がなされることによって、表現活動の場が、従来当事者とはみなされなかった、たとえば客観的に診断される病気や障害ではなくとも深刻な生きづらさを抱えている人々が仲間意識を持てる場となり、当事者コミュニティに多くの人が馴染んでいく場となっていることが考えられる。こうした曖昧なままに据え置かれた参集のあり方、表現のされ方によって、従来非当事者とされた人々を巻き込みながらつながりがつくられていることが考えられる。

こわれ者の祭典新潟公演で司会を務めているフリーアナウンサーである松井さんは、こわれ者の祭典には同じく司会を務める江口さんも「足に障害がある」ことから、「舞台上にいる唯一の健常者」として参加しており、「出演者と観客を結ぶ」ことにやりがいを感じている。そして、精神障害は「身近な存在ではなかった」が、大学時代に「ストレスで食べ過ぎて吐いてしま」ったりと「精神的に不安定になった」ことを思い出し、「生きづらさや心の病」は『誰にでも起こり得ることなのかもしれない』ということに気付いた」という(以上引用、小林 2012 より)。このように、表現活動では、非当事者とされる人々が当事者と共感できるような活動になっていることがうかがえる。また、こわれ者の祭典東京公演でギタリストとしてほぼ毎回出演しているタダさんはいわゆる非当事者として活動に参加している。2006 年からこわれ者の祭典に出るようになり、当時司会をしていた江口さんから「リストカットないの?」って言われて、「動物園の中の檻の中にいるような気分」になった。そして、「普通」の人たちが「異常」ではないが、同様に「こっち(障害者・当事者側)も異常じゃないんだな」と

ということがよく分かった。そしてすごく「居心地がよくて」、今後もかかわっていきたい、と語っていた(2012年9月22日イベント時トークより)。このように、当事者コミュニティに非当事者が入ることにより逆に自身が奇異の目でみられるような感覚を味わったり、非当事者でありながらも当事者コミュニティにすることが、仲間と共にいるような居心地のいい体験になっていることがあることがうかがえる。こうした自らの生きづらいつらい経験を思い出したり、当事者コミュニティに馴染んでいく体験を促す表現活動は、非当事者に何らかの当事者コミュニティと関係をもたらすような、当事者性を付与している活動であるととらえることができる。

### 5.3.3 サブカルチャーとしての実践によるつながり

病気の表現活動は、福祉的な側面を持ちつつも、由緒正しいものではない、裏の魅力を持つメインではない下位文化であるサブカルチャー(伊奈 1999)であることを重視する。病気の表現活動は、サブカルチャーイベントがよく行われることで知られる新宿ロフトプラスワンで定期的な公演を行い、月乃さんは病気や障害にフォーカスした活動と共に、病気や障害にかかわらずサブカルチャーイベントを行うほどに<sup>123</sup>、サブカルチャー的要素を重視している。

表現活動は「仲間」との共感と共にエンタテインメント性を重視する。このような病気という分野を笑いにするという実践はメインではないひとつサブカルチャー的要素を感じさせる。表現活動における当事者と社会、非当事者とのつながりにおいては、笑いを介在させた相互理解を志すありようが見出せる。こわれ者の祭典にしても K-BOX にしても、その時々イベントの性質にもよるが、病気や苦悩の経験を笑いにするのが特徴のひとつとなっている。多量飲酒をしてとった行動や、妄想の内容や、摂食障害で大量に食物を摂取した内容が語られ、笑われる。また、DAIGOさんは脳性マヒによる言語障害があり、発音が不明瞭であるが、これについて「何言っているのかわからない」ことが舞台上でネタにされることがある。

Kacco: はい、お待たせしましたー。こわれ者の祭典っていうとお決まりの何かかけ声があるということで、今日はどうしましょう、やっていただけるのかな。

アイコ: じゃあ、真ん中にあるセンターの DAIGO さんに。

Kacco: DAIGO さんが。大丈夫ですか。はい、じゃあお願いします。

DAIGO: ビョウキだよ!

一同: 全員集合!

アイコ: 字幕出ないから。

---

<sup>123</sup> 2013年7月13日、「ポエトリーリーディング in サブカルチャー」というサブカルチャーイベントなど

Kacco:何言ってるか分かんないところがちょっとネックですね。どうでしょう。

アイコ:今日、相方さんがいないので、通訳する人がいないんです<sup>124</sup>。

Kacco:ああ、かなりしんどいですね、このステージ。

アイコ:15分ぐらいするとだんだん聞き取れるようになってきます。

DAIGO:そうなんです。

Kacco:その頃には終わりそうっていわれてますけどね。(笑)(2012年6月3日、ひきこもりアートフォーラムのこわれ者の祭典ステージにて)

こうした障害を笑うやり方は、「障害は笑ってはいけない」という規範に強く働きかける。DAIGOさんは、さらに「腹黒い」障害者、「上から目線」「毒舌」であることなどがステージ上で語られ、そうした役回りを担い、イベントを魅力的にするのに貢献している。以下は、同じく「病気だよ！全員集合」のかけ声を全員が立って行うことを促した際に、DAIGOさんが、相方の車いすを使っている周佐さんが「立てない」ことを指摘している場面である。

月乃:DAIGO君が何か言ってますよ。

DAIGO:立てない人もいらっしやると思いますが。

江口:あ、車椅子の人ね。なんとか立ってますか？車椅子の方(笑)。

月乃:DAIGO君は優しいようで、今のは差別発言ですんで。彼はいつも上から目線(笑)。(2011年6月19日イベントより)

こわれ者の祭典では、こうしたDAIGOさんの上から目線の立ち位置を大きな魅力として考えている<sup>125</sup>。障害者イベントに笑いを持ち込むスタイルは、特にこわれ者の祭典において、歴史的にも運営的にもお笑い集団NAMARAとの関係が強いことが関係することが考えられる。こわれ者の祭典の司会を務めるNAMARA代表の江口さんは、ステージ上で、当事者の表現者をいじり、笑いをとるスタイルを形作る。このようなスタイルは、一定の批判も浴びるも、月乃さんは、江口さんの毒の入れ方を評価し(江口 2011: 8)、活動を共に継続して行っている。NAMARAはお笑いと絡めて教育や福祉関係の活動を盛んに行っているが、そのスタイルはお笑いを通すことで一風変わったものとなっている。江口さんの考えとしては、「問題発言」だと思われることを前提として「障害を面白がればいい(江口 2011: 204)」という立場をとっている。そして、「面白いというのは興

<sup>124</sup> 脳性マヒブラザーズとしてコンビを組んでいる周佐さんがステージ上でDAIGOさんの通訳的役割を果たす場合が多々ある。

<sup>125</sup> 2011年8月17日、こわれ者の祭典会議より

味のあること。興味があるということは知りたいということ。知るということは理解につながります。そういう意味では面白がっていいんです(江口 2011: 204)」とする。江口さんが障害を面白がるあり方は以下のような、吃音を面白がるやりとりにおいてもみられる。

江口:吃音者のグループ。打ち合わせする時に、吃音者って、まあ、結局、昔でいう「どもり」じゃない。「あ、う、あ、う」ってなったりするじゃない。だから、これは面白いと思って、この吃音者のグループに何か歌でも歌わせようと思ったのよ。

松井:あなたが？ 江口さんが？

江口:そうそうそう。歌だって歌わない？ みんなでコーラスとかやってみない？って言ったらね、「歌は歌えちゃうんですよ」っていった(笑)。

松井:あ、歌は歌える。へえー。

江口:えっ、えっ、歌はどもらないの？どもらないんですよって。はあーと思ってね。意外と面白い、いろんな発見ありますよ

(2011年6月19日、こわれ者の祭典新潟公演)

この場面で江口さんは、吃音者が「歌は歌える」ことを発見し、興味を寄せている。江口さんは、障害を面白がるのは、「障害者に対する免疫が少ないがために、どう接していいかわからなかった状態から、慣れっこにする作業(江口 2011: 205)」であって、「欲求(江口 2011: 205)」であると。そして、「障害者と健常者(江口 2011: 12)」を含む「極端な関係性の中に入る仕事(江口 2011: 12)」が増えており、NAMARAの笑いは「肯定」をキーワードとして、「あらゆる関係性の中に立ち、通訳、翻訳、フォローのような役割を持っている(江口 2011: 12)」とする。

このような江口さんの考え方と表現者の思いが合わさる中で、こわれ者の祭典の笑いは生み出されている。これにより、笑いは、健常者と障害者の間に位置し、健常者を障害者へ「慣れっこ」にし、健常者が障害者を「知る」ことに寄与している。当事者と非当事者との関係をつくるには、笑いを介在させることがひとつのあり方であることがうかがえる。そして非当事者と当事者とのつながりは、対立関係でも、協力関係でも、支援する／される、という関係でもなく、相互の間で笑いを生み出す関係、非当事者の好奇心を元にした関係としてつくられていくあり方が見出せる。

病気などの経験をパフォーマンスとしてオープンに話す、という表現活動の特徴や、笑いを介在させた当事者と非当事者との関係は、世間の規範に強く働きかけるものとなる。そして時に障害者が障害者を笑うというスタイルをとることによって、当事者内部の差別を表し、差別の視線を当事者、非当事者双方が持つことを感じさせる表現をすることもある。これは、当事者ではなく非当事者が差別的な眼差しを持つという先入観に働きかけるものとなる。また、DAIGOさんのしたたかな、

腹黒い、上から目線の障害者の役回りは、障害者を聖人とみなしがちな傾向などにみられるような無意識に感じやすい障害者像を揺るがすものとなっている。同時に以下に示されるように、表現活動では「馬鹿馬鹿しさ」を大切に考えており、多くの人に来てもらいやすい場を設定しようとしている。こうした実践もひとつの、障害という深刻なテーマを馬鹿馬鹿しくするという形のサブカルチャーとしての実践ととらえることができる。

月乃:すごいダメな男なんですけど(笑)、なんか馬鹿馬鹿しさも実はすごい伝えたくて、あの、「人生ダメでもいいね」っていうか。あの・・・普段、私、イベントはひきこもり時代のパジャマというので出ているんですけど、最近、父の遺品のももひきとかは出て出ている(笑)  
(NHK ONLINE 2014: 11)

月乃:そうですね。それで、エンターテインメントで。体験発表っていういろいろあるけど、結構、眉間にしわよせて「こうやって乗り越えてきました」みたいな、そういうのもとっても素敵なんですけど、もっと軽く、面白おかしく伝えると、また入りやすい、っていうのもありますよね。  
まあ、そんなことで、もう11年ぐらいになるんですけど(NHK ONLINE 2014: 11)

心的外傷を負った人にとってのユーモアは重要である一方で(Herman 1992=1999; Wolin and Wolin 1993=2002)、当事者による笑いの語りにより苦悩が覆い隠されることも危惧されている(稲沢 2006)。笑いは危惧される点もありながら、馬鹿馬鹿しさを示す表現活動は、笑い、ユーモア、といった側面の重要性を強調するものであり、同時に「障害を笑ってはいけない」というメインのストーリーに対するサブの視点を生み出している。表現活動ではアングラな側面、対抗文化的な側面と、サブカルチャーとしての意識が根付いており、それによりメインである主に社会・世間やそこにある規範に対して働きかけている。

表現活動がサブカルチャーとしての実践であることが意味するところのひとつは当事者活動がアンダーグラウンドな側面を有するという特徴と、その効果である。アンダーグラウンドな側面については、「秘密結社」めいたつながり、グループ内で共感などを生み出す上で大きな意義を有していると考えられる。ここではそれに加えて、対社会の実践において「対抗文化」としての表現活動の特性について考察する。対社会的実践において病気の表現活動がサブカルチャー的であることの意味は、表現活動が対抗文化として、メインの文化に対して一病気や障害などの「サブ」から健全者社会といった支配的な「メイン」に対して一働きかけているということである。しかしながらその対抗文化のありようはゆるいもので、たとえばろう文化宣言(木村・市田 1996)のように、明確に自らの独自の文化を確立するものでもなければ、「健全者文明を否定する(青い芝の会 行動綱

領)」障害者運動のような対立的な形をとるものではない。こわれ者の祭典を形づくる江口さんや月乃さんは次のようにイベントにて述べる。

江口:我々がちょっと声出して行きましょうよ。それもなんか政治的な声じゃなくて、何て言うのかな。もうちょっと何にしますか。

月乃:あの、「原発反対!なんとかしろ!」というのとはちょっと我々と違うじゃないですか。何ですかね。怠けてもいい、ほら、摂食障害のある種のグループが「いい加減に生きよう」とか言いますが、「もっといい加減でいいんじゃないの～」とか、「もっと楽しましょ～」って。

江口:それで、「そうだ!そうだ」という感じじゃなくて、「そうかもねえ～」って、全部ゆるい感じで。なんかいいじゃんね。それでいきましょうよ。

月乃:「ひきこもったって、まあ、いいんじゃないの～」とか、「生活保護もっもらおうよ～」。「生活保護くれよ～」「頭髪障害も障害者 3 級にしろよ～」。全然いけますね。ゆる系。(2012 年 7 月 15 日、こわれ者の祭典新潟公演)

表現活動はこのように、病気の表現活動は、メインに迎合するような形でも、メインに対立するものでもない立場をとりながら、社会との関係を築いていく形をとる。もっともここで表されているのは一部の表現活動の中で述べられたもので、そのゆるい内容自体は表現活動が目指す姿そのものではないかもしれない。しかしながら、既存の活動とは異なるあり方を提示する、というサブカルチャー的な立場に自らを位置づけることは表現活動において通底した実践として見出せるもののように思われる。

表現活動は、福祉イベントとしての特徴を持たせながらも、単なる福祉イベントに収斂されてしまふことなく、見世物としての病気の体験発表を行うことに代表されるような挑発的なサブカルチャーとしての特徴を有し、また既存のありようとは一線を画す主張のあり方なども探りながら、社会への切り口をつくっている。

そして、表現活動からは、表現活動を行う人々自身、明確な統一的な見解を確立しているわけではなく、むしろ様々な対立する方向性がある中で表現活動は続けられていることがうかがえる。対立する方向性としては、たとえば「活動が広まれば『レア感』がなくなる」「表現の質を高めることを突き詰めれば、素人としての魅力がなくなる」「万人受けする活動を目指せば、活動の魅力が減る」(以上こわれ者の祭典会議 2012 年 9 月 26 日の議論内容より)といった相反する方向性が挙げられる。こうした活動の方向性の相違は個々の表現者によって異なることもあろうし、同一人物であっても揺らぎながら活動の方向性は模索されていくような場合もあるように思われる。こうした

議論からは、表現活動として統一する活動の方向性などにおける見解を見出すことが難しいことがうかがえるが、対立的な考え方の中で活動の方向性が模索されている状況であるからこそ、サブカルチャーとしての実践を行うことの表現活動における根源性が見出せるようにも思われるのである。それはすなわち、画一的な方向性に対してサブの立場から働きかけていくサブカルチャー的な立場を重視する意識であり、そうした表現活動の意識は、運営上の方向性における対立した見解を模索するような実践にも見出せるもので、そうした実践がサブカルチャー的意識の形成を促す要素のひとつとなっているように思われるのである。

表現者のサブカルチャー的意識および実践は、メインではなくサブでいることに価値がおかれる実践によって社会に対して働きかけていくあり方、支配的な言説に対して代替的な言説を生み出し続けながら、世間の規範に対して働きかけていくあり方を示していると考えられる。

## 5.4 通底する知識としての生存の表現

本章で検討された、表現活動においてみられる生きづらさでつながる人々の知識は以下のようなものである。

1. 共感と共に差異の活用や福祉から芸術やサブカルチャーなどの文脈の越境を通して当事者間のつながりをつくる。
2. 病気や障害などを「コンプレックスを個性に」というように価値転換すると共に、能動性をもって弱くある自己規定をなす。
3. 当事者性を非当事者側に付与し、サブカルチャーとしてメインに働きかけながら社会とのつながりをつくる。

以上は、本研究フィールドで活動する人々の有する意識や技法としての知識ととらえられる。そして、これらはそれぞれ無関係に独立しているわけではないことが考えられる。弱くある自己規定は、弱さやバルネラビリティの力でもって(金子 1992)、当事者間のつながりを形成するであろうし、虐げられたり、逆に逆境を乗り越えるといったメインの障害者像とは異なる当事者像を提示するサブカルチャーとしての実践につながる事が考えられる。代替的な言説を生産し続けるサブカルチャー的な対外的な実践は、差異ある当事者間のつながりを許容する土壌を作り得るし、サブとしてのアイデンティティとして、弱くある自己の形成を促進することが考えられる。アンダーグラウンドなサブカルチャーとしての実践は秘密結社めいた強固な当事者間のつながりをつくる事が考えられる。また、セルフヘルプ・グループは新たな価値や生き方を見出す場としての意義を有するとさ



れ(平野 1995), 本研究においても生きづらさのつながりの中で, 自己規定にかかわる, 新たな生き方を知るという経験が示されていた。こうした経験がもたらされる要因としては, つながる人々が多様であることに加え, メインに縛られない多様な考え方を生み出すサブカルチャー的要素がかかっていることが推察される。すなわちアンダーグラウンドな雰囲気の中で, メインのストーリーに縛られない立場であり続けようとするサブカルチャー的意識が, 多様なものの見方, 生き方の獲得を容易にすることが考えられ, サブカルチャーとしての実践をなす知識は自己を規定, 構築していく上での知識にも同時になっていることが考えられる。このように, それぞれの当事者の知識は独立して存在しているのではなく, それぞれ重なり合い, お互いに影響しあっていることが考えられる(図 49)。

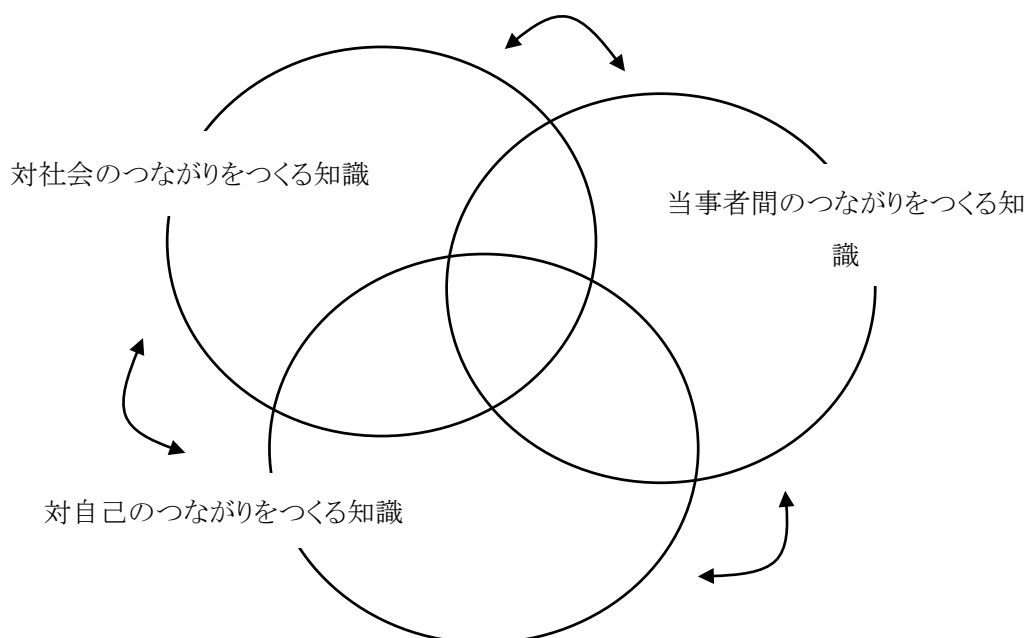


図 49 当事者の知識の重なりと相互への影響(筆者作成)

知識の重なりや相互作用がある中, 本節では, 当事者間, 対自己, 対社会と分断して考えられてきた中でとらえ損ねてきた表現活動に通底する知識に, 生存を表現することが挙げられることを述べる。

病気の表現活動は自らの病気などの経験をパフォーマンスとして表現する活動である。また, 「見本」となりたい, という意図もみられ, 表現のされ方は時に迫真的であり, 弱さやかっこ悪さといった表現内容が重視されていた。生きづらさを抱える人々が表現していることは, つまりは各々が生きづらいうリアルな現実を生存していることであり, それを表現することが活動に通底する意識を

なしていることがうかがえた。月乃さんは「僕はサバイバー」という詩をつくり、朗読している。ここでは、生きづらい経験をしてきた中、現在まで生き延びてきたことが絶叫朗読という形で迫真的に表現される。

いじめられて、バカにされて、無視されて、笑われても、僕たちは  
死ななかつた、死ななかつた、死ななかつた。  
僕たちはサバイバー(月乃光司作「僕はサバイバー」より)

そして、「どんな人でも今生き残っていれば僕たちはサバイバーだ。私たちは生き残った者たちだ」と、多くのプライドを捨て、弱く自己規定がなされる中で、サバイバーであることに対してのプライドを保持しているように感じられる表現がなされる。そして、「こんな人でも社会復帰してるんですね。こんなあなたでも生き残ってきたんですね。僕はとても安心しました(僕はサバイバーより)」と講演を聞いた高校生からメッセージをもらったことが自作詩の中で紹介されることは、弱い中生き延びていくことを表現する価値をうかがわせる。また、イベントを通して伝えたいメッセージとして以下のように語られる。

月乃:私も死にたいと思って自殺未遂したこともあるんですけども、生き延びて、今、50 ぐらいになって、すごく自分の人生の着地点があったんで、死なないで生きていてもらいたいな、っていう(NHK ONLINE 2014: 10)

月乃さんが『「こんな人でも生きています』というメッセージを伝えます<sup>126</sup>』と、講演や朗読の依頼を募っているように、表現活動では「生きづらさ」を抱える人々に、生きづらさを乗り越えてきたことや克服してきたこと、というよりもむしろ、生きづらい中を生きてきたこと、「こんな人でも生きていく」ことを伝えることを意識していることがうかがえる。

このように、病気の表現活動は「生存」していることを表現する活動となっていることが考えられる。本研究で見出された知識である「差異を資源として活用すること」「弱くある自己規定をなすこと」「サブカルチャー的実践であること」は、単に、それぞれ当事者間、対自己、対社会のつながりをつくるのみならず、「生存」を強調する上でも有益に作用すると考えられる。差異をむしろ表すことによって生き延びているという共通点が垣間みる事ができ、弱くあることによって生きづらい状況であれども生き延びていることが逆説的に強調され、代替的な言説を生み出し続けること自体に価値をおきながらアンダーグラウンドな雰囲気を出し、確固とした対抗言説を作り上げないサブカル

---

<sup>126</sup> 月乃さんのツイッターによるツイートより(2013年9月30日)

チャー的実践によって生き延びていくことの重要性が強調されるように思われる。当事者は、差異を見据え、弱くあり、サブカルチャー的存在であるというつながりをつくるための知識を有しており、これには生存が通底していると考えられる。月乃さんはラジオ番組で以下のように語る。

はるな愛:最後に、このラジオを聞いてくれている人たちに向けて、メッセージをお願いします。

月乃:そうですね。あの・・・こう、「ぶざまさ」とか、「ダメさ」でつながっていきたいんです。

そこでつながれば、「死ぬこともできない、生きることもできない」人も生きていけるんで、みんなとつながっていきたいと思っています(NHK ONLINE 2014: 12)

ここでは、「ぶざまさ」や「ダメさ」というような「弱さ」でつながることを願っていることが語られる。そして、つながることで「生きていける」と「仲間」という詩の中で語られる。

仲間がいれば  
僕はきっと生きていける  
仲間

以上で示されるのは、弱さ、ぶざまさ、ダメさでつながり生きていくことを表現すること、が表現活動の基底にあり、つながりと生存が強く関連するということである。生存を表すことはつながりをつくる上で重要な役割を果たしている。

## 第6章 結論

本研究は、当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか、を病気や障害を有する人々による表現活動を通して明らかにするものである。本研究では、「つながり」を当事者間の関係、自己との関係、対社会との関係という3つの側面からとらえ、第5章にて表現活動にみられるつながりとそれをつくる知識を分析した。本章では第5章でなされた分析を踏まえた上で、当事者の知識としての普遍性を意識し、リサーチクエスチョンに対する回答をまとめる。そして当事者のつながりをつくる知識を説明する理論的モデルを提示する。次いで、将来研究への示唆を示し、研究を総括する。

### 6.1 発見事項

#### 6.1.1 表現活動は他の当事者活動とどのように違うのか

はじめに今一度整理すると、本研究では「表現活動(もしくは病気の表現活動)」とは、冒頭に述べたとおり「病気や障害等の当事者が自作詩の朗読、音楽等のパフォーマンス活動を行うという本研究のフィールドにおける実践」としている。そして、表現活動は他の当事者活動とどのように違うのか、という問いに対する本研究の回答としては、表現活動は、特徴的でありつつ、他の当事者活動と多くの共通点を有する、ということである。もちろんこれは、表現活動が、他の当事者活動より価値があるとかないとかを意味するわけではない。表現活動は、多様で豊かな様相をみせる当事者活動のひとつととらえられるものであり、当事者の活動は、当事者の活動として多くの共通点を持ち、かつそれぞれ個々に固有であるということもできるかもしれない。他の当事者活動と表現活動には多くの共通点がある。表現活動はパフォーマンスをしたり、当事者の苦しい経験を笑ったりと、特徴ある実践であるが、そうした実践はたとえば浦河べてるの家の幻覚&妄想大会などの実践や、障害者プロレス、障害者による劇団などの当事者の実践にみられることでもある(浦河べてるの家 2005; 金 1996; 倉本 1999)。広く普及している形態のセルフヘルプ・グループでも体験にユーモアが加味されて語られることは稀なことではない。病気の表現活動にて「生きづらさ」をもとに集うのは、たとえばアルコール依存の自助グループや、統合失調症が中心となっているグループや実践とは異なるかもしれないが、アダルトチルドレンの自助グループに疾患名に限らない幅広い家族関係に伴う困難を抱える人々が集まるように、その参集の基準の違いは連続的なものであり、表現活動に必ずしも特異的なものではないと考えられる。

また、当事者活動と一言でいえども多様である。たとえばセルフヘルプ・グループと一言でいえ

ども、たとえばグループ内部に焦点をあてた活動をするところから社会運動的な活動をするものもある。また、典型的なあるタイプの当事者活動であっても様々な他のタイプの当事者活動の特性を同時に有するなど同じグループでも様々な特性を有していることが考えられる。当事者活動は、当事者活動として画一的に一括りにして説明できるものではなく、そもそもが多様なものであり、同一グループや活動においても多様な側面を有している。

このように、病気の表現活動は特徴的なものであり、同時に他の当事者活動と多くの共通点を持つものである。もともと表現活動は特徴的なものであることから、表現活動を通して今まで照射されてこなかった知識を見出す上で有用なフィールドであると考えられる。同時に病気の表現活動は他の当事者活動と多くの共通点を持つ当事者活動のひとつとしてとらえられることから、表現活動から見出される知識は一部の特殊な人々が有する知識ではなく当事者の知識として考察しうるものであると考えられる。

表現活動に見出される知識-差異の活用、越境、弱くある自己規定、当事者性の付与やサブカルチャーとしての実践、表現することなどは表現活動にみられる知識である。しかしながら同時に他の当事者活動にもあてはまる要素があり、当事者の知識としてとらえられると考えられる。表現活動にみられる個々の知識についての当事者の知識としての普遍性にかかわる議論は後述するが、いうならば表現活動ではなくとも、共感により当事者同士でつながるのはもちろん、当事者はセルフヘルプ・グループ等で自分と違う人から違う生き方を学び、芸術活動やお笑いなどの分野に活動の幅を広げ、福祉以外の文脈で活躍する当事者の姿も多々見受けられるように、差異を活用し、他文脈への越境をしていることがうかがえるのである。弱くある自己規定は、弱さを表明する多くのセルフヘルプ・グループの実践でみられる姿勢であることがうかがえる。また、そもそも表現活動も弱さを曝す他のセルフヘルプ・グループの実践から見出されたものでもある。アダルトチルドレンという言葉で集い、なされる活動は家族関係で悩まされてきた従来非当事者とされた多くの人々を巻き込み、そうした人々に当事者性を付与してきた。ひきこもりといった状態像で集まる人々の実践や、暴力被害や、育児に困難を抱える人々の集う実践などにおいても、現代的な複雑な要素の絡む問題として多くの人々に当事者性を付与していることが考えられる。このように当事者性の付与は多くの当事者の活動にあてはまることが考えられる。サブカルチャーとしての実践であることは、一見表現活動ならでの知識のように見受けられるが、必ずしもそうではなく多くの当事者の活動にあてはまることが考えられる。サブカルチャーとは対抗文化やアンダーグラウンドな要素、メインではなくサブである志向が含まれるものとしてとらえられる。当事者活動においては、ろう文化などはメインとは異なるサブカルチャーとしてとらえることが可能であり、その他対抗文化として障害者文化を確立していく姿勢は表現活動ではなくとも多く見受けられるところである。また、メインの考え方(あたりまえのように思っている考え方)が覆される経験は当事者グループに参

加する人も感じているところであり、こうしたメインではない言説を生み出すことも活動のサブカルチャー的側面にとられられる。加えて、サブカルチャーとして認識はされていなくとも、世間に偏見が残り、スティグマが付与されやすい精神疾患などにおける活動はアンダーグラウンドなサブカルチャー的要素を生み出しやすい状況であることが考えられる。セルフヘルプ・グループなども、メインの世間とは異なるところ、たとえば公共施設の一室で、小規模でひっそりなされる側面に表れるような、ある意味秘密結社的なつながりがつくられるサブカルチャー的な実践ととらえることができる。表現については、ステージ上のパフォーマンスという点においては、一部の当事者による劇団や芸術活動、プロレスの興行などにみられることが考えられる。本研究で知識として提示する「表現」ではそうした意味合いに加え、ステージ上でのパフォーマンスに限らず、自助グループで自らの経験を語るといったこと、そうした場に参加するなど自らの姿を他者に示すこと、といった広い意味合いで用いている。こうした意味ではすべての当事者活動において表現はなされていると見て過言ではないと思われる。多くの当事者は広い意味での表現によってつながりをつくっていることが考えられる。

病気の表現活動はユニークな活動である。そして、ユニークながらそこで見出される知識を表す現象は、他の多くの当事者活動における知識の理解を深めることのできる現象である。本研究は、他の当事者活動を行う人々も有してはいたが、見出されていなかったつながりをつくる知識を提示するものである。

先行研究における従来の議論は、既存研究で見出されてきたつながりをつくる知識の限界に応える知識、弱さに収斂されない包括的な当事者の知識を認識し損ねてきたという問題点があった。それに対して本稿では、新たな、当事者のつながりをつくる知識、およびそこに通底する弱さに収斂されない生存を基盤とした知識が提示された。次にこれら個々の知識について検討する。

## 6.1.2 当事者はいかにして当事者間のつながりをつくるのか

本研究の当事者間のつながりに関する発見事項の1点目は、異なる経験の中でも共感することによって当事者間でのつながりがつくられるということである。病気の表現活動では、身体障害や精神障害、精神障害の中でも依存症や、摂食障害、躁うつ病などの多様な経験を有する人が集まる。疾患が異なり、異なる経験をしていても、病気の表現活動では対人関係での辛さやいじめ、偏見、といった共通のキーワードで語り合える場を創出し、共感することによって当事者間のつながりはつくられている。本研究からは差異がある中でも、多様性を内包した新たな共通性を再構成することで当事者間のつながりが共感に基づいてつくられることが示された。セルフヘルプ・

グループや障害者運動などの活動は、多様な形態がみられるも、特定の疾患や経験により参集がなされることが多く、ある程度参集の基準が明確な傾向があった。それゆえに、当事者同士の凝集力が高まり、結束していくことが可能となる一方、その枠内に入らない人を排除してしまうことになりかねない危険を有していた(金子ほか 2009)。一方、新たに設定された「生きづらさ」等の多様性を内包する共通項によるつながりは、共通性のみでつながる際に起こりやすい諸問題(排外的になりがちなコミュニティの逆機能による問題など)を抑制するものとなりうることが考えられた。本研究からはこうした新たな参集の枠組みの再構成による共感が当事者の知識として挙げられた。これは、基本的には従来指摘されている当事者グループによる共感と同じものであり、当事者間でつながりをつくるためには、古典的な先行研究(Levy 1976; Hill 1984=1988 など)でいわれている通り、「共感」や「共通性」が極めて重要であることを表現活動は示している。特に、個々の経験や疾患が異なれどもやはり共感が重要であるという視点は、差異ある中でも、分かり合える点を探し、共感することを放棄しない姿勢が、当事者間のつながりをつくる上で重要であることを示している。

しかしながら、同時に差異や分かり合えなさも、決して無意味なものとして排除されるべきものではないということも本研究の示唆するところである。本研究における発見事項の2点目は、差異を資源として活用することが、当事者間のつながりをつくる知識となっているということである。従来、共通性で集まっているように見える当事者グループも個人の経験は多様であることや(佐藤 2002)、共通性のみならず、語り続ける行為(佐藤 2002)、語られる場への帰属感(伊藤 2000)などにより当事者間のつながりがつくられていることが示されてきた。本研究においては、それらに加え、当事者間のつながりは、差異を資源として活用する中でつくられることを示した。差異があるからこそ、傷つくことのできるつながりがつくられるのであり、「他の生き方」を知るつながりができる。セルフヘルプ・グループは、新たな生き方、価値を見出す場となっているが(平野 1995)、そうしたことが可能になるのは、当事者間のつながりが差異ある中でつくられているからこそであると考えられる。当事者間のつながりは、共通性と共に差異が大きな意味を持つ。差異を活用する知識は、一見同一に見える中にも差異があるということのみならず、差異に積極的な意義を見出し、差異を資源として活用する中で当事者間のつながりがつくられることを示唆している。

発見事項の3点目は、当事者間のつながりは、必ずしも病気や障害の当事者として福祉的文脈でつながろうとすることでつくられるものではなく、エンタテインメント性を持たせたパフォーマンスといった別の立場に越境した活動がなされることによりつくられるということである。病気の表現活動はエンタテインメント性を持たせたパフォーマンス活動であることによって間口を広くとり、人々を集め、また表現活動をきっかけにして、それぞれに合った自助グループなどの当事者活動につながることを支援している。従来のセルフヘルプ・グループの課題として、必要としている人の一部し

か参加しないことがいわれているが(岡 1988), エンタテインメント性を組み込ませることによって, 病気の表現活動は従来当事者活動へアクセスできなかった人々が当事者同士でつながる入り口となり, また, 当事者グループを紹介するなどの活動を通して, 出口として多くの人々の当事者間のつながりをつくることを促している。これが示すことは, 当事者間のつながりは, 病気の当事者として福祉的文脈つながろうとすることで必ずしもつくられるものではなく, 別の特性に立場を越境することでつくられているということである。そしてそのつながりは表現活動の枠を超えた当事者間のつながりの形成に開かれている。越境は, 単一の活動の枠を越えて当事者間のつながりをつくる知識となると考えられ, 福祉的な活動を越えた視点での活動を行っている多くの当事者活動で活動する当事者も有している知識であることが考えられる。

### 6.1.3 当事者はいかにして自己を規定するのか

本研究では, 「内部」といえる当事者間, 「外部」といえる対社会とのつながりに加え, 自己規定としての自己との関係を含めたつながりを検討した。

本研究での当事者の自己規定における発見事項は, 「コンプレックスを個性に」というように, 負に取られてきた自らの病気や障害などの属性の価値を見出すといったように自己の負に見られてきた属性の価値転換をなすことがやはり当事者の自己とのつながりをつくる上で重要であるということである。従来の先行研究では, 自らのマイナスに思われていた側面の価値を転換することが当事者の戦略として示され(田畑 2010 など), 病気の表現活動においても同様にそうした点は重視されている。

加えて, 価値転換とは異なり, 能動性をもった弱くある自己規定をなすことが当事者の知識となっていることが本研究の発見事項として挙げられる。表現活動では, 病気や障害を乗り越えてきた姿に加え, 時にはそれ以上に, 「弱さ」や「ぶざまさ」にまとわれた自己が表現される。これにより, 「こんな人でも生きていける」という安心感を他者に与え, 恥をかきながら, 弱いながら生きていくモデルが提示される。「弱さ」はつながりをつくる上で重要な要素であり, 「弱さ」は弱いからその力を有することが考察されている(中村・金子 1999; 松岡 2005; 向谷地 2002など)。これらの知見に本研究が積み重ねる知見としては, 当事者は, 弱さを力に変換し, 価値転換すると共に, あくまで弱いままに自己を規定するという知識を有しているということである。弱さの価値転換は規範化することにより価値転換できない人々を窮地に陥れることが危惧される。また, 当事者の聖化, 権威化が危惧されている中(向谷地 2009; 小池 2007; 伏見 2005), 能動的に弱くあることは, 自己否定, 権威化を回避する知識となっていることが考えられる。障害の文化には「従属文化」「対抗文化」「固有文化」の 3 つの側面があるといわれている(杉野 1997)。当事者が自らを負に, 弱



く自己規定するのは、従属的に否応なくなされているのではなく、かといって価値転換し、対抗、固有の文化の確立を目指しているのではなく、あくまで弱くあり続けるという知識といえ、当事者のひとつの文化を形づける方向性を示していると考えられる。月乃さんは自助グループから恥をかいてもそれをさらけだして生きていけることを学んだという(NHK ONLINE 2014: 9)。このように病気の表現活動でみられるぶざまさ、かっこわるさを含む弱くある自己規定は、表現活動に特有なことでは必ずしもなく、自助グループなどを含む当事者活動の中でも既になされており、一定の当事者の知識として普遍性を有する自己規定のありようであると思われる。もともと本研究では、弱くある自己規定を、価値転換とは区別し、価値転換の重要性と共に弱くある自己規定の重要性を強調した。しかしながら、弱くあることもまた弱さの価値転換の一形態ともとらえられうる可能性を有するのであり、今後、弱くある自己規定が価値転換の一形態であるのか、そうではないと考えるのが妥当なのかの検討が求められると思われる。

#### 6.1.4 当事者はいかにして社会とつながるのか

病気の表現活動で表現する表現者の多くは、日常会社員として、家族の一員として暮らすなど社会とのつながりをつくっている。そして表現活動は、「対世間」「対社会」といったように、広く社会に対して働きかけていく実践である。セルフヘルプ・グループも社会変革機能を有することがいわれ(岡 1988)、パフォーマンスもまた自己主張や問題提起、社会変革を行う上で有用であるとされる(高橋 2005)。セルフヘルプ・グループ的な特性を有し、かつパフォーマンス活動という形をとって社会に働きかける病気の表現活動は、従来当事者の社会的な活動として検討されてきたセルフヘルプ・グループや運動における社会変革を志す動きとはまた異なった様相が見て取れる。

本研究における社会と当事者のつながりについての発見事項の1点目は、社会とのつながりは対立や同化、協力関係といった形とは異なり、当事者性を付与することによってつくられるということである。病気の表現活動では「仲間」と呼ばれるような形で多様な人々が参集するつながりをつくっている。これは身体障害や精神障害といった人々と共に、ひきこもりなどの状態像、その他会社員として、学校生活上など多くの人間関係上の生きづらさが語られるなかでつくられるつながりである。こうしたつながりをつくるやり方は、新たな共感を生み出し当事者間でつながる知識であると同時に、非当事者や社会とつながる知識としてもとらえられる。「仲間」「生きづらさ」といった枠組みの中で当事者性が付与されることで従来病気や障害といった枠組みには入れない人々が生きづらさを抱える「仲間」としてつながることができる。また、狭義の当事者性に問題が封じ込まれ、問題が社会全体のものとして考えられないことが懸念されているが(豊田 1998)、当事者性を付与する知識は、社会全体として生きづらさ等の医学的な診断名に限定されない複雑で重要な問

題をとらえる土壌を育む一助となっていると思われる。こうしたことを可能にしているのは、パフォーマンスとしての病気の表現活動の特性が大きくかかわっていると考えられる。パフォーマンスはエンタテインメント性を持ち、関係ないと思っていた人に関心を持ってもらう上で有用である(鈴木 2011)。表現活動は、多くの非当事者に対して「病気」や「生きづらさ」や「障害」について考えてもらうきっかけを提供する。そして、表現活動はパフォーマンスとしての特性を活用しながら非当事者に当事者性を付与していくことによって問題を当事者のみならず社会全体の問題として考えられるような社会を構築していく道筋を開く。こうした当事者グループを越えて「仲間」をつくる実践は、当事者の非当事者に対する、対立とも迎合、協力関係とも異なるつながりを形成する知識であると考えられる。こうした知識はアダルトチルドレンのような今まで名付けられていなかったが存在する問題や、声をあげられる人の少なかった暴力被害のような関係性に基づく被害を受けている当事者などが当事者同士でつながるための知識になりえ、当事者の知識として普遍性を有することが考えられるが、その検証は今後求められるところであると思われる。

発見事項の 2 点目は、当事者はサブカルチャーとしての実践を行うことで社会に対して働きかけているということである。特にこわれ者の祭典は、サブカルチャーイベントがよくおこなわれる会場で公演を定期的に行ったりと、サブカルチャー色を濃く打ち出している。また、障害を笑うことにより人々のタブー意識に働きかけたり、アンダーグラウンドな特性に価値がおかれたり、運動のように対抗するでもなくゆるさをもった活動の方向性を提示するなど、いわば既存の当事者の運動のあり方をも相対化していくような形で活動がなされる。病気などの当事者には病気の持つイメージがよくも悪くも付与されてきた(Sontag 1977=1992)。病気の表現活動で表される笑いを通じて形作られる当事者像は、古くから流布している弱者や墮落者としての当事者像とも、その裏返しともいえる聖化や特権化を伴う当事者像(伏見 2005 など)とも異なる当事者像であることが考えられる。当事者はサブカルチャー的实践でもって、新たな当事者像を社会に提示し、社会の当事者に対する見方を変容させている。社会の否定か自己の否定かを迫られるジレンマがある中(草柳 2004)、メインに対するサブとして、サブカルチャー的に代替的な言説を生産し続けることは当事者が社会とつながりをつくるひとつの知識としてとらえられる。

社会やメインの考え方に対して働きかけていくサブカルチャー的な実践のあり方は病気の表現活動の実践のみで見出されるものではないと思われる。病気や障害当事者によるパフォーマンスや芸術活動、当事者としての文化の確立など(倉本 1999, 金 1996, 木村・市田 1996)は一部アンダーグラウンドな側面も含め、サブカルチャー的側面を有すると考えられる。また、日常的なセルフヘルプ・グループの実践にもメインに対するサブカルチャー的な考え方が垣間みえる。病気や障害、生きづらさというマイノリティとして集い、行う実践はそれ自体がアンダーグラウンドな、メインに対するサブとしての特性を持ちやすいことが考えられる。また、たとえば、月乃さんは以下のよう

に、自助グループでの反応が一般的に想定される反応とは異なった反応であるように感じたことを語っており、そうした話の内容にも広い意味でサブカルチャー的な要素が含まれることが考えられる<sup>127</sup>。それは次のような話である。月乃さんは自助グループに通うことをきっかけにしてアルコールを飲まない生活を続けているが、その昔、退院し、仕事を探し、フルタイムの仕事が決まったことがあった。そして、そのことについて親も喜んでくれた。自助グループの人にも褒めてもらえるだろうと思って報告したところ、「やめた方がよい」「絶対にリバウンドするから」といわれたことに驚いた。そして、フルタイムではなく「バイトみたいな」仕事を眼鏡屋でする中で、フルタイムの就労が無理なことであることがよくわかった。最初は眼鏡を拭くという業務だったが、「眼鏡を勧める」という対人関係の伴う業務が求められ、その時に辛くなった。通っている自助グループの人に状況をいったところ、「もうちょっとがんばれ」というようなことを言われるかと思っていたが、「元に戻るならやめた方がよい」といわれた。この話にみられるように、当たり前のように思っていたことが覆される体験を月乃さんは自助グループでしている。また、深刻に語られやすい認知症家族会の語りにおいて、ユーモアや笑いがみられ、それは「行動規範の影響を無効化し、その世界をひっくり返し、『手抜き介護』を否定しない別の世界を映し出す(以上 荒井 2013: 64)」ものとなるという。こうした体験や実践がサブカルチャー的であるかどうかという点については、サブカルチャーのとらえ方にもよる点があると思われる。しかしながら、メインに対して異なった考えを提示することは、メインの規範を覆すようなサブカルチャー的な一側面ととらえることは可能と考えられる。こうしたユーモアや笑いにみられる規範に対する作用は、広くとらえるならば一種のサブカルチャー的な取り組みとみられることも可能であると考えられる。そして以上に述べてきたように、必ずしも病気の表現活動ではなくともセルフヘルプ・グループなどの当事者集団がサブカルチャーとしての実践を行うという知識を有していると思われ、サブカルチャーとしての実践をなすことは一種の当事者の知識として汎用性を持つことが考えられる。

もっともサブカルチャーとして自らを位置づけ、そのありようを表現し続けることでいかなる社会変容が成し遂げられるのかは未知な部分が多い。しかしながら、サブカルチャーとしての実践は、「仲間」としてつながる人々が増えその人たちにメッセージが届けられる意義、当事者の世界にアクセスすることのなかった人たちのアクセスを促す意義、経験の権威化を防ぐ意義、対立か迎合かの選択を迫られる状況を打破する可能性としての意義を有する当事者の知識であるように考えられる。そして、社会の規範や支配的な価値観に対して一石を投じる社会とのつながり方がサブカルチャーとしての実践に見出せるのである。

---

<sup>127</sup> 以下、月乃さんが2014年5月25日ゲスト出演したイベント時のトークより

## 6.1.5 当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか

### (1) 弱さの基盤にある生存

ここでは本研究より見出された、当事者の、当事者間、対自己、対社会のつながりをつくる知識に通底する、弱さや生存にかかわる知識について述べ、当事者はいかなる知識を用いてつながりをつくるのか、というメジャーリサーチクエスチョンに対して回答する。

つながりをつくる観点からは弱さや傷つきやすさ(バルネラビリティ)の価値がいわれ(金子 1992)、精神保健分野においても弱さがつながりをつくる力となることがいわれている(向谷地 2002)。本研究フィールドは病気や障害などの当事者による活動であり、当表現活動も弱さを大切にし、弱さを基につながりをつくっている。しかしながら、病気の表現活動は同時に、「弱さ」とは対極的にみえる迫真的なパフォーマンスがなされ、弱い自分を曝すといったような単に「弱さ」に収斂されない「強さ」を含む実践がみられる。弱さを基本としながらそこに強さが共存する実践に強調されていることは自らが弱い中を生存していることであると考えられる。

「生存」という言葉は、“survivor”の訳語としての「生存者」という形で、「患者」や「被害者」といった当事者像とは異なる、困難な状況を生き延びてきた人々の姿をあらわす際に用いられてきた(中井 1999)。本研究フィールドにおける活動においても、自らを生存者と規定していく姿にみられるように、生存者としての意識が表現活動の中にみられた。生存者の意識として、罪意識や生存者使命を感じるということがいわれているが(Lifton 1969=2009; Herman 1992=1999)、表現活動においてもたとえば、「神様から、与えられた、仕事」(月乃 2006: 11)というように生存者としてメッセージを発していくという使命を見出し、活動していくといった、既存の研究で見出される生存者のあり方と一致している姿が見出された。従来「生存者」という言葉は、被害者や犠牲者といった弱い立場から、生き延びてきた強い立場への転換の意味合いが含まれていたように思われ、それと同様に単なる被害者にとどまらない当事者の姿が表現活動からも見出せた。しかしながら、表現活動からは、弱さから強さへの転換ではなく、あくまで弱いままである生存が重要な意味を持つことが示唆された。表現活動で表されることは生存者としての自分の経験であり、自らの弱さであり、生き延びてきたことである。生存者、サバイバーという言葉は犠牲者、患者のように弱く抑圧されている立場とは異なる意味合いで用いられるが、「生存」において重要なのは生き延びている人々のいわば力、強さよりも、むしろ弱くあるままに生き延びていることそのものである、ということが本研究の示唆する点である。

当事者がチーム医療にて主体的にかかわる姿が示されており(秋本 2010)、本研究のフィールドにおいても主体的に動く当事者の姿がみられた。特にステージ上でのパフォーマンスという表現形態は、自らを積極的に表す実践である。しかしながら、一方では、主体的に問題解決を図ると

いうよりは、弱い中を生き延びているという、主体的な当事者像とは異なる当事者像もまた見出された。本研究は、受身的に医療やサービスを受けるのみの当事者とも、主体的に問題解決に向けて動く当事者とも異なる、弱く生存する知識を有するという新たな当事者像を提示するものである。

当事者の世界において「弱さ」の意義は、新しい可能性やメリットをもたらすものとして語られている(向谷地 2002, 2009)。知識科学的観点からも「弱さ」の価値・強さは語られている。たとえば能动性をもった視覚的な科学的知と対するのように、「パトス(受動, 受苦, 痛み, 病い)の知」として新たな知のありようが検討され、一見価値が見出しにくい「弱さ」やバルネラビリティが人とのつながりを生み出し、文化に活力を与えているとされる(金子 1992; 松岡 2005; Frank 1995=2002; 中村 1983 など)。そして、本研究においても「弱さ」を元にして当事者がつながりをつくっていくありよう、その意識や技法が当事者の知識となっていることが見出された。それに加えて、弱さを元にしてつくられるつながりは、弱さを元につくられる共感的なつながりとして語られるが(Frank 1995=2002)、その内実は、単に弱さが人々をつなぐということのみならず、弱さが顕在化させる「生存」によりつながっているのではないか、ということが本研究から考えられる点である。病気や障害、ひきこもりなどの経験を表現することは、弱さを表すことであり、同時に迫真的にパフォーマンスの場で表されるのは、そうした状況を生き延びて今ここに至る、というメッセージである。

「生存」の観点は、実践にある「弱さ」と「強さ」の一見矛盾するものの共存の理解を深める。パフォーマンスの迫真性などにみられる生存の表現は単に「弱さ」と表せること以上に「強さ」の要素を含んでいる。表現活動では「弱さ」を表しながら同時にパフォーマンスなどにみる迫力ある強さ、「ぶざまさ」、「ダメさ」が持つ強さを表している。その「弱さ」と「強さ」の結びつきを「生存」が介しているのではないかと考えられる。弱さを表すことはその背後の生存している迫力のようなものを表すことにつながる。同時に「生存」は、弱いながら生き延びていく姿にみられるように弱くもあるものである。能動と受動という対立的なものが受苦性を帯びる身体性という観点から結び付けられるように(中村 1983, 1992)、表現活動では生存が弱さと強さの間でそれらを結び付けており、弱さを重視する知識の基盤になっていることが考えられる。そして弱さを表現するセルフヘルプ・グループにおいて迫真性のある語りがなされていることが示されているように(伊藤 2000)、弱さと強さが共存するありようは多くの当事者活動に共通することが考えられる。弱さの表現により顕在化し、弱さと強さを結びつける生存を基盤とした知識は当事者の知識としてとらえることが可能であると考えられる。

## (2) 生存の表現

表現活動という名に表れるように、本研究フィールドには表現が通底している。そして本研究における発見事項として、生存していることを表現することがつながりをつくる当事者の知識となって

いる、ということが挙げられる。すなわち、当事者同士、自己、社会とつながる上で、生存を表現することが重要であるということである。本研究で触れたパトスの知(中村 1982 など)は演劇やパフォーマンスといった表現に密接にかかわるものであった。パトスの知が演劇等から見出されたように、パトスの知は表現に表れるひとつの知の態様といえる。一方、本研究からはそれに対して当事者がつながりをつくる上での表現すること自体の重要性が示された。そして表現することの重要性には2つの意味が含まれると考えられた。その1点目は表現される内容の重要性である。表現活動で表現されるのは弱さであり、弱さが人々をつなぐ媒体となる。これは、「弱さを絆に」(向谷地 2002)や、バルネラブルであることが関係性をつくるといった知見(金子 1992)に一致する。表現活動でも「こんな人でも生きていける」と弱さを表すことで、かえって安心して近づいてもらえる姿が見出された。表現することの重要性の2点目は、表現するという行為そのものの重要性である。パトスの知が構想される際、劇的行動やパフォーマンスが能動的であり、かつ受動的であることがその発想の源となっていたが、表現活動における表現も能動的かつ受動的なものであった。病気の表現活動において、自らの弱さや生きづらさをステージ上のパフォーマンスで表現することは能動的な強い行動である。しかしながら表現するという行為は、表現することによって自らがバルネラブルな状況におかれるのであって、それ自体が受苦的な弱さを伴う行動でもある<sup>128</sup>。自発性がバルネラビリティを内在し、つながりをつくる上で機能するように(金子 1992)、表現という行為そのものが強いものでありつつ、弱いバルネラブルな状況を生み出し、それが当事者のつながりをつくっていることが考えられた。なお、ここでいう「表現」は表現活動が行っているステージ上のパフォーマンスそのものに限らないものを想定している。それは「演劇的知」が演劇を有益な手がかりにして構想されたものであり、狭い意味での演劇そのものを指しているわけではないように、また、「パフォーマンス」という言葉が単に演技や芸能のみならず、社会的役割を演じ分けるなどの振る舞いを含めて考えられるように(高橋 2005)、「表現」もまた幅広い意味を有するものとしてとらえられる。ある月乃さん主催のイベントに来ていた観客の人は、メンタルヘルス上の問題を抱え、アルコール依存ではないがAAのオープンミーティングに参加したことがあったという。そこで赤裸々に参加者が体験を語るのを見て、「人に歴史あり」と感じたという(2014年11月29日)。こうした自助グループで語ることも、その語られる内容はもちろんのこと、歴史を感じさせる語り方やその場の状況や雰囲気も含めた総体が表現の一形態であり、表現することが他者に強いインパクトを与えていることがうかがえる。インパクトを与える表現はステージ上のパフォーマンスという形でなされやすいと思われるが、それに限らないことが自助グループにおける語りからは考えられる。表現はある

---

<sup>128</sup> 「受動的あるいはパトスのとは、身体性を帯びていることであり、受動的行動あるいはパト斯的行動とは身体性を帯びた受苦的な行動にはかならない(中村 1992: 118)」とされ、身体演技であるパフォーマンスは自ずと受苦性を帯び、〈行動＝能動(能動)〉とは区別されるとされた(中村 1983)。

人の場合はステージ上のパフォーマンスの形をとってなされるかもしれないが、ある人は自助グループで語るという形をとるかもしれない。ある人にとっては、語らなくても当事者の集まる場に参加することが身体性を帯びた表現になるかもしれない。いわば生き延びて他者とつながること全般が表現となることが考えられ、当事者は広い意味で、「生存」を「表現」することでつながりをつくっていると考えられる。

本研究では、当事者間、自己規定といった対自己、対社会における当事者のつながりを形成する知識を検討した。そこでは、従来のセルフヘルプ・グループや障害者運動、当事者による芸術活動といった実践にて用いられてきた知識と共に、それらとは異なる知識が提示された。それは、共感のみではない差異の活用、福祉のみではない分野への越境、価値転換のみではない弱くある自己規定、対立・協力関係とも異なる当事者性の付与、サブカルチャーとしての実践、といったつながりをつくる知識であった。そして、それらの知識の発見とともに、本研究が示唆するのは、当事者がつながる上では広い意味での表現が必要であること、つながりをつくる知識の基盤には「弱さ」と共に「生存」が通底し、「生存」が「弱さ」と「強さ」を結びつけているということである。

従来、当事者の知識は、科学的普遍的な専門的知識 (professional knowledge) に対して体験的知識 (experiential knowledge) の存在がいわれていた (Borkman 1976)。本研究ではそうした体験的知識が、当事者がつながりをつくる観点から見出された。そして、臨床の知、パトスの知といった知識が、「演劇」「パフォーマンス」といった表現にかかわる実践を有力な手がかりにして構想されたように (中村 1982, 1992)、本研究からも表現を通して広く当事者の知識として普遍性を有すると考えられる知識が見出された。加えて表現を通して知識が見出されたのみならず、当事者のつながりをつくる知識において広い意味での「表現」が重要であることが示された。これは、弱さが表現されるといった表現の内容と共に、表現という行為がつながりをつくる上で重要であるという意味合いを含んでいた。また能動、受動といった一見相反するものの結びつきの理解を可能にするパトスの知という知の形態が示されているように (中村 1982)、当事者の実践に内在する弱さと強さの結びつきの理解を可能にする、生存の知ともいえる弱さの背後にある生存を基盤にした当事者の知の形態が考えられた。

## 6.2 理論的含意

本研究からは、これまで見出されていなかった、当事者間、対自己、対社会とのつながりをつくる知識と共に、それらに通底する生存を表現するという当事者の知識が見出された。ここでは、生存の表現によるつながりの形成を示す理論的モデルを提示し、理論的含意を述べる。

本研究より、当事者がつながりをつくる知識は、以下のような理論的モデルとしてまとめられた。

一言でいえば、当事者は生存の表現によりつながりをつくる、ということである。当事者は、当事者間、自己、社会に対して、共感と共に、差異の活用、文脈の越境、価値転換と共に弱くある自己規定、当事者性の付与およびサブカルチャーとして実践、といった知識を用いてつながりをつくっている。そしてそれらの知識は、重なり合い、相互に影響しあっている。それらの知識に通底・共通しているのは弱さの表現であり、つながりは弱さの表現を通してつくられる。弱さの表現は、その内容及び行為でもって単なる弱さの表現にとどまらないその背後にある生存を顕在化させるものとなる。生存の表現は、弱さの表現であると共に、生きづらい中を生きていく強さの表現でもあり、生存により弱さと強さは結びつけられる(図 50)。



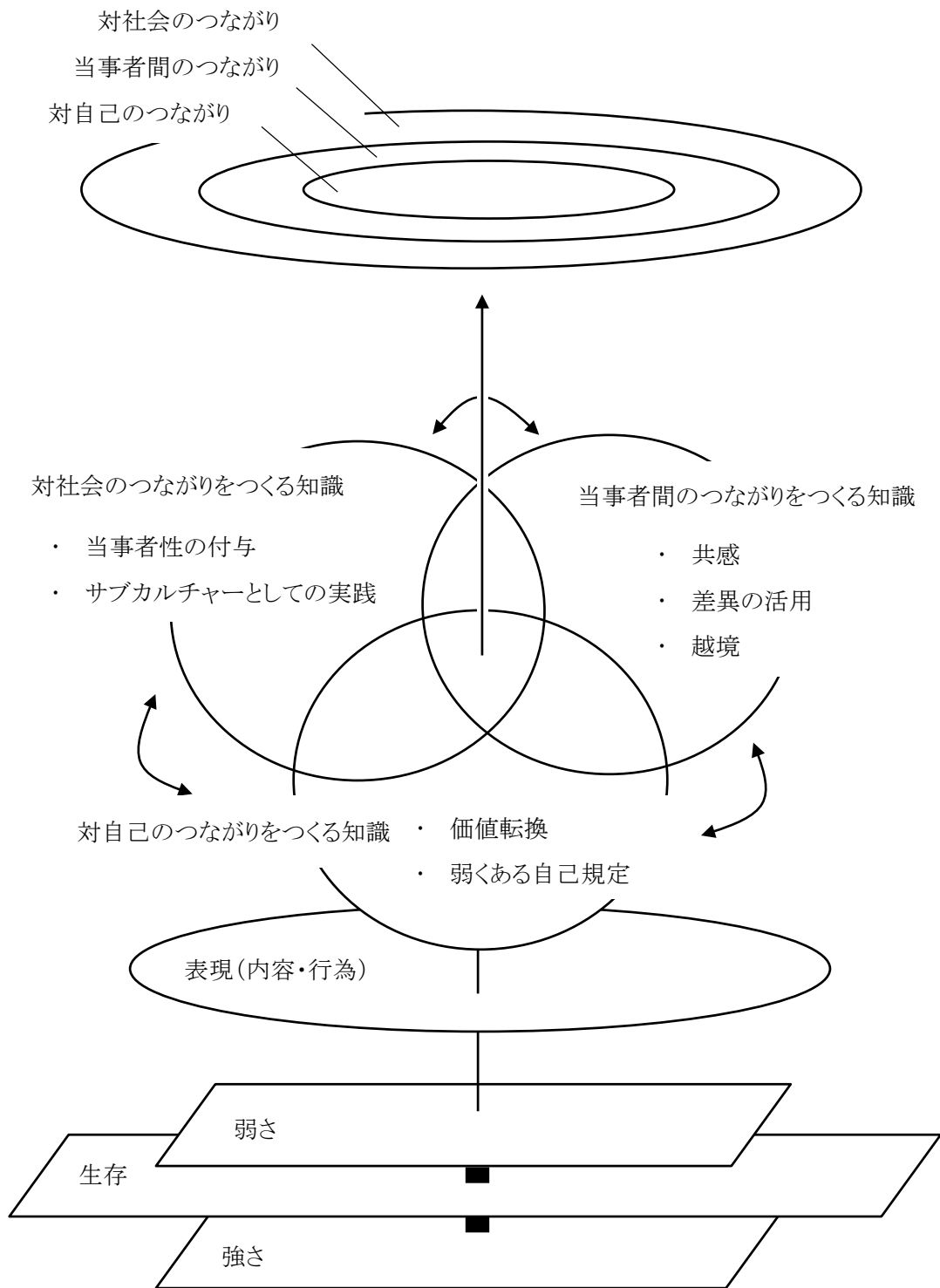


図 50 生存の表現によるつながりの形成(筆者作成)

表現活動は当事者活動のひとつである。また他の当事者活動と多くの共通点を有しており、見出された知識は今まで語られてこなかったが、他の当事者活動でも見受けられる知識であることが想定される。本研究で見出された知識は単に本研究フィールドにおける知識にとどまらず、従来のセルフヘルプ・グループや障害者運動などの当事者の実践から見出されてきた知識に積み重ねられる、当事者の知識としてある程度の普遍性を有する知識となることが考えられる<sup>129</sup>。

本研究の理論的含意の1点目は病気や障害を有する当事者の、つながりを形成する新たな知識が見出されたことにある。当事者間につながりにおいては、従来いわれてきた共通性により共感することと共に、差異を資源として活用したり、福祉の文脈から越境した実践をなすことによって当事者間につながりをつくる、という知識を当事者は有すること、自己とのつながりについては、従来いわれてきた病気や障害などの属性の否定的なイメージを否応なく受け入れたり、逆に価値転換をしたりといった自己規定に限らず、あくまで弱いままに自己を規定していくという知識を当事者が有すること、社会とのつながりについては、対立でも迎合でもなく、当事者性を広く付与し、サブカルチャーとして実践することで、非当事者社会、支配的な規範に対して働きかけるという知識を当事者が有することが本研究から見出された。本研究からはこのように、従来考察されてきた当事者の知識と共に、それらとは異なるつながりをつくる当事者の知識が見出された。

本研究の理論的含意の2点目は、「弱さ」にかかわる知識に対する知見を深めたことにある。従来、近代科学的知とは異なる弱さを基にした知識や、つながりをつくる上での弱さの価値などが示されてきたが、本研究からはそれらに加え、「弱さ」を重視する意識や、「弱さ」を活用する技法である知識の背後には「生存」があることが考えられた。また、「生存」は一見相反する「弱さ」と「強さ」を結びつけ、それらの共存を可能にしていることが考えられた。本研究で見出された病気の表現活動も病気や障害、ひきこもりなどのいわば「弱さ」を基盤にした実践であり、そこには弱さを基にした知識が埋め込まれている。しかしながら、本病気の表現活動における主要なテーマとして「弱さ」とともに「仲間がいれば生きてける」「こんな人でも生き残ってきた」「僕はサバイバー」といった言葉に表れる「生存」が見出せた。「生存」はつくられた詩や語られる言葉のみならず、自らの生きづらさをパフォーマンスという形態で表す実践や表現される作品の迫真性にも見出せるものである。表現活動で表現されるのは「弱さ」であり、同時に「生存」していることである。生存者(サバイバー)という言葉は犠牲者、患者のように弱く抑圧されている立場と対立的な、強さを感じさせる言葉として用いられるが、同時に生存という言葉は、弱くあるままに生き延びていることを強調するもの

---

<sup>129</sup> もっとも個々の当事者活動により、使われる知識の程度は異なることが考えられる。たとえば AA 系列の自助グループでは越境という知識の活用の程度は少ないことが考えられる。しかしながら、笑いなどを含ませるような実践にその活用が垣間みることができると考えられる。加えて共感などはもちろんなされるにしても、一見そのようにみえないながらサブカルチャー的実践を実際はなしていたり、差異を活用していたりといった知識は広く活用されているように考えられる。

であり、当事者の知識としての生存は「弱さ」と「強さ」を結びつけていることが考えられた。

本研究の理論的含意の3点目は、表現することのつながりをつくる上での重要性が示されたことにある。「生存」の表現は表現活動に通底している意識であり、生存を表現することが、「こんな人でも生きていける」というメッセージを発する意味合いを持ち、多くの人がつながる起点となっている。そして「仲間がいれば生きていける」と、つくられるつながりと生存は関連づけられる。本研究ではパフォーマンスなどを行う表現活動をフィールドにしたからこそ、表現の重要性が強調されたと思われる。しかしながら、「表現」は単にステージ上のパフォーマンスのみならず、自らの経験を語ったり、当事者が参集する場に足を運んだり、日常的に他者に出会ったりと、様々な場で自己を表すことでなされると考えられ、表現することは、ステージ上でのパフォーマンスをする人々の知識というよりは、当事者の知識としてとらえるのが妥当であると考えられる。そして本研究結果からは、表現される内容のみならず必然的に弱さを惹起させる表現という行為がつながりをつくる上で重要な意味を持つこと、すなわち、表現される内容および行為の双方でもって、当事者は弱さおよびその背後にある生存を表し、つながりをつくっていることが示唆された。本研究からは以上のような流れの中で、当事者は生存を表現するという知識を用いてつながりをつくっていることが考えられた。

本研究から見出された当事者の知識には、基底にある弱さと強さ、と共に、共感と差異、価値転換と弱くある自己規定というように一見相反するようなものがある。そして、表現活動は福祉的な要素の強いものから、純粋に表現活動としての要素の強いものにまでまたがるなど幅広い様相を示し、とらえどころのない拡散した方向性を持つ活動のようにみえるかもしれない。しかしながら、やはり表現活動において当事者は、差異ある中でも生存という点において共感し、プライドを捨て負に自己規定する中でも生き延びている点においてプライドを保ち、「生存」という観点で生きづらさを抱える多くの人々の「仲間」意識の醸成を促していると考えられる。弱さの知識の知見としては「弱さ」と「強さ」の二元論からの脱却が求められているが(高橋・辻 2014)、本研究から得られる知見は当事者のつながりをつくる知識において「生存」を介したその二元論の脱却の方向性を示唆するものである。そして、従来重要性が指摘され、検討がなされてきた弱さの知識の理解を含める上での生存という観点の重要性を示唆するものである。本研究結果からは、弱さと生存は密接な関係にあり、当事者がつながりをつくる知識には生存の表現が通底することが考えられた。

本研究の理論的含意は、新たな当事者のつながりをつくる体験的知識が示されたこと、従来弱さの力、価値といわれているものの背後には生存の力、価値があることが示されたこと、当事者がつながりをつくる上での生存を表現することの重要性・意味を示したことにある。

## 6.3 実務的含意

本研究の実務的含意の1点目は、本研究結果が、当事者の「つながり」をつくるための方法論の発展に寄与しうることである。実践の文脈を福祉的文脈からずらして越境し、差異をむしろ資源として活用しながらつながりをつくる知識は、福祉的観点のみの実践ではつながりえなかった人々、差異によりつながりの形成が阻害されていた人々がつながる上で有用であることが想定される。自己とのつながりについては、価値転換と同時に能動性をもって弱くある自己規定のあり方が見出されたが、こうした知識が提供されることによって生きづらい状況に活路を見出しうる人がでてくることが想定される。たとえば、価値転換したくともできないことで窮地に陥りがちな人々は、弱くある自己規定のありようを知ることによって、価値転換にとらわれない自己規定のあり方を見出すことが可能になるかもしれない。また、当事者の聖化や権威化が専門家のそれと同様に危惧されているが、そうした危惧に対するひとつの返答となりうる当事者の知識としてとらえられる。対社会的な実践としては、当事者性を非当事者に付与したり、サブカルチャーとしての実践によって規範に働きかけるといった当事者の知識が見出されたが、これにより、健常者社会との対立の回避、対立か迎合かのジレンマに陥らない当事者の社会への働きかけのありようの提案、非当事者との関係の結び方の開発につながるものが考えられる。

本研究の実務的含意の2点目は、保健医療福祉施策の展開における新たな視点を提示することにある。「生きづらさ」の解消、解決、もしくは生きづらい中を生き延びていくためには、個人の努力のみではなく、社会的な取り組みが必要とされる。公衆衛生上の課題としては、単に疾病予防のみならず、本研究でも取り上げられるようなひきこもりなどを含む様々な複雑な問題に対する対応が求められている。福祉や健康上の社会的取組みを考える上で、人々を力づけるエンパワメントが重視されているが(WHO 1986 など)<sup>130</sup>、流動的に変動する複雑な現代的な課題に対応するためには、健康施策の視点、理念も絶えず更新していくことが求められる。本研究からは、「弱さ」と「生存」が当事者の知識において重要であることが示唆された。このことは、能力の付与としてのエンパワメントが必ずしも普遍的な健康施策としての理念として位置づけられるものではないことを

<sup>130</sup> 世界的な健康施策の指針となっている「ヘルスプロモーション」は単に日本語でイメージされる健康増進以上の意味合いを含み、エンパワメントが中核概念となっているものである。これは健康を生きる目的ではなく資源としてとらえるなど健康至上主義に対する批判的視点や、健康問題の解決において個人のみならず環境や組織的な対応の重要性を指摘する点を含む画期的なものとなった。ヘルスプロモーションは、1986年のオタワ憲章(WHO 1986)では”Health promotion is the process of enabling people to increase control over, and to improve, their health.”と定義され、2007年のバンコク憲章(WHO 2007)では” Health promotion is the process of enabling people to increase their health and its determinant, and thereby improve their health.”と健康の決定要因が強調されたものになっている。

示していると考えられる。それよりもむしろ、能力の欠如を改善すべき否定的なものとしてとらえるのみならず、そこを「生存」していることに視点をおいた健康施策を展開するような、健康施策の視点やエンパワメントの概念の拡張が求められるという問題提起が本研究からはなされる。

本研究の実務的含意としては以上のように、当事者の知識が新たなつながりをつくる道筋を開くこと、健康、福祉施策の基盤となる理念の拡張に寄与することが挙げられた。

## 6.4 将来研究への示唆

本研究では、病気や障害を有する当事者の知識をつながりという観点から検討し、従来のセルフヘルプ・グループや障害者運動、障害を有する人々自身による芸術活動などの当事者の実践から見出されてこなかった当事者の知識を見出し、弱さに関わる知識の理解を深めた。しかしながら、多くの課題が残されており、ここに将来研究への示唆として述べる。

本研究の今後に残された課題の1点目には、本研究フィールドの理解をさらに深めることにある。本研究においては、表現者や観客を含む表現活動の全容を示したが、横断的な全容の側面に比し、縦断的なプロセスにかかわる理解が今後求められると思われた。特に、表現活動が長期にわたっていかに変容し、そこでは他の組織や団体、制度と表現活動との間でどのような相互作用が生じているのか、また、いかにして人はパフォーマンスなどの表現活動を行うようになるのか、といった表現活動にまつわるプロセスは表現活動の理解を深める上で重要な側面であり、その深い理解は今後の課題として残された。

課題の2点目には、当事者の知識の全容の理解、普遍性の検証が挙げられる。本研究で見出された知識は当事者の知識の一部であることが考えられる。見出された知識は、当事者の知識の新たな一面を照らすものではあるが、当事者の知識を網羅したものでもなければ、必ずしも代表しているものでもない可能性も考えられ、当事者の知識の理解をより深めることが課題となる。また、本研究では当事者はいかなる知識を有しているのか、という点については一定の見解を提示したものの、知識科学においてはいかにして知識が創造されたのかというプロセスが重視される場所である。当事者の知識の全容を見据えるためには今後、本研究で見出された知識が創造されていくプロセスに焦点を当てた研究が求められる。

加えて、研究結果の普遍性の検証も課題として挙げられる。本研究で見出された知識は病気の表現活動のみならず、当事者の知識としてある程度の普遍性を有することが考えられ、実際にそれを支持する情報もフィールドワーク等から見出されている。本研究でも示した通り、当事者活動と一言でいっても多様であり、同じ活動でも多様な側面を有している。ゆえに明確に当事者活

動を分類して議論することは困難な点があり<sup>131</sup>、本研究では当事者の知識という観点で広く議論を行ってきた。しかしながらそれでもやはり本研究で見出された知識がどの範囲の当事者活動にあてはまるのかの体系的な検証を行うことによって、見出された知識の当事者の知識としての強固な普遍性が担保されると考えられる。これらの検証を踏まえることによって、本研究で見出された「サブカルチャー」、「表現」といった概念についてもより洗練され、より表現活動に特異的なものであることを超えて普遍性を有する知識の理解を深めることができると考えられる。

課題の3点目には、知識科学的知見についての理論的な検討が挙げられる。本研究では、単に従来いわれている「弱さ」のみならず、「生存」の観点の重要性を示したが、「弱さ」やに比して「生存」の観点は検討される余地が多分にあることが課題となる。特に、患者や被害者とは異なる「生存者」、「サバイバー」という言葉が使われ、検討されているものの、「生存」がいかなるものであるのかの検討を深めることが求められると思われた。そして、病気や障害に限らず、虐待や戦争、災害などを生き抜いてきた人々の意識などについては議論されているものの、「生存」がいかにして、当事者間のつながりの形成、自己規定、対社会的な作用として機能するのか、の検討が求められると思われた。また、生存を見据えることによって弱さと強さの二元論の脱却に向けての示唆を得たものの、混沌とするジレンマに満ちている当事者の世界にて、ジレンマの解決に寄与する普遍性を有する知識科学的知見を深めることが求められると思われた。

加えて、本研究では病気や障害にかかわる保健医療福祉の議論の流れから当事者の知識を考察したが、パフォーマンスやサブカルチャーの分野の知見を統合させて考察することが求められると思われた。病気の表現活動は必ずしも病気や障害の観点から語られるもののみではなく、サブカルチャーやパフォーマンスの観点から分析されう。本研究ではサブカルチャーやパフォーマンスの観点を重要視しながらも、基本となる議論はセルフヘルプ・グループや障害者運動などの保健医療福祉分野における当事者の実践およびそこから見出される知識の議論であった。しかしながら今後はパフォーマンスやサブカルチャーの分野の知見(パフォーマンスやサブカルチャーによる社会変革やアイデンティティ形成などの知見)を保健医療福祉分野の知見と統合することによって、当事者の知識の新たな発見がなされることが考えられる。病気の表現活動は両者を統合した分析を行うに適したフィールドであると考えられるが、そうした分析を深められていない点は今後の課題に残される。

課題の4点目には、本研究では実務的含意として、現代的な複雑な課題に対する健康施策の

---

<sup>131</sup> たとえば、セルフヘルプ・グループも社会運動的側面も有する場合が多く、ある知識が、セルフヘルプ・グループにはあてはまるが障害者運動にあてはまらないのかどうか、という議論、同様に、当事者による芸術活動にはあてはまるが、障害者運動にはあてはまらないのかどうか、等の議論を行うのは困難な面がある。

理念において、エンパワメントを相対化したあり方を提示したが、エンパワメントにかわる具体的な理念がいかなるものであるのかを提示するには至っておらず、その検討を深めることが挙げられる。病気の表現活動には従来より根強く残っている支配的な当事者像や支援に対する考え方を打破する要素が多分に含まれている。保健医療福祉上のサポートを必要としている人々への支援において、従来からの洗練された支援のあり方—たとえばエンパワメントに向けての取り組みや環境への働きかけなど—を適用していくことは有益なことである。一方で、健康問題が多様で複雑な様相を持つなどその質が刻々と変化する中、支援やかかわりにおける理念や方向性は絶えず更新されていく必要がある。表現活動における既存の支配的な雰囲気や考え方に縛られないあり方に当事者の知識が垣間みえるのであって、そうした知識に学びながら新たな理念として健康施策の方向性についての考え方を更新していくことが求められる。そうして更新された理念に基づいた当事者や支援者が形作る社会やそのあり方は病気や障害にとどまらない多くのメンタルヘルス上の問題、その他生きづらさを抱える人々の問題の解決に寄与する可能性を有することが考えられる。

## 6.5 まとめ

本研究では、病気や障害などを有する当事者がいかなる知識でもってつながり(当事者間の関係、自己との関係、社会との関係)をつくるのかを明らかにすることを目的とし、以下のことを明らかにした。

1. 当事者は、共通性による共感のみではなく、時に差異を資源として活用することによって、また福祉以外の文脈に越境することによって当事者間のつながりをつくっていた。
2. 当事者は、自らの障害などの特性の価値転換と共に、あくまで弱くある自己規定をなしていた。
3. 当事者は、対立や協力、同化といった形のみならず、当事者性の付与、サブカルチャーとしての実践、という形で非当事者を巻き込み、支配的な規範に働きかけながら社会とのつながりをつくっていた。
4. 当事者のつながりを形成する知識には「弱さ」が通底しているが、弱さの知識の基盤には「生存」があり、当事者は生存を表現することによりつながりをつくっていた。

本研究は、生存を表現するという知識によって当事者がつながりをつくることを示したものである。そして、従来弱さの知識といわれてきたものの基底には生存が深くかかわっていることを示したものである。本研究の理論的含意は、未だ見出されていなかった当事者のつながりをつくる知

識を見出し、弱さを基にした知識の理解を深め、つながりをつくるための表現の重要性を示したところにある。見出された知識は表現活動を行う一部の特殊な人が有する知識ではなく、当事者の知識として普遍性を有するものととらえられる。しかしながら、本研究で見出されたのは当事者の知識の一部にすぎず、今後さらに、当事者の知識の解明を進めることが求められる。そうして見出される知識は、狭義の当事者のみならず、広く多くの生きづらさをかかえる人々に対して恩恵をもたらしてくれるものであることが考えられる。



## 参考文献

- 阿部彩, 2011, 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社.
- 秋本信子, 2010, 「患者と医療スタッフの協働による知識のマネジメント—『喘息大学』の事例研究」  
北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科平成 22 年度博士論文.
- 雨宮処凛, 2007, 『雨宮処凛の「オールニートニッポン」』祥伝社.
- , 2009, 『ロスジェネはこう生きてきた』平凡社.
- 雨宮処凛・萱野稔人, 2008, 『「生きづらさ」について—貧困, アイデンティティ, ナショナリズム』光  
文社.
- American Psychological Association, 2010, *Publication Manual of the American Psychological Association, 6<sup>th</sup> edition*, American Psychological Association. (=2011, 前田樹海・江藤裕之・田  
中建彦訳『APA 論文作成マニュアル』医学書院.)
- 荒井浩道, 2013, 「〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ—認知症家族会を事例として」伊藤  
智樹編著『ピア・サポートの社会学—ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物  
語を聴く』晃洋書房, 33-68.
- 荒井裕樹, 2011, 『障害と文学—「しのめ」から「青い芝の会」へ』現代書館.
- アートミーツケア学科編, 2014, 『病院のアート—医療現場の再生と未来』生活書院.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎, 2008, 『発達障害当事者研究』医学書院.
- , 2010, 『つながりの作法—同じでもなく 違うでもなく』NHK 出版.
- Baba, M.L., 2014, "De-Anthropologizing Ethnography: A Historical Perspective on the  
Commodification of Ethnography as a Business Service," Denny, R.M. and Sunderland, P., L. eds.,  
*Handbook of Anthropology in Business*, Left Coast Press, 43-67.
- Back, K.W. and Taylor, R.G., 1976, "Self-Help Groups: Tool or Symbol?," *Journal of Applied  
Behavioral Sciences*, 12(3): 295-309.
- Bateson, G., 1972, *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row. (=1985, 佐伯泰樹・佐藤良明・高  
橋和久訳『精神の生態学』思索社.)
- Barns, C. and Mercer, G., 2010, *Exploring Disability second edition*, Polity Press.
- Barton, L., 2004, "The Disability Movement," Swain, J., French, S., Barns, C. and Thomas, C. eds.  
*Disabling Barriers: Enabling Environments second edition*, Sage. (=2010, 竹前栄治監訳「障害  
者運動—いくつかの観察」『イギリス障害学の理論と経験—障害者の自立に向けた社会モデ  
ルの実践』明石書店, 474-481.)
- Borkman, T., 1976, "Experiential Knowledge: A New Concept for the Analysis of Self-Help Groups,

- “*Social Service Review*, 50(1): 445-456.
- , 1990, "Experiential, Professional, and lay Frames of Reference," Powell, T.J. ed., *Working with Self-Help*, Silver Spring, 3-30.
- Charmaz, K., 1983, "Loss of self: A Fundamental Form of Suffering in the Chronically Ill," *Sociology of Health and Illness*, 5(2):168-95.
- Corbin, J. and Strauss, A., 1985, "Managing Chronic Illness at Home: Three Lines of Work," *Qualitative Sociology*, 8(3): 224-247.
- Cunningham, R., 2009, "Anthropological Theories of Disability," *Journal of Human Behavior in the Social Environment*, 19: 99-111.
- Dubos, R., 1959, *Mirage of Health: Utopias, Progress & Biological Change*, Harper & Brothers Publishers. (=1964, 田々井吉之介訳『健康という幻想』紀伊國屋書店.)
- 江口歩, 2011, 『エグチズム—新潟お笑い疾風録 NAMARA の素』新潟日報事業社.
- Frank, A. W., 1995, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- Freidson, E., 1970, *Professional Dominance: The Social Structure of Medical Care*, Atherton Press. (=1992, 進藤雄三・宝月誠・佐竹久男訳『医療と専門家支配』恒星社厚生閣.)
- French, S., Swain, J., 2004, "Whose tragedy? Towards the Personal Non-Tragedy View of Disability," Swain, J., French, S., Barns, C. and Thomas, C. eds. *Disabling Barriers: Enabling Environments second edition*, Sage. (=2010, 竹前栄治監訳「障害は誰にとって悲劇か—障害を個人的悲劇としない見方」『イギリス障害学の理論と経験—障害者の自立に向けた社会モデルの実践』明石書店, 61-72.)
- 藤野友紀, 2007, 「『支援』研究のはじまりにあたって—生きづらさと障害の起源」『子ども発達臨床研究』1: 45-51.
- 藤澤三佳, 2005, 「『障害者』とアウトサイダー・アート—医療・福祉とアートの交差」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在—新たな社会的世界の構築をめざして』世界思想社, 95-112.
- 福重清, 2013, 「複数のセルフヘルプ・グループをたどり歩くことの意味」伊藤智樹編著『ピア・サポートの社会学—ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房, 69-92.
- 伏見憲明, 2005, 『性という「饗宴」』ポット出版.
- Gamson, J., 1995, "Must Identity Movements Self-Destruct?: A Queer Dilemma," *Social Problem*, 42(3): 390-407.

- Gartner, A. and Riessman, F., 1977, *Self-Help in the Human Services*, JosseyBass. (=1985, 久保絃章訳『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店.)
- Geertz, C., 1973, *The interpretation of cultures*, Basic Books. (=1987, 吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一・板橋作美訳『文化の解釈学』岩波書店.)
- 服部正, 2003, 『アウトサイダー・アート—現代美術が忘れた「芸術」』光文社.
- 林美朗, 2005, 『表現の精神病理学—病跡学の世界』青山社.
- Herman, J.L., 1992, *Trauma and Recovery*, HarperCollins Publishers. (=1999, 中井久夫訳『心的外傷と回復〈増補版〉』みすず書房.)
- Hill, K., 1984, *Helping You Helps Me: A Guide Book for Self Help Groups*, Canadian Council on Social Development. (=1988, 岩田泰夫・岡知史訳『患者家族会のつくり方と進め方—当事者組織 セルフ・ヘルプ・グループの手引』川島書店.)
- 平野かよ子, 1995, 『セルフ・ヘルプグループによる回復—アルコール依存症を例として』川島書店.
- 広井良典, 2009, 『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書.
- , 2011, 『創造的福祉社会—「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』筑摩書房.
- 本保善樹, 1998, 「第 12 章 セルフヘルプ・グループと新しい公衆衛生」久保絃章・石川至覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規出版, 212-226.
- 星加良司, 2012, 「当事者をめぐる揺らぎ」『支援』2: 10-28.
- 池上正樹, 2010, 「DIAMOND online 『引きこもり』するオトナたち 第 46 回 体重は 40 キログラム以上も増減! 5 年間も苦しめられた「地獄の摂食障害」の日々」<http://diamond.jp/articles/-/10187>(2010年11月25日記事, 2014年12月26日閲覧)
- 伊奈正人, 1999, 『サブカルチャーの社会学』世界思想社.
- 稲田理子, 2014, 「『こわれ者の祭典』がつむぐ“共感”のナラティブ・コミュニティ」新潟大学人文学部人文学科社会・地域文化学プログラム専攻 2013 年度卒業論文.
- 稲沢公一, 2006, 「物語としての精神障害—本人の語りを中心に」田垣正晋編著『障害・病いと「ふつう」のはざま—軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店, 98-125.
- いっしー, 2010, 『「自転車」でいこう』
- 伊藤智樹, 2000, 「セルフヘルプ・グループと個人の物語」『社会学評論』51(1): 88-103.
- , 2008, 「語り手に『なっていく』ということ」崎山治男ほか編『〈支援〉の社会学』青弓社, 21-39.
- 伊藤智樹編著, 2013, 『ピア・サポートの社会学—ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房.

- 自立生活センター協議会編, 2001, 『自立生活運動と障害文化—当事者からの福祉論』現代書館.
- 上岡陽江・大嶋栄子, 2010, 『その後の不自由—「嵐」のあとを生きる人たち』医学書院.
- 金子郁容, 1986, 『ネットワークキングへの招待』中央公論社.
- , 1992, 『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店.
- 金子郁容・玉村雅敏・宮垣元編, 2009, 『コミュニティ科学』勁草書房.
- 葛西賢太, 2004, 「世界標準の断酒法—弱みを仲間と分かち合う」伊藤雅之・檜尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求』世界思想社: 57-79.
- , 2007, 『断酒が作り出す共同性—アルコール依存からの回復を信じる人々』世界思想社.
- 加藤博史, 1981, 「街で患者として暮らすものの生きづらさ(主体的社会関係形成の障害と抑圧)と, P.S.W.機能」『精神神経学雑誌』83(12): 808-810.
- Katz, A. H., 1993, *Self Help in America: A Social Movement Perspective*, Twayne Publishers. (=1997, 久保絃章訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社.)
- Katz, A. H. and Bender, E. I., 1976, *Self-Help Groups in Western Society: History and Prospect*, *Journal of Applied Behavioral Sciences*, 12 (3): 265-282.
- 川北稔, 2009, 「若者の『生きづらさ』と障害構造論」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』12: 293-300.
- 香山リカ・上野千鶴子・嶋根克己, 2010, 『「生きづらさ」の時代』専修大学出版局.
- Kiefer, C. W., 2006, *Doing Health Anthropology: Research Methods for Community Assessment and Change*, Springer Publishing. (=2010, 木下康仁訳『文化と看護のアクションリサーチ—保健医療への人類学的アプローチ』医学書院.)
- 金満里, 1996, 『生きることのはじまり』筑摩書房.
- 木村晴美・市田泰弘, 1996, 「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者」『現代思想』24 (5): 8-17.
- 小池誠, 2012, 「書評 つながりの文化人類学」『文化人類学』77(2): 334-337.
- 小池靖, 2007, 『セラピー文化の社会学—ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』勁草書房.
- 小林多美子, 2012, 「『こわれ者』と私 4—司会の松井弘恵さんが語る『祭典』」『毎日新聞』地方版 2012.8.27
- 近藤まゆみ・峰岸秀子編, 2006, 『がんサバイバーシップ—がんとともに生きる人々への看護ケア』医歯薬出版.
- 久保絃章, 2004, 『セルフヘルプ・グループ—当事者へのまなざし』相川書房.

- 久保紘章・石川至覚編, 1998, 『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規出版.
- 熊谷晋一郎, 2009, 『リハビリの夜』医学書院.
- 熊倉伸宏, 2003, 『面接法(追補版)』新興医学出版社.
- 倉本智明, 1999, 「異形のパラドックス—青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准・長瀬修編『障害学への招待—社会, 文化, デイスアビリティ』明石書店, 219-255.
- , 2010, 「文化と表現の障害学にむけて」倉本智明編著『手招くフリーク—文化と表現の障害学』生活書院, 9-17.
- 草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会—クレーム申し立ての社会学』世界思想社.
- Levy, L., 1976, “Self-Help Groups: Types and Psychological Processes,” *Journal of Behavioral Science*, 11: 310-322.
- Lifton, R. J., 1969, *Death in Life: Survivors of Hiroshima*, Vintage Books. (=2009, 榊井迪夫・湯浅信之・越智道夫・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く—精神的考察』岩波書店.)
- Maclagan, D., 2009, *Outsider Art: From the Margin to the Market place*, Reaktion Books. (=2011, 松田和也訳『アウトサイダー・アート—芸術のはじまる場所』青土社.)
- 松本晃明, 2011, 『うつ自殺を止める—(睡眠)からのアプローチ』筑摩書房.
- 松岡正剛, 2005, 『フラジャイル—弱さからの出発』筑摩書房.
- 松繁卓哉, 2010, 『「患者中心の医療」という言説—患者の「知」の社会学』有斐閣.
- , 2012, 「健康と病の『知』の社会学」『インターナショナルナーシングレビュー』35(3): 102-107.
- 向谷地生良, 2002, 「弱さを絆に—『弱さ』は触媒であり稀少金属である」浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論—そのままがいいと思えるための25章』医学書院, 188-196.
- , 2009, 『技法以前—べてるの家のつくりかた』医学書院.
- 村上宣寛, 2006, 『心理尺度のつくり方』北大路書房.
- 村松友視, 1994, 『合本 私, プロレスの味方です』筑摩書房.
- 中川米造, 1996, 『医療の不確実性』日本評論社.
- 中井久夫, 1999, 「訳者あとがき」Herman, J. L., 1992, *Trauma and Recovery*, HarperCollins Publishers. (=1999, 中井久夫訳『心的外傷と回復(増補版)』みすず書房, 405-418.)
- 中村かれん, 2014, 『クレイジー・イン・ジャパン—べてるの家のエスノグラフィ』出版社名.
- 中村雄二郎, 1982, 『パトスの知—共通感覚的人間像の展開』筑摩書房.
- , 1983, 『魔女ランダ考—演劇的知とはなにか』岩波書店.
- , 1992, 『臨床の知とは何か』岩波書店.
- 中村雄二郎・金子郁容, 1999, 『弱さ—21世紀へのキーワード』岩波書店.

- 中西正司・上野千鶴子,2003,『当事者主権』岩波書店.
- NHK ONLINE, 2014,「この人と ことんトーク アルコール依存症の詩人・月乃光司さん」, バリバラ R アーカイブ , ( 2014 年 3 月 26 日 取得 , [http://www.nhk.or.jp/baribara/baribarar/pdf/140216\\_baribara\\_r.pdf](http://www.nhk.or.jp/baribara/baribarar/pdf/140216_baribara_r.pdf)).
- 西倉実季, 2010, 「『異形』から『美』へポジティブ・エクスポージャーの試み」倉本智明編著『手招くフリーク—文化と表現の障害学』生活書院, 7-101.
- 野田哲郎,1998,「第 2 章 セルフヘルプグループ活動の 6 つの志向群—セルフヘルプ・グループ活動のタイプ分類」久保紘章・石川至覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規出版, 21-38.
- Nonaka, I. and Takeuchi, H., 1995, *The Knowledge-Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation*, Oxford University Press. (=1996,梅本勝博訳『知識創造企業』東洋経済新報社.)
- 野沢慎司, 2009, 「ネットワーク論への再招待—『特殊な方法』という神話を越えて」『文化人類学研究』10: 28-46.
- 岡原正幸, 2012, 「第 5 章 コンフリクトへの自由—介助関係の模索」安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法 第 3 版—家と施設を出て暮らす障害者の社会学』生活書院, 191-231.
- 岡知史, 1986, 「セルフ・ヘルプ・グループへの専門的援助について」『地域福祉研究』14: 61-68.
- , 1988, 「セルフ・ヘルプ・グループの働きと活動の意味」『看護技術』34(15): 12-16.
- , 1999, 『セルフヘルプグループ—わかちあい・ひとりだち・ときはなち』星和書店.
- 大串正樹, 2007, 『ナレッジマネジメント—創造的な活道管理のための 12 章』医学書院.
- 大谷順子, 2006, 『事例研究の革新的方法—阪神大震災被災高齢者の 5 年と高齢化社会の未来像』九州大学出版会.
- Powell,T.J., 1987, *Self Help Organization and Professional Practice*, National Association of Social Workers, Inc., Silver Spring.
- Prior,L., 2003, “Belief, knowledge and expertise: the emergence of the lay expert in medical sociology,”*Sociology of Health & Illness*, 25: 41–57.
- 西原理恵子・月乃光司, 2010, 『西原理恵子×月乃光司のおサケについてのまじめな話』小学館.
- 斉藤環, 2003, 『ひきこもり文化論』紀伊国屋書店.
- Sanjek,R., 2002, " Ethnography," Barnard,A. and Spencer J., eds.,*Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology*, Routledge, 193-198.
- 佐藤知久, 2002, 「共通性と共同性—HIV とともに生きる人々のサポートグループにおける相互

- 支援と当事者性をめぐって』『民族学研究』67(1): 79-98.
- 渋井哲也, 2010, 『自殺を防ぐためのいくつかの手がかり—未遂者の声と, 対策の現場から』河出書房新社.
- 標美奈子, 2008, 『健康マイノリティの発見』弘文堂.
- 篠原清夫・榎本環・大矢根淳・清水強志編集, 2010, 『社会調査の基礎』弘文堂.
- Sontag, S., 1977, *Illness as Metaphor*, Farrar, Straus, and Giroux. (=1992, 富山太佳夫訳『隠喩としての病い—エイズとその隠喩』みすず書房.)
- 園田恭一, 2008, 「地域福祉計画とコミュニティ, そしてソーシャル・インクルージョン」園田恭一・西村昌記編著『ソーシャル・インクルージョンの社会福祉—新しい〈つながり〉を求めて』ミネルヴァ書房, 65-86.
- 想田和弘, 2006, 『精神病とモザイク—タブーの世界にカメラを向ける』中央法規出版.
- 末井昭, 2013, 『自殺』朝日出版社.
- Strauss, A. L. and Corbin, J. M., 1990, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Sage Publications. (=1999, 南裕子・操華子訳『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院.)
- 杉本洋, 2011, 「表現する生存者の戦術的实践—経験の深化と『正常』と『異常』の再構成」『文化看護学会誌』3(1): 10-19.
- , 2013, 「『生きづらさ』をパフォーマンスする人々のつながりを形成する戦略—共通性による共感と障害の価値転換を越えて」『アートミーツケア学会誌』5: 21-36.
- 杉本洋・伊藤泰信, 2010, 「『病気』の表現活動にみる生存者の肯定の技法」『九州人類学会報』37: 51-68.
- 杉野昭博, 1997, 「『障害の文化』と『共生』の課題」青木保ほか編『岩波講座文化人類学 第8巻 異文化の共存』岩波書店, 247-274.
- 鈴木健, 2011, 「文化的パフォーマンス」高橋雄一郎・鈴木健編著『パフォーマンス研究のキーワード—批判的カルチュラル・スタディーズ入門』世界思想社, 51-72.
- 田畑稔, 2010, 「若者の『生きづらさ』へのアプローチ」『人間科学研究』4: 5-21.
- 多田晃子, 2009, 「ネットワーク・コミュニティ」日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善, 428-429.
- 高橋源一郎・辻信一, 2014, 『弱さの思想—たそがれを抱きしめる』大月書店.
- 高橋和枝・月乃光司・田原和隆・Kacco, 2003, 『ひきこもりただいま冬眠中』新潟日報事業社.
- 高橋都, 1998, 「第5章 乳がん患者の相互扶助行動—わが国における病院内患者交流に着目して」久保紘章・石川至覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規出版, 74-95.

- 高橋雄一郎, 2005, 『身体化される知—パフォーマンス研究』せりか書房.
- 高森明, 2012, 「当事者の語りの作られ方—〈障害者役割〉が圧殺するもの」『支援』2: 29-41.
- 武井秀夫, 1993, 「医療における文化と心理—あるいは『苦』の人類学」『社会心理学研究』8(3): 135-144.
- 竹中哲夫, 2010, 『ひきこもり支援論—人とつながり, 社会につなぐ, 道筋をつくる』明石書店.
- 豊田正弘, 1998, 「当事者幻想論」『現代思想』26(2): 100-113.
- 月乃光司, 2001, 『窓の外は青 アルコール依存症からの脱出!!』新潟日報事業社.
- , 2006, 「詩集『仲間』」1000 番出版.
- , 2007, 『病気だよ! 全員集合—月乃光司対談集』新紀元社.
- , 2011, 『人生は終わったと思っていた—アルコール依存症からの脱出』新潟日報事業社.
- , 2013, 「地域の自助グループにつながってもらうために」『アクションと家族』29(2): 135-137.
- , 2014, 「人生なんでもあり 『こわれ者の祭典』 月乃光司 心のリハビリ日記」より (<http://yaplog.jp/koware/archive/1774>, 2014 年 12 月 20 日作成記事, 2014 年 12 月 22 日閲覧)
- 月乃光司・雨宮処凛, 2008, 「死にたいあなたに」雨宮処凛『全身当事者主義—死んでたまるか戦略会議』春秋社, 15-49.
- 上野千鶴子, 2011, 『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- 浮ヶ谷幸代, 2004, 『病気だけど病気ではない—糖尿病とともに生きる生活世界』誠信書房.
- , 2007, 「病いと〈つながり〉の場」浮ヶ谷幸代・井口高志編『病いと〈つながり〉の場の民族誌』明石書店, 13-46.
- , 2009a, 『ケアと協働性の人類学—北海道浦河赤十字病院精神科から地域へ』生活書院.
- , 2009b, 「セルフヘルプ・グループ」日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善, 114-115.
- , 2010, 『身体と境界の人類学』春風社.
- 宇野重規編, 2010, 『つながる—社会的紐帯と政治学 (政治の発見 第 4 巻)』風行社.
- 浦河べてるの家, 2005, 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院.
- Vasey, S., 2004, “Disability Culture: The Story So Far,” Swain, J., French, S., Barns, C. and Thomas, C. eds. *Disabling Barriers: Enabling Environments second edition*, Sage. (=2010, 竹前栄治監訳 「なぜ障害問題に対するライフサイクルアプローチが必要か」『イギリス障害学の理論と経験—



- 障害者の自立に向けた社会モデルの実践』明石書店, 178-187.)
- 鷲田清一, 2001, 『〈弱さ〉のちから』講談社.
- WHO, 1986, Ottawa Charter for Health Promotion.
- , 2007, The Bangkok Charter for Health Promotion.
- Wolin, S. J. and Wolin, S., 1993, *The Resilient Self: How Survivors of Troubled Families Rise above Adversity*, Villard Books. (=2002, 奥野光・小森康永訳『サバイバーと心の回復力—逆境を乗り越えるための七つのレジリエンス』金剛出版.)
- 山下美紀, 2010, 「子ども研究への視座—『生きづらさ』概念と生活システム論の検討」『ノートルダム清心女子大学紀要』45: 13-22.
- 山崎喜比古・三田優子, 1995, 「セルフヘルプ・グループの展開とその意義」園田恭一・川田智恵子編『健康観の転換』東京大学出版会, 175-192.
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典, 2011, 『思春期のストレス対処力 SOC—親子・追跡調査と提言』有信堂.
- 横塚晃一, [1975]2007, 『母よ!殺すな』生活書院.
- 吉岡逸男, 2004, 「障害を個性に自己表現」『東京新聞』2004.11.25.

## 謝辞

本研究は、多くの方々にお世話になる中で遂行されました。本研究のフィールドとなった表現活動にかかわる皆様には、研究に必要な多くの情報をいただきましたこと、当事者活動の魅力を教えてくださいましたこと、共に活動させていただきましたことに心より感謝申し上げます。そして、北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科の先生方には、研究を進めるにあたり、多大なご教示をくださいましたこと、心よりお礼申し上げます。特に主テーマ指導教員の伊藤泰信先生には、研究全般にわたり、また、ご専門の文化人類学、社会学的な視点についてご指導いただきました。体系的な文化人類学の教育を受けてこなかった私に丁寧にご指導くださいましたこと、感謝いたします。主旨導教員の梅本勝博先生には、知識科学的観点について折に触れご指導いただきました。先生のご指導の元、本研究論文は知識科学の論文として構成することができました。井川康夫先生、藤波努先生には、審査を通して、学際的な見地から新鮮なご指摘をいただきました。先生方のご指摘からは、本研究フィールドには、幅広い分野において有益な知見が必ずや多く含まれているはずでありながら、それを明示することの難しさを感じさせてくださいました。今後の研究を発展させていく上で有益な課題をいただきましたこと、感謝いたします。また、外部審査員をお引き受けくださった相模女子大学の浮ヶ谷幸代先生からは、研究内容についてもさることながら、一面的な倫理観の元、安易に書かずにすませてしまうことの非倫理性や、多面的で深い倫理観の元、覚悟をもって書く重要性など、「書く」ことについて教えていただいたように思います。今後、研究を行っていく上での土台となるような観点を深く学ばせていただきましたこと、先生方に心より感謝申し上げます。また、研究室のゼミで共に学ばせてもらいました多くの方々には、貴重なディスカッションをさせていただきましたこと、何かと手助けしてくださいましたこと、お礼申し上げます。

私は主に公衆衛生看護学という分野を専門に職業生活を送ってきました。人々を支援する、そのシステムをつくるといった意図的な介入を前提とした応用的な公衆衛生看護学的な視点と同時に、当事者の実践それ自体を考えたいと思っていた私にとって、学際的な特徴を持つ知識科学研究科で学べたことは幸福なことであったと思います。本研究を通して知識科学的知見は公衆衛生看護学をはじめ、私が職業生活等にかかわる分野において極めて有益な示唆をもたらすものであるとの確信を持つことができました。今後も知識科学の探求を続けることで、お世話になった方々へのご恩に報いたいと思います。